

馬場遺跡 3

九州国立博物館建設に伴う散策路整備事業に
関わる埋蔵文化財発掘調査

馬場遺跡第6・7次調査

平成20年

2008

太宰府市教育委員会

馬場遺跡 3

九州国立博物館建設に伴う散策路整備事業に
関わる埋蔵文化財発掘調査

馬場遺跡第6・7次調査

平成20年

2008

太宰府市教育委員会

序

本書は、九州国立博物館建設に伴う散策路整備事業に先立ち行われた、馬場遺跡に関する埋蔵文化財発掘調査報告書です。

今回報告する馬場遺跡は、太宰府天満宮の南部を流れる藍染川に隣接して点在しております。馬場遺跡第6次調査では、浮殿の建築以前に存在したと絵図から推測されている弁天池に関連する可能性が高い石組み遺構や複数の生活面が確認され、多量の土器・瓦類が出土しました。同7次調査では谷地形の形成過程、平成17年度に報告した同8次調査の金属学的調査を行い、貴重な成果を得ることができました。

また、散策路整備に伴って移築された齋藤邸についても調査成果を報告することができました。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、ひいては文化財愛護の精神が高揚することを心より願っております。

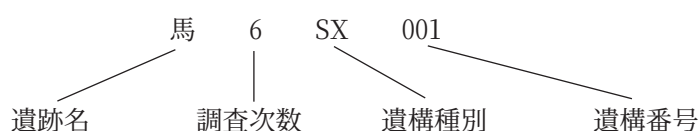
最後になりましたが、本調査に対しご理解ご協力いただきました、関係各位ならびに諸機関の方々に心からお礼申し上げます。

平成20年3月

太宰府市教育委員会
教育長 關 敏治

例 言

1. 本書は太宰府市教育委員会が平成15・16年度に実施した馬場遺跡第6～8次調査の報告書である。
2. 本書に掲載した資料の調査に関わる経緯については、各章に記載している。
3. 本書に掲載した資料の整理は、主に平成18、19年度に実施した。
4. 周辺調査区の配置については本文中の周辺遺跡図を参照されたい。
5. 遺構および遺物の実測及び図の浄書は、調査、整理、執筆担当者のほか、山村信榮、端野晋平、豊岡(島)純子、森若知子、森部順子、松本理栄子、久味木理恵、久家春美、福井円、木戸雅美が行い、一部を(株)埋蔵文化財サポートシステムに委託してデジタルトレースをおこなった。
6. 掲載した遺構・遺物の写真撮影は宮崎亮一、柳智子、高橋、渡邊、山村、(有)空中写真企画、(有)文化財写真工房がおこなった。
7. 出土した木製品・金属製品の保存処理は下川可容子が担当した。
8. 第8次調査の自然科学分析は(株)九州テクノリサーチ・TACセンターに依頼をした。尚、本書の体裁に整えるために、内容を損なわないように一部編集をした。
9. 齋藤邸移築プロジェクトとは、地権者の齋藤仲道氏と近畿大学産業理工学部工藤卓教授並びに同研究室による家屋の移築再生活動である。その調査成果を今回報告する。
10. 本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。なお遺構の性格を表記する記号については、SA柵列、SB掘立柱建物、SD溝、SK土坑、SXその他の遺構などであり、略号として以下のように記載している。



11. 出土した遺物および全ての図面、写真、電子資料等の記録は太宰府市教育委員会が保管している。
12. 本書で用いる基本的な分類は以下の文献に記載されている。

土器・陶磁器・須恵質土器

太宰府市教育委員会（1983）『大宰府条坊跡Ⅱ』

太宰府市教育委員会（2000）『大宰府条坊跡XV』

太宰府市教育委員会（2002）『大宰府条坊跡XVI』

上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」（1982）『貿易陶磁研究』No.2

森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年について」（1982）『貿易陶磁研究』No.2

中世土器研究会編（1995）『概説中世の土器・陶磁器』

土師質・瓦質土器

山村信榮（1990）「太宰府出土の瓦質土器」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』

瓦

九州歴史資料館（2000）『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』

太宰府天満宮（1988）『太宰府天満宮』

太宰府市教育委員会（1995）『太宰府天満宮Ⅲ』

太宰府市教育委員会（2003）『宝満山遺跡群Ⅳ』

13. 本書の執筆分担については、目次および各報告書の末尾に記す。馬場遺跡第6次調査北部については調査担当渡邊の調査時のメモを高橋が追加訂正し原稿化した。尚、編集は高橋がおこなった。

目 次

I. 調査・整理方法と調査体制	(高橋 学) … 1
II. 遺跡の位置と歴史	5
III. 調査報告	
1. 馬場遺跡第6次調査	(高橋 学) … 16
(1) 調査に至る経緯	16
(2) 基本層位	16
(3) 検出遺構	
第1遺構面	18
第2遺構面	21
第3遺構面	25
第4遺構面	26
第5遺構面	27
第6遺構面	29
(4) 出土遺物	
第1遺構面	29
第2遺構面	29
第3遺構面	53
第4遺構面	75
第5遺構面	79
第6遺構面	85
土層	87
(5) 小結	100
2. 馬場遺跡第7次調査	(宮崎亮一) … 105
(1) 調査に至る経緯	105
(2) 基本層位	105
(3) 検出遺構	107
(4) 出土遺物	108
(5) 小結	112
IV. 自然科学分析	
1. 馬場遺跡第8次調査出土の鋳造関連遺物について	(柳 智子) … 114
2. 馬場遺跡（第8次調査地区）出土 鋳造関連遺物の金属学的調査	(九州テクノリサーチ・TACセンター) … 116
V. 齋藤邸移築報告	
昭和初期和洋折衷住宅の移築再生プロジェクト	(近畿大学産業理工学部 工藤卓) … 139
VI. 総括	(高橋 学) … 199

写真図版……主な遺構および遺物写真

付録……CD（遺構および遺物写真、表）

I. 調査・整理方法と調査体制

1. 調査・整理方法

発掘調査は、トラバース測量により基準点を設定し、国土座標第Ⅱ座標系により位置を明示した。その基準点を元に調査区グリッドを設定して調査を進めた。作図は、遺物取り上げ用の遺構略測図を1/100で作成し、遺構個別図・土層図を1/20、ないしは1/10で作図した。遺構全体図は1/20で各遺構面ごとに作図をした。

調査および整理方法については、『太宰府・佐野地区遺跡群Ⅰ』（太宰府市の文化財第14集 1989）、『太宰府市における埋蔵文化財調査指針』（太宰府市教育委員会2001年9月改訂）に基づいている。

出土遺物一覧表は、馬場遺跡第6次調査に関しては、付属のCD-ROMに収納しているが、他は本文中に記載掲載している。付属のCD-ROMには、表類の他に、遺構・遺物の写真を掲載している。CD-ROM閲覧の方法は、CD-ROM搭載の「はじめにお読みください。」をご参照いただきたい。

2. 調査・整理作業の体制

本報告の調査を実施した平成15、16年度、および整理報告を行なった平成18、19年度の調査体制は以下の通りである。

（平成15／2003年度）

総括	教育長	關 敏治	
庶務	教育部長	白石純一	
	文化財課長	木村和美	
	文化財保護係長	和田敏信	（～6月30日）
		久保山元信	（7月1日～）
	保護係長	久保山元信	（10月1日～）
	文化財調査係長	神原 稔	（～9月30日）
	調査係長	永尾彰朗	（10月1日～）
	事務主査	藤井泰人	
	主任主事	大石敬介	
調査	主任主査	城戸康利	
	技術主査	山村信榮	
		中島恒次郎	（事前調整担当）
	主任技師	井上信正	
		高橋 学	（調査担当）
		宮崎亮一	（調査担当）
	技師（嘱託）	下川可容子	
		森田レイ子	
		柳 智子	（調査担当）
		渡邊 仁	（調査担当）

(平成16／2005年度)

総括	教育長	關 敏治	
庶務	教育部長	松永栄人	
	文化財課長	木村和美	
	保護活用係長	久保山元信	
	調査係長	永尾彰朗	
	事務主査	藤井泰人	
		齋藤実貴男	
調査	主任主事	大石敬介	
	主任主査	城戸康利	
	技術主査	山村信榮	
		中島恒次郎	
	主任技師	井上信正	
		高橋 学	(調査担当)
		宮崎亮一	
	技師(嘱託)	下川可容子	
		森田レイ子	
		柳 智子	(調査担当)
		渡邊 仁	
		長 直信	
		松浦 智	(7月1日～)

(平成18／2006年度)

総括	教育長	關 敏治	
庶務	教育部長	松永栄人	
	文化財課長	齋藤廣之	
	保護活用係長	久保山元信	
	調査係長	永尾彰朗	
	主任主査	齋藤実貴男	
		吉原慎一	(7月1日～)
	事務主査	大石敬介	(～6月30日)
調査	主任主査	城戸康利	
		山村信榮	
		中島恒次郎	
	技術主査	井上信正	
	主任技師	高橋 学	(整理・報告担当)
		宮崎亮一	(整理・報告担当)
	技師(嘱託)	柳 智子	(整理・報告担当)
		下高大輔	

(平成19／2007年度)

総括	教育長	關 敏治
----	-----	------

庶務	教育部長	松永栄人（～9月30日） 松田幸夫（10月1日～）
	文化財課長	齋藤廣之
	保護活用係長	久保山元信（～9月30日） 菊武良一（10月1日～）
	調査係長	永尾彰朗
	主任主査	吉原慎一 齋藤実貴男
調査	主任主査	城戸康利 山村信榮 中島恒次郎
	技術主査	井上信正
	主任技師	高橋 学（整理・報告担当） 宮崎亮一（報告担当）
	技師（嘱託）	柳 智子（報告担当） 下高大輔 大塚正樹 端野晋平

また、現地での調査に対し地元馬場地区の方々には物心ともに厚いご協力をいただいた。記して感謝いたします。また、報告書作製にあたっては次の皆様にご指導・ご協力を頂いた。

大澤正己、鈴木瑞穂（(株)九州テクノリサーチ）（以上、敬称略）



- | | | | |
|-----------|----------------|----------|--------------------|
| 1.大野城跡 | 10.水城跡 | 19.原口遺跡 | 28.剣塚遺跡 |
| 2.岩屋城跡 | 11.大宰府政庁跡 | 20.篠振遺跡 | 29.唐人塚遺跡 |
| 3.陣ノ尾遺跡 | 12.観世音寺 | 21.前田遺跡 | 30.峯・峯畑遺跡 (●は峯火葬墓) |
| 4.筑前国分寺跡 | 13.遠賀団印出土地 | 22.宮ノ本遺跡 | 31.桶田山遺跡 |
| 5.辻遺跡 | 14.大宰府条坊跡(破線内) | 23.雛川遺跡 | 32.太宰府天満宮(安楽寺跡) |
| 6.国分松本遺跡 | 15.君畑遺跡 | 24.フケ遺跡 | 33.浦城跡 |
| 7.筑前国分尼寺跡 | 16.般若寺跡 | 25.尾崎遺跡 | 34.原遺跡 |
| 8.国分千足町遺跡 | 17.市ノ上遺跡 | 26.脇道遺跡 | 35.馬場遺跡 (報告地点) |
| 9.御笠団印出土地 | 18.神ノ前窯跡 | 27.殿城戸遺跡 | |

Fig.1 太宰府市とその周辺の遺跡 (1/30,000)

II. 遺跡の位置と歴史

馬場遺跡は、太宰府市の北東に位置する太宰府天満宮の周辺に所在する遺跡の1つである。標高は50m前後に立地している。旧小字「馬場」の範囲を便宜的に遺跡名にしているため、範囲内の遺構の展開は多様である。古くは、縄文時代早期の遺物が出土した浦ノ田遺跡が北東部に位置している。馬場遺跡からみて南西部に位置する奥園遺跡・新町遺跡では縄文時代晩期の遺物がある程度まとまって出土している。しかし、調査の成果から考えると、縄文時代に続く弥生・古墳時代では、この地区は目立った土地利用はされていない。奈良時代に入っても遺物として須恵器片などが散見されるが、継続的に人間活動の痕跡を示すような遺物・遺構は検出されていない。

天満宮周辺の遺跡の大きな画期となるのは、「馬場遺跡2」の報告書でも触れているとおり、連歌屋から馬場にかけて施工された平安時代後期の南北方向の溝である。この溝は真北から東へやや触れているのが特徴で、いわゆる北を強く意識した条坊制に基づく溝とは、施工された意味合いが違うものと考えられる。その平安時代後期に作られた溝の周辺を中心に、鎌倉時代後期までは大量に土器を廃棄する遺構が展開しており、活発な生産・消費活動を示す遺構の特徴が見受けられる。

馬場遺跡第4次調査などは山手の墓地として12世紀後半から14世紀前半まで継続的な遺構が作られており、安楽寺関連の墓地と推定されている浦ノ田遺跡第4次調査でも、13～14世紀にかけての墓地が斜面に営まれていることがわかっている。最近の調査成果によれば、連歌屋遺跡、奥園遺跡などでは中世期の大規模な空濠が見つかっている。しかし、全体的には中世後期から江戸時代前期までの、この地域の土地利用の変遷は発掘調査ではいまだによくわかっていない。

江戸時代後期～末にかけては、大規模な整地を伴う大量廃棄がおこなわれており、絵図や文献で指摘されている推定杜家町地区に関する大きな動きが反映しているものと考えられる。今回、報告する馬場遺跡第6次調査でも、江戸時代後期～末にかけてはなんども整地を行って土地造成を行っていることがわかっている。

今回報告する馬場遺跡の各現場は、ちょうど東から西へ流れている藍染川に面しており、古き時代の通りの雰囲気を経験できたのだが、今回の散策路整備により、利便性と引き替えにそれら過去との繋がりを意識できた雰囲気は薄れてしまった。甚だ惜しまれることである。

参考文献

- 『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』1978福岡県教育委員会
- 『福岡県遺跡等分布地図 筑紫野市・春日市・大野城市・筑紫郡編』1980福岡県教育委員会
- 『太宰府天満宮』1988太宰府天満宮
- 『太宰府天満宮Ⅲ』1995太宰府市教育委員会
- 『大町遺跡』1992太宰府市教育委員会
- 『馬場遺跡』1999太宰府市教育委員会
- 『馬場遺跡2』2006太宰府市教育委員会
- 『大宰府条坊跡 XVII』2001太宰府市教育委員会
- 『三条遺跡』2001太宰府市教育委員会
- 『連歌屋遺跡1』2003太宰府市教育委員会
- 『太宰府市史 考古資料編』1991太宰府市
- 『太宰府市史 環境資料編』2001太宰府市



Fig.2 馬場遺跡周辺遺跡図 (1/3000)

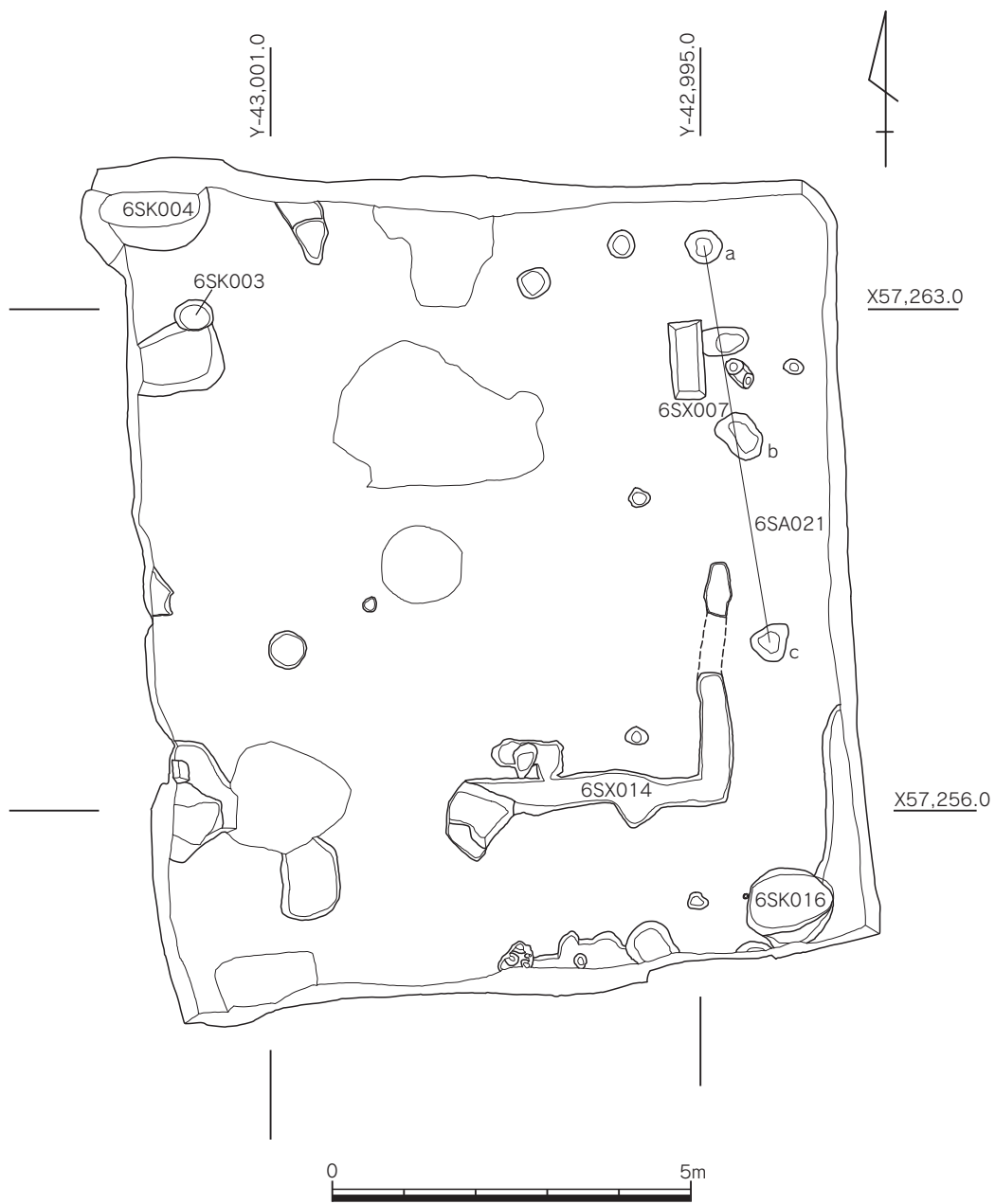


Fig.3 馬場遺跡第6次調査 第1遺構面全体図 (1/100)

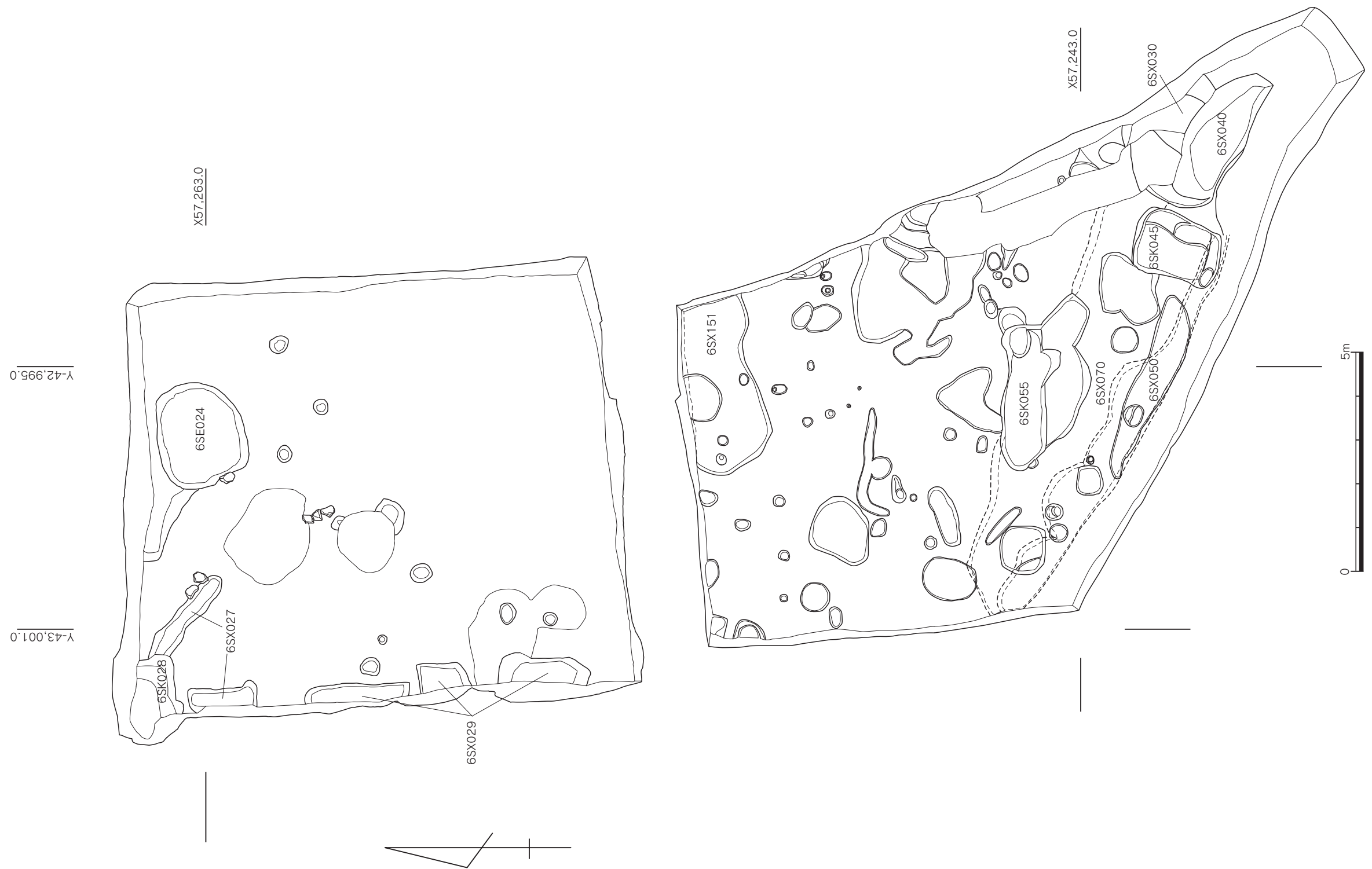


Fig.4 馬場遺跡第6次調査 第2遺構面全体図 (1/100)

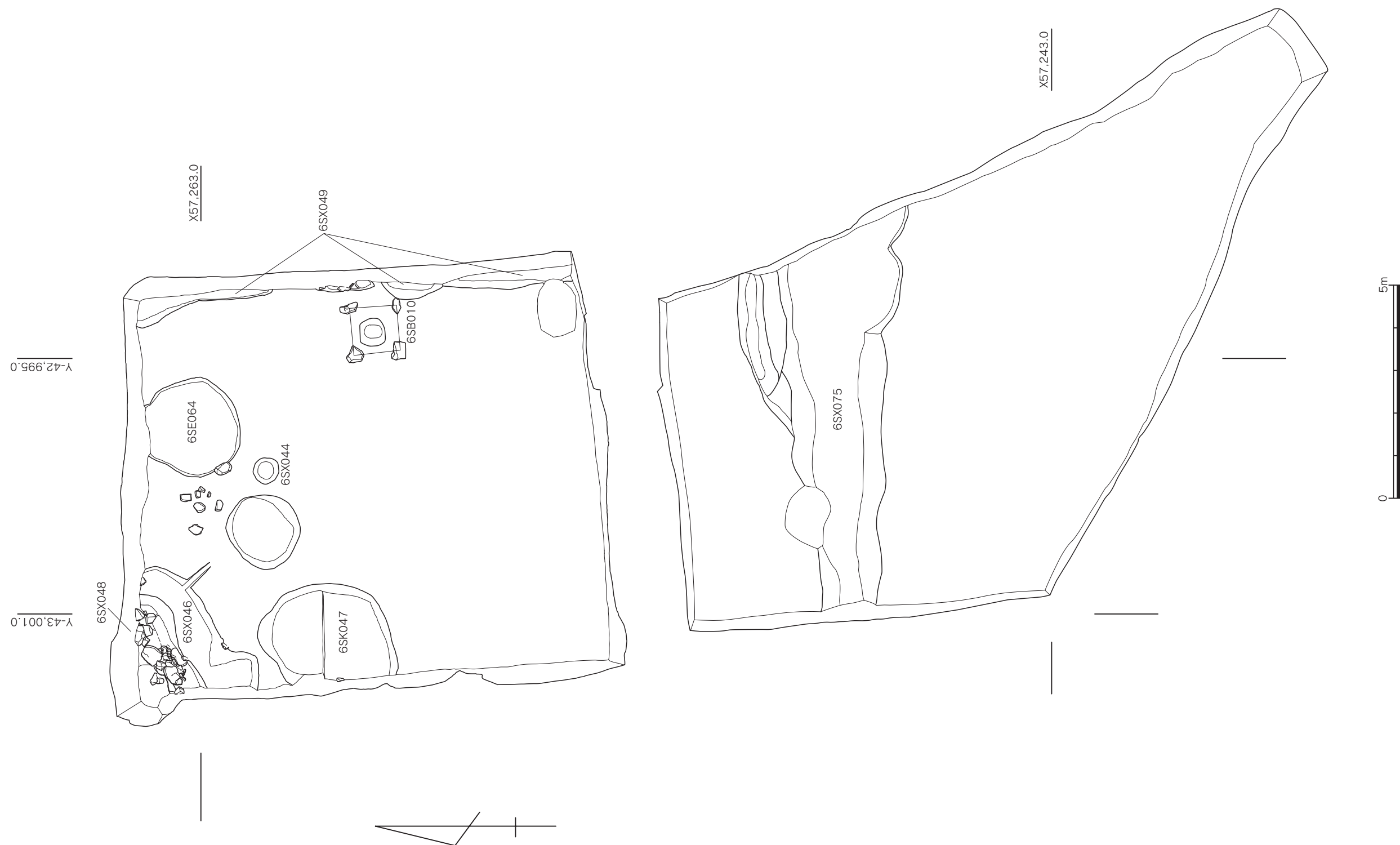


Fig.5 馬場遺跡第6次調査 第3遺構面全体図 (1/100)

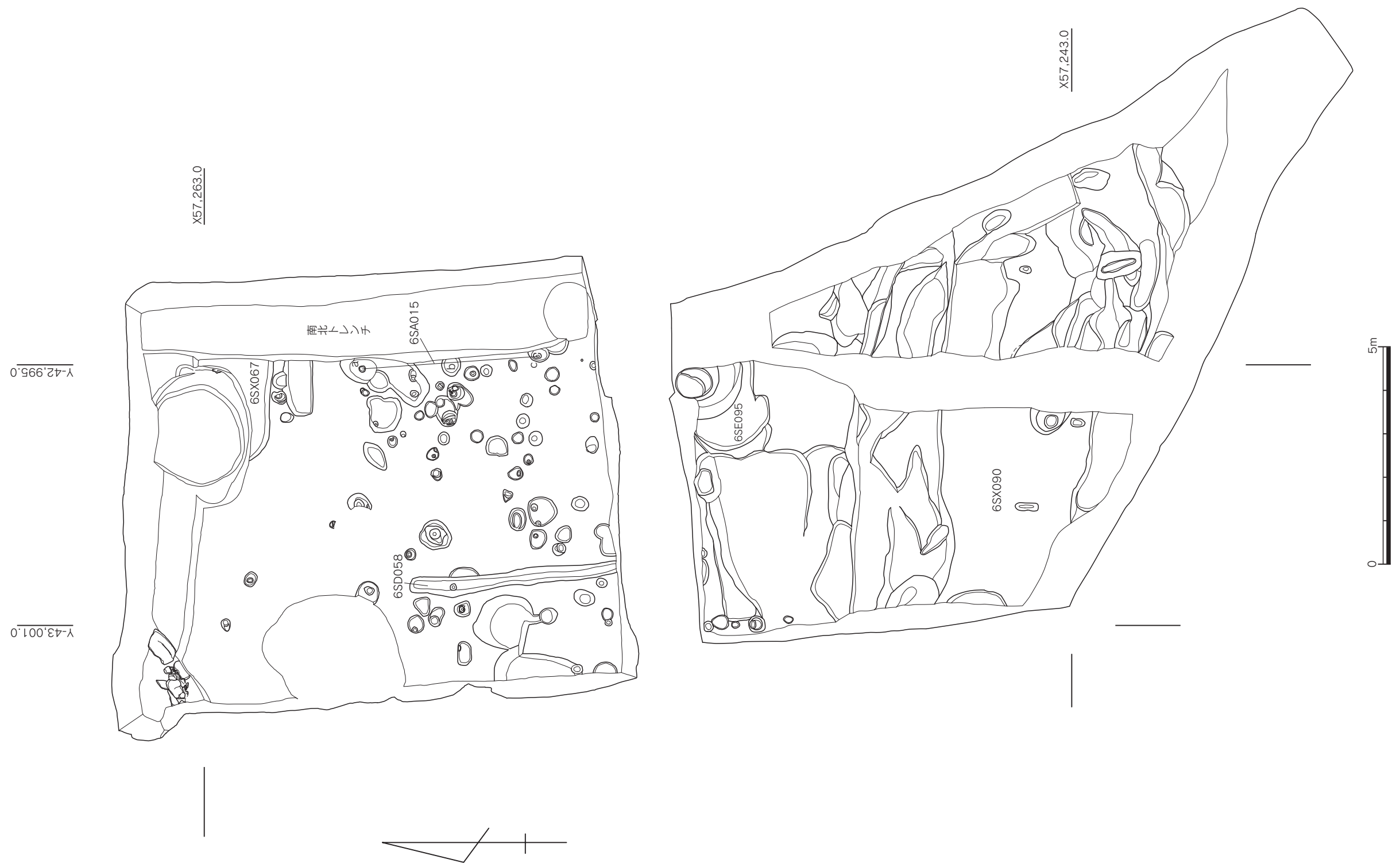


Fig.6 馬場遺跡第6次調査 第4遺構面全体図 (1/100)

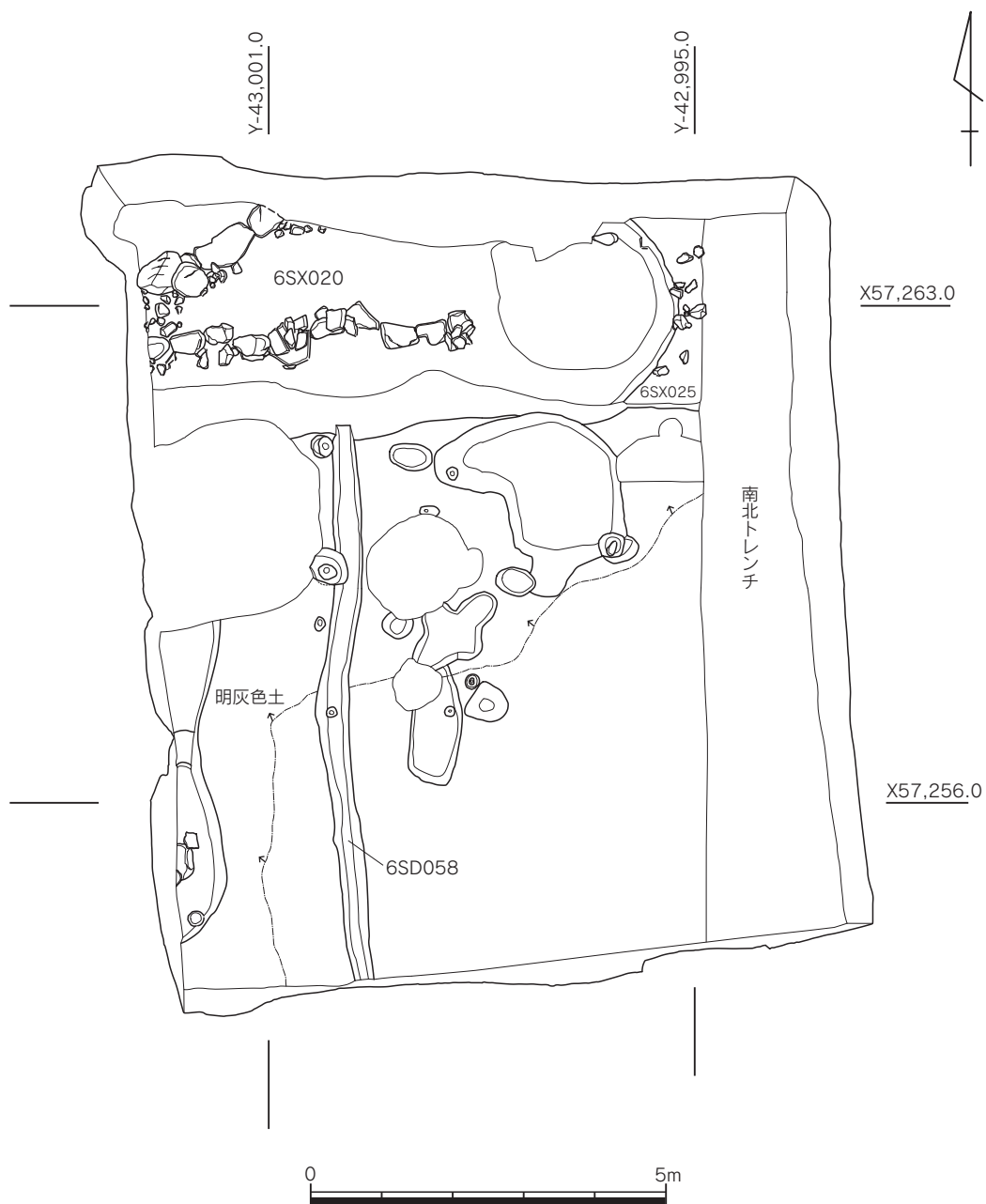


Fig.7 馬場遺跡第6次調査 第5遺構面全体図 (1/100)

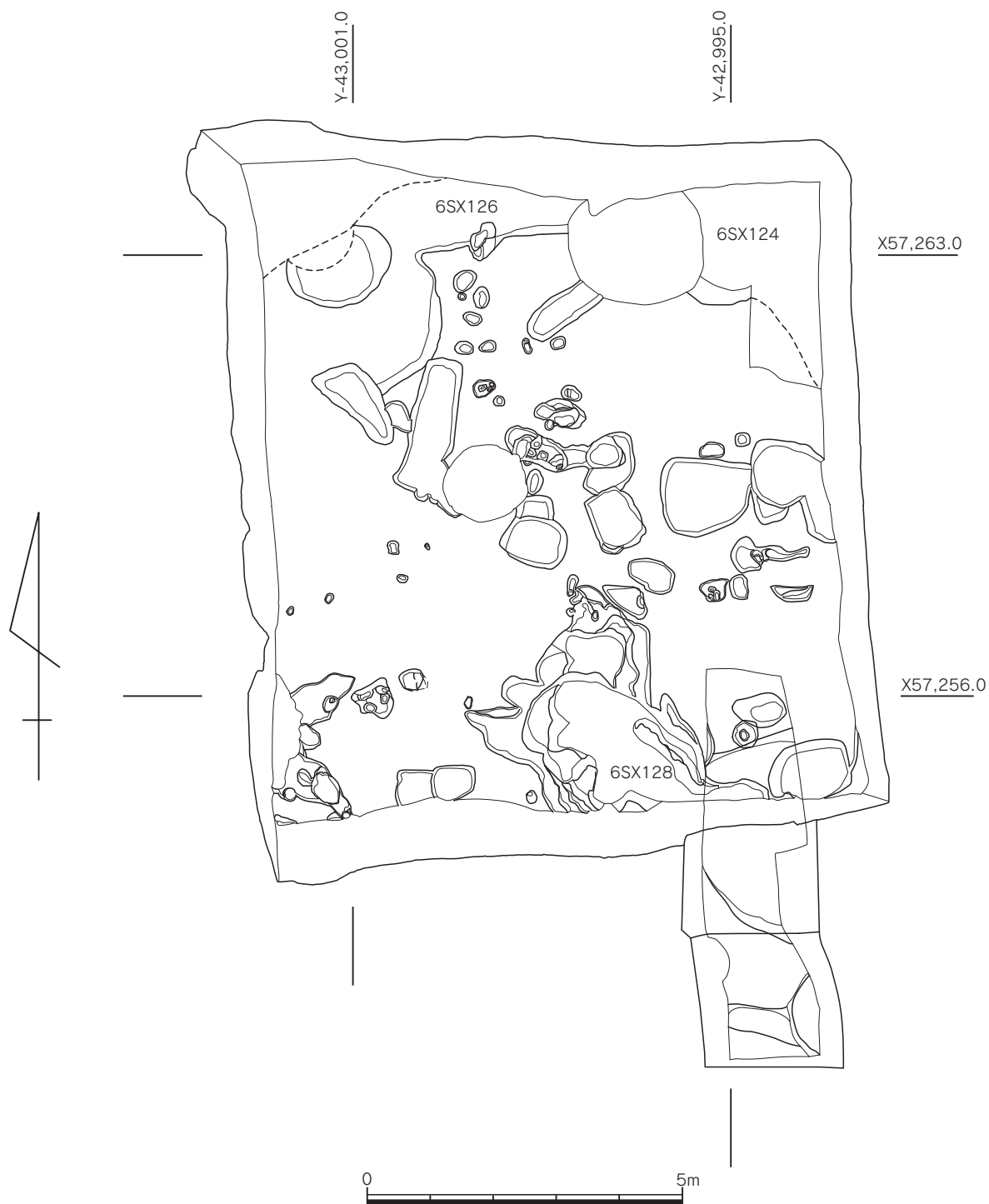


Fig.8 馬場遺跡第6次調査 第6遺構面全体図 (1/100)

III. 調査報告

1. 馬場遺跡第6次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は、太宰府市宰府4丁目1107-1、1107-2に所在する。

九州国立博物館の開館に合わせて、西鉄太宰府駅との間の散策路を整備する計画が平成14年度まで協議をされてきた。その中で太宰府天満宮周辺地ということもあり、埋蔵文化財が存在する可能性は著しく高かった。そのため全長690mに及ぶ整備事業に伴って、平成15年5月9日に太宰府市まちづくり技術開発課から文化財保護法の届けを受けた。確認調査や周辺の調査事例から、埋蔵文化財発掘調査が必要と認められたため、平成15年6月16日から平成16年2月4日にかけて調査を実施した。開発対象面積は267.98㎡、調査面積は221㎡。

発掘調査は反転調査を行い、北部を渡邊仁、南部を高橋学が担当した。

(2) 基本層位 (Fig.9)

調査地を南北に分けて反転調査を行った。便宜的に、北側の調査区を調査区北部、南側を調査区南部と呼称して以後、記述を進めていく。調査時では、調査区北部を6層、南部では3層に分けて掘り下げている。土層の検討によって相互の関連性を確認した。簡単にまとめると、南部の1層目は北部の2層目に対応、南部2層目は北部の3層目、南部3層目は北部の4層目に対応している。まず、北部の土層から記述していく。

第1遺構面を覆う土層は橙褐色土である。この土層は調査時の遺構検出土を便宜的に呼称するための任意設定土層である。第1遺構面を形成する土層として、黒褐色土（炭混じりの包含層）、明褐色土（8世紀後半以降の盛土整地層。他と異なり明らかに持ち込まれた可能性がある土のためここでは整地層と考える。調査区北部南西寄りでは後世の削平のためか、消失している。）整理すると、第1遺構面形成土としては、古い堆積から明褐色土→黒褐色土→橙褐色土の順番である。堆積方向としては、南部から北部へ向かって傾斜堆積をしている。

第2遺構面の任意検出土層としては、橙色土があげられる。第2遺構面の形成土層としては、黒灰色土と赤褐色土があり、赤褐色土が南側に位置し古層に当たる。この面の西側は幾度と無く整地が施されている。新しい層から記述すると、S-38→S-39→S-41→S-42→S-43となる。

第3遺構面を覆う層を灰褐色土としたが、これも遺構検出時の任意設定層である。遺構面形成土としては、第2遺構面に引き続き、赤褐色土となる。つまり、この段階では南東部にはほとんど整地がなかったことになる。

第4遺構面の遺構検出土層は、任意土層として赤褐色土。これは第3遺構面に本来帰属するものである。遺構形成土として、古層から黄褐色土→明灰色土→暗灰色土となる。やはり、南から北方向に向かって堆積が進んでいる。

第5遺構面は北寄りに堆積していた暗灰色土を掘り下げて検出した。5層形成土としては、茶灰色土、灰褐色土、黄褐色土があげられる。この土層の形成を見てみると、北から南に広がっていることが土層との違いとしてあげられる。

第6遺構面は、検出土層として任意層である黄色土が覆っている。形成土は白黄色土で地山である。

南部の土層としては、第1遺構面に関するものがない。これは、北部の調査で第1遺構面がほぼ近現代

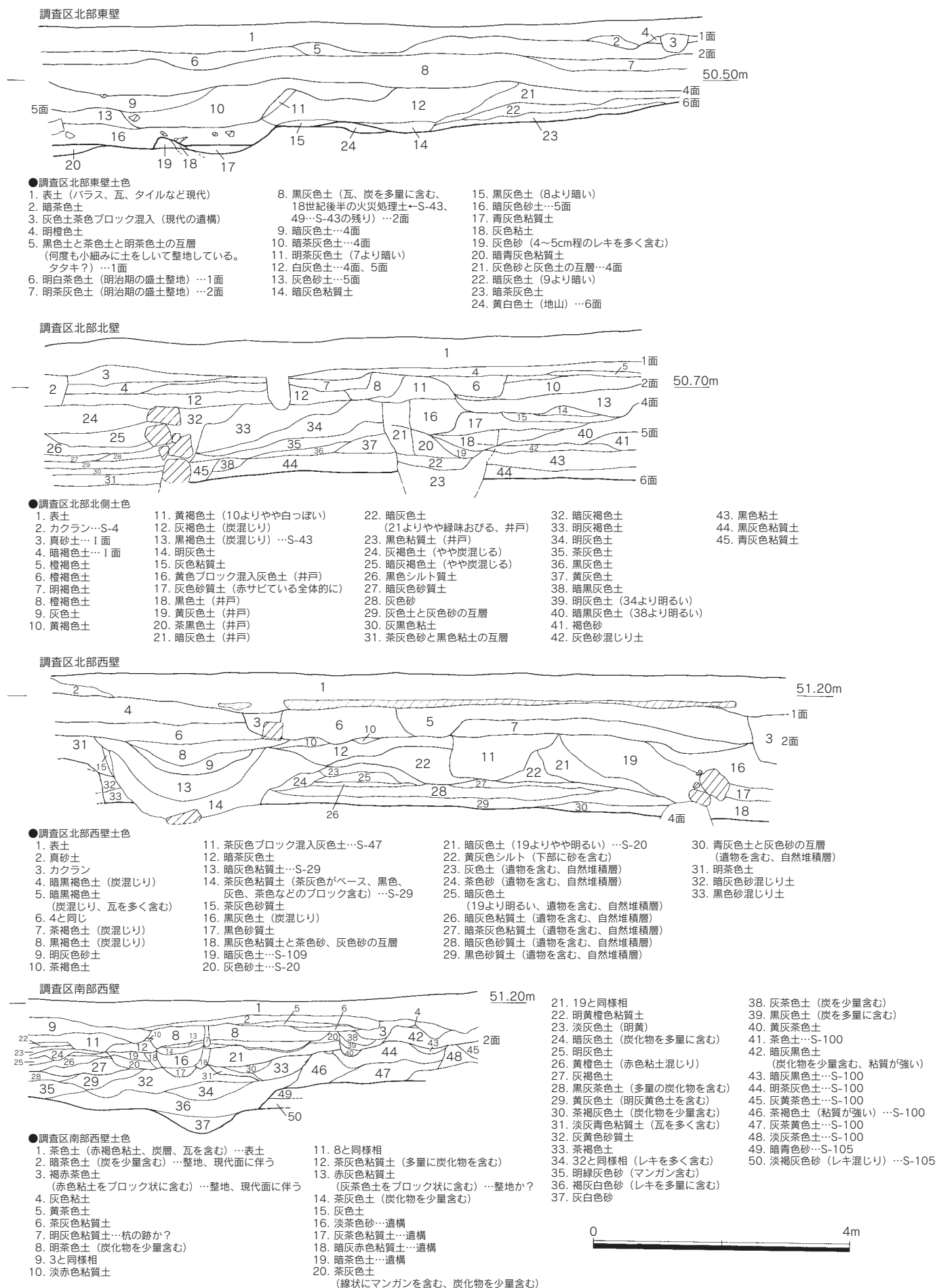


Fig.9 馬場遺跡第6次調査 調査区外壁土層図 (1/80)

の攪乱が多かったため、暗灰色土として重機で除去しているためである。第2遺構面の検出土として灰白色土（任意の土層）を設定している。形成土層としては、6SX085や灰茶色土、黒灰色土となる。

第3遺構面は6SD075が切り込む6SX090が検出された層である。調査区南側全般が砂層の堆積である。

第4遺構面は先述の6SX090が切り込む整地層である。基盤層としては6SX085、6SX157となる。以下、下層の土層は調査区北部との比較で推定されるだけで、調査区北部と南部をつなぐ土層が確認できなかったため、推定の域を脱していないが、参考までにあげておく。第4遺構面の基盤層は6SX100。第5層の基盤層は6SX105がそれぞれ相当すると考える。

(3) 検出遺構

第1遺構面検出遺構 (Fig.3、Pla.1-1)

柵列

6SA021 (Fig.3、10)

調査区北部東側で検出。円形のピット列。柱穴内の埋土は灰色土で、拳よりやや大きめの礫を無造作につめている。柱穴はa.b.cの3つを検出。柱間は2.8～2.9m。瓦などが出土。時期は不明。

井戸

6SE011

調査区北部中央西寄りで検出。コンクリート枠の使用から、近代以降に掘られたと考えられる井戸。

土坑

6SK003 (Fig.3)

調査区北部北西で検出。瓦やタイルを含む近代から現代の円形の土坑。埋土は暗灰色土。

6SK004 (Fig.3)

調査区北西隅で検出。埋土中にプラスチック製の水溜や瓦を多く含む土坑。現代のゴミ穴と考えられる。埋土は暗灰色土。

6SK006

調査区北部北西で検出。浅い楕円形の土坑。近代から現代の遺構か。埋土は茶褐色土で瓦を含む。斬り合い関係は、6SK006→6SK003。

6SK008

調査区北部南西で検出。江戸時代後半の遺物を含む黒灰色土に切り込む不定形の土坑。埋土は少量の炭化物を含む暗灰色土。肥前系の陶磁器を含み、江戸時代後半以降に埋没したと考えられる。

6SK013

調査区北部西の壁にかかる円形の凹み。埋土は暗灰色土。肥前系の陶磁器が出土している。18世紀後半以降に埋没したものか。

6SK016 (Fig.3)

調査区北部南東隅で検出。円形の土坑だが、プラスチックのトタンや飲食物の瓶などが捨てられており、現代のゴミ穴と考えられる。

6SK018

調査区北部南側で検出。埋土は黒色土で炭化物を多く含む。近代以降に埋没したものか。

6SK019

調査区北部北東で検出。楕円形の土坑。埋土は暗灰色土。肥前系の陶磁器を含む。18世紀後半以降に埋没。遺構の切り合い関係は6SK019（古）→6SX007（新）となる。

その他の遺構

6SX001

調査区北部北側で検出。浅いピット状の遺構。埋土は黒色土。近代の造成土の残りか。

6SX002

調査区北西で検出。調査区の壁にかかる浅い凹み状の遺構。埋土は茶褐色土。近代の造成土の残りか。

6SX007 (Fig.3、10)

調査区北部北東で検出。長方形の性格不明の土坑。埋土は暗黒色土→黒灰色土→黒色土→橙褐色土の順に堆積している。床面及び壁面には橙褐色の真砂土が貼られており、暗黒色の炭層がレンズ状に堆積し、土坑立ち上がり部分にまで達している。床面及び壁面には火熱を受けた痕跡は見られないことから、多量の炭を流し込み使用していたことが想定される。

6SX009

調査区北部西側で検出。円形の小穴。埋土は明灰色土。瓦が出土している。出土遺物から埋没年代は、江戸期以降か。

6SX012

調査区北部中央西寄りで検出。炭化物を多く含む小穴。瓦が出土している。近代以降か。

6SX014 (Fig.3)

調査区北部南東で検出。L字形の浅い掘りこみ内に20cm程の角礫をつめた遺構。建物の基礎か。出土遺物にコカ・コーラの缶があることから現代の遺構と考えられる。

6SX017

調査区北部南で検出。不定形の

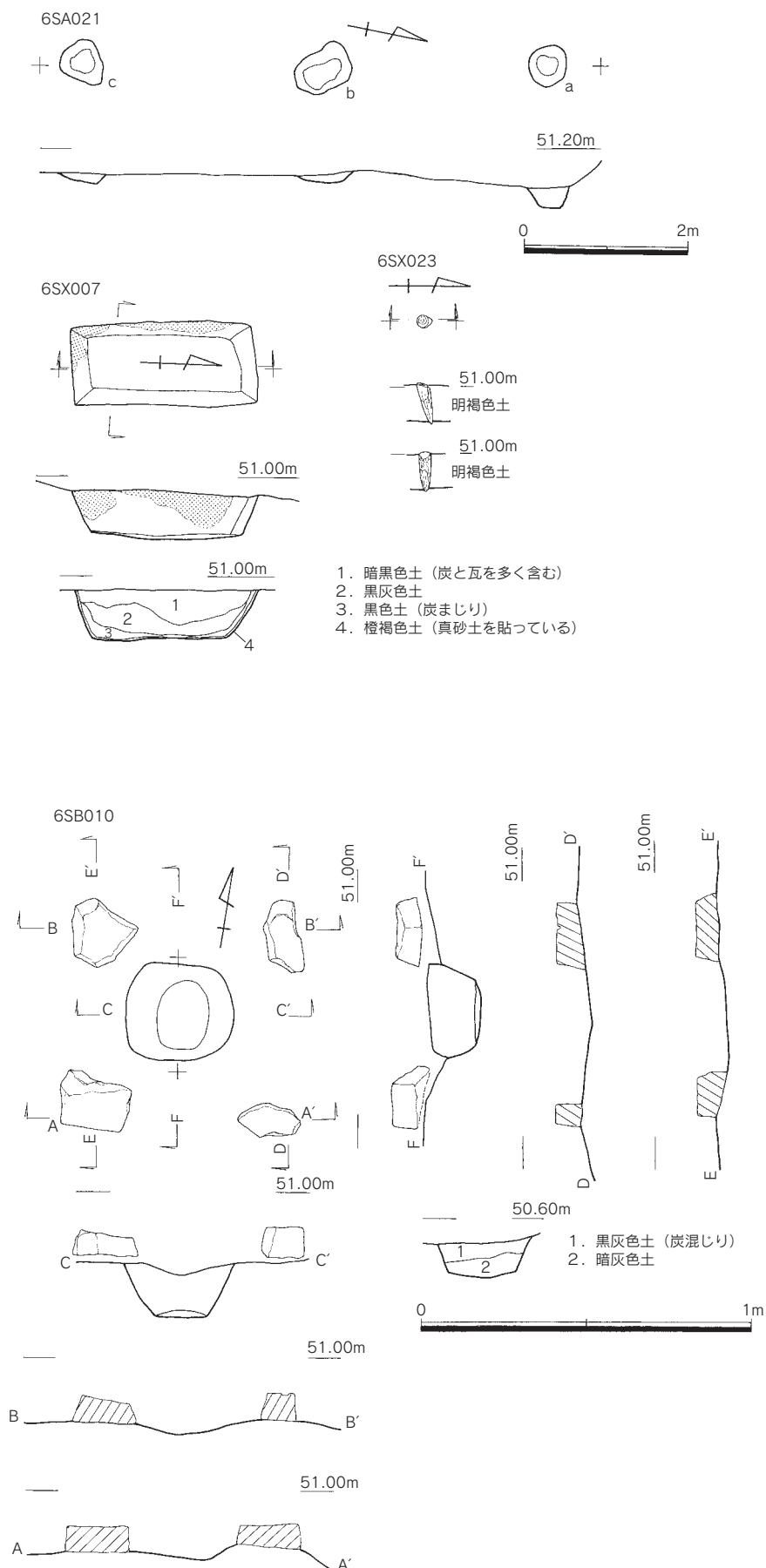
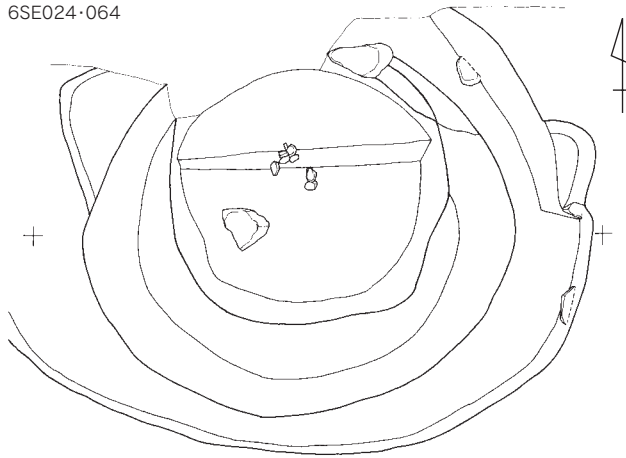
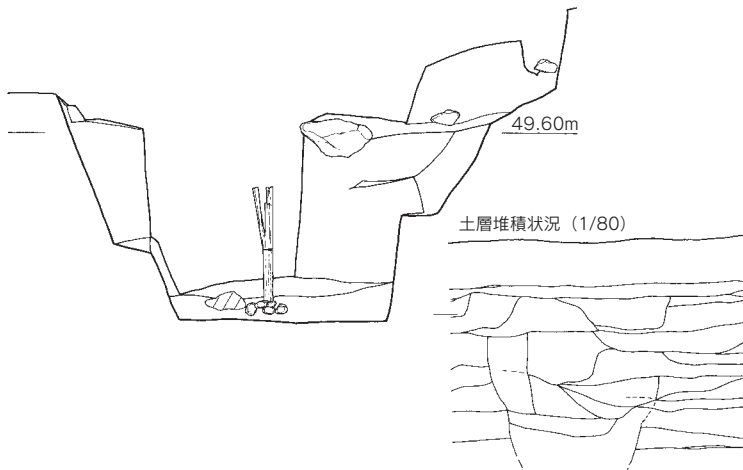
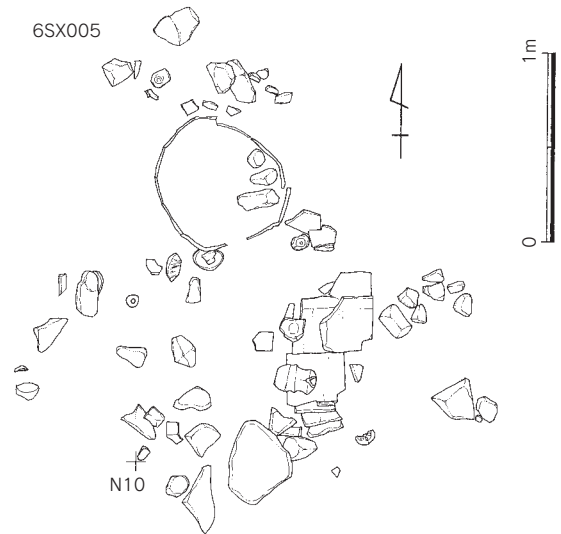


Fig.10 第1遺構面6SA021、6SX007、6SX023 (1/40)、第2遺構面6SB010実測図 (1/20)

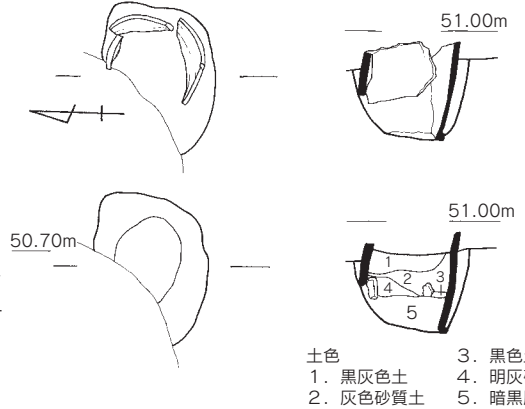
6SE024・064



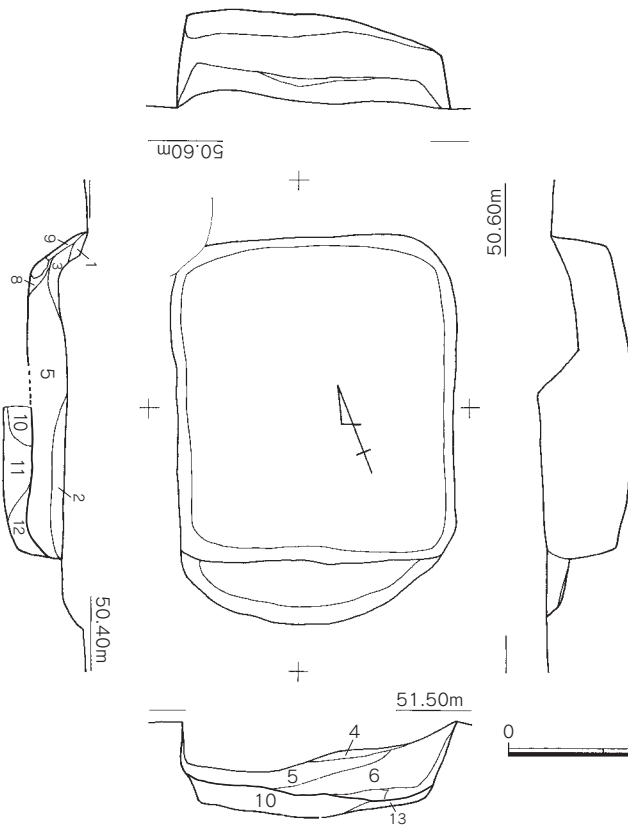
6SX005



6SX033



6SK045



※土色は調査区北部
北壁土層図に記載

6SX141

1. 灰褐色粘質土 (極少量マンガン含む)
2. 灰白色粘質土
3. 暗灰色土 (砂粒を多く含む、炭化物を含む)
4. 淡赤色土
5. 淡赤灰色粘質土
6. 灰茶色砂質土 (酸化鉄混じり)
7. 茶灰色粘質土
8. 明灰色粘質土
9. 明灰白色粘質土
10. 淡青灰色砂質土 (シルト質) …掘りすぎ
11. 黄灰色砂…掘りすぎ
12. 明青灰色砂質土 (シルト質) …掘りすぎ
13. 灰色砂質土…掘りすぎ

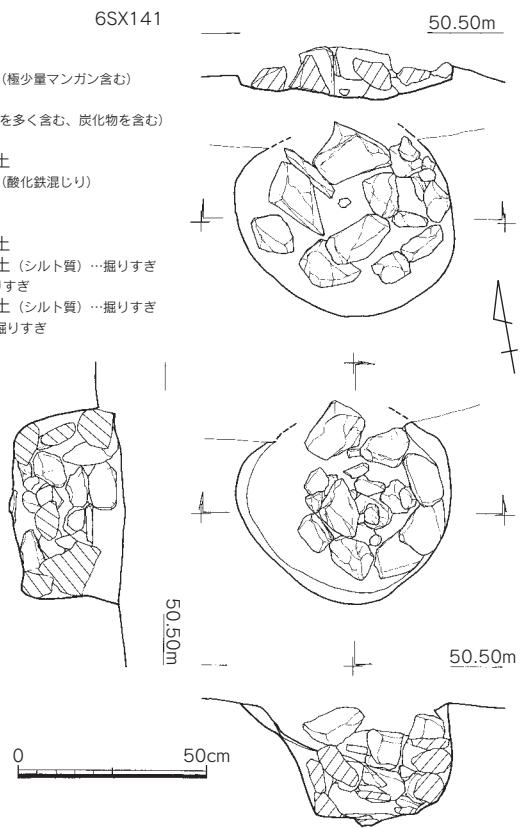


Fig.11 6SE024、064、6SK045、6SX005、6SX033、6SX141実測図 (6SX141は1/20、それ以外は1/40)

窪み群。埋土は明灰色土。瓦が出土している。上層の残りの土で近代以降のものかと考えられる。

6SX022

調査区北部北東で検出。小穴群。埋土は暗灰色土。肥前系の陶磁器を含む。出土遺物から埋没年代は18世紀後半以降と考えられる。

6SX023 (Fig.10)

調査区北部南東L8区で検出。木杭。明褐色土（18世紀後半以降の盛土整地）上から打ち込まれており、その下の黒灰色土（18世紀後半代の遺物を含む包含層）には届いてないことから、18世紀後半以降のものと考えられる。

第2 遺構面検出遺構 (Fig.4、Pla.1-2、Pla.4-1)

掘立柱建物

6SB010 (Fig.5、10)

調査区北部東寄りで検出。1間×1間の礎石立建物。柱間の距離は1m。礎石は長方形で幅0.4m、長さ0.3m、厚み0.18m程度の平坦な石を敷いている。礎石に囲まれた中央部には東西0.65m、南北0.5m、深さ0.34mの小穴が検出された。小穴の堆積土は、上から黒灰色土（炭混じり）、暗灰色土。ただし、黒灰色土に関しては、6SX043の埋土の落ち込みと判断している。礎石立建物に関連するものと思われるがその性格は不明。また、これらの礎石は6SX043（火災処理土）にすっぽりと埋まるかたちになっており、火災処理をした時にはその機能を果たしていなかったものと思われる。小さな祠のような建物か。完全に検出したのは、3面目だが、2面目から石は露出していたために、ここでは2面目の遺構としてとりあげる。

井戸

6SE024 (064) (Fig.4、11)

調査区北部北寄りで検出。直径3.2m、深さ1.7mの素掘り井戸である。当初、明橙色土が円形の凹みに溜まっていたことから、盛土整地と考えた。しかし、3面目において6SE064が同一地点から検出されたことをふまえて、両者は同一の遺構（井戸の層）の堆積層の埋没過程の違いと判断した。なお、埋土中に、直立させた長さ0.6m、太さ0.05mの竹が検出されたが、これはいわゆる井戸の息抜きに伴うものと考えている。

土坑

6SK028 (Fig.4)

調査区北部北西隅で検出。土坑。埋土は暗灰色土。埋没時期は出土遺物より18世紀後半以降と考えられる。遺構の切り合い関係は、6SK028（古）→6SK004（新）となる。

6SK031

調査区北部中央西寄りで検出。凹み。埋土は橙色土。盛り土整地の残りか。

6SK032

調査区北部中央西寄りで検出。1面の遺構6SE011にそのほとんどを破壊されて三日月状になった土坑。18世紀後半以降。埋土は上層から灰黒色土、暗灰色土と堆積している。切り合い関係は6SK032（古）→6SK031→6SE011（新）となる。

6SK045 (Fig.4、11)

調査区南部南寄りで検出。大きさは東西1.5×南北1.75m、深さ0.54mの隅丸方形の土坑で、6SK035に切られている。埋土は底面に沿って赤色粘土の堆積が0.30mほどあり、その上層に灰褐色粘質土、暗灰色土が確認された。埋土内から遺物はほとんど出土していない。

6SK055 (Fig.4)

調査区南部中央寄りで検出。大きさは東西3.3m×南北2.1m、深さは0.43mの不整形土坑で中央部に段があり、北側が0.05～0.2mほど深くなっている。埋土は礫混じり暗灰色土。

6SK132

調査区南部南よりで検出。東西1.4m×南北1.2m、深さは0.1mの不整形土坑。埋土は茶褐色土。

6SX137

調査区南部南よりで検出。東西1m×南北1m、深さ0.25mの不整形土坑。埋土は灰褐色土。

その他の遺構

6SX005 (Fig.11)

調査区北部中央寄りで検出。多量の土器・陶磁器が集積された状況で検出された。その範囲は東西方向2.6m、南北方向2.8mの広がりを持つ。南東部に瓦などが重ねて検出された。ただし、積極的に敷いたかどうかは不明。周辺を精査したが、遺構に伴う掘り方は検出できなかった。土器と土器の間に詰まっている土も下層の黒灰色土と同じだったため、このまともは包含層の一部と考えている。しかし、その黒灰色土は炭化物を多く含み、瓦や陶磁器類を多く含むため、火災などの災害により消失した住居を埋めた際の整地の可能性も指摘できよう。

6SX026

調査区北部北東で検出。小穴群。埋土は明橙色土。整地土が凹みに溜まったものと考えられる。出土遺物より埋没年代は18世紀後半以降。

6SX027 (Fig.4)

調査区北部北西で検出。凹み群。埋土は明橙色土。整地土が窪みに溜まったものと考えられる。出土遺物より埋没年代は18世紀後半以降。

6SX029 (Fig.4)

調査区北部西側で検出。凹み群。埋土は暗灰色土。出土遺物より埋没年代は18世紀後半以降。

6SX030 (Fig.4)

調査区南部東側で検出。整地土。埋土は明灰色土で炭化物が混じっている。出土遺物より埋没年代は18世紀後半以降。

6SX033 (Fig.11)

調査区北部中央西寄りで検出。楕円形の土坑。土坑内には平瓦を縦に用いて囲いを作るようにしていたが、その半分を6SE011に破壊されており、詳細は不明である。おそらくは穴の全周を瓦によって囲っていたと考えられる。出土遺物より埋没年代は18世紀後半以降。遺構の切り合い関係は古い方から6SK033→6SK032→6SK031→6SK011となる。

6SX034

調査区北部南東で検出。円形の凹み。埋土は暗灰色土。瓦を含む。出土遺物より埋没年代は近世以降か。

6SX036

調査区北部中央西寄りで検出。円形の凹み。埋土は明灰色土。瓦を含む。出土遺物より埋没年代は近世以降か。

6SX037

調査区北部中央で検出。小穴。埋土は黒色土。瓦を含む。出土遺物より埋没年代は近世以降か。

6SX038

調査区北部で検出。第2遺構面の遺構が切り込む整地層。調査区中央西よりに広がる。埋土は黄灰色土。

6SX039

調査区北部で検出。第2遺構面の遺構が切り込む整地層。埋土は茶色ブロック混入黒色土。

6SX040 (Fig.4)

調査区南部で検出。調査区外に広がっているたまり状遺構。埋土は暗茶色土で炭化物が混じっている。遺構の切り合い関係は、6SX060より古い。6SX040と6SX060から出土した遺物が接合したことから考えて、時期差はあまりないと考えられる。

6SX041

調査区北部で検出。第2遺構面の遺構が切り込む整地層。埋土は黄色土。瓦や肥前系の陶磁器を含む。出土遺物より埋没年代は18世紀代。遺構の切り合い関係は、古い方から6SX041→6SX039→6SX038となる。

6SX042

調査区北部で検出。第2遺構面の遺構が切り込む整地層。埋土は黄色土。

6SX043 (Fig.9、57)

調査区北部で検出。第2遺構面の遺構が切り込む整地層。埋土は黒灰色土。瓦や陶磁器、木炭を多量に含む。火災が起きた後に火事場の廃材を処分した処理土層の可能性はある。

6SX050 (Fig.4)

調査区南部南寄りで検出。調査区の形状に沿うように、斜め方向に延びる窪みである。長さ4.35m×横幅0.80m、深さ0.10mである。埋土は暗灰茶色土。

6SX060

調査区南部南寄りで検出。東西7m、南北1.2m、深さ0.22mの溜りである。調査区と現在流れる藍染川との間を区切る石垣の裏込めの一部と考えられる。

6SX070 (Fig.4)

調査区南部で検出。東西8.5m、南北1.5mの範囲に堆積していた整地土である。

6SX129

調査区南部で検出された小穴群。埋土は暗褐色土。

6SX133

調査区南部東寄りで検出されたたまり状遺構。埋土は黒茶色土。調査区外に広がっているため、全容は明らかではないが、土坑もしくは整地土の可能性はある。

6SX141 (Fig.11)

調査区南部北寄りで検出。東西0.58m×南北0.54m、深さ0.35mの石組み円形状遺構である。検出した段階で円形に石が集積した状態が認められた。掘り下げてみると、4段以上で組まれたものであり、組まれている状況は石組み井戸の組み方に近い。底面に近い石ほど大きめの石を使っている。また、石材は花崗岩。石自体は河川での摩滅をうけておらず稜が明瞭。

6SX143

調査区南部東寄りで検出されたたまり状遺構。埋土は灰茶色土。遺構の範囲が不明瞭であるため整地土と考えられる。

6SX151 (Fig.4)

調査区南部北寄りで検出。東西方向に伸びる不定形の溜まり。おそらくは下層の6SE095に伴い沈み込みが起こって、それを防ぐために整地している整地層の可能性を考えている。

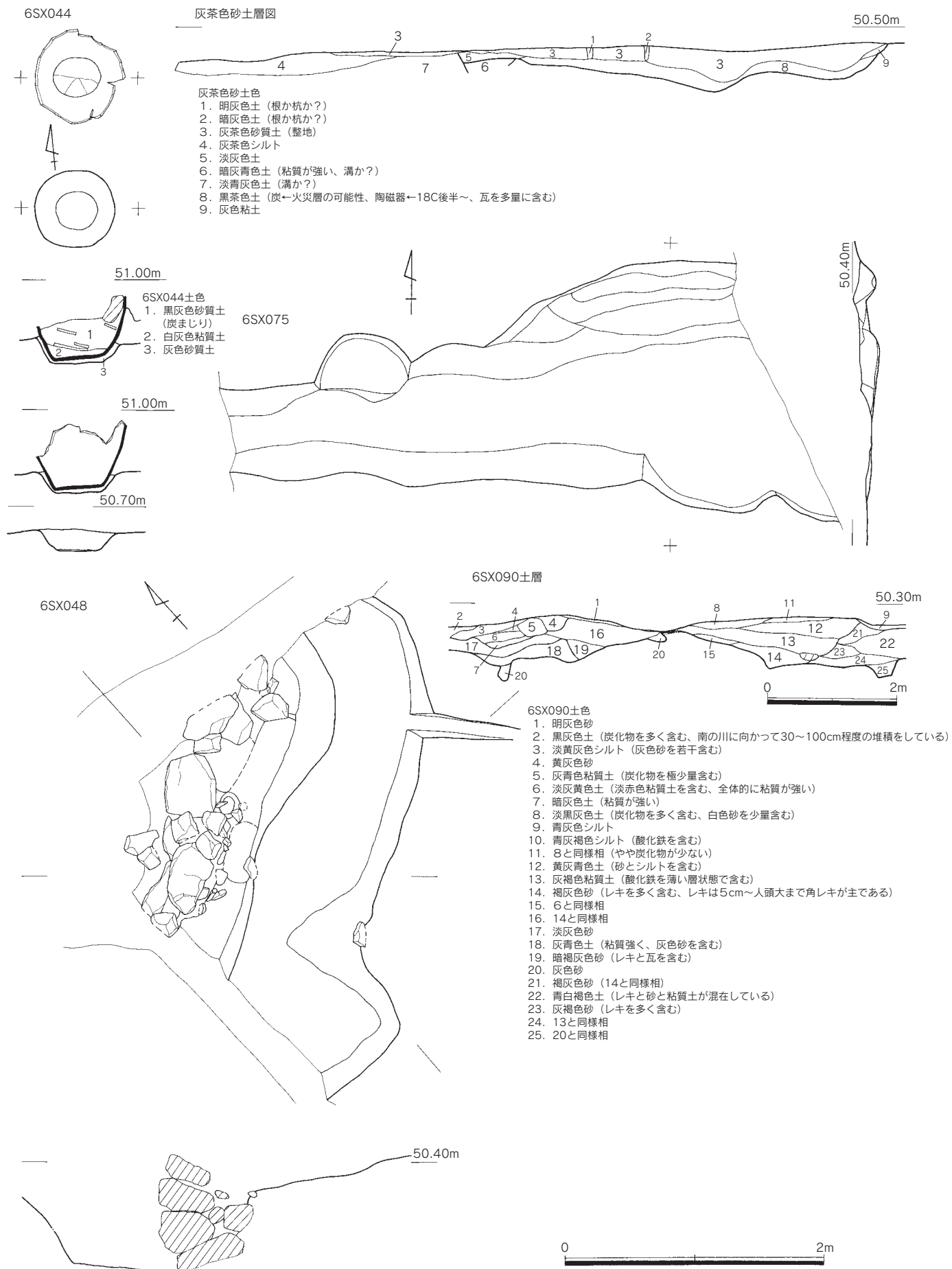


Fig.12 灰茶色砂土層図、6SX044、6SX048、6SX075実測図、6SX090土層図

第3 遺構面検出遺構 (Fig.5、Pla.2-1)

土坑

6SK047

調査区西側で検出。調査区外にのびる楕円形の土坑。

6SK052

調査区北側で検出。土坑か溜まりと考えられる。6SK024に切られる。後にわかったことであるが、土坑とした6SK024は井戸と認定され、6SE064として調査した。6SE064は調査区外に若干かかっているため、6SK052は6SE064の覆土の一部である可能性が高い。

その他の遺構

6SX044 (Fig.5、12)

調査区北部中央北よりで検出。埋め甕遺構。覆土は白灰色土→黒灰色土。上層の黒灰色土は6SX043と酷似しており、6SX043を埋め立てた時にすでに破壊されていた可能性が高い。1面を検出した際にすでに露出していたことから、本来は1面に帰属する遺構である可能性が高い。

6SX046 (Fig.5)

調査区北部北西隅で検出。緩い傾斜で北側に落ちる土坑もしくは溜まり状遺構。当初整地層の掘り残しと考え、掘り下げていたが、下から石垣である6SX048を検出したため、これに伴うものとする。

6SX048 (Fig.5、12)

調査区北西隅で検出。6SX046を掘りさげ後に検出した石垣。調査区外に延びているためにその全貌は明瞭ではないが、北側に弧を描くように作られていることが見てとれる。石垣の北側の土層観察では滞水状態と流水状態を繰り返していたことが判明している。江戸時代の絵図に見える弁天池に関する遺構の可能性が高い。

6SX049 (Fig.5)

調査区東側で検出。調査区外に伸びる溜まり。溝かとも考えたが調査区東側壁面の土層観察により、6SX043の掘り残しであることがわかった。このことより、火災処理土は東側に落ちて堆積していることがわかった。

6SX075 (Fig.5、12、Pla.4-2)

調査区南部中央寄りで検出。東西方向に長さ9m、幅1.3～3.1m、深さ0.15mの溜りである。幅は、東方向にいくにしたがって広がっていく傾向が認められる。埋土は黒茶色土で大量の炭と遺物が混じって検出されている。6SX090が埋没する過程で形成されている遺構である。

6SX080

調査区南部北寄りで検出。茶赤色土の整地層。6SX075に切られて6SX085を切っている。出土遺物はXX期以降の中世後期を中心とする遺物がまとまって出土するが、江戸後期の遺物が少量混じる。この現象は、中世後期に形成された面を江戸時代後期になって生活面として利用していたと理解できる。

6SX085

調査区南部北寄りで検出。灰褐色土の整地層。出土遺物によると、江戸時代後半には埋没していたと考えられる。

6SX090 (Fig.6、12、Pla.4-3)

調査区南部南寄りで検出。砂による堆積層が広く認められるため、河川痕跡と考えられる。土層を観察すると、水が流れて砂が溜まった時期と、水があまり流れなく粘質土、シルトが溜まった時期に大別できる。土層の堆積から大きく3つのルートで流れていたと想定され、埋土内からは多量の遺物が検出

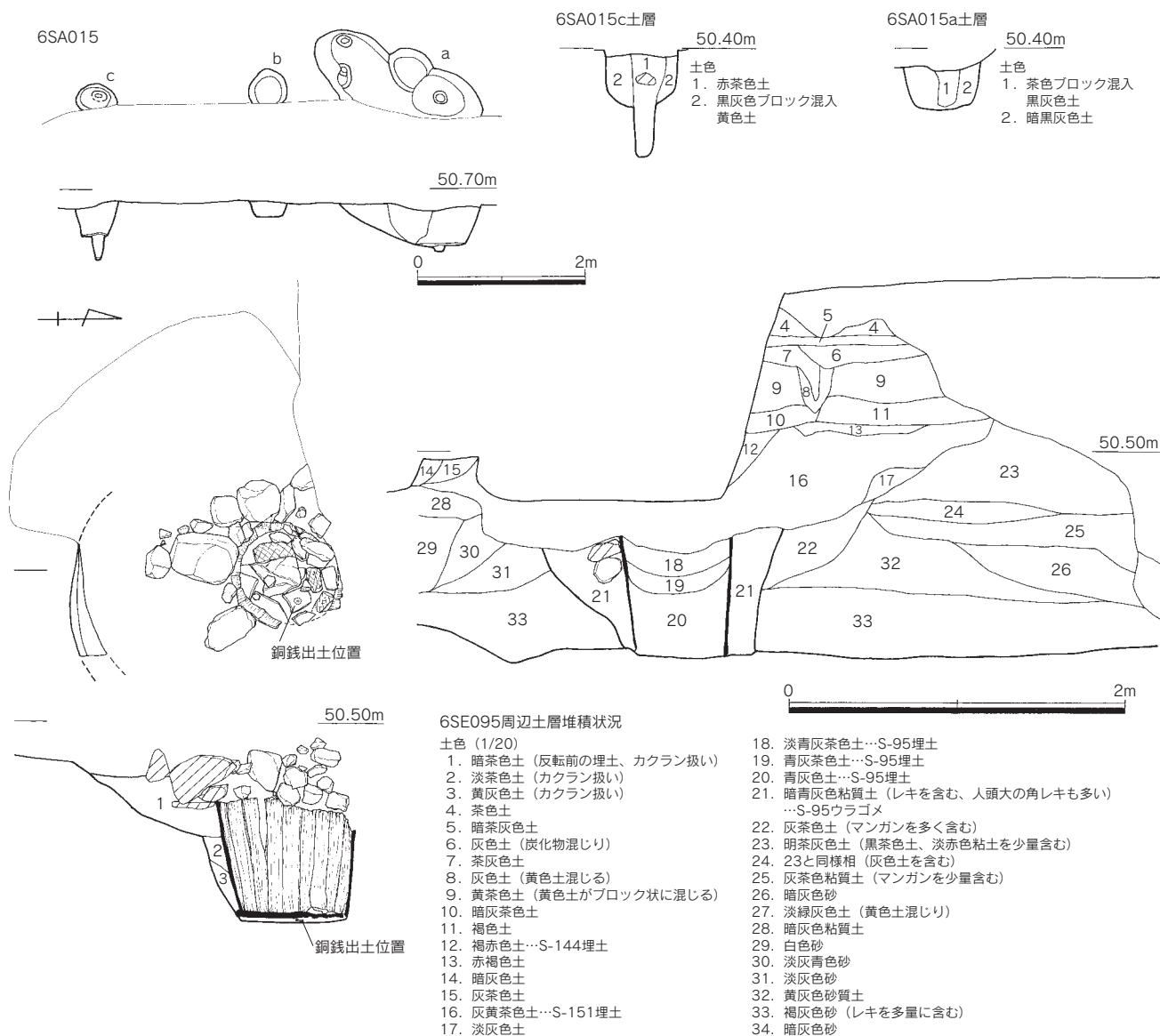


Fig.13 6SA015 (1/80、ただし土層図は1/40)、6SE095実測図 (1/40)

されている。出土遺物の年代から13世紀後半～14世紀、18世紀以～19世紀に遺物出土量のピークが確認できる。

第4遺構面検出遺構 (Fig.6、Pla.2-2、5-1)

3面を形成する赤褐色土と6SX051を下げて検出した面。

掘立柱建物

6SA015 (Fig.6、13)

調査区北部東寄りで検出。調査区内では2間確認されており、柱間は約2.0m。

井戸

6SE095 (Fig.6、13)

調査区南部中央寄りで検出。検出段階では直径2.5mの広がりを持つ円形土坑だったが、掘り下げていくと、井戸枠に桶を使った井戸と判明した。

井戸中央部に直径1.0m前後、深さ0.5mの円形の土坑を掘り、そこに桶を設置している。桶と堀方の間の裏込めには、長さ0.3m×幅0.2～0.4mの大型の花崗岩と、0.2m×0.2m×0.2mの中型の花崗岩、拳大の礫によって構成されている。裏込め石を観察すると、中～大型の石は平坦面を内側に向け、反時計回り

に積まれている。桶板は18枚現存しており、1枚の幅は10cm前後、埋没環境のせいか木質の残りが悪かった。桶の直径は上部で0.7m、下部で0.6m、高さは0.7m。桶の底には瓦が敷かれていたが、桶板が瓦の上に乗っていることから、桶を設置するまえに瓦が敷かれていたことがわかる。敷かれた瓦は格子目叩きがある平安時代の平瓦で、瓦敷きの意図としては、底面にたまった泥の巻き上げ防止だと想定される。現在は湧水していなかった。

また、瓦敷きの瓦の直下から、文字面を上にして銭貨が1枚出土している。井戸の構築時の祭祀の可能性が考えられる事例だろう。出土遺物の年代観からXX期には埋没している。

その他の遺構

6SX051

調査区北部南西隅に広がる整地層。6SX051を下げて、第4遺構面の遺構を検出した。埋土は灰色土。

6SX053

調査区北部西側で検出した小穴群。埋土は灰色土。平安時代後期の遺物を含む。

6SX054

調査区北部中央付近で検出した小穴。炭混じりの黒色土を含む。

6SX056

調査区北部南西隅で検出した小穴群。

6SX066

調査区北部北寄りで検出。6SX067を切っている。

6SX067 (Fig.6)

調査区北部北寄りで検出。6SX066に切られている。

6SX100 (Fig.9)

調査区北部で検出した整地層。第4遺構面の基盤層の可能性が高い。

第5遺構面検出遺構 (Fig.7、Pla.3-1)

溝

6SD058 (Fig.6、7)

調査区北部西寄りで検出。南北方向の溝で、長さ8m、幅0.3～0.5m、深さ0.25m。埋土は灰色土。第4遺構面で検出して南側を掘ってしまったが、北側の整地をはずしたところ、続きが検出された。よって本来は第5遺構面に帰属するものである。溝の振れは、N-1 54 °Wと北に対してわずかに西へ振れている。遺構の切り合い関係から、6SD058 (古) →6SX020 (新) となる。出土遺物からXVI期には埋没したことがわかる。

その他の遺構

6SX020 (Fig.7、14)

調査区北部北寄りで検出。調査区外に伸びる落ち込みを掘り下げていくと、石垣が2列検出された。南側の石垣は、東西方向に伸びている。1辺が0.4m程度の長方形の石を主に使い、1段積み。東方向へは他の遺構によって切られているが、そのあたりに石が散乱していることからもっと東側に伸びる可能性がある。北側の石垣は2m程しか検出していないが、おそらく南西から北東方向へ伸びると思われる。南側の石垣と比較して0.6～0.8m程度の大ぶりの花崗岩を使い、最低3段は組んで積んでいる。両方とも北側に向かって面を向けていること、裏込めが南側に存在すること等から、北側に向けて築造された施設であることがわかる。この両者が併存したかどうかは調査時には解決できなかった。当然、時期差が有

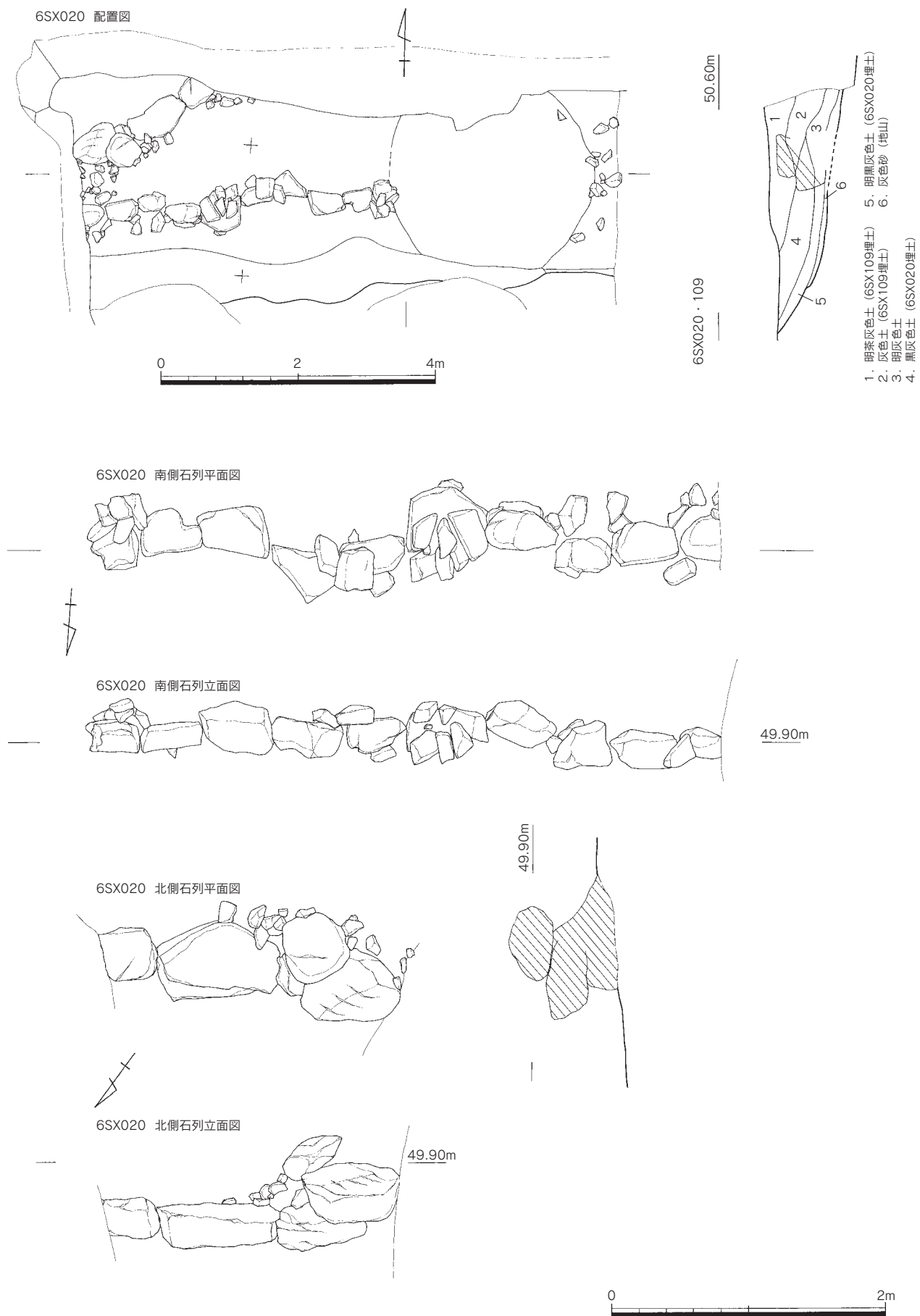


Fig.14 第5遺構面6SX020実測図（配置図は1/80、他は1/40）

る可能性もある。出土遺物からはXIX期には廃絶して埋められていた可能性が高い。

6SX025 (Fig.7)

調査区北部北寄りで検出。6SX020と同一遺構。調査時に6SX020を清掃段階に、同一の遺構であることに気づき、東側で新に検出して掘削したものを6SX025とした。ただし、6SE024・064に切り合いで壊されているため、石垣が東側に連続したかどうかは不明である。ただし、井戸の東側にも石の破片が点在していることから、なんらかの施設があった可能性は指摘できる。

6SX105

調査区南側北寄りの整地層。5面目の基盤層。調査区北部では、茶灰色土層や黄褐色土層にあたると考えられる。

6SX109

調査区北部北寄りで検出。6SX020の上層に堆積していたたまり状遺構。

第6 遺構面検出遺構 (Fig.8、Pla.3-2)

その他の遺構

6SX124 (Fig.8)

調査区北部北寄りで検出。北側に向かって堆積しているたまり状遺構。

6SX126 (Fig.8)

調査区北部北寄りで検出。北側に向かって堆積しているたまり状遺構。

6SX128 (Fig.8)

調査区北部南寄りで検出。埋土は灰色土のたまり状遺構。

(4) 出土遺物

第1 遺構面出土遺物

井戸出土遺物

6SE011出土遺物 (Fig.15)

青磁

椀 (1) 龍泉窯系青磁I-6類。口縁部破片。

土坑出土遺物

6SK013出土遺物 (Fig.15)

国産磁器

小型合子 (2) 紅皿。ほぼ完形、口径3.8cm、高さ1.1cm、高台径1.4cm。

坏 (3) 内面は化粧土を施した上に透明度が高い釉を施す。有朱書きで飛び跳ねる鯛を描く。外面口縁下部に「九谷」と朱書きを施す。外面は施釉をせず、型抜き成形による人物像になっており、その表現と内面に描かれている鯛との関連性から恵比寿神と考えられる。両眼には墨により目入れがされ、口唇部は朱書きにより彩られている。九谷焼か。

第2 遺構面出土遺物

掘立柱建物出土遺物

6SB010出土遺物 (Fig.15)

国産磁器

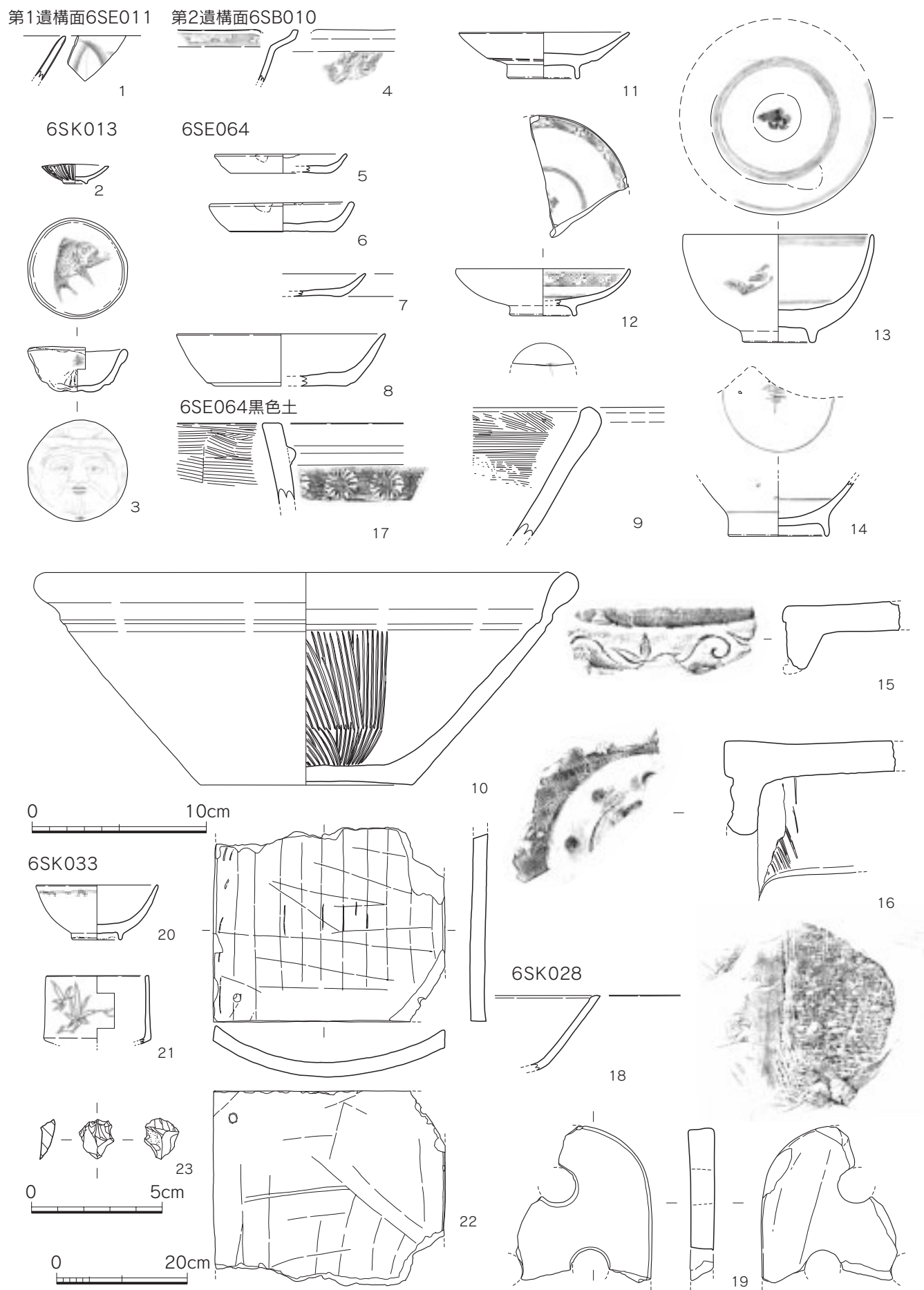


Fig.15 第1遺構面 6SE011、6SK013、第2遺構面6SB010、6SE064、6SE064黒色土、6SK028、SK033その1出土遺物実測図 (22は1/8、23は1/2、他は1/3)

角皿（4） 口縁部破片。口縁部内面に梅花と松葉の図案を描く。外面には松を描くが、手法、および釉薬から近代～現代のものと考えられる。

井戸出土遺物

6SE064出土遺物（Fig.15）

土師器

小皿a（5、6、7） 口径がはっきりわかるのは、6で口径8.2cm、器高1.7cm、底径6.1cm。ほかは破片。3点すべて底部糸切り。

坏a（8） 口径12cm、器高3cm、底径8.5cm。底部糸切り。

瓦質土器

鉢（9） 焼成不良。器壁断面を観察すると黒色化しているため、焼成温度が低かった可能性が見て取れる。内面を刷毛目調整する。

国産陶器

擂鉢（10） 口径31.2cm、器高12.2cm、底径12.1cm。焼成は良好で固く焼き締まっており、茶褐色の釉が全面に施されている。擂目は6条が1単位で密に施す。

国産磁器

坏（11） 産地不明の白色磁器である。外面で底部から屈曲して鋭角に立ち上がり、その屈曲点に沈線が入るのが特徴的である。

肥前系染付磁器

坏（12） 口径9.8cm、器高2.7cm、高台径4.2cm。内面は呉須で絵付けし、外面は青磁釉で仕上げている。内面口縁部近くには、四方襷文様を描き込み、内底面には手描きの五弁花文を配置する。

椀（13、14） 13は口径11cm、器高6.2cm、高台径4.2cm。12と同様に、外面は青磁釉で仕上げている。内底面、見込み釉剥ぎ。中央に五弁花文。14は広東椀。内底面に、崩れた昆虫文を施す。

瓦

軒平瓦（15） 焼成はやや良好。色調は淡灰色。中心飾は三葉文を配置し、唐草文が左右に展開する。

軒丸瓦（16） 焼成は良好。いぶしは軒先の一部にしか施されていない。破片のため全形は不明だが、三巴文の可能性が高い。

6SE064黒色土出土遺物（Fig.15）

瓦質土器

火鉢（17） 口縁部破片。焼成は良好。口縁端部から約1.4cm下方に突帯を巡らし、その下部に菊花文を横方向に連続してスタンプする。小破片のため、器形は桶形の可能性もある。

土坑出土遺物

6SK028（Fig.15）

土師質土器

焙烙（18） 焼成は良好。器壁は薄く3.5mm程度しかない。外面は使用時の煤が付着して黒色化している。

七輪（19） 炭をうける皿部。破片。隅丸方形型をしている。穿孔部の直径は2cm前後を測る。

6SK033（Fig.15、16）

国産磁器

椀（20、21） 20は小椀。口径7cm、器高3.15cm、高台径2.9cm。口縁部外面に染付が施される。21は体部から直に口縁部に向かって立ち上がる器形で、湯飲み茶椀と考えられる。外面の染付は紅葉文か。

6SK033



Fig.16 第2遺構面 6SK033その2出土遺物実測図 (1/8)

瓦

平瓦 (22) 22は、縦29.8cm、横25.5cm、厚さ2.5cm。模骨跡を丁寧にナデ消している。また、角近辺に直径1cmの穿孔がほどこされている。

軒平瓦 (24) 24は、長さが46.2cm以上、短面幅が46.7cmを測る大型の軒平瓦である。

石製品

剥片 (23) 黒曜石の剥片。

6SK045出土遺物 (Fig.17)

土師器

小皿 (1) 口径6.6cm、器高0.9cm、底径4cm。底部は回転糸切り。口縁部に炭素が帯状に吸着していることから、灯明皿として使用されたことがわかる。

土師質土器

鉢 (2) 底部に高台の剥離痕跡があることから、高台付鉢と考えられる。体部外面に、扇形の波状文を全面に施している。

瓦質土器

鉢 (3) 焼成は良好。口縁端部は丸く収める。体部中頃に直径2cmの穿孔が2カ所開いており、残存状況から判断すると、完形時には3カ所施されていたと考えられる。

国産陶器

蓋 (4) 色調は赤褐色。釉調は外面に灰黄色を施したあとに、緑灰色の釉を垂らしている。口縁端部に炭素が吸着している。

皿 (5) 釉調は鮮やかな明黄色。胎土は精良。底部外面に目跡が2カ所ある。近現代のものか。

壺 (6) 口縁部破片。胎土は灰褐色。表面にわずかに自然釉がかかる。

油差し (7) 取っ手が縦位置につく。釉調は淡緑灰色。

猪口 (8) 釉調は鮮やかに明黄色。胎土は精良。近現代のものか。

肥前系磁器

蓋 (9) 口径14.9cm、器高4.3cm。頂部を取っ手の耳痕跡がある。外面に施されている染付の図案は、宝の図案をおそらく四方に描き、その区画内部に2つ重なる柳？を描いている。

椀 (10) 湯飲み茶椀。外面に呉須で文字を施す。

坏 (11) 直線的に立ち上がる体部の内外面に文字を描きこむ。内底面には、葉の上のにのせた鯛を描く。内面の文字は「めでたいな」。外面の文字は「いせの□□□折しきて」か。

国内磁器

鉢 (12) 口径26.6cm、器高7.2cm、高台径9.3cm。大振りの鉢。内底面にはヘラ切りで、草花文を描く。高台は蛇の目高台。

6SK045

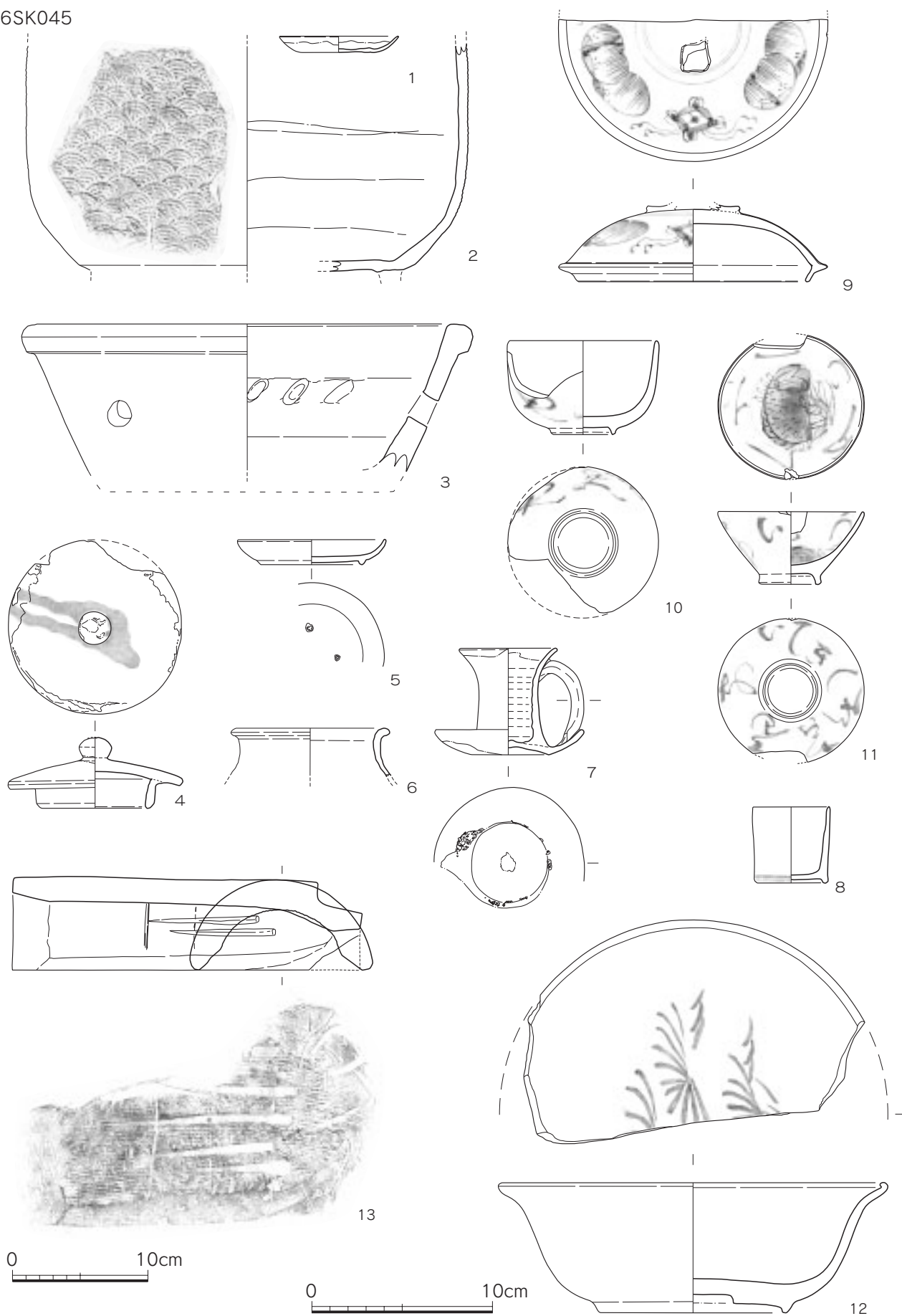


Fig.17 第2遺構面 6SK045出土遺物実測図 (13は1/4、他は1/3)

瓦

丸瓦 (13) 全長25.9cm、幅13.7cm、厚み2.2cm。焼成はやや良好。内面に模骨痕が残る。

6SK055暗茶灰色土出土遺物 (Fig.18、19)

土師器

小皿a (1) 復元口径7.4cm、器高1.1cm、復元底径5.4cm。底部切り放し技法は回転糸切り。色調は茶褐色。0.1mm程度の金色雲母を少量含む。

坏a (2) 復元口径11.2cm、器高2.1cm、底径8.7cm。口縁部を中心に煤が付着している。内外面の見込み部分が黒色化しているのは、重ね焼きの痕跡か。

土師質土器

七輪 (3～6) 3、4は口縁部の破片。3は口縁部で折り返している痕跡が観察され、内外面に突起状の部位が剥離した痕跡が残っている。焼成は良好。色調は黄橙色。表面は丁寧に布などでミガキ調整をしている。口縁部端部には上にむかって逆台形に突き出す部位を接合していた跡が長さ15cmほど確認できる。なお、外面には口縁から2cmほど下方に、幅1cm弱の赤褐色に変色した部位が連続で回っているが、これは金属製の環による箍締め痕跡だと考えられる。4も同様の口縁部の破片である。3では剥離していた、口縁部の逆台形突出部が確認できる。胎土は金色の雲母を多く含む。台形突出部の内面には煤が広く付着している。折り返しをして本来見えない外壁内側の調整は、刷毛目調整のみでナデ調整による仕上げは認められない。5は七輪の底部。焼成は良好。色調は淡赤褐色。外面はミガキ調整。内面は刷毛目調整。丸みを帯びた脚がおそらく3カ所につけられる。灰を掻き出すための窓がある。6は脚がないタイプの底部か。灰掻き出し用の窓が認められる。

国産陶器

椀 (7) 復元口径7.1cm、器高3.4cm、内外面に付け掛けで茶褐色の釉がかけられる。一部釉が高台まで垂れている。茶褐色釉の一部が淡灰色に変化している。

擂鉢 (8) 底部破片。焼成良好。茶褐色の釉が全面に掛けられる。内面の擂目は細かく密に施される。

土瓶 (9) 口縁部～体部の破片。三角形の把手がつく。外面の釉調は淡黄灰色で、表面に細かい貫入がはいる。絵付けは暗茶褐色で施される。

急須 (10、11) 10、11ともに把手。10は濃緑色釉に灰青色釉がかかる。11は濃緑色釉がかかり、内面に黒色釉が垂れている。

肥前系磁器

椀 (12・13) 12は復元口径10.3cm、器高5.2cm、高台径4.3cm。内面見込みに菊花文。外面は二重網目文を呉須により絵付けする。13は復元口径10cm、器高5.2cm、復元底径4.2cm。外面に草花文。高台外面に二重線。

皿 (14～16) 14は口径14cm、器高4.1cm、高台径5.1cm。内面見込み部を輪状に釉剥ぎをしている。内面に襷文を施す。呉須を絵付けする下地の灰白色の釉が、全体的にぼったりと重い感じを受ける。呉須も発色が暗く薄い。くらわんか茶椀と同時期のものか。15、16ともに蛇の目釉剥ぎ高台。15は復元口径14.4cm、器高4.2cm、復元高台径9.4cm。内面中央に虫文描く。内外面に木や枝を描く。16は復元口径13.8cm、器高3.9cm、復元高台径7.8cm。外面は枝、内面は草花文を描く。15、16ともに透明性が高い釉調である。

鉢 (17) 大ぶりの鉢。残存高4.1cm、高台径10.4cm。底部は蛇ノ目凹形高台。内面見込み部から口縁部にむかって、蛸唐草文を施す。

瓦

6SK055暗茶灰色土①

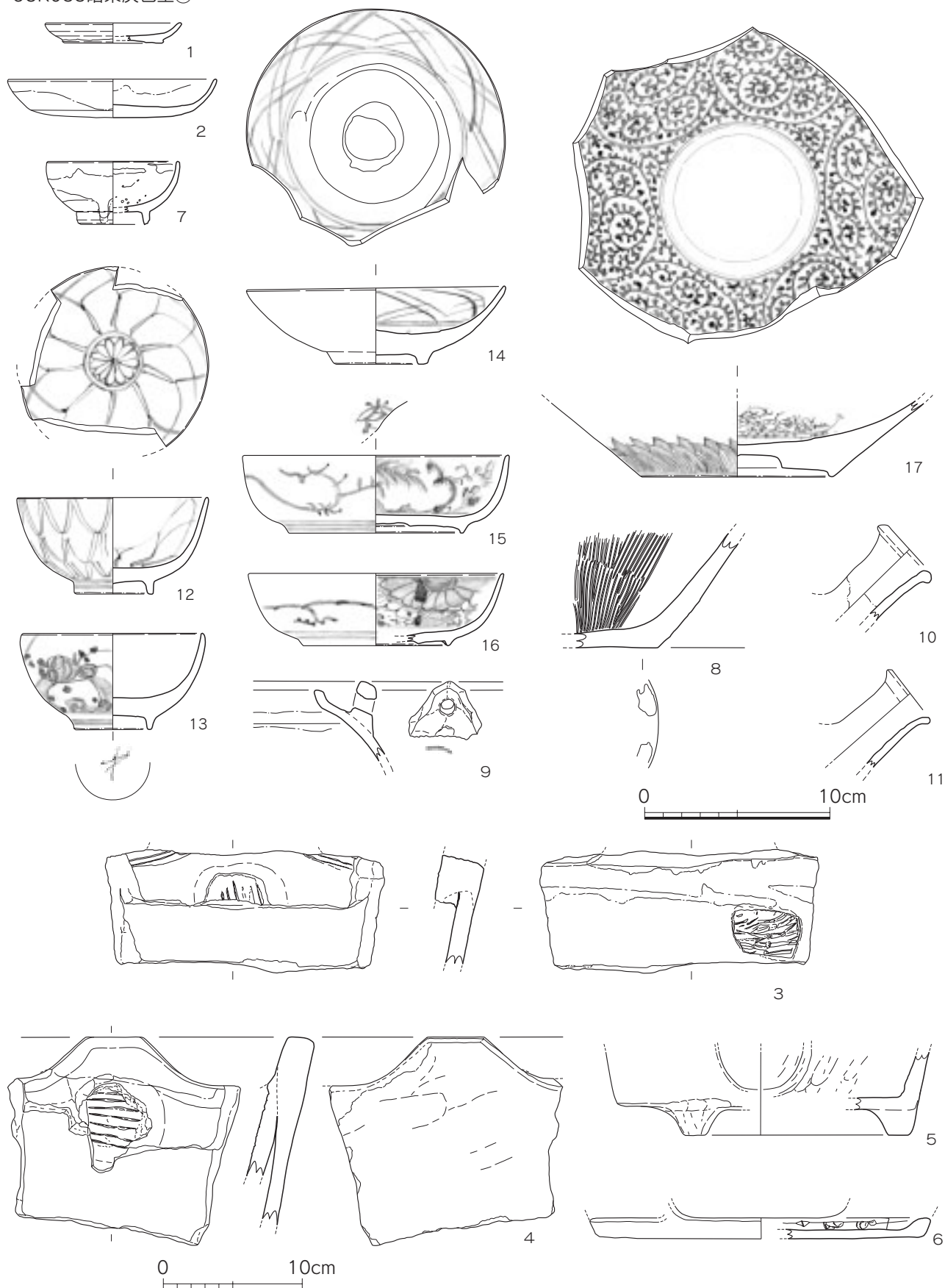


Fig.18 第2遺構面 6SK055暗茶灰色土その1出土遺物実測図 (3~6は1/4、他は1/3)

6SK055暗茶灰色土②

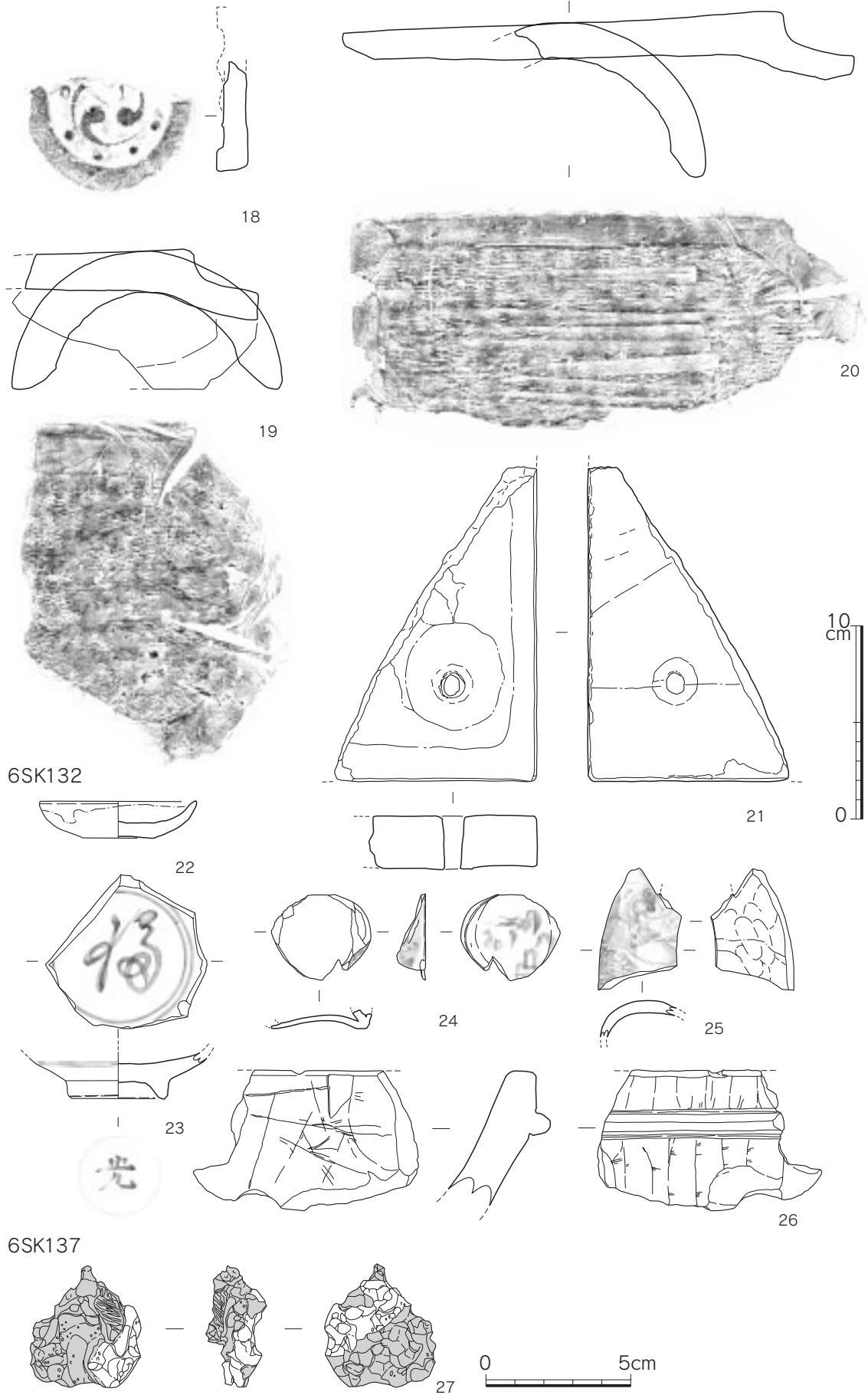


Fig.19 第2遺構面 6SK055暗茶灰色土その2、6SK132、6SK137出土遺物実測図 (26・27は1/2、他は1/3)

軒丸瓦(18) 直径6.1cm、厚み1.2cm。左回りの三巴文で、尾は界線に接していない。

丸瓦(19、20) 19は縦12.2cm、横14cm、厚さ2.2cmを測る。焼成は良好。20は縦26.6cm、横12.4cm、厚さ1.9cm。焼成は良好。内面は布目圧痕の後に、棒状の工具で掻き取りをしている。

道具瓦(21) 21は縦16.2cm、横10.4cm、厚さ2.7cm。直径1cmの穴が穿たれており、平坦な形から道具瓦の一種と考えられる。焼成は良好。穴を中心にして6cm程度、色調の暗黒灰色変が認められる。

6SK132出土遺物 (Fig.19)

国産陶器

皿(22) 復元口径8.1cm、器高1.9cm、復元高台径6.2cm。底部ヘラ切り。

肥前系磁器

椀(23) 染付椀。残存高2.4cm、底径5.1cm。内面見込みに吉祥句である「福」の崩し字を描く。外面高台内には、朱書きで「光」の一字を書いている。

人形(24、25) とともに鯉形の破片。内面には布目や指押さえの跡が残る。

石製品

石鍋(26) 滑石製石鍋の破片。外面には煤が付着する。

6SK137出土遺物 (Fig.19)

金属製品

鋳滓(27) 縦4.2cm、横3.8cm、厚さ1.8cm。表面は黒色化している箇所と、橙茶色の酸化した部位がある。

その他の遺構

出土遺物

6SX005出土遺物 (Fig.20、Pla.6-4)

土師器

小皿a(1) 復元口径7.4cm、器高1.35cm、復元底径5cm。底部糸切り。器壁が薄く2mm程度。

土師質土器

火鉢(2) 復元口径12.8cm、器高9.8cm、復元底径9.4cm。口縁部を大きく内湾させる。口縁部から3.4cm下まではミガキ調整を施して器壁を平滑にしている。ちょうどその調整の境目あたりにスタンプ文が押される。スタンプは二重輪文(欠損しているのでさらに輪が重なる可能性もある)と、1.5cm角の銘文と思われるものである。器壁断面を観察すると、内側は灰茶色に変化している。底部外面には剥離用砂粒が認められる。また底部には外側に張る短い脚が付くが、残存状況からみると、三脚であった可能性が高い。

国産陶器

蓋(3) 口径8.4cm、器高1.9cm。落とし蓋で、菊花を模した摘みがつく。釉調は黄褐色。

椀(4) 復元口径8.8cm、器高6.4cm、高台径4cm。釉調が灰白色で、表面に大きめの貫入が入る。体部の中央やや口縁部よりに赤褐色でスタンプ状に文字を描いている。

徳利(5) 口縁部を欠く徳利。肩部から体部中位にかけてくびれを持つ。

壺(6) 口縁部の破片。復元口径9.6cm。褐茶色の釉が掛かる。

肥前系磁器

椀(7、8) 7は復元口径14.3cm、器高7.3cm、復元高台径5.8cm。呉須により絵付けされた染付椀。内面見込み中央には五稜花のコンニャク印判を押す。見込みには2重圈文。外面には草花文を描く。底部外面にも記号を描く。全体的に器壁が厚手で、釉もやや厚くぼったりとしたもので、くらわんか茶椀

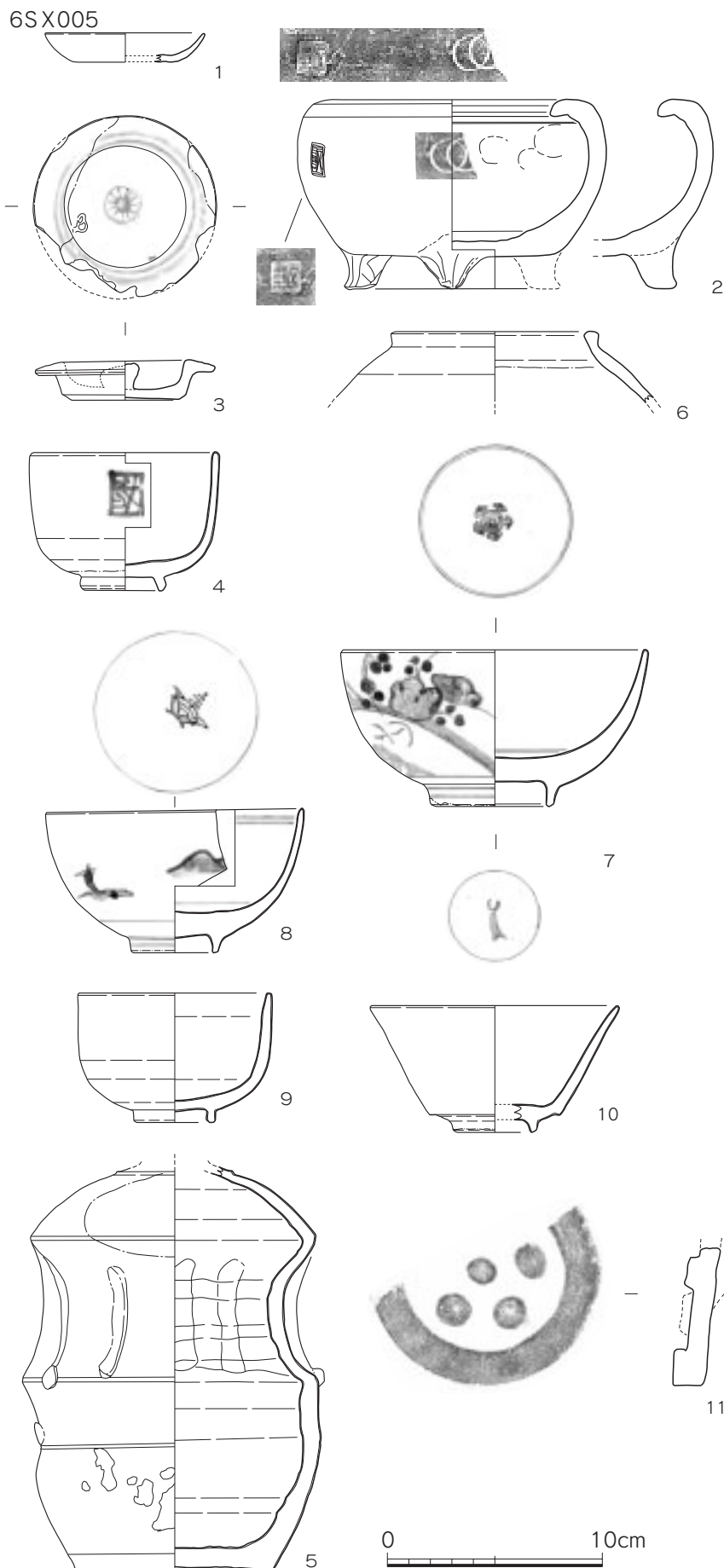


Fig.20 第2遺構面 6SX005出土遺物実測図 (1/3)

の系統だと考えられる。8は復元口径12cm、器高6.6cm、高台径4.1cm。内面見込み中央に、昆虫文。外面には松と雁を描く。内面の呉須の発色はやや緑色。

国産磁器

椀 (9、10) 白磁椀。9は復元口径12cm、器高6.6cm、底径4.1cm。体部が内弯ぎみ立ち上がる。10は復元口径11.6cm、器高5.9cm、復元高台径3.8cm。体部から口縁部にむけてらっぱ状に直線的に開く。

瓦

軒丸瓦 (11) 瓦当部復元径10.6cm。梅鉢文。

6SX027出土遺物 (Fig.21)

瓦質土器

火受け (1) 復元口径17.1cm、器高4.8cm、復元底径15.8cm。L字型の受け口に平坦な底面が続く。脚の位置からおそらく三脚が付いていたと考えられる。焼成良好、燻しも良好で、色調は暗黒色。外面は平滑にミガキ調整を施し、内面は轆轤目が残る。内面には油煙が多く吸着している。

6SX029出土遺物 (Fig.21)

瓦

平瓦 (2) 凹面に「次右衛門」とスタンプ文が押される。

6SX030出土遺物 (Fig.21)

土師器

小皿a (3) 復元口径6.8cm、器高1.3cm、復元底

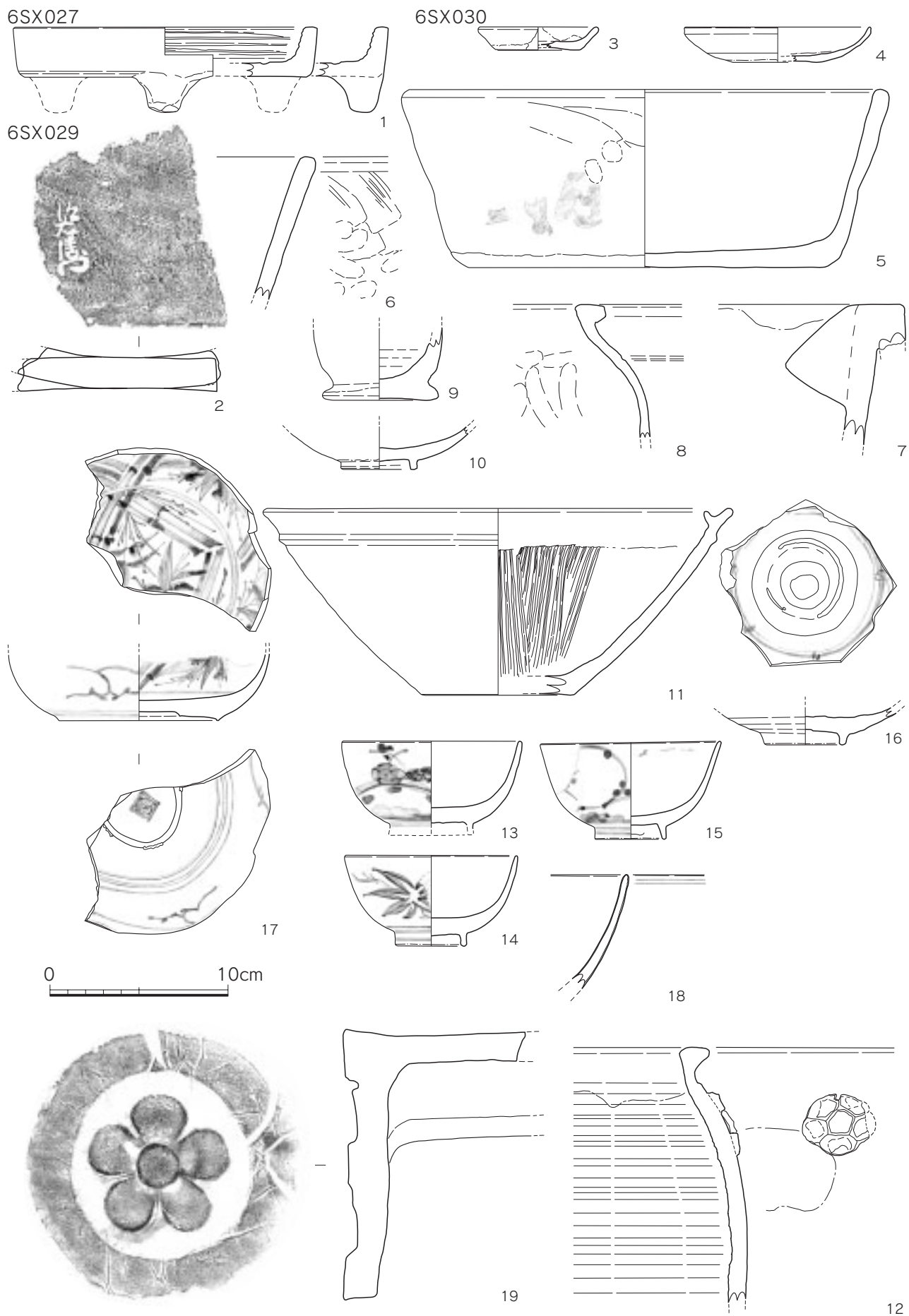


Fig.21 第2遺構面 6SX027、6SX029、6SX030出土遺物実測図 (1/3)

径4.8cm。底部切り離しは、回転糸切り。口縁部から内面体部にかけて、油煙が張り付いていることから、灯明皿として使用してことが伺える。

坏a(4) 復元口径10.5cm、器高1.9cm、底径5.0cm。胎土は精良。色調は淡灰黄色。

土師質土器

火入れ(5) 復元口径32.4cm、器高10cm、復元口径19.8cm。胎土は白色粒をごく少量含む。色調は明黄灰色。体部内面は横ナデ調整。内定面は不整方向の回転ナデ。外面の下半に墨書により文字が描かれているが、判別できず。

鉢×火入れ(6) 体部破片。色調は全体に黒灰色だが、部分的に燻しが掛かっておらず、黄灰色を呈す。内面は回転ナデ、外面は指頭圧痕の後、刷毛目調整を施す。金色雲母を大量に含む。

七輪(7) 口縁部の破片。外壁部は剥離して、折り返した内面が残存している。端部に煤が付着している。

国産陶器

甕(8、12) 8は口縁部破片。外に向かって肥厚する口縁部。釉色は明茶褐色土。焼成は良好。内面は指でナデを縦方向に施す。12は中型甕の破片か。茶褐色の釉に、灰黄色の釉が重ね掛けされる。口縁部に近い肩部に、不整五角形を呈す輪状物を貼り付ける。内面は轆轤目が強く残る。

花瓶(9) 底部破片。底部切り離し技法は、回転糸切り技法。黄緑色の釉を施す。

坏×皿(10) 復元底径4.3cm。釉は灰黄褐色が基本で内面には緑灰色の釉が細かくちり広がっており、高台部を残して付け掛けをする。

擂鉢(11) 復元口径26.4cm、器高10.5cm、復元底径8.7cm。擂目は細かく密に施される。擂目は10条が1単位。焼成は良好。色調は赤褐色。外面は回転ナデ調整。口縁端部はY字型を呈す。

肥前系磁器

椀(13～15) 13は復元口径10.1cm、器高4.9cm。高台を欠損する。外面に草花文。14、15は口径が10cm前後で器高も5cm前後とそろっており、呉須の発色もやや緑色を呈しているなど共通点が多い。14は外面に紅葉を描き、15は外面に花卉文。

坏(16) 染付皿。内面の見込み部分を蛇ノ目状に掻き取る。その見込み部分に高台の目痕あり。

鉢(17) 染付皿。残存高は3.7cm、復元高台径9cm。高台は蛇ノ目凹状高台。外面高台内に、吉祥句「渦福」の略字。内面に竹林を描き、外面に木を配している。

龍泉窯系青磁

鉢(18) 残存高6.3cm。鉢IV類。

瓦

軒丸瓦(19) 瓦当面直径14.9cm。焼成は良好。色調は淡黒色。凹面側のナデあり、模骨痕あり。凸面は一定方向のナデ調整。梅鉢文。

6SX038出土遺物 (Fig.22)

瓦

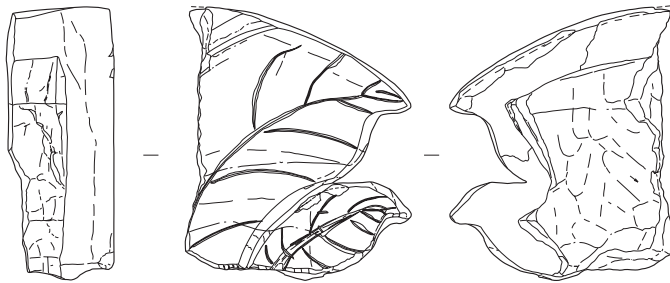
鬼瓦(1) 縦13.8cm、横12cm、厚さ5.3cm。部位は明らかではないが、葉の図案を描いていると思われる。焼成はやや良好。燻しは不良。凹面は指押さえの痕が明瞭に残存。3mm～30mmの白色粒子を多く含む。

6SX040出土遺物 (Fig.22)

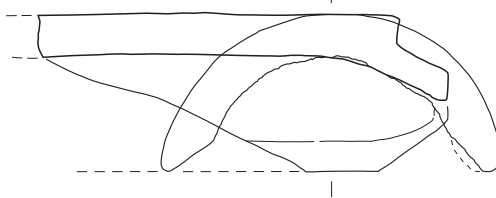
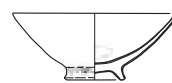
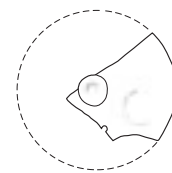
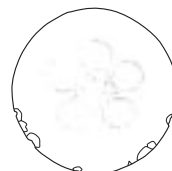
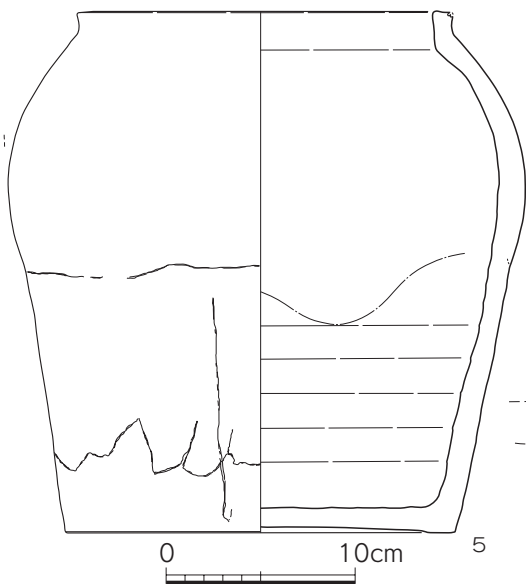
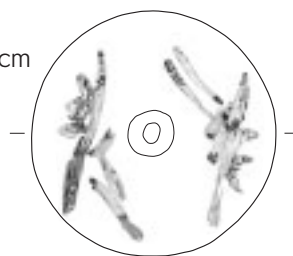
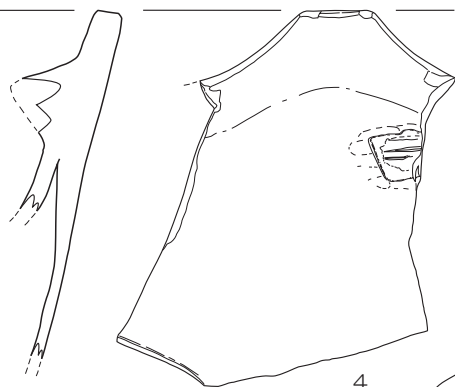
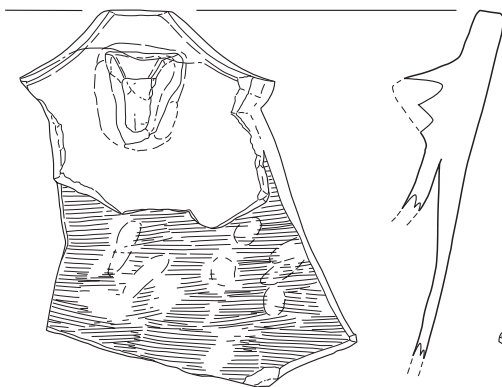
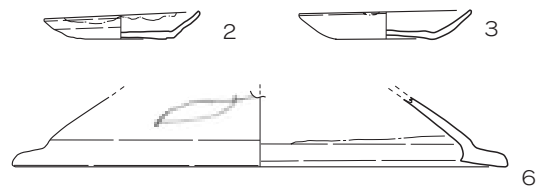
土師器

小皿a(2、3) 2は口径6.2cm、器高0.9cm、底径3.3cm。底部切り離し技法は、回転糸切り。焼成は良

6SX038



6SX040



14



15



12



Fig.22 第2遺構面 6SX038、6SX040出土遺物実測図 (1/2は14、15。1/4は、1、4、5。他は1/3)

好。色調は、明黄灰色。器壁は1.5mmと非常に薄い。口縁部に2.5cmほどの幅で黒色に変化した箇所があることから、灯明皿としての用途が想定できる。完形。3は口径6.8cm、器高1.1cm、底径3.8cm。底部切り離し技法は回転糸切り。焼成は良好。色調は淡白黄色。

土師質土器

蓋（6） 復元口径19.6cm、残存高2.7cm。焼成は良好。胎土は微細な雲母片を少量含む。内面に黄色釉が一部掛かる。色調は明黄灰色。外面に墨書があるが、絵の一部か。行平鍋の蓋の可能性あり。

七輪（4） 残存高20cm。内面の三角突起は一部残存しているが、外面の突帯は剥離している。色調は淡赤褐色。口縁部の台形突起部に集中して煤が吸着している。

瓦質土器

壺（5） 復元口径25cm、器高22.7cm、底径25.7cm。焼成は良好。内面には幅1.8cmほどの感覚で轆轤目が残る。外面は上半部が暗灰色に変化しているが、基本的な色調は淡灰黄色土である。火消し壺。

国産陶器

蓋（7） 7は口径9.7cm、器高3.8cm。頂部に宝珠形摘みを持つ。外面に茶褐色の呉須で絵付けされる。ほぼ完形。

国産磁器

坏（8、9） 8は復元口径7cm、器高2.8cm、復元高台径2.6cm。白磁。しぼり技法により口縁部が波状。内面に金地塗りをし、梅鉢文を白抜きする。高台部は釉掻き取り。9は口径6.5cm、器高2.5cm、高台径2.4cm。内面に金地塗りにより梅鉢文を線書きで描く。高台外面に凹凸圈文を巡らし、高台内部に呉須により福の崩し字を描く。

蓋（10） 復元口径6.2cm、器高2.4cm。白磁。丸みを帯びた摘みがつく。金地塗りで摘みと外面に円弧文とを描く。

碗（11） 口径7.6cm、器高3.7cm、高台径3.3cm。青磁碗。高台部は釉掻き取り。淡緑灰色の釉を0.8mmほど掛ける。表面は貫入が入る。

瓦

軒丸瓦（12） 瓦当部の破片。左周りの三巴文。巴文の尾は圈文に接しない。

丸瓦（13） 縦20cm、横13.5cm、厚み1.8cm。凹面に布目圧痕が残る。凸面はナデ調整。

金属製品

不明品（14、15） 14は縦1.6cm、横1.9cm、厚さ0.8cm。15は縦2.2cm、横1.7cm、厚さ1.2cm。両方とも残存鉄部は黒褐色、その周辺部に暗茶褐色を呈す。

6SX041出土遺物（Fig.23）

瓦

軒丸瓦（1、2） 1は瓦当部の破片。左周りの巴文。燻しが不良のため、色調は淡黄灰色。2は梅鉢文。

軒平瓦（3） 焼成は良好。色調は明黒灰色。唐草文を配す。

6SX043出土遺物（Fig.23～27、Pla.6-2、6-3）

土師器

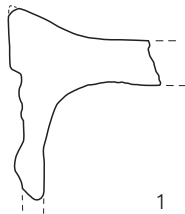
把手（4） 甕×甗の把手破片。色調は淡赤褐色で、部分的に淡黒灰色を呈す。

土師質土器

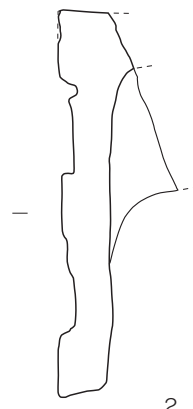
播鉢（5） 残存高6.4cm。底部から体部の破片。外面は刷毛目のあとにミガキ調整。金色雲母と白色粒子を少量含む。内面及び見込み部に5条を1単位にした播目が間隔を置いて施される。

土玉（6） 直径1.4cm。淡黄色。

6SX041



1

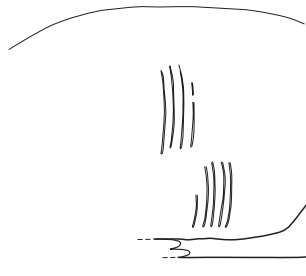


2

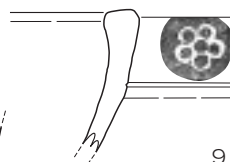


3

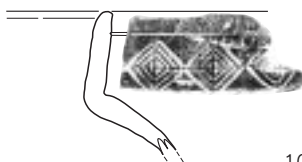
6SX043



5



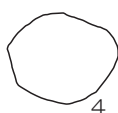
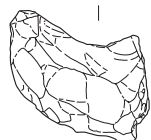
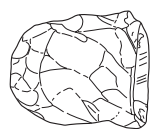
9



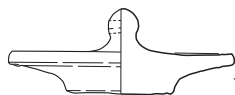
10



6



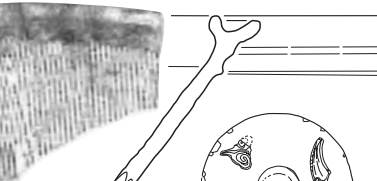
4



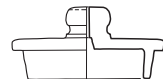
13



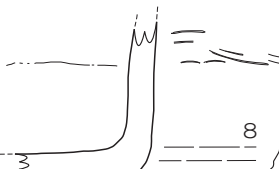
15



17



14

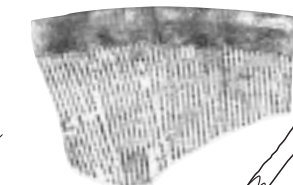
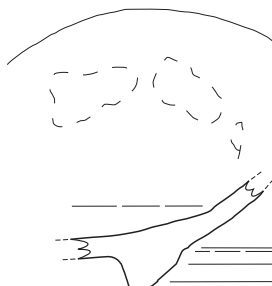


8

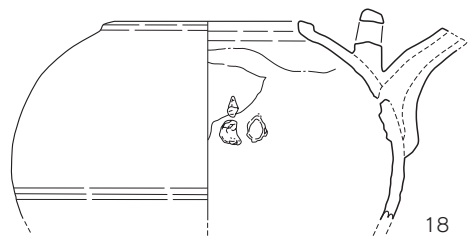


10cm

12



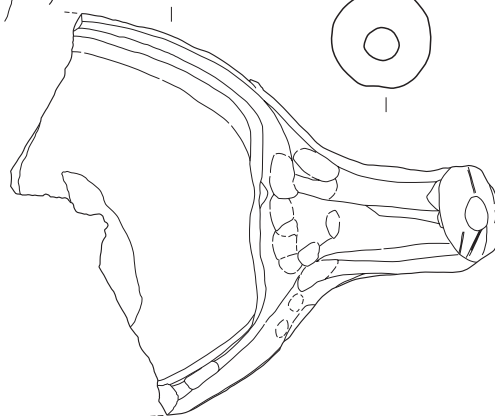
16



18



10cm



7

Fig.23 第2遺構面 6SX041、6SX043その1出土遺物実測図 (12は1/4、他は1/3)

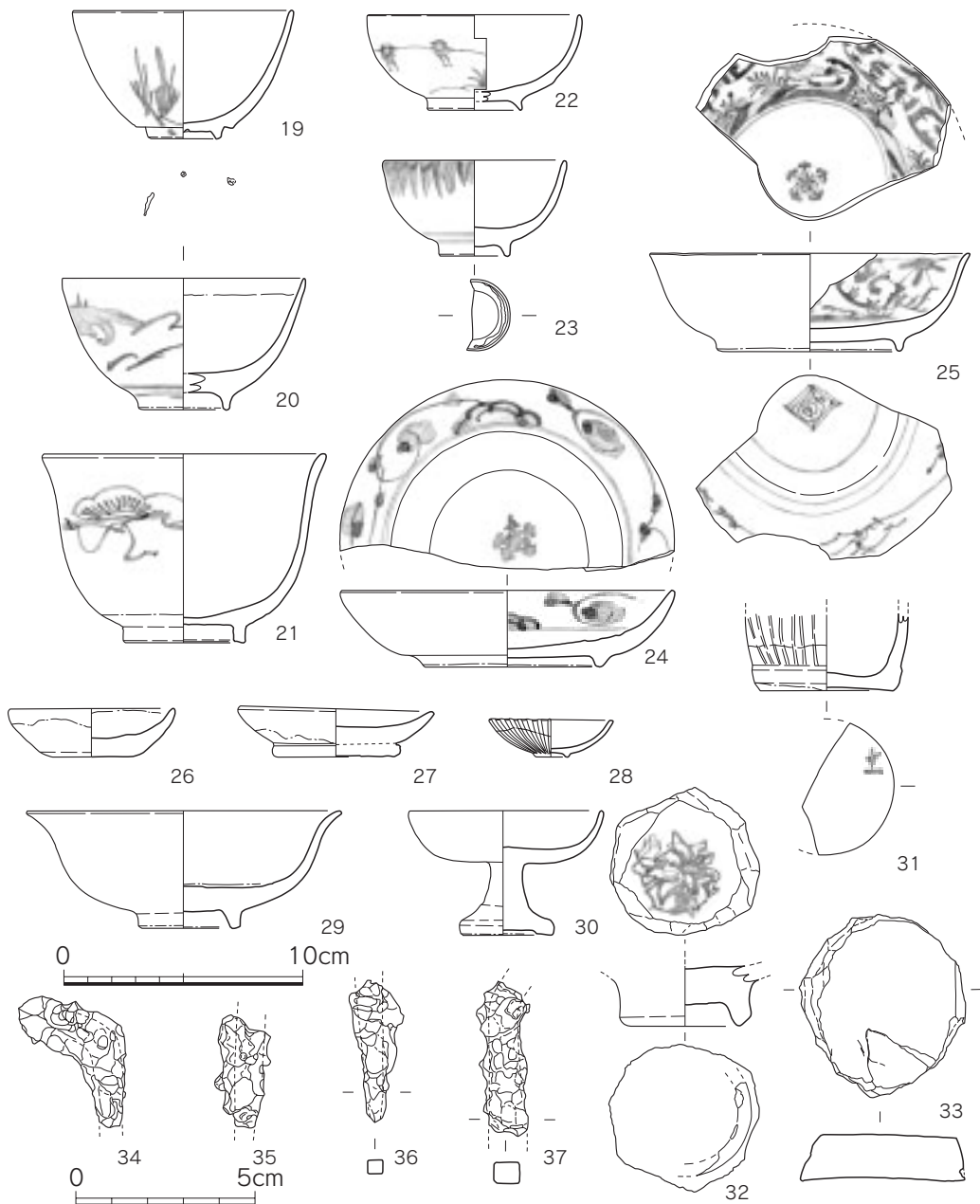


Fig.24 第2遺構面 6SX043その2出土遺物実測図 (34~37は1/2、他は1/3)

十能 (7)
長軸長17.6cm、
器高9.3cm、幅
15cm。胎土は
2mm以下の白
色粒子と金色雲
母を少量含む。
色調は、明黄赤
色。3cmほどの
立ち上がりを持
つ平坦な受け口
に、7cmほどの
把手がつく。把
手の直径は4cm
で、直径1.3cm
の穴が長さ
6.4cmほど穿た
れている。把手
の端部はヘラ切
りされている。
内底面には煤の
痕が残る。

火鉢 (8、9)
8は底部破片。
内面に煤が付着
している。9は
口縁部破片。外
面はミガキ調
整。内面は回転
ナデ調整。口縁

部から3cmほど下がったところに沈線が巡り、沈線と口縁部の間に、梅鉢文のスタンプが押される。焼成は良好。色調は明灰黄色。

瓦質土器

火鉢 (10~12) 10は口縁部破片。焼成は不良。頸部に菱形のスタンプ文が連続して押されている。11は復元口径19cm、器高11.9cm、復元底径14.3cm。焼成はやや不良。燻しは不良。口縁下半4cmの部位に蛇行する沈線を巡らす。その沈線に沿って菊花文と梅鉢文のスタンプが押される。脚は残存状況から3脚だったと想定できる。12は復元口径18.8cm、器高11.9cm、底径12.6cm。焼成・燻しともに良好。色調は暗黒色。外面はミガキ調整。口縁下部に梅鉢文のスタンプが巡るが、1カ所のみ菊花文のスタンプが巡る。口縁部は輪花形。脚の残存状況から、三脚だった可能性が高い。内面は口縁端部から3cm下半より煤が吸着している。

国産陶器

蓋 (13、14) 13は口径8.9cm、器高3.4cm。口縁部から天井部にかけて、黒緑色の釉を付け掛けしている。摘みは宝珠形。落とし蓋。底面は回転糸切り。口縁部内面に、重ね焼き時の融着した痕跡が輪状に残存している。14は急須の蓋。摘み頂部から内面まで直径2mmの穴が穿たれている。焼成は良好。色調は赤褐色。天井部には三カ所レリーフ状のものを貼り付けている。

托 (15) 口径8.3cm、器高2.7cm、底径3.4cm。底部切り離しは回転糸切り技法。内面に茶褐色の釉がかかり、見込み部には砂目跡が確認できる。

鉢 (16) 底部破片。残存高4.45cm、復元底径4.5cm。色調は、内面が灰褐色、外面が赤褐色。内面に砂目跡。

播鉢 (17) 口縁部破片。内面には細かい播目が密に施される。口縁部はY字型で、口縁部外面には2mmほどの突帯が巡る。

急須 (18) 復元口径8.4cm、残存高7.9cm。外面は黄灰色の釉、一部茶黒色の釉が掛かる。素地の色調は赤褐色。内面は、基本的に明褐色の釉、口縁部の内面に外面と同じ黄灰色の釉が掛かる。

肥前系磁器

椀 (19～23) 19は口径9.2cm、器高5.3cm、高台径3.1cm。外面に枝状のモチーフを淡黒色の呉須で描いている。底部は露胎。釉調はくすんだ淡灰白色。20は復元口径10.2cm、器高5.5cm、高台径3.8cm。外面に草文を描く。内面見込みに目跡あり。21は復元口径12.9cm、器高7.9cm、復元高台径5.1cm。体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部が外反する。釉調は黄灰色。表面に細かい貫入が入る。外面に淡緑黒色で松葉文を描く。

皿 (24～25) 24は染付皿。内面見込み中央に五弁花文のコンニャク判を押す。その周辺を蛇ノ目状に釉剥ぎ。内面には草花文を絵付けする。くらわんか茶椀に伴うタイプ。25は染付皿。復元口径13.4cm、器高4.1cm、復元高台径7.8cm。口縁部は輪花状。見込み中央に手書きで五弁花文を描く。内面には草花文を絵付けし、外面には唐草文を巡らす。高台内に「渦福」の簡略字を描く。

国産磁器

皿 (26～29) 26は口径7cm、器高2cm、底径3.4cm。素地の色調は灰白色、内面に黄緑灰色の釉を施す。口縁部に輪状に煤が付着していることから、灯明皿として使用されていたものと考えられる。完形品。27は皿と窯詰時の重ね焼き用トチン工具が融着したもの。皿部の口径8.2cm、器高2cm。トチンは口径5.3cm、器高0.9cm。トチンには離れ砂が確認できる。28は口径5.2cm、器高1.5cm、高台径1.4cm。完形品。紅皿の身。

仏飯具 (30) 復元口径8.1cm、器高5.2cm、高台径3.9cm。白磁。

瓶 (31) 底部の破片。残存高3.2cm、復元底径5.5cm。外面に灰緑色の釉を掛ける。外面は縦方向にのみ削り痕跡あり。底部に「十一」と墨書をする。器形から花瓶の一種か。

龍泉窯系青磁

円盤状製品 (32) 1類の高台部。残存高2.5cm、残存底径3.5cm。見込み部の周辺の立ち上がりから打ち欠いて円形にしている。

土製品

円盤状製品 (33) 縦8.7cm、横6.9cm、厚さ1.8cm。周辺を打ち欠いて円形に仕上げている。

金属製品

釘 (34～37) それぞれ角鉄釘に錆が固着している。37は長さ3.7cm。38は長さ3.15cm。39は長さ3.95cm、幅0.4cm、厚み0.4cm。40は長さ4.3cm、幅0.7cm、厚さ0.6cm。

6SX043

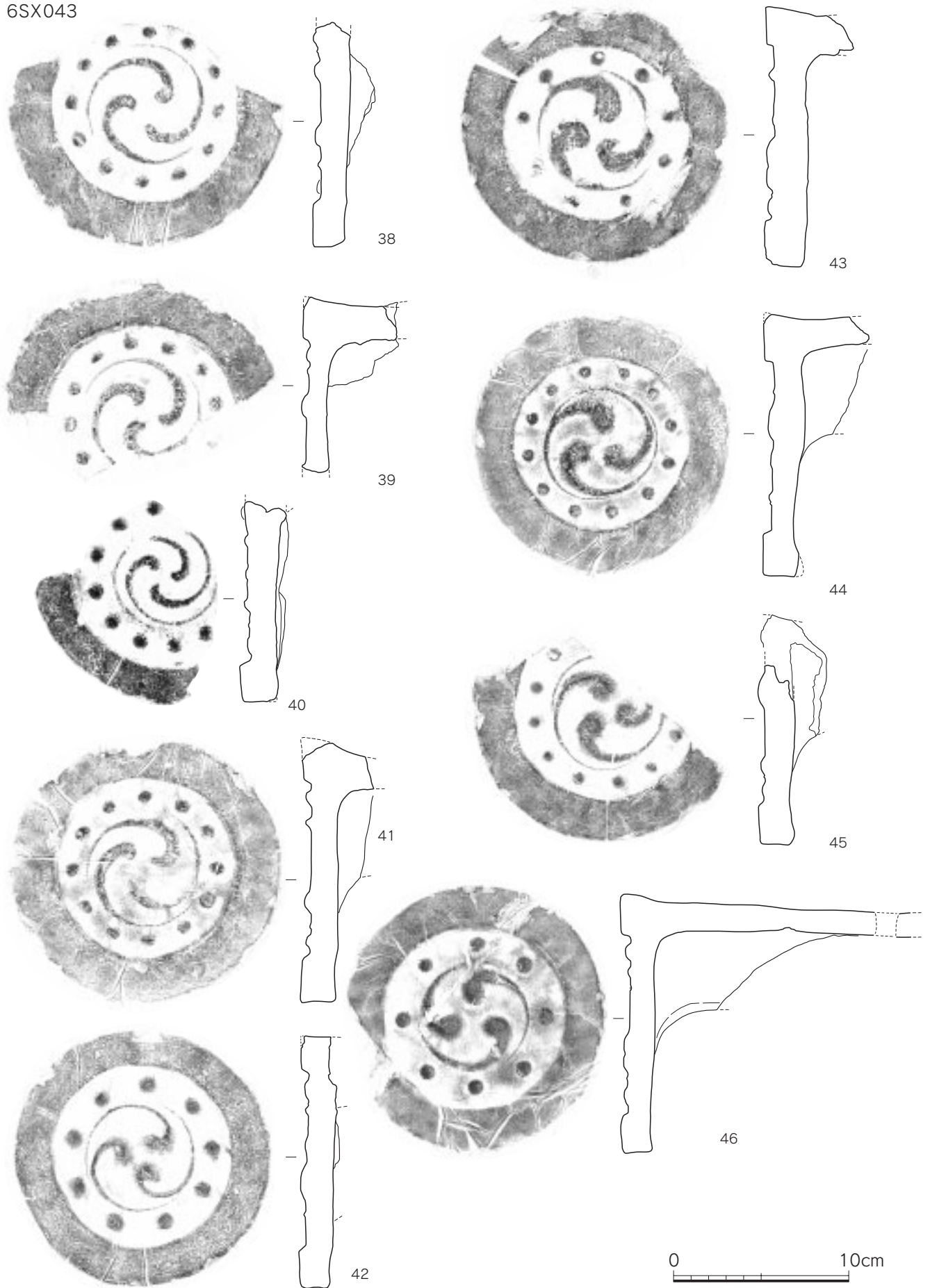


Fig.25 第2遺構面 6SX043その3出土遺物実測図 (1/3)

6SX043

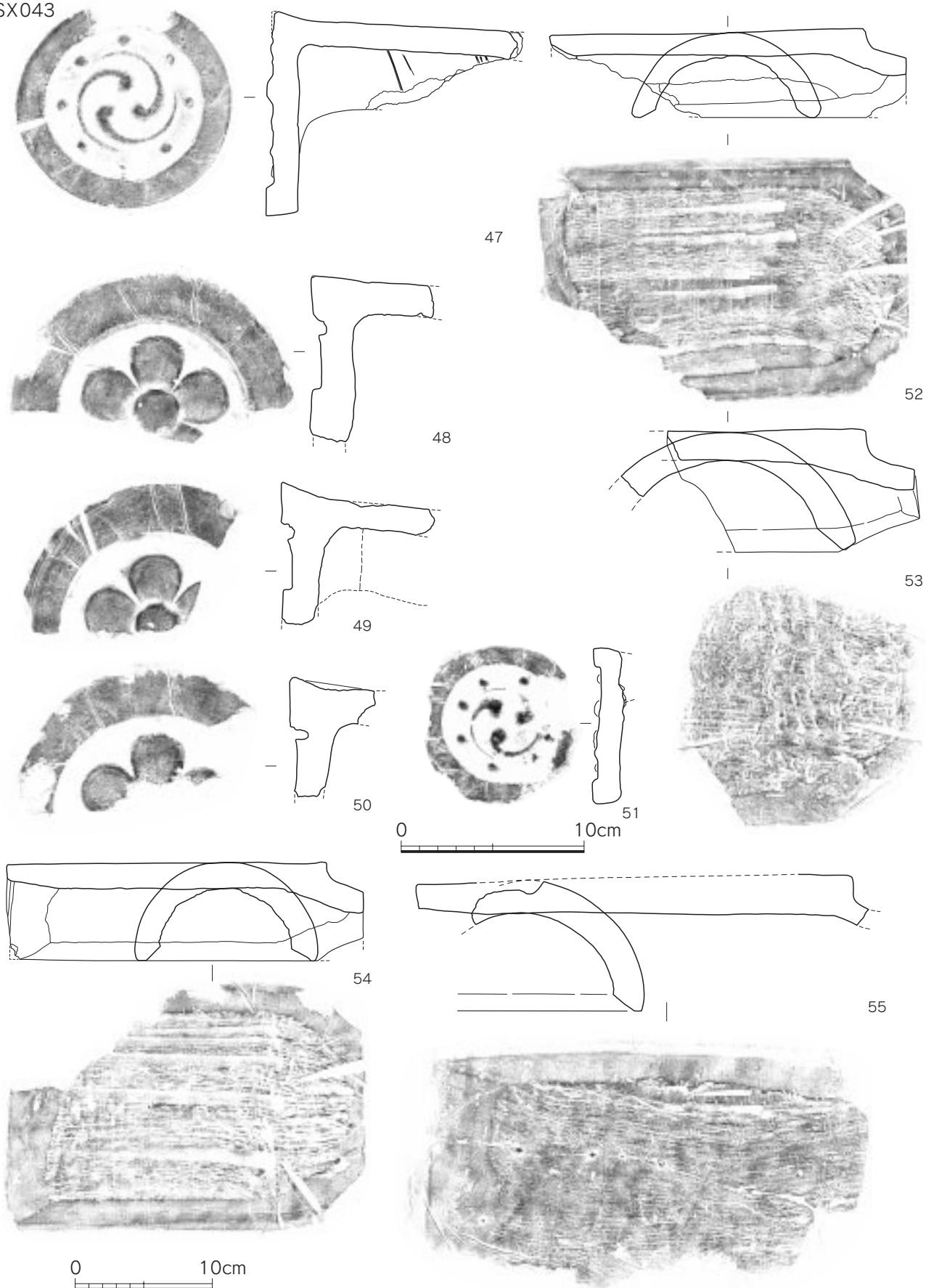


Fig.26 第2遺構面 6SX043その4出土遺物実測図 (1/4は47、52、54、他は1/3)

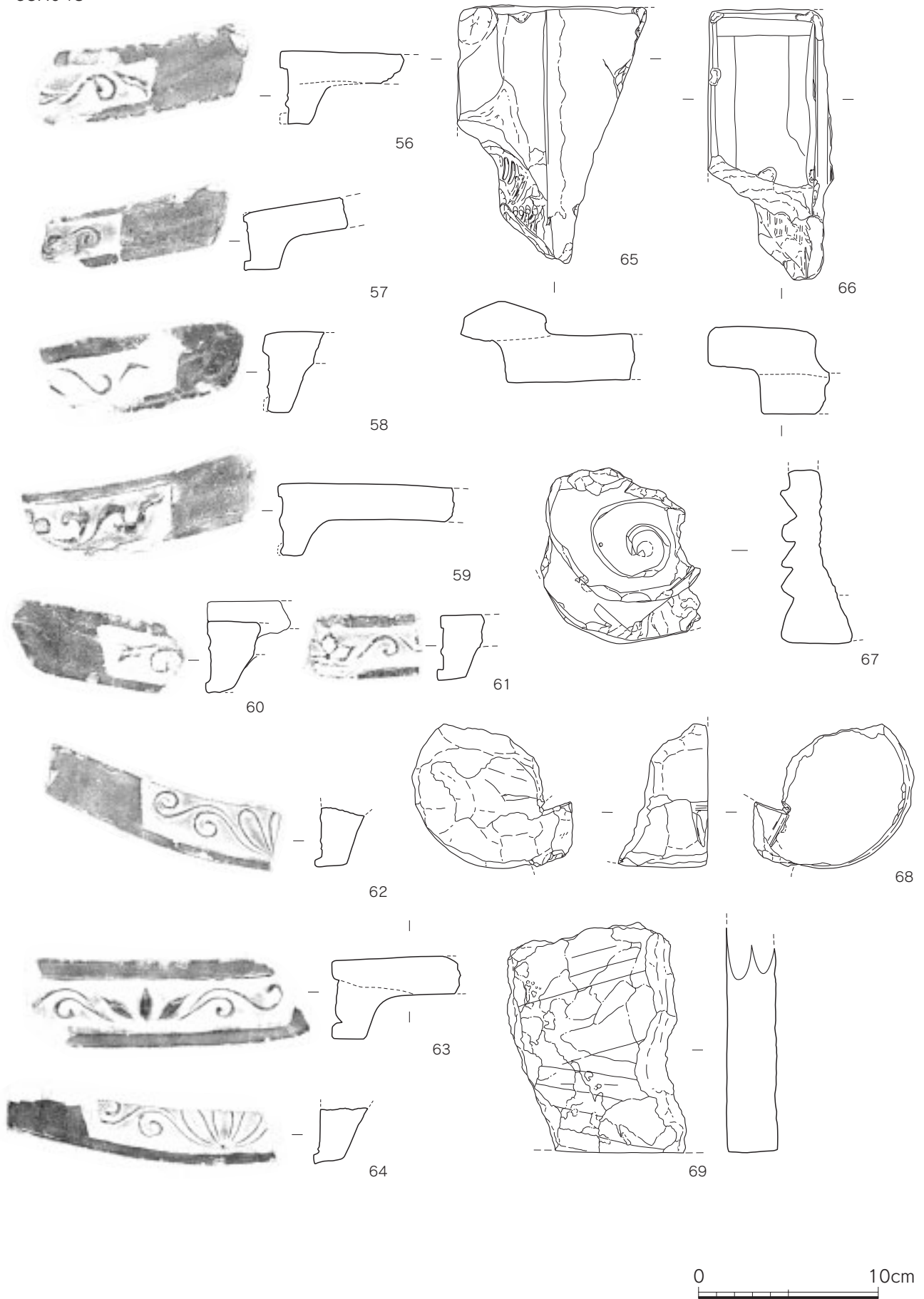


Fig.27 第2遺構面 6SX043その5出土遺物実測図 (1/3)

瓦

軒丸瓦（38～51） 38～47はすべて三巴文。巴文は右回りの46を除いて、すべて左回り。尾が離れている38のようなタイプに対して、44のように尾がつぎの巴文に接着しているタイプがある。珠文の数は12個のタイプ（38、41、44）、9個のタイプ（42、43）、8個タイプ（46、47）にそれぞれ分かれる。48～50は梅鉢文。51は瓦当径8.4cm。左周りの三巴文。大きさから菊丸瓦か。

丸瓦（52～55） 52は縦26cm、横13.8cm、厚さ1.6cm。凹面に布目痕跡を0.9mm程度の棒状の工具で調整している。側面はヘラ削り調整をしているが、丸みを帯びている。53は破片。縦12.5cm、横13.4cm、厚さ1.5cm。54は縦26cm、横12.9cm、厚さ1.9cm。凹面に52と同じく棒状の工具での調整痕跡が確認できる。55は玉縁部を欠損しており、凸面も剥離がひどい。縦25cm、横12.5cm、厚み1.8cm。

軒平瓦（56～64） 56～60まで破片。瓦当の一部。唐草文がみられる。61は中心飾りに三葉文の一部がある。62と64は細い線による丸みを帯びた三葉文が中心飾りである。63は中心飾りに厚みがあり鋭さがある三葉文が認められる。

棧瓦（65、66） 65、66ともに棧瓦の破片。

鬼瓦（67、68） 67、68ともに鬼瓦の一部。67はうずまき状を呈す。縦9cm、横11.2cm。68は縦8cm、横8.7cm、厚さ5cm。

板状製品（69） 縦12.8cm、横9.8cm、厚さ2.7cm。焼成は不良。色調は灰褐色。焼成不良箇所は、淡明赤色。5mm以下の白色粒を多量に含む。

6SX050出土遺物（Fig.28）

肥前系磁器

皿（1） 復元口径9.6cm、器高2.15cm、高台径5cm。外面と見込みに花草を呉須で絵付けする。

土製品

土鈴（2） 破片。てづくね成形。焼成は良好。色調は淡黄灰色。表面に意匠を線刻している。

6SX051出土遺物（Fig.28）

土師器

小皿a（3） 復元口径7.8cm、器高1.4cm、復元底径4.6cm。底部回転糸切り。焼成良好。器壁が2mm程度で薄い。色調は明黄灰色。

国産陶器

皿（4） 口縁部破片。釉調は透明度が高い緑灰色。合子の身の可能性もある。

龍泉窯系青磁

皿（5） 口縁部破片。輪花を呈す。IV類か。

椀（6） 底部破片。I類。内面見込みに草花文を印刻する。

瓦

軒平瓦（7） 瓦当部破片。焼成は良好。燻しは不良。色調は灰黄色。瓦当文は中心飾りに上向きの三葉文。胎土に黒灰粒子を多量に含む。

土製品

瓦玉（8） 縦3.5cm、横3.3cm、厚さ2.7cm。色調は淡灰青色。

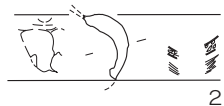
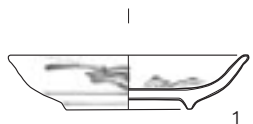
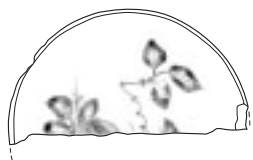
石製品

不明品（9） 縦3.5cm、横3.3cm、厚さ2.7cm。

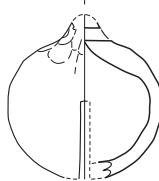
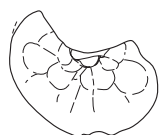
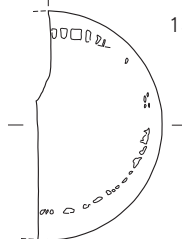
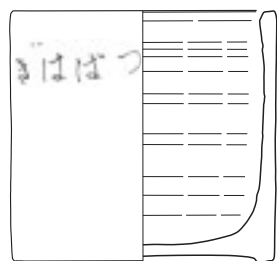
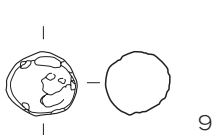
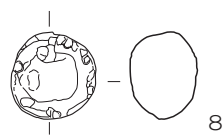
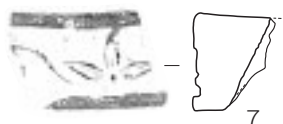
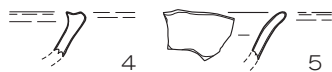
6SX060出土遺物（Fig.28）

瓦質土器

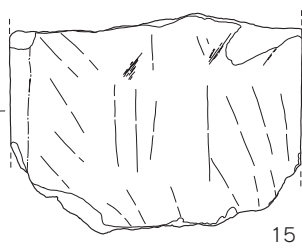
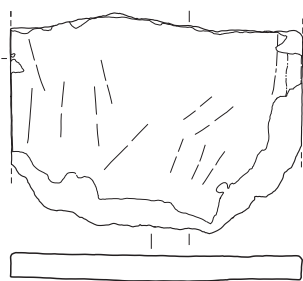
6SX050



6SX051

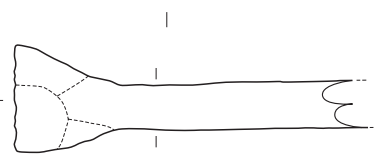
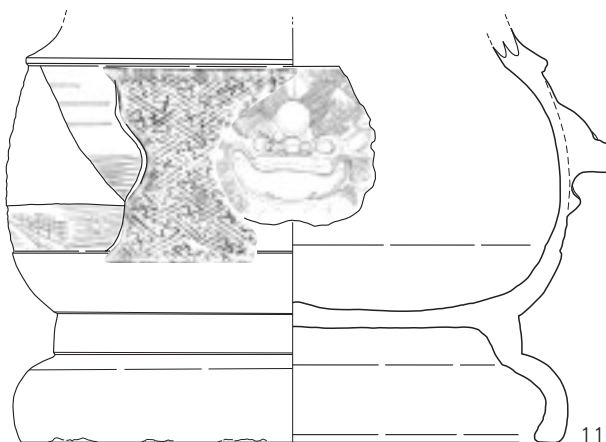
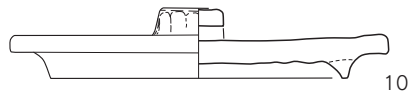


16

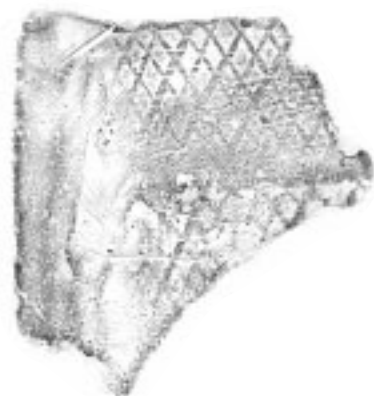


0 20cm

6SX060



14



0 10cm

0 10cm

Fig.28 第2遺構面 6SX050、051、6SX060出土遺物実測図 (1/4は14、1/8は15、他は1/3)

蓋(10) 復元径15cm、器高2.8cm、摘みの直径2.5cm。焼成はやや不良。口縁部は三角形を呈し、貼り付けている。摘みの側面から直径8mmの穴を穿孔する。

香炉(11) 丸みを帯びた体部に、4.5cmほどの高さの脚がつく香炉。口縁部が欠損している。残存高16.5cm、高台径21.4cm。体部中央には獅子形のレリーフが付けられ把手として利用されていた可能性がある。体部は分割して木や舟などを彫り込み、それ以外の部位には、沙綾形のスタンプを密に押す。

国産陶器

痰壺(12) 復元口径15.4cm、器高4.9cm、復元底径5.8cm。焼成は良好。釉調は淡灰黄色。内面中央に「ツ□□キ」と茶褐色の釉で描いている。底部は直径4.7cmの底が空いており、下へ抜けるようになっている。

国産磁器

痰壺(13) 復元口径10.4cm、器高10cm、復元口径10.4cm。染付。外面の口縁下部に「つばはき」と呉須で絵付けをしている。

瓦

軒平瓦(14) 縦18.7cm、横15.7cm、最大厚5.7cm。焼成は良好で須恵質。凹面は横長斜格子の叩きを施す。瓦当部は上外区に珠文、中央に唐草文、下外区に二重鋸歯文を配す。575B類。(九州歴史資料館2000)

平瓦(15) 縦23.3cm、横30.9cm、厚さ2.7cm。焼成は良好。

土製品

土鈴(16) 残存高7.2cm、最大幅6.1cm。袋状の形をつくった後に、摘み部分をしばって成形して、紐を通す穴を穿孔している。また、中央には幅4cm程度のスリットをヘラ切りして体部に入れている。焼成は良好。色調は明黄褐色。表面調整は指押さえのあとに不定方向のナデ調整。

6SX070出土遺物 (Fig.29)

国産磁器

皿(1) 残存高2.8cm、復元高台径3.9cm。口縁部を欠損している。全面に淡白赤色の釉が掛かる。見込みは蛇ノ目状釉剥ぎ。見込み部に、「八百や」と墨書あり。

壺(2) 外面に鳥と風景を呉須により下絵付けをして鳥を赤く塗る。染付はプリント版だと思われる。高台内に墨書あり。「八し」「ズ」と読める。

瓦

軒丸瓦(3) 焼成良好。瓦当径14.5cm。左回りの三巴文。尾は長く伸びるが、他に接してはいない。珠文は9個。

土製品

瓦玉(4) 縦2.4cm、横2cm、厚さ1.7cm。瓦の破片を加工して球状にしている。

石製品

砥石(5) 縦2.5cm、横4.5cm、厚さ1.7cm。1面のみ砥石として使用。砂岩製。淡赤色の縞状の石目が特徴的で、現在でも天草砥石として使われているものに似ている。

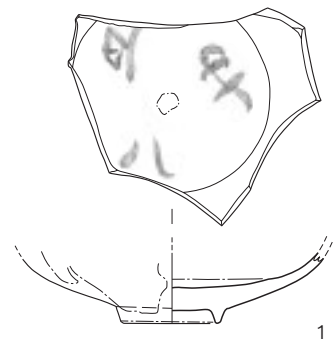
6SX129出土遺物 (Fig.29)

国産陶器

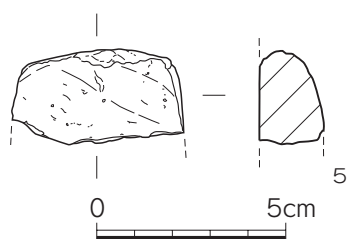
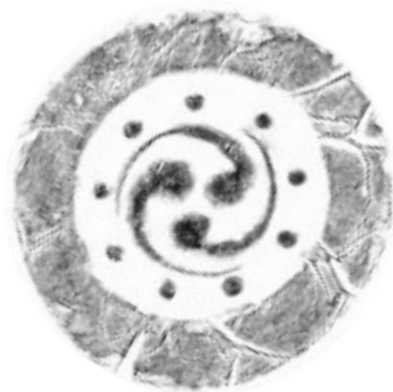
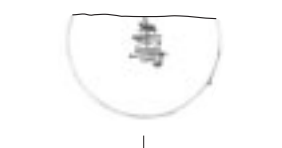
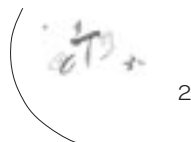
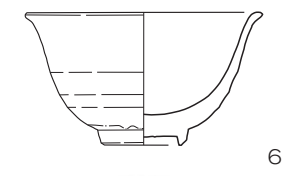
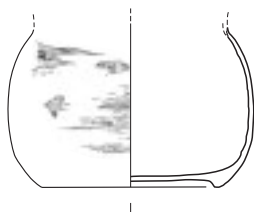
椀(6) 復元口径9.4cm、器高5.25cm、高台径3.4cm。釉調は淡黄色。高台部を除いて付け掛けをしている。

肥前系磁器

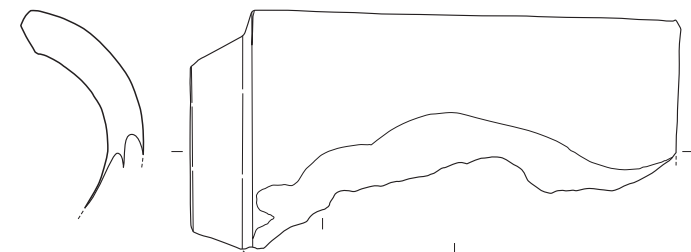
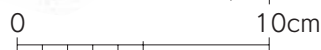
6SX070



6SX129



6SX133



10

椀 (7、8) 7は口径10.4cm、器高5.35cm、高台径5.35cm。広東椀。見込みに「寿」を書く。外面には松を中心とした草花文を下絵付けする。8は復元口径10.4cm、器高5.2cm、高台径5.4cm。広東椀。7と同様に、見込みに「寿」、外面に草花文を描く。

6SX133出土遺物 (Fig.29)

瓦

軒丸瓦 (9) 焼成良好。燻しは不良。瓦当文様は巴文と考えられる。

丸瓦 (10) 縦25.9cm、横12.6cm、厚さ2cm。側面調整はヘラ切りで、玉縁側に向かって調整をしている。凹面の布目痕のあとに、棒状工具で一部調整をしている。

6SX143出土遺物 (Fig.30)

瓦

軒丸瓦 (1) 瓦当部の破片。巴文。巴文の尾は他に接していない。

丸瓦 (2) 玉縁の破片。縦14.3cm、横14.3cm、厚さ2.3cm。凸面はヘラ状工具を

Fig.29 第2遺構面 6SX070、6SX129、6SX133出土遺物実測図 (1/2は5、1/4は10、その他は1/3)

6SX143

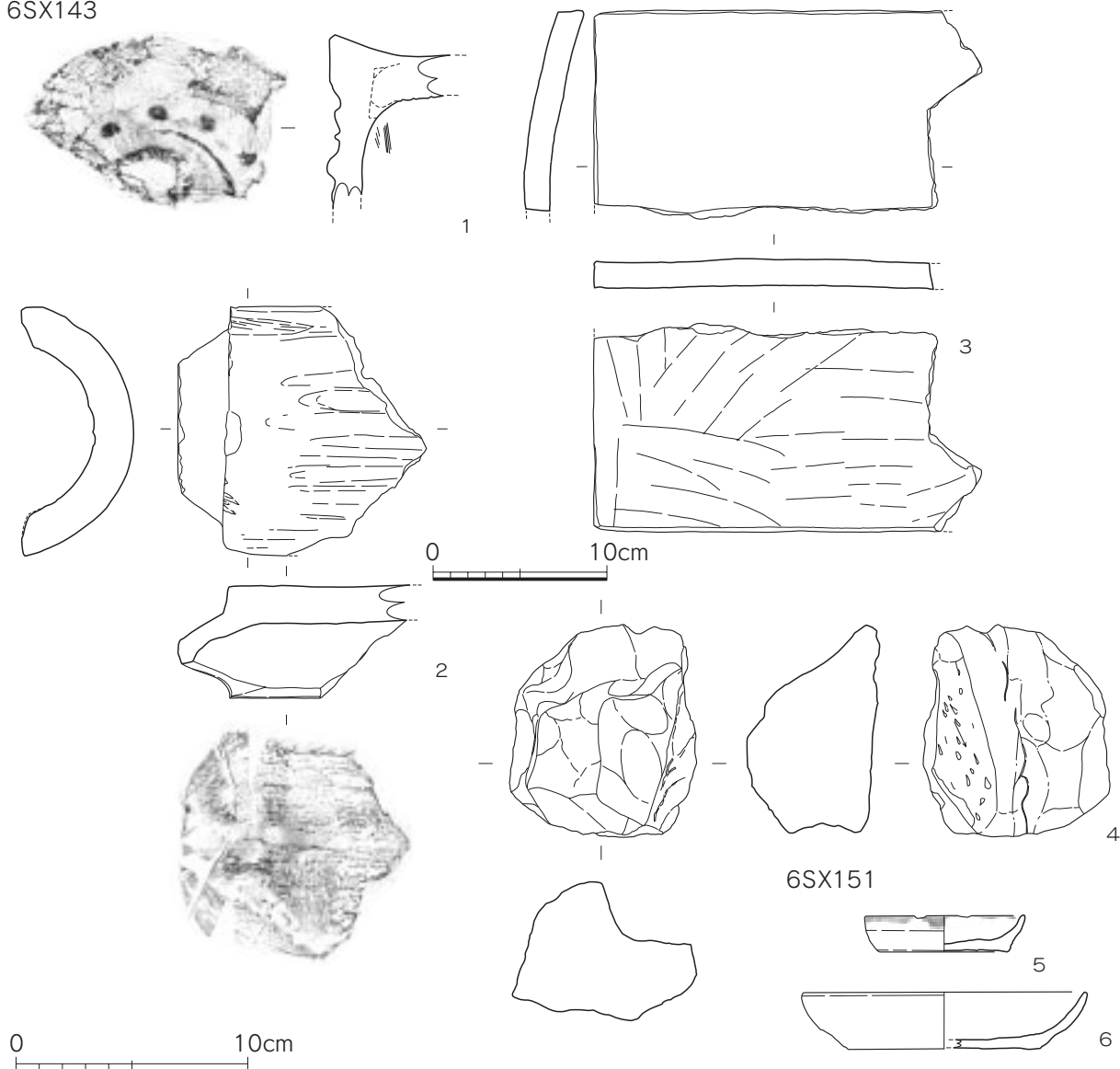


Fig.30 第2遺構面 6SX143、6SX151出土遺物実測図 (1/4は2、3、その他は1/3)

使用して縦方向のミガキ調整。凹面は布目痕、部分的に紐状痕跡あり。焼成は良好。燻しは良好。

平瓦 (3) 縦22.3cm、横9cm、厚さ1.7cm。

土製品

焼土塊 (4) 縦9.2cm、横8.1cm、厚さ5.5cm。色調は赤褐色～黄灰色～暗灰色。器壁に指押さえ痕があることから、大型の鬼瓦の破片の可能性も考えられる。

6SX151出土遺物 (Fig.30)

土師器

小皿a (5) 口径6.9cm、器高1.55cm、底径5.6cm。底部回転糸切り後、板状圧痕あり。口縁部に煤が帯状に吸着していることから、灯明皿として使用されたと想定される。

坏a (6) 復元口径12.3cm、器高2.45cm、復元底径8.3cm。底部回転糸切り後、板状圧痕あり。内面は焼成不良で淡黒灰色化している。

第3遺構面出土遺物

その他の遺構出土遺物

6SX044出土遺物 (Fig.31、Pla.6-1)

土師器

小皿a (1) 復元口径7.2cm、器高1cm、底径5.2cm。底部回転糸切り。色調は赤褐色。

瓦質土器

甕 (2) 口径76cm、器高69.8cm、底径33.1cm。外面は縦方向の刷毛目調整、内面は斜め方向の刷毛前調整。色調は内面、暗灰黄色～暗灰色～黒色。外面は暗灰色～黒色。胎土は暗灰黄色。胎土は、微細～1mm程度の白色砂粒を少量含む。

国産陶器

椀 (3) 3は口径9.6cm、器高6cm、高台径4.15cm。釉色は薄い黄褐色で、内外面に細かい貫入が入る。畳付部分は釉を拭きとる。

播鉢 (4) 残存高7.6cm。内面に8条を1単位とする細かい播目を施す。釉調は茶褐色。

肥前系磁器

蓋 (5) 復元口径9.4cm、器高2.7cm。染付蓋。外面に草花文、内面には四方櫛文を帯状に回している。見込み中央部には手書き五花弁文を描く。

椀 (6、7) 6は口径9.6cm、器高4.9cm、高台径3.8cm。くらわんか茶椀。外面に草花文。7は口径9.8cm、器高5.5cm、復元高台径3.7cm。くらわんか茶椀。

皿 (8) 口径13.7cm、器高3.6cm、底径7.5cm。染付皿。内面に区画文をもうけて、鳥を描いている。その間に草花文。見込み中央にコンニャク判による五弁花文を押す。外面は唐草文。高台中央には渦福の省略字を描く。

石製品

砥石 (9) 縦14.6cm、横6.4cm、厚さ3.1cm。砂岩製。4面を砥石として使用している。

6SX046出土遺物 (Fig.31、32)

土師質土器

七輪 (10) 縦13.3cm、横6.4cm、高さ5.9cm。胎土は密。1mm以下の白色粒子がごく少量含まれる。色調は明黄橙色。焼成は良好。胎土・色調・焼成の特徴から七輪のサンだと考えられるが、L字型を呈しているため、特殊器形の七輪に対応したものかと想定される。

国産陶器

瓶 (11) 底部破片。残存高4.5cm、復元高台径5.3cm。外面は黒褐色釉が掛かる。胎土の色調は黄橙色。

肥前系磁器

椀 (12) 復元口径10.2cm、器高5.1cm、高台径4.2cm。染付椀。外面に梅花文。高台内部にも呉須で文字を絵付けする。

皿 (13) 口径13.2cm、器高3.7cm、高台径8.2cm。染付皿。内面は橘花文、外面は唐草文。見込み中央に五弁花文をコンニャク印判。高台内部には渦福文を崩した文字を描く。

瓦

軒丸瓦 (14～16) 14は右回りの三巴文。珠文は8個。尾は長く伸びるが、他とは接していない。15は左周りの三巴文。珠文は1つ欠損しているため、9個と推定される。尾は長く伸びるが、他とは接していない。16は瓦当部の破片。残存した文様から梅鉢文と思われる。

軒平瓦 (17、18) 17と18ともに瓦当部の破片。唐草文。

6SX048出土遺物 (Fig.33)

国産陶器

第3遺構面
6SX044

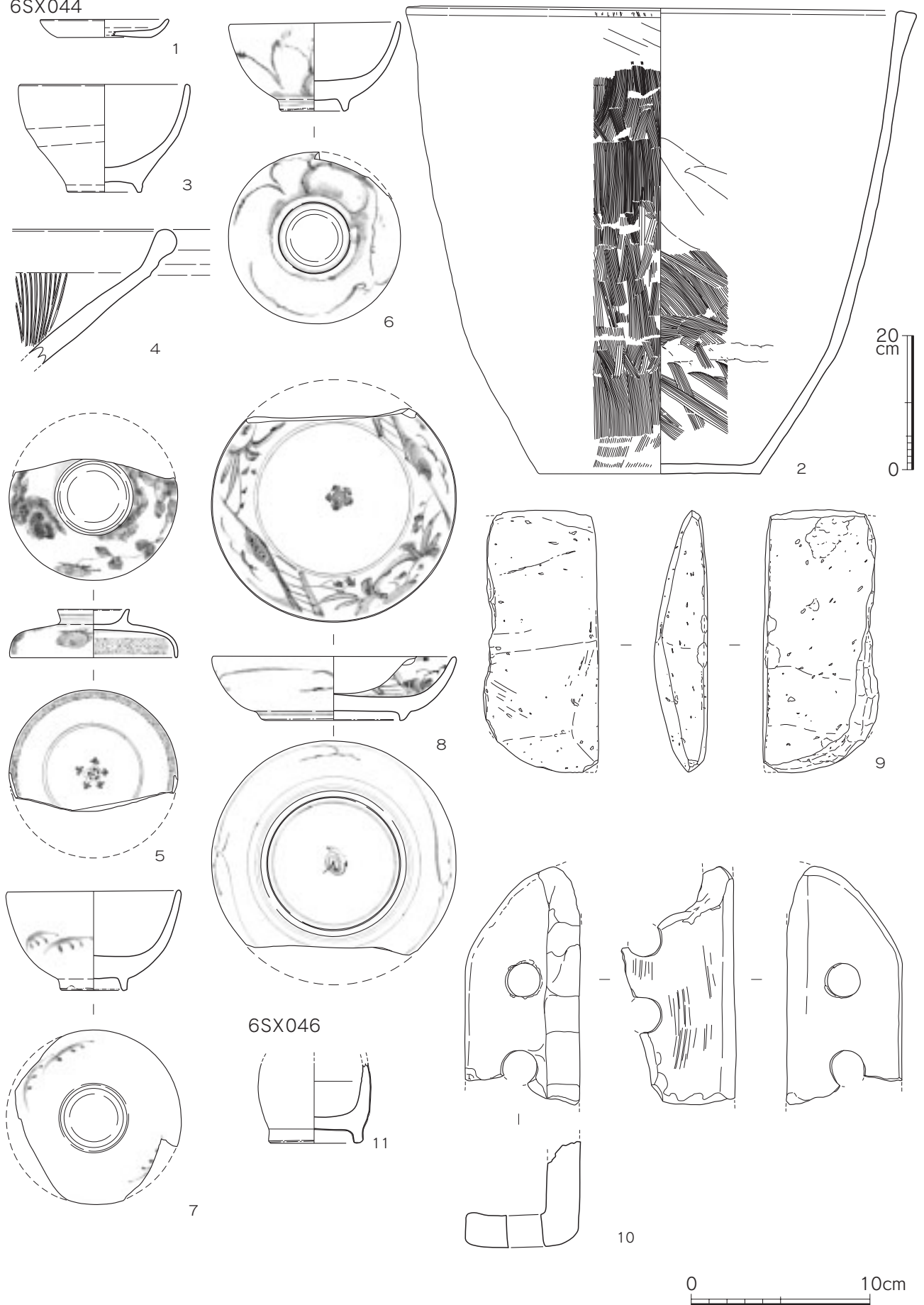


Fig.31 第3遺構面 6SX044、6SX046その1出土遺物実測図（1/8は2、その他は1/3）

6SX046

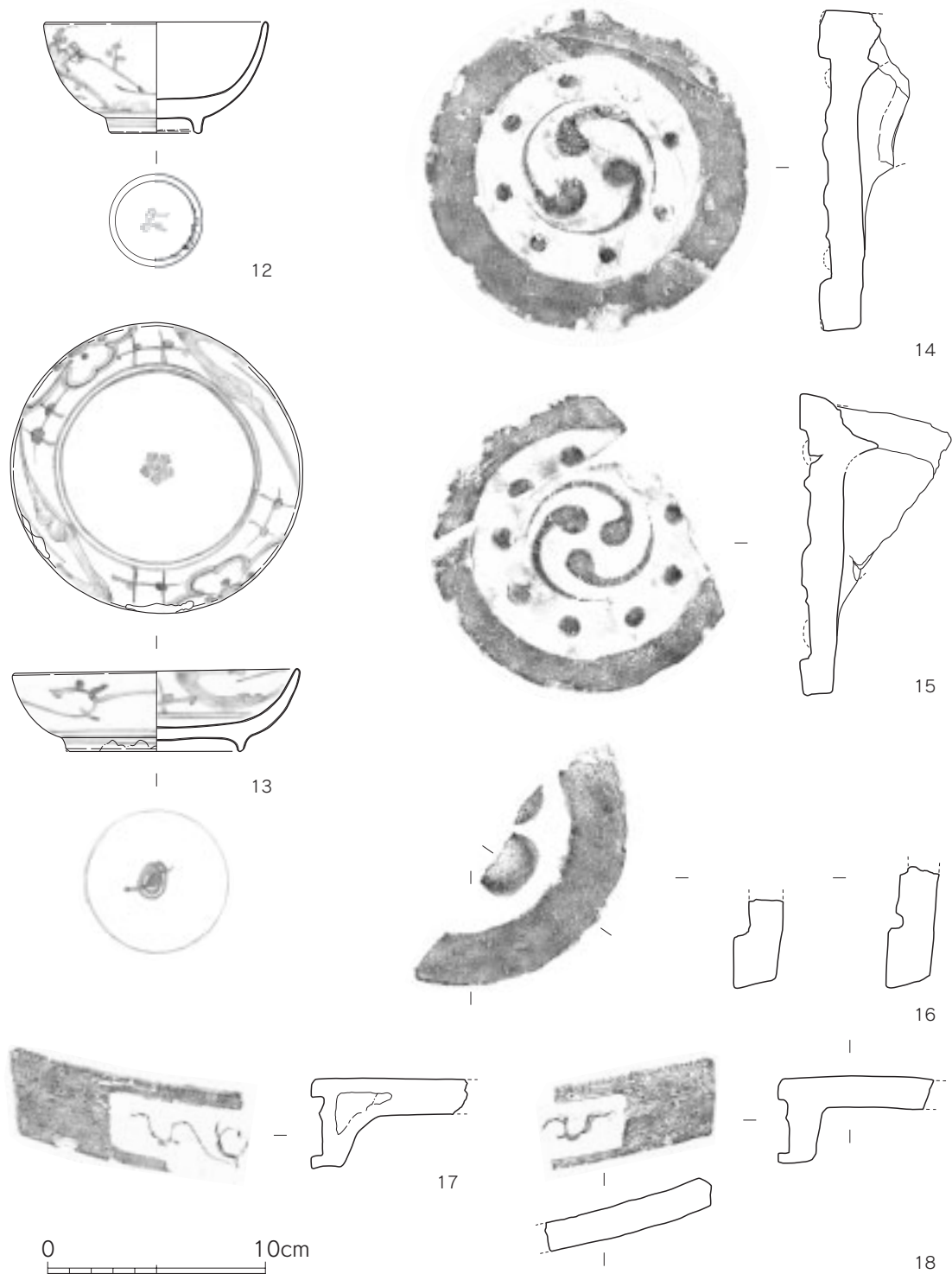


Fig.32 第3遺構面 6SX046その2出土遺物実測図 (1/3)

搦鉢 (1) 器高12.95cm。8条を1単位とした搦目を密に施す。焼成は良好。釉調は茶褐色。

蓋 (2) 復元口径10cm、器高3.4cm。逆台形の摘みがつく。外面には三彩で絵付けされている。三彩土瓶に伴うものか。

肥前系磁器

椀 (3) 口径10cm、器高5cm、高台径4.3cm。染付椀。外面に草花文を絵付けする。釉色はやや濃灰色。

猪口 (4) 復元口径7.4cm、器高5.7cm、高台径4.7cm。呉須はやや濃緑色を呈す。

皿 (5、6) 5は復元口径14.2cm、器高2.6cm、復元高台径7.85cm。染付皿。口縁部を外にやや外反さ

6SX048



Fig.33 第3遺構面 6SX048出土遺物実測図 (1/3)

せる。内面は菊花文。外面は唐草文を絵付けする。見込み中央に五弁花文をコンニャク印判する。6は口径14.5cm、器高4.2cm、高台径8.8cm。完形の染付皿。高台は蛇ノ目凹高台。内面は草花文、外面は唐草文を絵付けする。見込み中央部には五弁花文を手書きする。表面の呉須がやや黒灰色を呈していることから、二次的に火を受けている可能性がある。

瓦

軒丸瓦（7、8） 7と8は瓦当破片。ともに左周りの三巴文。

丸瓦（9） 焼成は良好だが、燻しが不良で一部しか掛かっていない。

平瓦（10） 焼成はやや不良。燻しは不良。

石製品

不明品（11） 縦20.5cm、幅10.6cm、厚さ4.2cm。強く比熱しており、部分的に油煙による煤が張り付いている。

6SX049出土遺物（Fig.34）

肥前系磁器

椀（1） 口径10.6cm、器高5.5cm、高台径4cm。染付。外面に草花文。高台内にも記号のような絵付けあり。

壺（2） 残存高14.4cm、復元高台径7.15cm。染付。外面に直径3.5cm程度の円形に菊花、魚鱗、草文、梅鉢などの文様をあしらってちりばめている。内面は露胎。

瓦

丸瓦（3、4） 3は縦15.2cm、厚さ1.7cm。玉縁部との境から3.7cmの所に、1.8×1.6cmの穴が斜めに凸面から凹面にむけて穿孔されている。焼成・燻しともに良好。4は玉縁部の破片。縦9.4cm、横13cm、厚さ1.7cm。

熨斗瓦（5） 縦25cm、横12.8cm、厚さ2cm。直径1.3～1.5cmの穴が2カ所穿孔されている。

6SX054出土遺物（Fig.34）

土師器

小皿a（6） 復元口径6.2cm、器高1.05m、復元底径4.1cm。底部に板状圧痕あり。色調は黄灰色。

坏a（7、8） 7は復元口径12.8cm、器高3.2cm、復元底径8cm。底部回転糸切り後に板状圧痕。色調は黄灰色。胎土は3mm以下の白色粒子を少量含む。8は口縁部破片。器高2.2cm。焼成はやや不良。色調は暗茶灰色。1mm以下の微細な金色雲母を大量に含む。底部に板状圧痕あり。

肥前系陶器

合子（9） 口縁部破片。外面に呉須で円形文を絵付けする。

龍泉窯系青磁

坏（10） 口縁部破片。釉調は緑灰色で厚く掛ける。

6SX075出土遺物（Fig.34～36、Pla.6-5）

瓦質土器

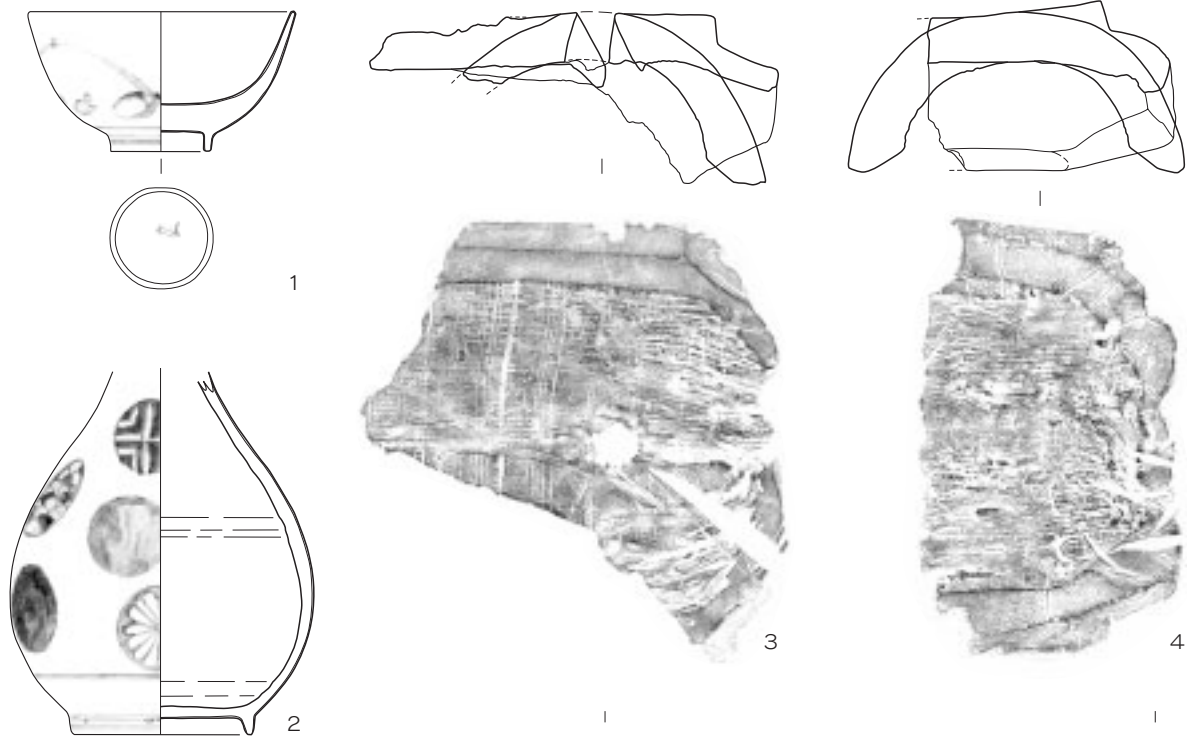
鉢（11） 口縁部の破片。表面は剥離しており、調整は不明瞭。外面にわずかに指頭圧痕が認められる。色調は内面が灰白色。外面は灰白色～淡黒灰色。焼成はやや不良。

国産陶器

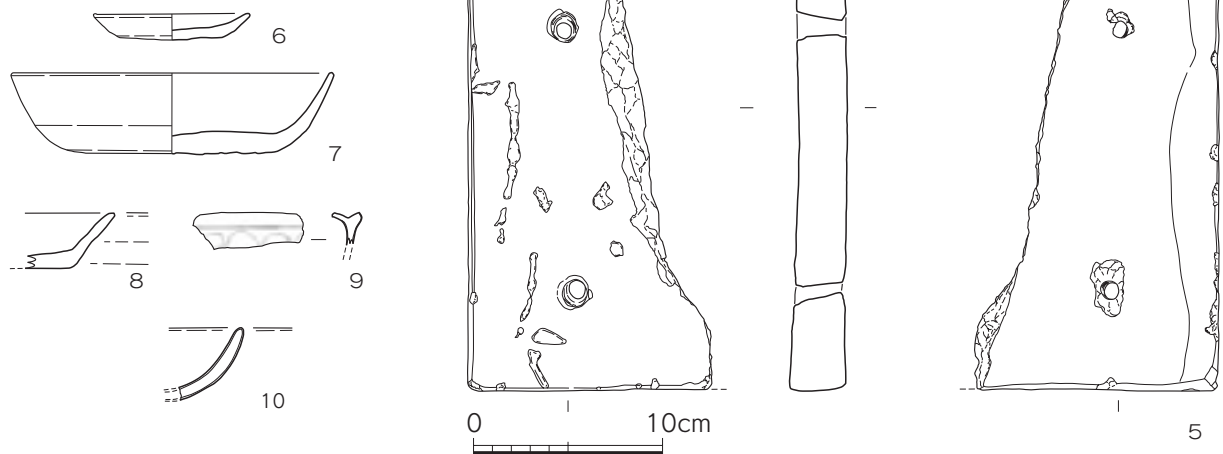
椀（12） 復元口径8.2cm、器高5.1cm、底径3.6cm。高台部を除いて黄灰色の釉が掛かる。表面には微細な貫入が認められる。

鉢（13） 残存高5.8cm、復元高台径15.2cm。胎土色調は赤褐色。淡灰色の釉がかかる。内面に波状

6SX049



6SX054



6SX075

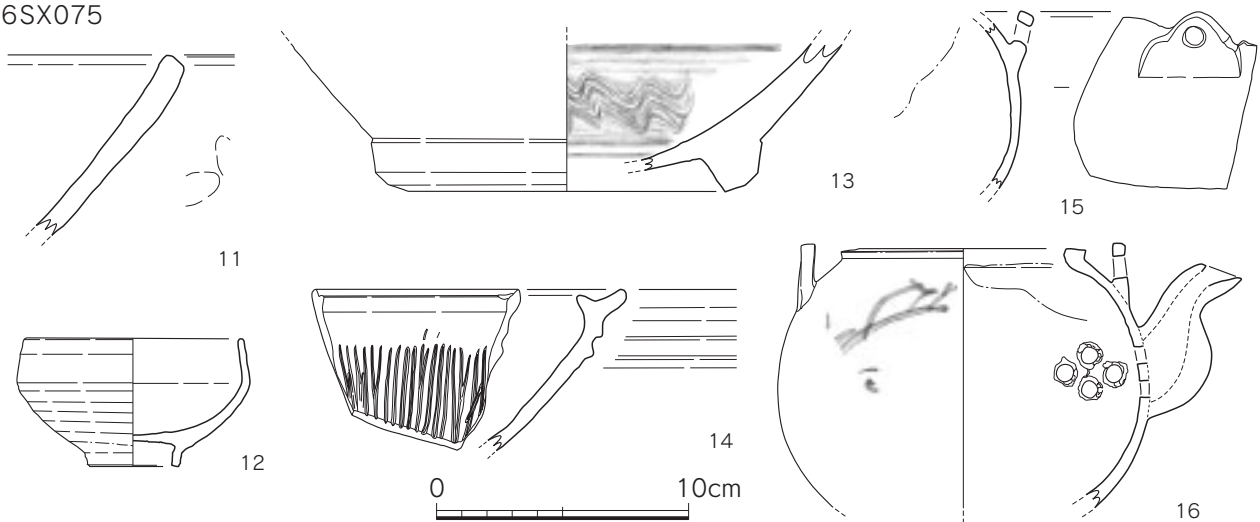


Fig.34 第3遺構面 6SX049、054、075その1出土遺物実測図（1/4は5、その他は1/3）

文を描く。外面へラ削り調整。

播鉢（14） 口縁部の破片。残存高6.4cm。焼成は良好。色調は暗紫茶色。播目は6条を1単位にして密に彫られている。

土瓶（15、16） 15は体部破片。穿孔されている把手がつくが、注口がないため、反対側の破片だと考えられる。16と同一個体の可能性がある。16は復元口径9.8cm、残存高10.5cm。黄灰色の釉に、部分的に濃緑色の釉で絵付けをする。内面には釉を掛けないが、口縁部付近は釉が垂れている。釉の表面は微細な貫入が入っている。注口に向かって内側から4カ所、穴が穿孔されている。

土師質土器

七輪（17～20） 17は復元口径29.4cm、器高29cm、底径20.3cm。焼成は良好。色調は黄灰色。構造的にはいくつかの部位にわけて作ったものをあとで接合して1つの形にしている。まず、粘土板で、底板をつくって外側の体部を積み上げていく。積み上げて桶状に成形したあとに、灰を掻き出す口をヘラにより切りとり調整する。体部は全体としては外側と内側で二重になっている。内部に外側よりも一回り小さい筒状で高さ6cmほどの別パーツを据えて、それに外側の体部と口縁部で折り返した内面の部位を接合して構成している。内面には上段に三角形の大突帯と下段に三角形の小突起を巡らす。この下段の突起によってサンが固定されて、灰が下の灰掻き出し口に落ちる。外面には中央と口縁の間あたりに扇状の把手をつける。底面には3つの脚をつける。外面はミガキ調整で平滑に仕上げており、内面は横方向のナデ調整、外側にあたる器壁の内面は本来見えないため、粗い横方向のナデで調整がおわっている。内側のサンの固定箇所より上は、火によって二次焼成を受けているため淡赤褐色を呈し、煤が吸着して黒灰色を呈す部位もある。18、19は口縁部破片。17と同一個体の可能性がある。20は円形のサン。直径16.9cm、高さ1.7cm、穴の直径1.8cm。火にあたっていた面は部分的に赤褐色に変化しているが、反対の面はほとんど色調が変化せずに黄灰色を呈す。

国産磁器

皿（21） 口径7.7cm、器高2.2cm、底径4.05cm。底部回転糸切り。黒茶色釉を漬け掛けする。

合子（22） 口径4.05cm、器高1.8cm、底径2.95cm。合子の身。内外面に透明な白青色を釉がけする。口縁部と底部は釉掻き取りしている。高台内面に墨書で「□院」の字を描く。

椀（23） 復元口径12.2cm、器高5.9cm、復元高台径4.5cm。透明度の高い灰青色を施釉する。内面を蛇ノ目釉剥ぎする。そこにややずれて砂目跡がある。

肥前系磁器

皿（24、25） 19は復元口径13.4cm、器高4.5cm、高台径4.95cm。染付皿。見込みを蛇ノ目釉剥ぎする。そこに砂目跡が輪状に巡る。内面に呉須により、格子文を描く。20は口径14.2cm、器高2.9cm、復元高台径10cm。染付皿。八角形の角皿になると思われる。見込みに呉須により草花文を描く。内面口縁端部には区画帯を設けて帯状に巡らす。

瓦

軒丸瓦（26） 瓦当面の破片。縦8.5cm、横8.3cm、厚さ1.45cm。左回りの三巴文。尾はほかの尾に接しない。珠文は8個。

丸瓦（27） 縦16.3cm、横12.3cm、厚さ2.1cm。玉縁部周辺の破片。焼成良好。玉縁側の反対側を斜めにへら切りして落とす。凸面中央から凹面に向けて直径1.2cmの穴を穿孔する。道具瓦の谷丸瓦か。

道具瓦（28、29） 23は縦8.1cm、横11cm、厚さ1.4cm。口縁端部をへら切りで調整。24は縦14.8cm、横13.8cm、厚さ2～3.5cm。焼成良好。表面が剥離しており、図案の一部が残存。波頭か。色調は暗灰色だが、剥離している箇所は淡暗灰色を呈す。

6SX075

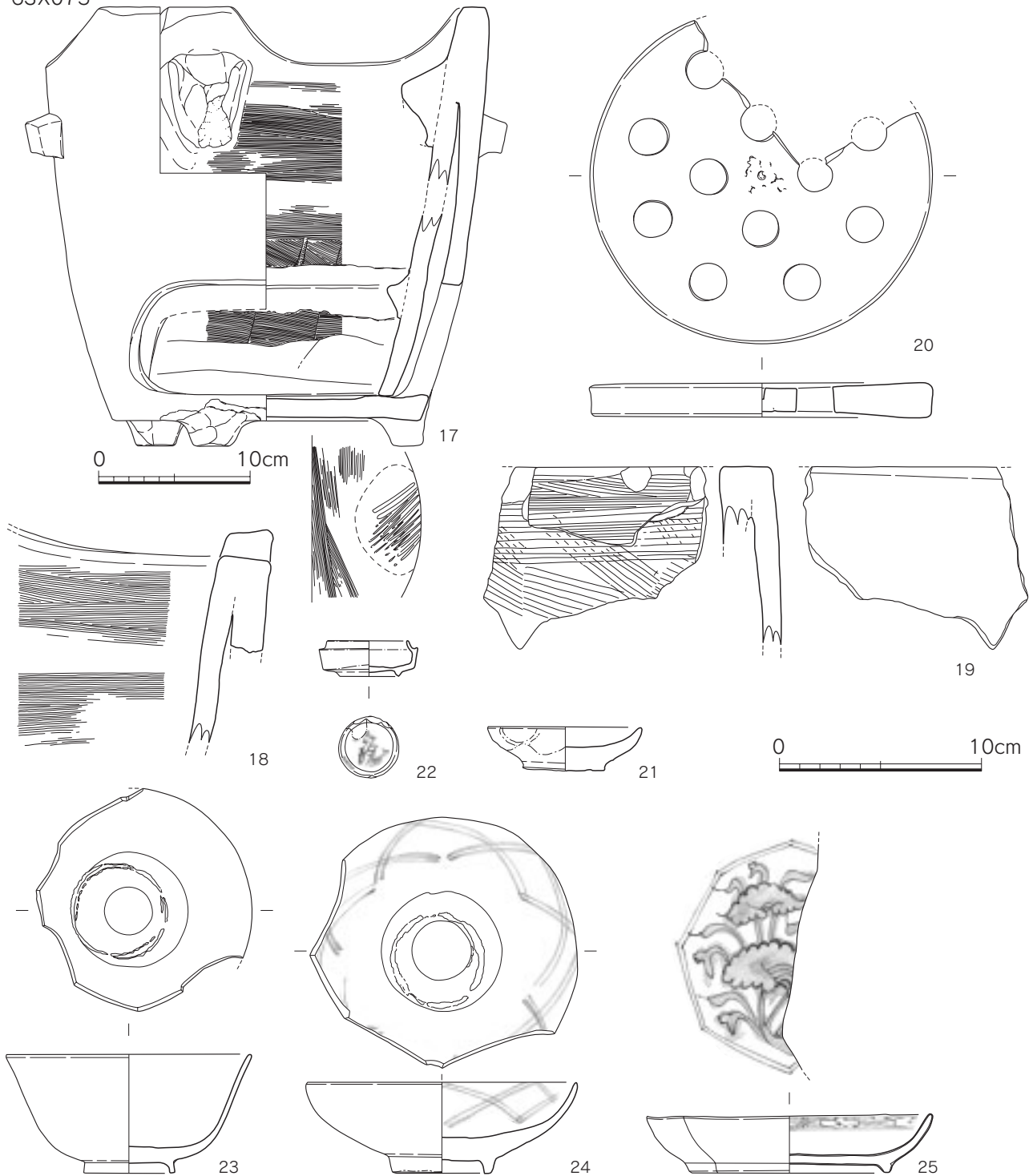


Fig.35 第3遺構面 6SX075その2出土遺物実測図 (1/4は12、その他は1/3)

6SX080出土遺物 (Fig.36)

土師器

小皿c (30) 口径7.75cm、器高1.7cm、高台径5.65cm。焼成はやや不良。色調は明黄灰色。部分的に淡赤灰色を呈す。口縁部を中心に黒灰色の煤が付着する。見込み中央ややはずれた箇所、1.1cm×0.8cmの穴が穿孔される。

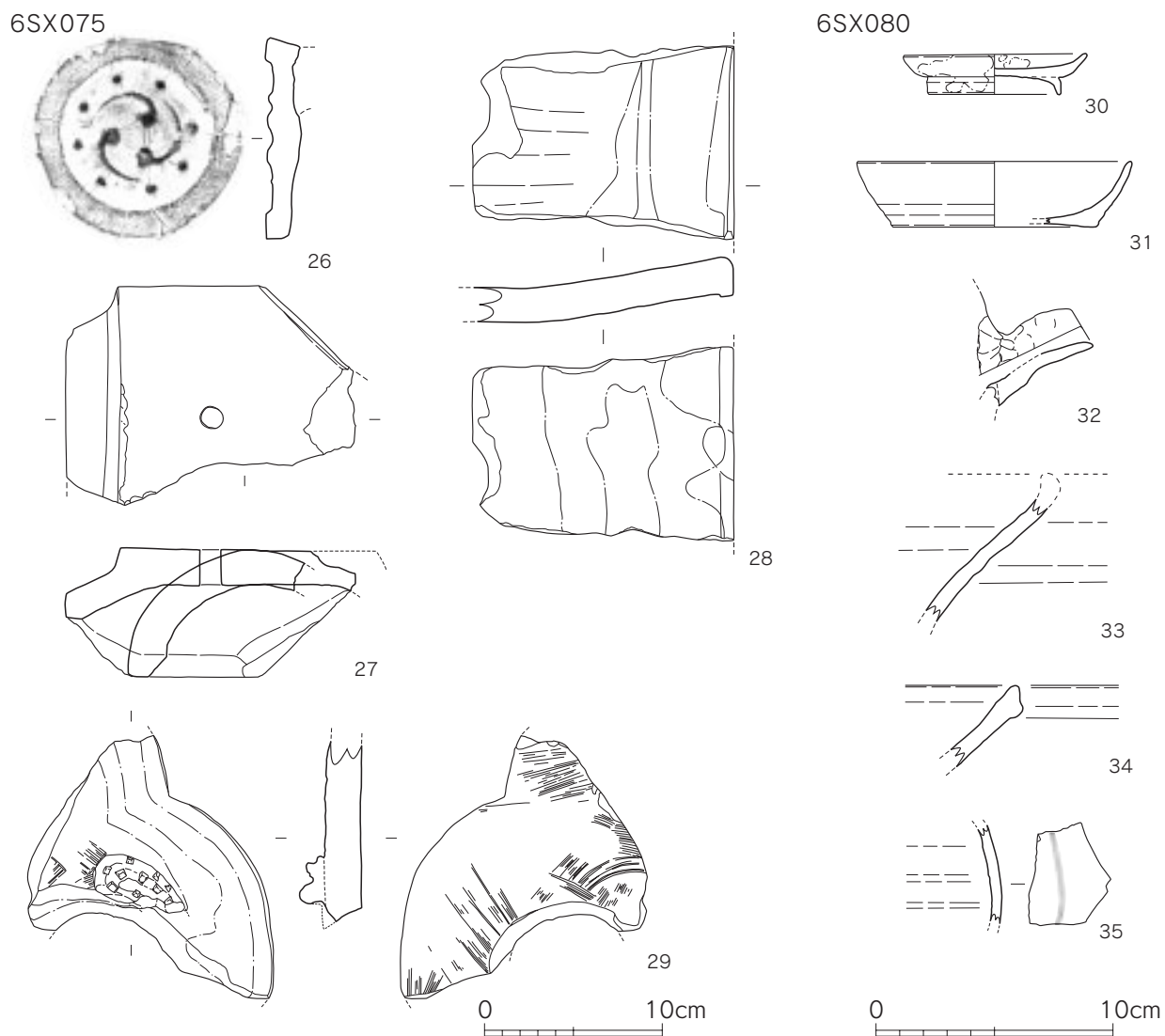


Fig.36 第3遺構面 6SX075その3、6SX080出土遺物実測図（1/4は22、24、その他は1/3）

坏a (31) 復元口径11.6cm、器高7.8cm、復元底径8.7cm。底部回転糸切り後、板状圧痕。焼成はやや不良。色調は明黄灰色。1mm以下の白色砂粒を少量含む。XX期以降。

輸入陶器

水注 (32) 残存高4.9cm。焼成良好。注口部を体部に指押さえて接合。色調は外面が灰赤褐色、内面は灰青色。B群。

須恵質土器

鉢 (33、34) こね鉢の破片。28は体部。29は口縁部。色調は青灰色。東播系須恵器。

肥前系磁器

徳利 (35) 体部の破片。染付。外面に呉須で線を描く。

6SX090明灰黄色土出土遺物 (Fig.37～39)

土師器

小皿a (1～5) 1は口径6cm、器高1.15cm、底径4.6cm。底部回転糸切り。器形はゆがんでいる。2は復元口径6.1cm、器高1.7cm、復元底径4.7cm。底部回転糸切り。3は復元口径6.9cm、器高1.4cm、復元底径4cm。底部回転糸切り。4は復元口径8.4cm、器高1.6cm、復元底径6.2cm。底部回転糸切り。口縁部に

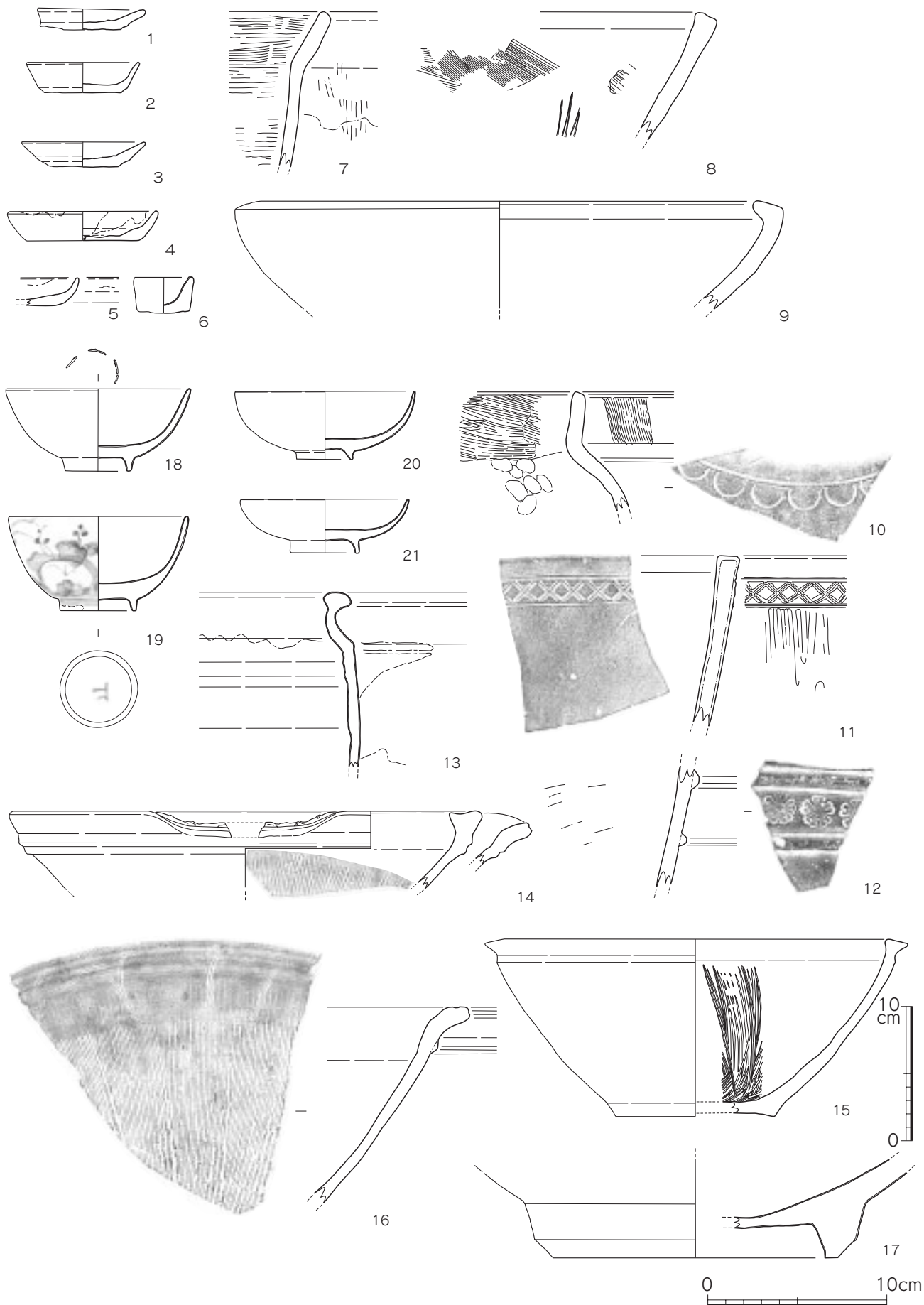


Fig.37 第3遺構面 6SX090明灰黄色土その1出土遺物実測図 (1/3)

煤が付いていることから、灯明皿として使われていたと推測される。5は破片。器高1.55cm。

てづくね(6) 復元口径3.2cm、器高2cm、底径2.9cm。色調は、外面は淡黄褐白色。内面は淡黄緑褐色の自然釉が薄く掛かっている。

土師質土器

鍋(7) 残存器高8.7cm。口縁部の破片。口縁部は「く」形に外反する。焼成は良好。色調は淡橙黄褐色。内面は横方向の刷毛目調整。外面はわずかに刷毛目調整が残る。外面下部には煤の付着あり。

擂鉢(8) 口縁部の破片。焼成は不良。色調は淡茶褐色～暗灰色。内面に斜め方向の刷毛目調整の後に擂目を刻む。外面は横方向のナデ調整。

鉢(9) 復元口径31.6cm、残存高6cm。焼成は良好。色調は橙褐色～黄橙褐色。口縁部を内側に折り曲げる。内外面を回転ナデで調整する。

瓦質土器

壺(10) 残存高6.7cm。口縁部の破片。焼成は不良。口縁部内面は斜め方向の刷毛目調整。外面は縦方向の刷毛目調整。肩部の内面は指頭圧痕の後に横方向のナデ調整。肩部には馬蹄状のスタンプ文が沈線に沿って連続して押される。

火鉢(11、12) 11は口縁部破片。残存高9.5cm。焼成・還元ともに良好。色調は内外面ともに黒色。内面は不定方向のナデ調整。外面は丁寧にミガキ調整。口縁部外面下部にX字を浮きあがらせるように周辺を削り込んでいる。

国産陶器

甕(13) 残存高9.8cm。釉調は内面にはつやがない暗茶色釉が掛けられ、口縁部から外面にかけては光沢のある暗緑茶色釉がかかる。口縁端部と肩部には白濁釉が掛かる。

擂鉢(14～16) 14は復元口径26.4cm、残存高4.3cm。片口鉢。焼成良好。釉調は内外面ともに暗茶褐色。胎土は密で淡褐色を呈す。15は復元口径36.5cm、器高13.2cm、復元底径11.8cm。焼成はやや良好。釉調は茶褐色。胎土は密で黒灰色を呈す。内底面近くの胎土は黄灰色を呈しており、焼成温度が上がりきっていないことがわかる。内面の擂目は一度擂目を口縁下部まで施しておいて、口縁端部から5cmほどの高さで回転ナデを施し、一度擂目を消してしまう。その後、先に施した擂目は角度を変えて段違いのように口縁下部まで施す。これは意匠的な意味あいの強い擂目入れの可能性がある。16は残存高10.9cm。釉調は黄茶褐色。胎土はやや密で灰黄色を呈す。擂目は12条を1単位として密に施す。口縁部下部まで一度擂目を入れておいてから、回転ナデでその調整を消している。

鉢(17) 残存高5.5cm、復元高台径15.8cm。胎土は赤茶色で密。0.1mm～2mmの砂粒を少量含む。釉調は内面、淡茶灰色で、外面は暗茶黒色を呈し、畳付部だけ釉を剥ぎ取っている。

椀(18) 復元口径10.4cm、器高4.6cm、復元底径3.65cm。

肥前系磁器

椀(19) 復元口径10cm、器高5.25cm、高台径4.2cm。染付椀。外面に草花文を呉須で絵付けする。釉調は暗灰白色。胎土は密で白色。高台部の露胎部に少量の砂粒付着。高台内に呉須で記号を絵付けする。

国産磁器

椀(20) 復元口径10.1cm、器高3.8cm、復元高台径3.2cm。釉調は淡黄褐色にまばらに淡茶褐色。焼成はやや良好。表面に微細な貫入が入る。

皿(21) 復元口径9.4cm、器高3cm、復元高台径3.8cm。白磁皿。

瓦

軒丸瓦(22～26) 22は瓦当面径14.8cm。左回りの三巴文。尾はやや長く伸びるが、他の尾に接して

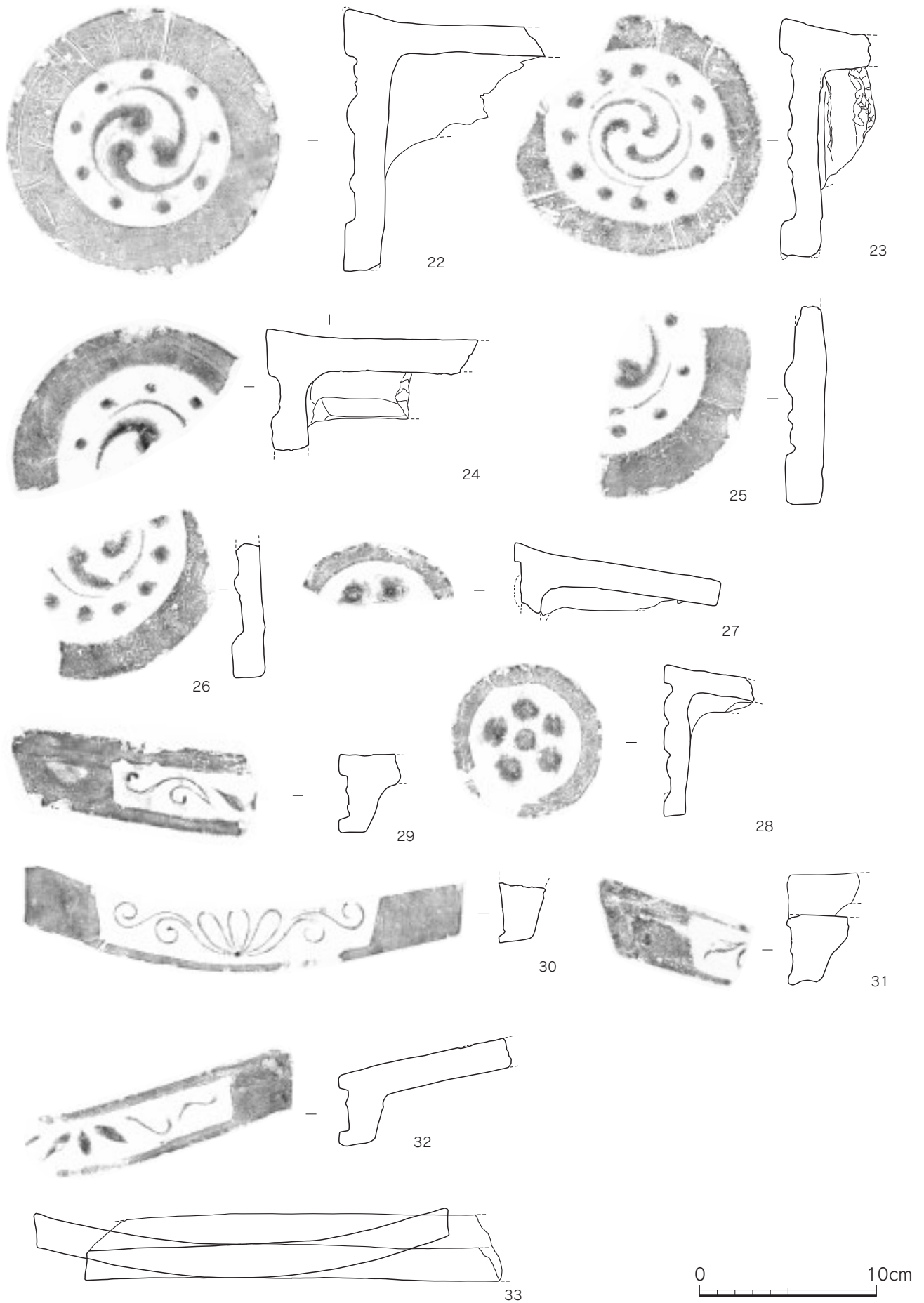


Fig.38 第3遺構面 6SX090明灰黄色土その2出土遺物実測図 (1/3)

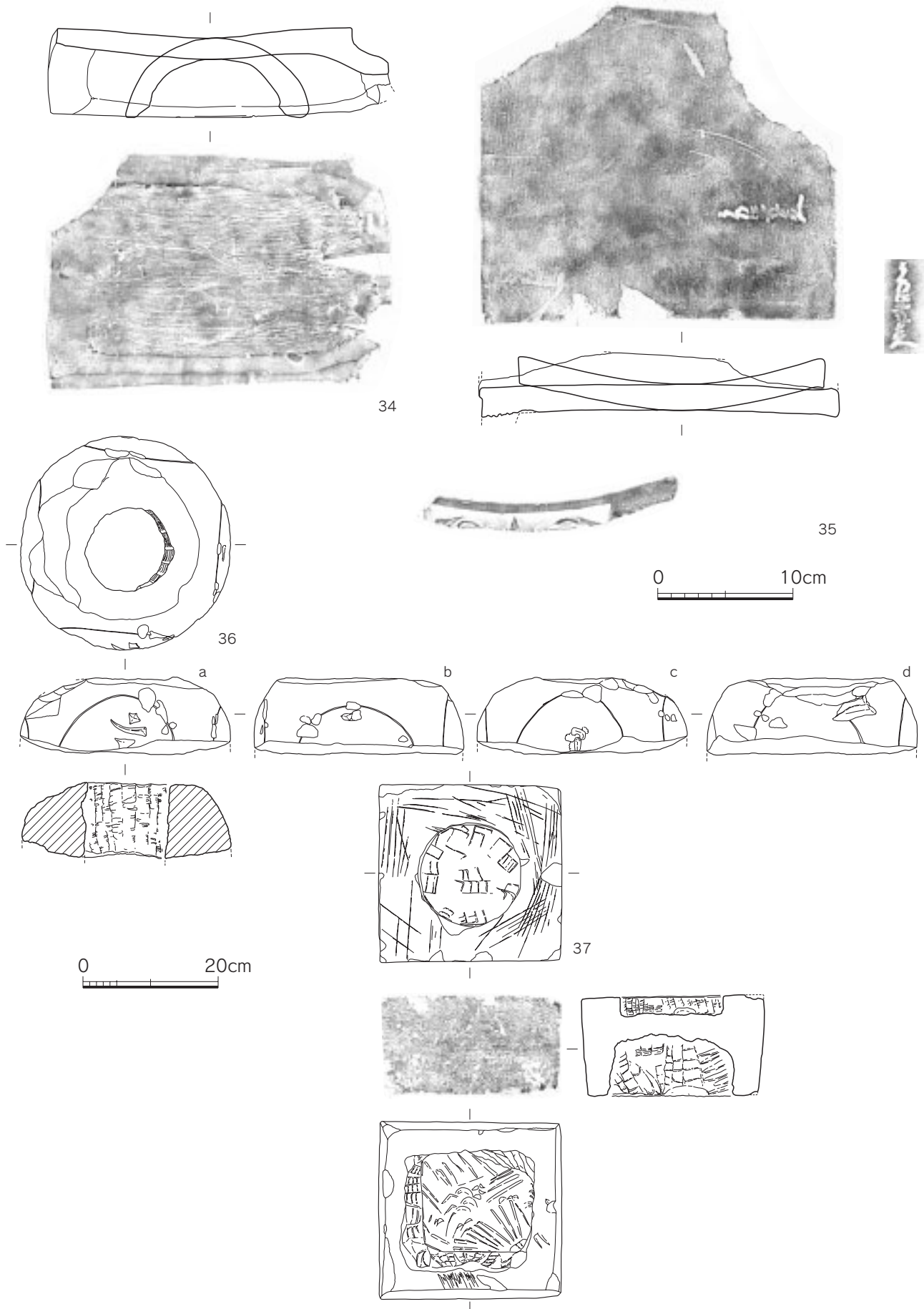


Fig.39 第3遺構面 6SX090明灰黄色土その3出土遺物実測図 (1/4は34、35、その他は1/8)

いない。珠文は9個。23は瓦当面径13.7cm。左周りの三巴文。尾は細く長く伸びるが、他の尾とは接していない。珠文は12個。24～26は瓦当の破片。文様は三巴文か。

菊丸瓦（27、28） 27は残存高4cm、長さ11.65cm、厚み1.5cm。瓦当面から下端面に向かって側面を斜めにヘラ切りしており、端面に近づくほど中心によるため、上からみると瓦当面を底辺にした三角形のように見える。文様は梅鉢文か。28は瓦当径8.6cm。焼成・還元ともにやや不良。色調は灰白色。瓦当文は梅鉢文。

軒平瓦（29～32、35） 29は中心飾りが太く短い三葉文でその両側に均等唐草文を配す。30は中心飾りが上向きの細い線の三葉文で、両側に均等唐草文を配す。31は破片のため、唐草文が一部確認できるだけである。32は下向きで太い三葉文で、唐草文を配す。

平瓦（33） 縦23.4cm、横23.5cm、厚さ1.9cm。焼成・還元はともに良好。色調は黒灰色だが、重ね焼きの部位は、淡灰褐色を呈す。胎土は淡灰白色の0.5mm程度の砂粒を多く含む。35は軒平瓦で瓦当面の半分以下が欠落している。縦26.6cm、横22.7cm、厚み1.9cm。焼成・還元ともに良好。色調は黒灰色。胎土は密で、0.1～2mmまでの砂粒を少量含む。凹面にスタンプにより文字を陰刻する。

丸瓦（34） 長さ25.3cm、幅13.5cm、厚さ1.55cm。焼成・還元ともに良好。色調は黒灰色～黒灰褐色。

石製品

五輪塔（36、37） 36は水輪の一部でちょうど上部1/3程度が残存している。残存高11.4cm、幅31.1cm。石材は阿蘇凝灰岩。本来円形の部位で、内部をノミ状の工具で直径17.2cmの円柱状に削り抜いている。体部の四面にはそれぞれ梵字を彫っていた痕跡が残るが、破損がひどく明確ではない。aの種字は阿閼如来を表す「𑖀(ウーン)」の可能性がある。それを足がかりに考えると、cの面は阿弥陀如来を表す「𑖀キリーク」ではないだろうか。そうすると、北方が不空成就如来、西方が阿弥陀如来、南方が宝生如来、東方が阿閼如来という金剛界五仏を本来表していた可能性が考えられる。37は地輪で完形品。縦26.3cm、横27.1cm、厚さ15cm。上部を直径15.2cm、深さ3cmほど彫り下げて、下部は内面を大きく削り抜いている。ともにノミ状工具の使用痕跡が明瞭に残っている。外面は丁寧に削って平滑に仕上げている。

6SX090茶灰色砂出土遺物（Fig.40～44）

土師器

小皿a（38～44） 38は復元口径6.5cm、器高1.3cm、底径3.8cm。底部回転糸切り。39は復元口径7cm、器高1.6cm、復元底径5cm。底部回転糸切り。40は口径7.2cm、器高1cm、底径4.9cm。底部回転糸切り。41は復元口径7.8cm、器高1.1cm、復元底径5.6cm。底部回転糸切り。色調は黒褐色。42は復元口径8.8cm、器高1.5cm、復元底径6.6cm。口縁部に煤が吸着しているため、灯明皿として使用された可能性が高い。43は復元口径9cm、器高1.1cm、復元底径5.8cm。底部回転糸切りのち板状圧痕。44は復元口径9.4cm、器高0.95cm、復元底径7cm。底部回転糸切りのち板状圧痕。

坏a（45～47・49） 45は復元口径11.4cm、器高2.3cm、復元底径7.5cm。口縁部に黒褐色の煤が吸着しており、灯明皿として使用された可能性がある。底部回転糸切りのちに板状圧痕。46は復元口径13.4cm、器高2.6cm、復元底径8.8cm。47は復元口径13.4cm、器高3.1cm、復元底径9.6cm。底部回転糸切りのちに板状圧痕。

坏c（48） 48は器高2cm、復元底径11cm。高台は円盤状高台で板状圧痕の痕跡がある。焼成はやや不良。色調は黄灰色。0.1mm程度の金色雲母片をごく少量含む。胎土は5mm程度の白色粒子を少量含む。

土師質土器

播鉢（50～52） 50は残存高9.7cm。片口鉢か。焼成はやや不良。色調は明黄褐色。内面に6条を1単位とした播目をまばらに施す。51は口縁部破片。残存高8cm。内面は刷毛目調整の後に播目を施す。外

面は指頭圧痕の後にナデ調整。焼成は良好。色調は明茶褐色。52は底部～体部の破片。残存高8.5cm。内面はよこナデの後に、2条の揃目を入れる。外面は指頭圧痕の後に刷毛目調整をし、そのご不定方向のナデを施している。底部には離れ砂を確認出来る。

釜（53） 肩部の破片。罫が付けられ中央に穴が穿孔される。焼成はやや不良で、色調は暗灰茶色。

十能（54） 把手部の破片。残存高4.4cm。焼成は良好。色調は黄灰色。胎土はやや密で、1mm程度の白色粒子と金色雲母を少量含む。把手は中空で、直径1.7cmの穴を穿孔している。

蓋（55） 摘み付きの蓋で、天井部に六角文のスタンプを輪状に施す。焼成はやや不良。色調は黄灰色を呈す。内面の中央部、ちょうど摘みの中軸線が通るあたりに直径3mmの穴が穿孔されている。深さは5mm程度。用途は不明。

七輪（56、57） 56はサンの一部。縦14.8cm、横7.7cm、厚さ1.9cm。焼成は良好。色調は赤褐色で、一部明灰褐色に変化している。胎土の色調は黄灰色。直径2.1cmの穴が不規則に穿孔されている。57は底部の破片。灰掻き出し口の一部と考えられる。焼成はやや良好。2mm程度の白色粒子を多く含む。底部に板状圧痕が認められる。

瓦質土器

蓋（61） 復元口径15.5cm、器高2.3cm。焼成はやや不良。色調は暗黒灰褐色。円盤状の底部に口縁部を接続させている。粘土紐を天井部に把手として貼り付ける。底部と口縁部の段の周辺に煤が多量に吸着している。火消し壺の蓋か。

壺（58） 肩部の破片。残存高5.9cm。焼成はやや良好。いぶしはやや不良。内面の体部と肩部の接合箇所に指頭圧痕が明瞭に残る。外面は刷毛目調整のあとナデ調整。外面肩部下まで煤が付着している。肩部の稜線から口縁部に向かって、1.5cmの幅に刺突文を連続させてX形をつくり、それを連続で巡らしている。

鉢（59） 深い桶状の鉢の口縁部破片。残存高9cm。焼成は不良。酸化気味の土師質焼成であり、外面下位の一部のみ淡黒灰色の燻しがわずかに確認できる。胎土は4mm以下の白色砂粒と微細な黒色粒、微細な金色雲母を多く含む。口縁部下位に2重の突帯を巡らして、それにより区画された空間に雷文を連続で施す。

土製品

瓦玉（60） 幅1.8cm、高さ2.1cm、厚さ1.75cm。

国産陶器

蓋（62） 口径9.4cm、器高3.6cm。焼成・還元は良好。胎土は淡灰白色の微細粒子を多く含む。外面に暗褐色の釉が掛かる。天井部に輪状の摘みがつく。

揃鉢（64、65） 64は口縁部の破片。内面に揃目を8条1単位にしてやや密に施す。焼成は良好。色調は赤紫色。65は底部の破片。胎土は淡灰白色の0.5～1mm大の砂粒を多く含む。揃目を密に施した後に方向を変えて、再度揃目を施している。

鉢（66） 残存高4.7cm、復元高台径8cm。焼成良好。胎土は密で、灰青色を呈す。内面見込みを蛇ノ目釉剥ぎする。釉剥ぎ部に二重の目跡痕跡が確認できる。釉調は薄い緑灰色。見込みに向かって釉垂れしている。高台は高く3cmを測る。高台部は露胎している。

人形（72、73） 72は残存高5.6cmの破片。灰白色の素地に5色の釉で彩色する。内面に指押さへの跡が残る。確認できる釉色は、外面を凹線で区画してモチーフを描いているものと推定できる。肩部と推定される横に伸びる凹線を淡赤褐色で絵付けして、その上を濃青色で塗る。一部、明緑黄色が掛かる。また、肩部の下には円形内に七宝らしき文様を描いていると思われるが、それぞれ区画になる凹線は淡

6SX090 茶灰色砂

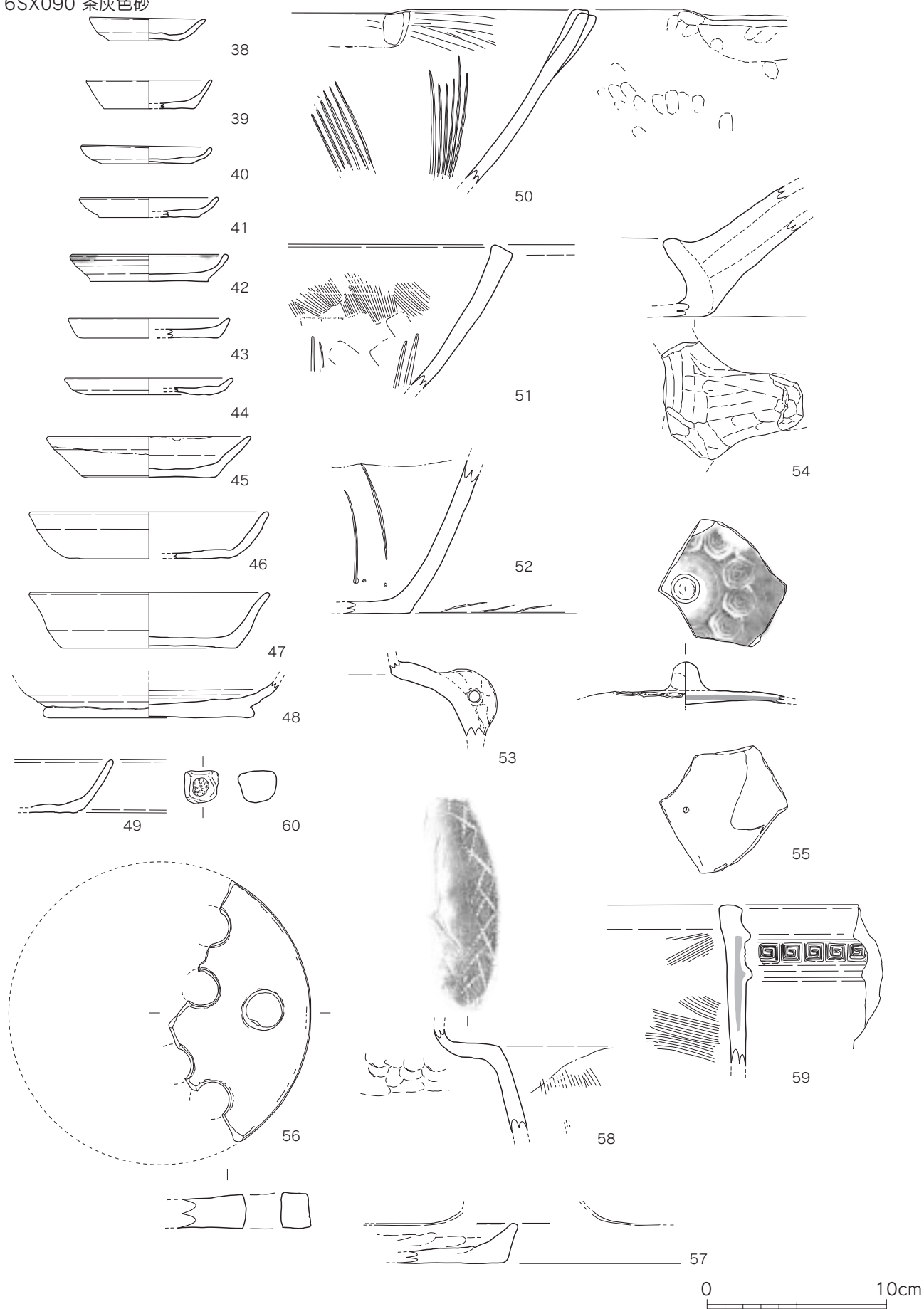


Fig.40 第3遺構面 6SX090茶灰色砂その1出土遺物実測図 (1/3)

6SX090 茶灰色砂

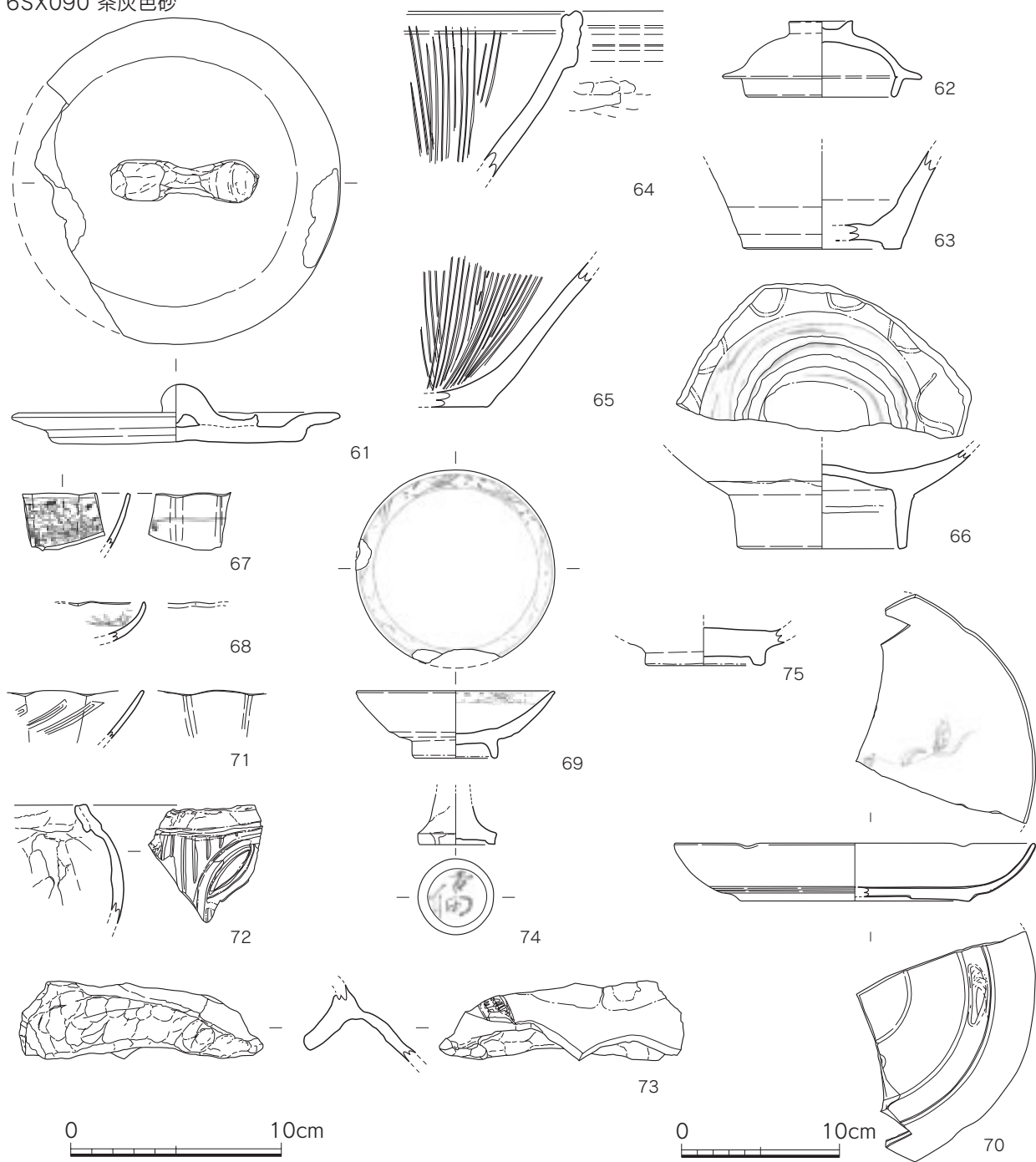


Fig.41 第3遺構面 6SX090茶灰色砂その2出土遺物実測図 (1/3)

6SX090 茶灰色砂

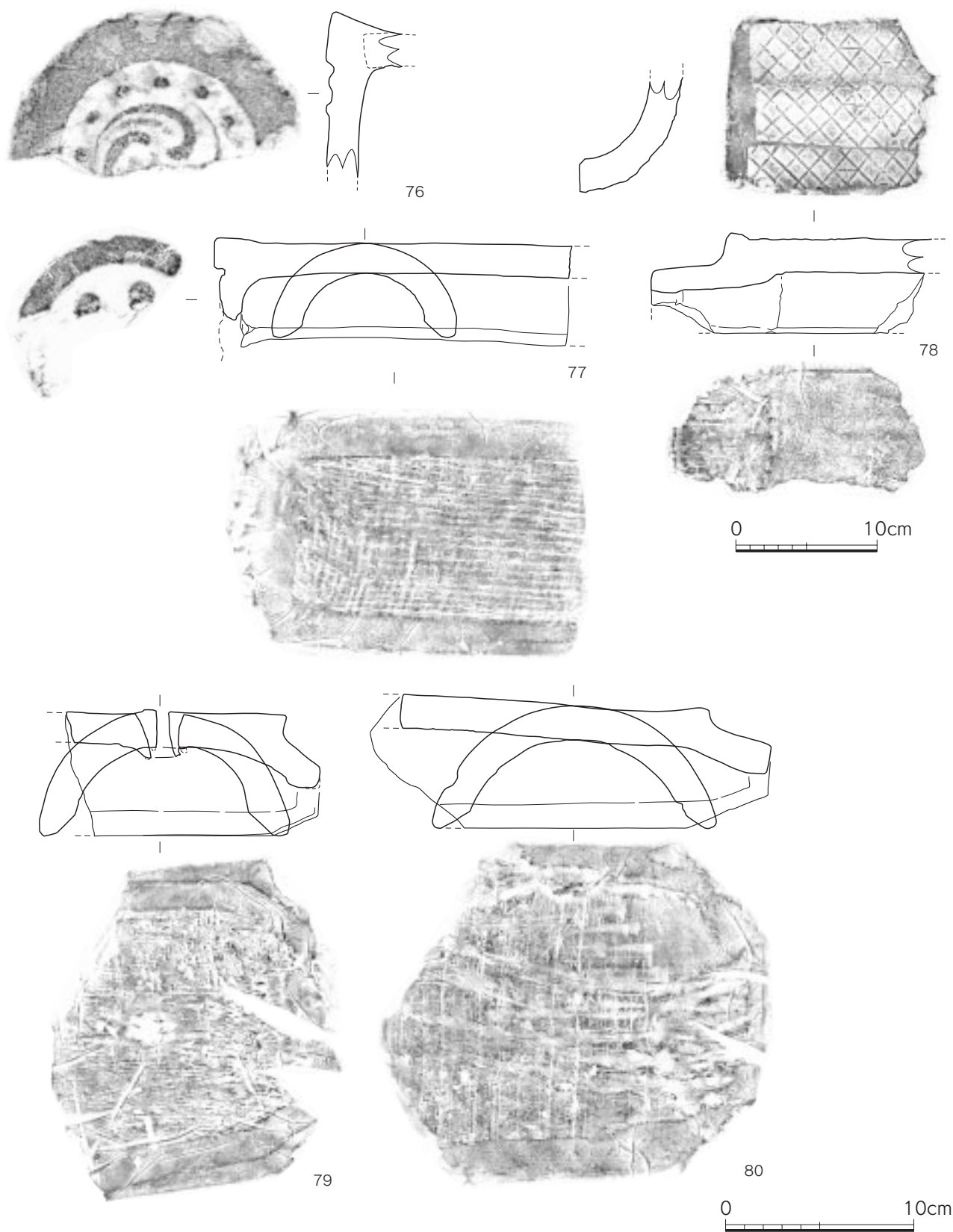


Fig.42 第3遺構面 6SX090茶灰色砂その3出土遺物実測図 (1/3)

6SX090 茶灰色砂

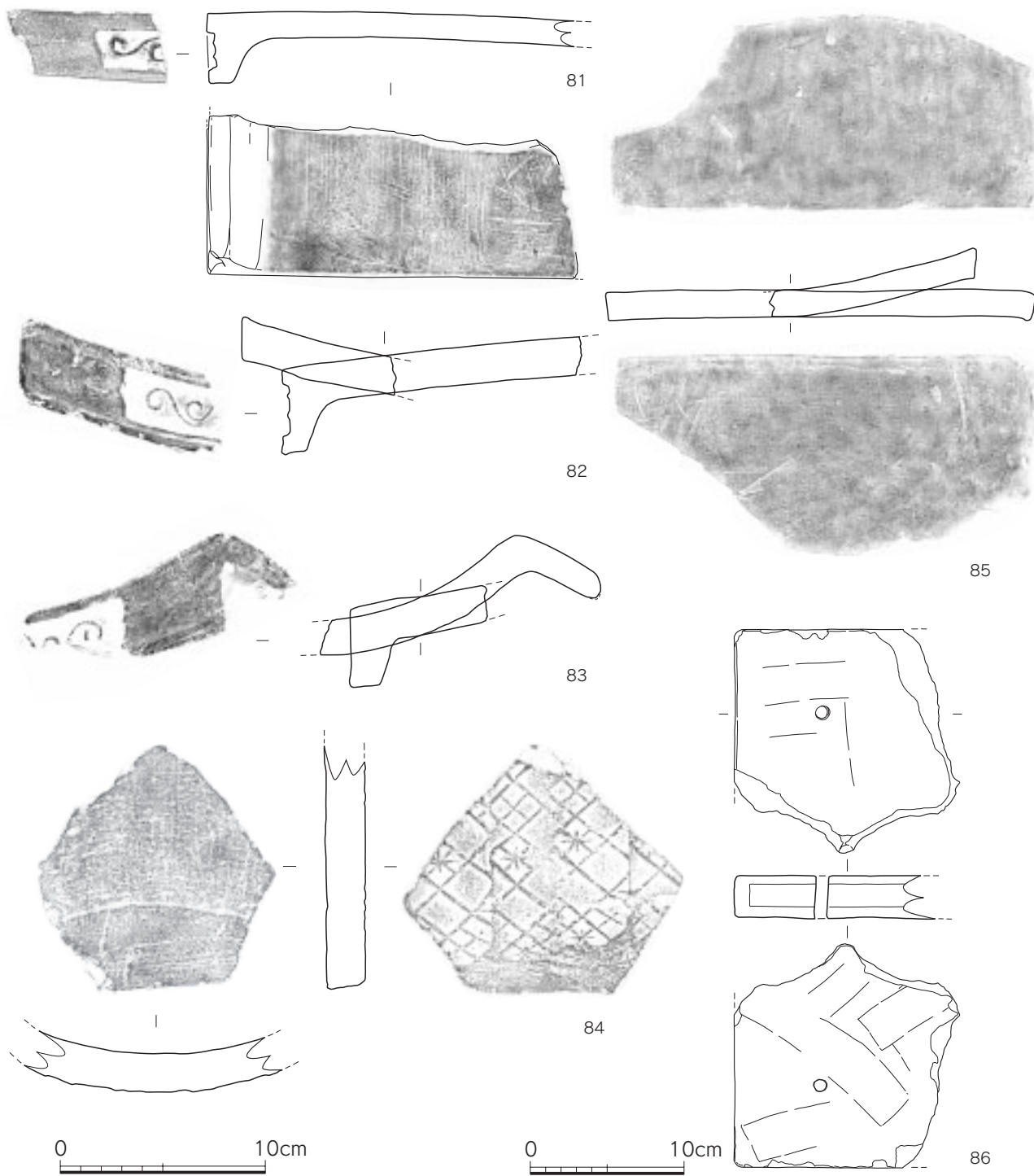


Fig.43 第3遺構面 6SX090茶灰色砂その4出土遺物実測図 (1/3は84、その他は1/4)

赤褐色をつかい、七宝は黄色で、それぞれの空間は明緑黄色で絵付けをする。残りの縦に凹線が入る箇所は紫灰色をあてる。73は唐子人形の一部か。素地は灰白色で、内面には釉を掛けない。外面は白濁釉をかけて、茶褐色や黒青色で絵付けをする。

肥前系磁器

(67～71) 67は口縁部破片。口縁部は輪花を呈す。角皿。内外面に呉須で絵付けをする。内面に草花文、外面に唐草文を描く。68は口縁部破片。口縁部は輪花を呈す。角皿。内面に赤絵で紅葉を描く。69は口径9.4cm、器高3.2cm、復元高台径4.1cm。内面に呉須により絵付けをしているが、焼成時に灰をかぶったため、灰白色化しており、文様は判別しづらい。口縁部内面下部にX形の文様を連続で施すのが確認できるのみである。外面の釉調は、灰白黄色で透明感はない。70は染付で絵付けをした後に、全面に青磁釉を施す。高台は蛇ノ目凹高台で、高台部は淡赤褐色を呈す。口縁部は輪花形を呈す。見込みには草花を呉須で描いている。71は口縁部破片。輪花形を呈す。白磁か。内面に透かし彫りで文様を描く。

仏飯具(74) 残存高2.4cm、底径3.8cm。胎土は淡褐白色の0.5～1mm大の砂粒をわずかに含む。外面を回転ヘラ削りで調整した後に化粧土をふき、灰白色の釉をかける。底部外面に「吉田□」を墨書する。

輸入陶器

壺(63) 底部の破片。残存高4.65cm、復元底径7.4cm。色調は内面、淡褐灰色。外面は淡灰赤色。焼成はやや良好。胎土は精良で淡橙褐色。2mm以下の薄い黒色粒を多く含む。B群。

龍泉窯系青磁

椀(75) 高台の破片。釉調は淡緑灰色。I類。

瓦

軒丸瓦(76、77) 76は瓦当面の破片。左周りの三巴文か。巴文の頭は細く、尾も細長く伸びるがほかの尾に接してはいない。焼成・還元はやや不良。77の瓦当の文様は梅鉢文の可能性が高い。

丸瓦(78～80) 78は凸面に斜格子叩きを施す。格子目の中に「+」が入る。79は玉縁部破片。焼成・還元ともに良好。凸面中央に直径1.5×1.7cmの穴を穿孔するが、これは瓦の成形段階であけており、その後外面のヘラミガキ調整をしている。80は凹面に布目痕跡がのこっており、その後に棒状工具で調整をしている。焼成・還元ともに良好。色調は黒褐色。側面の調整はヘラ削りで行うが、仕上がりは丸みを帯びている。

軒平瓦(81～83) 81は残存長24.1cm、残存幅10.6cm、器高4.6cm、厚さ1.7cm。凹面には不定方向のナデ調整のあとが明瞭に残る。瓦当面は唐草文をスタンプする。82は81と同様の破片。瓦当面には唐草文をスタンプする。83は焼成・燻しともにやや不良。色調は黄灰色を呈し、一部燻しが掛かっている箇所は淡灰黒色を呈す。瓦当面には唐草文をスタンプする。瓦当面にむかって右に三角形のくぼみがあるが、これはもともと「へ」の字型に端部を成形したあとに、瓦当面を貼り付けたことによって生じた隙間だが、ヘラで丁寧調整しており、なにかの機能的な意味があるのかもしれない。

平瓦(84～86) 84は平瓦の破片。焼成・燻しともにやや不良。凸面は端部を除いて燻しがかかっておらず、灰白色を呈す。凸面には格子叩きが施される。格子目の間に「※」や「×」の文字が入る。内面の布目痕跡には布目の継ぎ目痕跡が観察できる。85は縦28cm、横13cm、厚さ1.8cm。表面を指ナデによりナデ消している。86は縦14.65cm、横14.65cm、厚さ2.8cm。焼成・燻しともに不良。色調は灰白褐色。胎土の色調は表面が灰白褐色だが、内面は黒褐色で生焼けの状態を示している。破片の中央部近くに直径7mm程度の穴が穿孔されている。表面は丁寧な刷毛目調整で平滑に仕上げている。端面はヘラ切り。

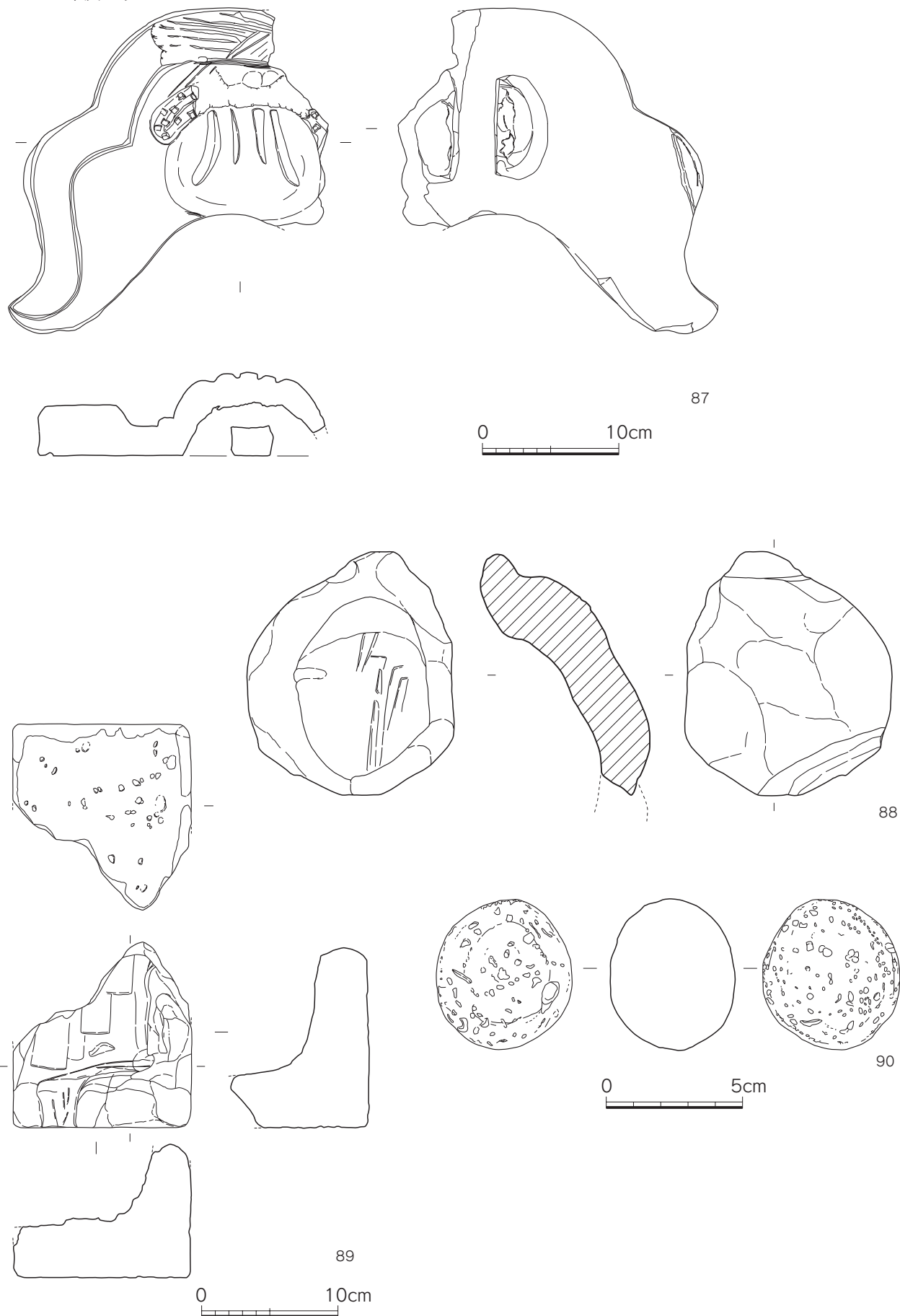


Fig.44 第3遺構面 6SX090茶灰色砂その5出土遺物実測図 (1/2は90、その他は1/4)

鬼瓦（87） 高さ23.35cm、横23.4cm、厚さ3.75cm。向かって右半分が欠損している。中央部には巾着袋と思われる図案が丸みを帯びて貼り付けている。裏面をみると、中央に柱を通して、巾着袋の内部は削り抜いているのがわかる。巾着袋の上には接合時のヘラ刻みが残っている。焼成は良好。燻しはやや良好。胎土は密で精良。3mm以下の白色粒子を少量含む。

石製品

五輪塔（88、89） 88は水輪の破片。縦17.9cm、横15.2cm、厚さ4.9cm。石材は阿蘇凝灰岩。風化が激しく表面の調整は不明。内面などに部分的に工具痕跡がある。上部には火輪との組み合わせ用の段が彫り込まれており、下部には円窓と思われる削り込みが見受けられる。色調は淡灰褐色。89は地輪の破片。縦13.6cm、横13.1cm、高さ9.8cm。内面を削り抜いているあとがみられる。表面は平滑に仕上げているが、内面のくりぬき部は工具痕跡が粗く残る。色調は淡灰褐色。

打石（90） 縦5.5cm、横5.5cm、厚さ4.6cm。石材は礫岩。上部のやや平坦な面を使って叩いていた可能性がある。色調は暗灰黄色。

第4 遺構面出土遺物

柵列出土遺物

6SA015a出土遺物（Fig.45）

土師質土器

鉢（1） 口縁部の破片。残存高2.5cm。焼成はやや良好。色調は内面が黒褐色～暗茶色。外面は暗茶色～黒色。外面に煤が付着している。胎土は1mm以下の白色砂粒を大量に含む。1mm以下の角閃石がわずかに混入している。

6SA015b出土遺物（Fig.45）

土師器

小皿a（2） 復元口径7.7cm、器高1.4cm、復元口径6cm。底部回転糸切り。色調は淡白黄橙色。XIX～XX期。

井戸出土遺物

6SE095出土遺物（Fig.45）

土師器

小皿a（3、5） 3は復元口径7.9cm、器高1.65cm、復元底径6.2cm。色調は明黄灰白色。底部回転糸切りの後、板状圧痕。5は口縁部の破片。色調は明黄白色。底部回転糸切り。

小皿b（4） 口径6.7cm、器高1.7cm、底径5.05cm。色調は明黄灰白色。底部回転糸切りの後に、板状圧痕。口縁部に煤が吸着していることから、灯明皿として使われた可能性が高い。XX期。

瓦

丸瓦（6） 長さ16.2cm、横9.1cm、厚み3cm。焼成は良好。還元も良好。色調は青灰色を呈す。凸面二重斜格子叩き。叩き工具の幅は約4cm。

平瓦（7～9） 7は長さ19.6cm、横16.5cm、厚み2.2cm。焼成は良好。還元も良好で、色調が淡灰青色。胎土は6mm以下の白色砂粒を大量に含む。1mm以下の黒色粒子を多量に含む。8は長さ21.1cm、横13.5cm、厚さ2cm。焼成はやや不良。燻しも不良。色調は淡灰色～淡白黒色。凸面は縄目叩きをナゲ消している。凸面に横長の斜格子叩きを施す。9は長さ19cm、横14.6cm、厚み2.3cm。焼成・燻しともに不良。色調は黄褐色で部分的に淡黒灰色を呈す。凸面に斜格子叩きを施す。凹面には布目痕。

その他の遺構出土遺物

第4遺構面

6SA015a

6SA015b

6SE095

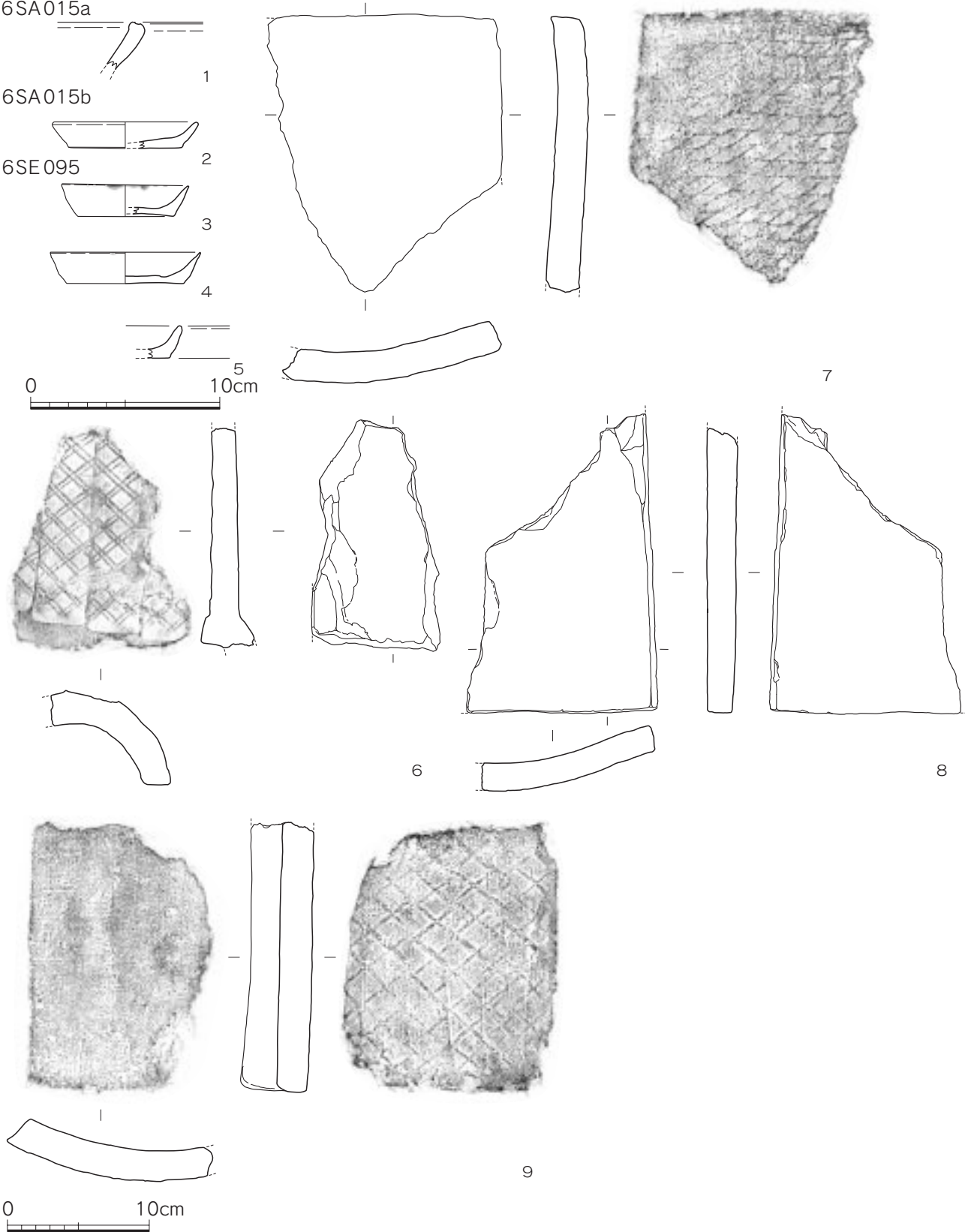


Fig.45 第4遺構面 6SA015a.b、6SE095出土遺物実測図 (1/4は6~9、その他は1/3)

6SX063出土遺物 (Fig.46)

土師器

小皿a (1) 復元口縁7.4cm、器高1.3cm、復元底径5cm。焼成は良好。色調は淡褐灰色。底部回転糸切り。胎土は淡褐白色の0.5～1mm大の砂粒を少量含む。

坏a (2) 器高3.9cm。全体が摩耗しており、調整は不明。色調は淡褐橙色。

鍋 (3) 口縁部破片。内面は刷毛目調整。外面に煤が付着している。色調は暗茶褐色。

須恵質土器

捏鉢 (4) 復元口径26.4cm。色調は灰白色。口縁部だけ暗黒灰色を呈す。胎土は淡灰褐色の0.5～1mm大の砂粒を少量含む。底部回転糸切り。表面が摩耗しており、調整不良。東播系。

6SX066出土遺物 (Fig.46)

土師器

小皿a (5) 復元口径8.1cm、器高1.3cm、底径5.6cm。底部回転糸切りの後、雑なナデ調整。

坏a (6) 復元口径13.8cm、器高3cm、復元底径8cm。底部回転糸切り。色調は淡褐黄色。XVII期。

土師質土器

鍋 (7) 「く」の字型に大きく外反する口縁部の破片。色調は褐黄色だが、内外面に煤が付着しており、黒褐色を呈す。内面は回転ナデ調整。外面は指頭圧痕の後に横方向のナデ調整を施す。

白磁

椀 (8) 底部破片。II類か。

瓦

平瓦 (9) 破片。焼成はやや良好。燻しは不良。色調は灰白色を呈す。凸面に格子叩きを施す。格子内に「※」の記号が入る。凹面は粗いナデ調整。端部は分割時のまま未調整。

6SX067出土遺物 (Fig.46)

瓦質土器

鉢 (10) 口縁部破片。内面に不定方向の刷毛目調整。焼成はやや不良。色調は灰白色～淡青灰色。

椀 (11) 口縁部破片。釉調は淡黄灰色の透明釉を掛ける。細かい貫入が入る。

龍泉窯系青磁

椀 (12) 見込みに魚の貼付文。外面に蓮弁文を施す。椀IV類。

6SX091出土遺物 (Fig.46)

土師器

小皿a (13) 復元口径8.25cm、器高1.15cm、底径3.6cm。底部回転糸切りの後に板状圧痕。色調は暗灰黄色。1mm程度の白色粒子を少量含む。

坏a (14) 復元口径12.3cm、器高2.9cm、復元底径7.4cm。底部回転糸切りの後に、一部ヘラで掻き取っている。色調は黄灰色。焼成はやや不良。XIX期。

龍泉窯系青磁

皿 (15) I-2d類。

石製品

軽石 (16) 縦5.1cm、横6.95cm、厚さ2.9cm。重さ37.4g。平坦な面があるため、使用されていた可能性がある。

6SX154出土遺物 (Fig.46)

土師器

6SX063

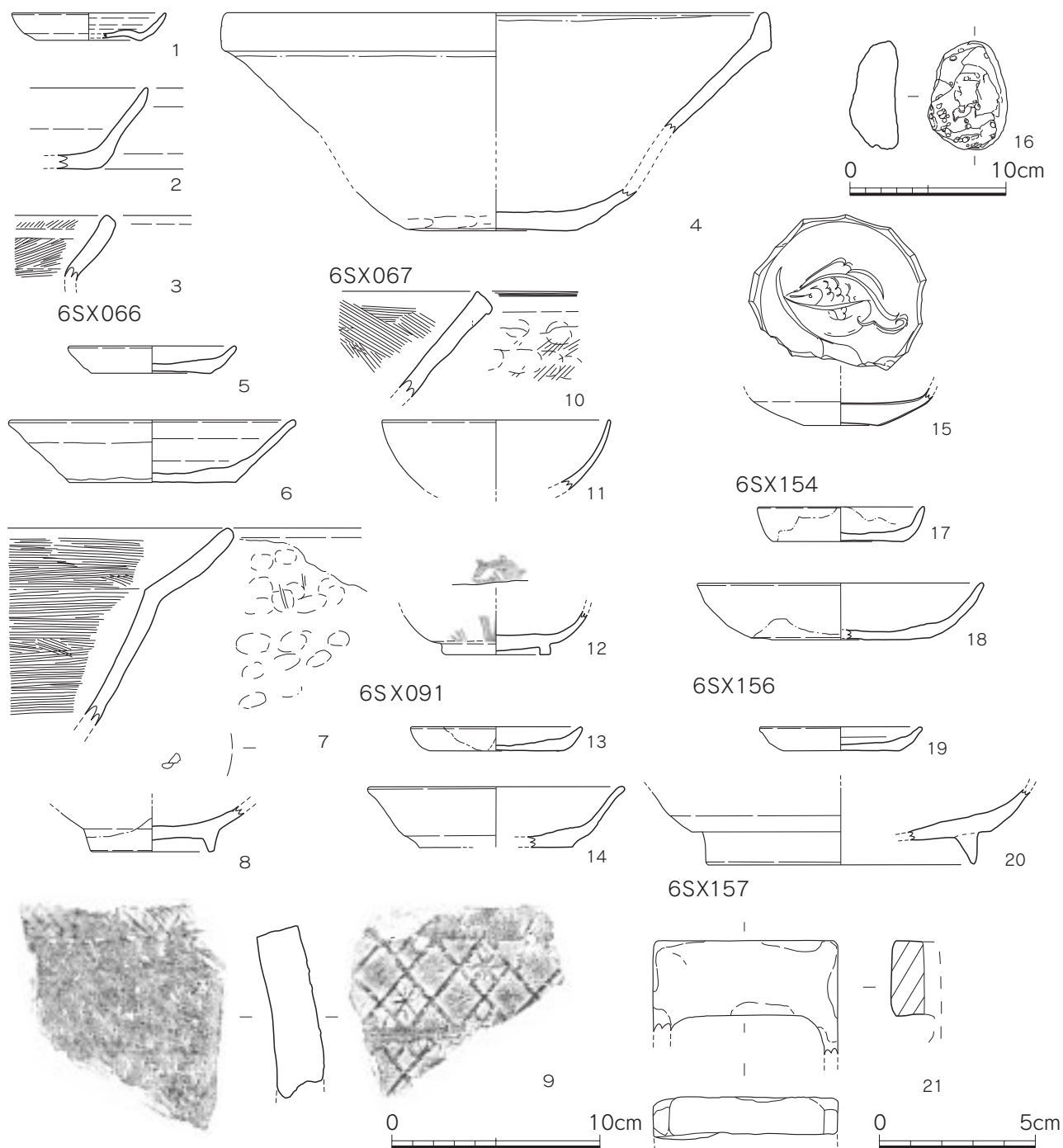


Fig.46 第4遺構面 6SX063、066、067、091、154、156、157出土遺物実測図（1/2は21、1/4は16、その他は1/3）

小皿b (17) 口径8cm、器高1.7cm、底径6.1cm。底部回転糸切り後に一定方向のナデ調整。内外面に煤が付着している。灯明皿か。

坏a (18) 復元口径13.8cm、器高2.7cm、復元底径8.6cm。底部に板状圧痕が残る。XVI～XVII期。

6SX156出土遺物 (Fig.46)

土師器

小皿a (19) 復元口径7.8cm、器高1.15cm、復元底径5.5cm。底部回転糸切り。色調は黄灰色。微細な金色雲母を少量含む。

鉢 (20) 残存高3.7cm、復元高台径13cm。断面三角形のやや高い高台貼り付ける。色調は橙色をおびた明黄灰色。

6SX157出土遺物 (Fig.46)

石製品

硯 (21) 縦3.65cm、横5.9cm、厚さ1.1cm。色調は暗灰茶色。石材は泥岩。

第5 遺構面出土遺物

溝出土遺物

6SD058出土遺物 (Fig.47)

土師器

小皿a (1) 復元口径9.2cm、器高0.9cm、復元底径7.4cm。底部回転糸切りの後に板状圧痕。色調は淡褐灰色。胎土に微細な黒色粒をやや多く含む。XVI期。

坏a (2) 器高2.3cm。破片。色調は淡褐灰色。

瓦

平瓦 (3) 長さ11.4cm、幅7.3cm、厚さ2.1cm。焼成良好。胎土は6mm以下の白色砂粒をやや多く含む。色調は暗灰色。凸面斜格子叩き。斜格子の間に「+」の文字が入る。

その他の遺構出土遺物

6SX020出土遺物 (Fig.47)

土師器

小皿a (4) 復元口径7.8cm、器高1.35cm、復元底径6.6cm。底部回転糸切り。色調は淡黄茶色。XIX～XX期。

坏a (5、6) 5は復元口径13.2cm、器高2.4cm、復元底径9.5cm。底部回転糸切りの後、板状圧痕あり。焼成良好。色調は淡灰黄橙色。胎土は2.5mm以下の白色・透明砂粒を多く含む。XVII期。6は口縁部が欠落した破片。残存高1.85cm。底部8.5cm。底部回転糸切りの後、板状圧痕あり。色調は淡黄茶色。胎土は2.5mm以下の白色・透明砂粒を大量に含む。2mm程度の赤褐色粒子を多量に含む。見込み中央部に成型時に開けられた穴がある。穴の直径は約1.5cm。

瓦質土器

鉢 (7) 口縁部破片。片口部。焼成やや良好。胎土は1.3mmの灰色砂粒を多く含む。色調は淡灰白色～淡灰黒色。内面は刷毛目調整。外面は指頭圧痕の跡をナデ調整している。

須恵質土器

握鉢 (8) 口縁部破片。焼成は良好。色調は、灰青色。口縁外面が淡黒灰色に変化している。東播系。

石製品

石鍋（9） 口縁部の破片。滑石製。

龍泉窯系青磁

椀（10） 残存高3.3cm、復元高台径6cm。施釉は内面～外面、高台部にかけて0.5～0.7mmの厚さで施される。釉調は淡緑灰色。光沢度は高く、透明度は低い。前回に細かな貫入が入り、微細な気泡を含む。胎土は淡灰色だが、底部近くでは茶褐色を呈す。高台内に墨書あり。IVイ類。

土製品

瓦玉（11） 縦4.7cm、横4.5cm、厚さ2.1cm。色調は暗灰褐色、断面は茶褐色。周囲を打ち欠いて円形に形作っている。

6SX020黒灰色土出土遺物（Fig.47）

土師器

小皿a（12） 復元口径8.8cm、器高1.1cm、復元底径7.1cm。底部回転糸切りのち板状圧痕。

坏a（13、14） 13は口縁部を欠落する破片。残存高0.9cm、復元底径9cm。底部回転糸切りのち板状圧痕。色調は淡黄灰色。14は復元口径13.6cm、器高2.8cm、復元底径10.5cm。底部回転糸切り。

瓦

平瓦（15） 破片。焼成・還元は良好。須恵質に焼き上がっている。凹面に靱殻痕跡がある。これは馬場遺跡第8次SSE050灰色土出土平瓦（図23-7）『馬場遺跡2』2006太宰府市教育委員会P40と同様の特色かと思われる。

6SX025出土遺物（Fig.47）

土師器

小皿b（16） 口径7cm、器高1.65cm、底径5.2cm。底部回転糸切り。色調は灰茶色。XIX期。

土製品

土塊（17、18） 17は縦4cm、横4.5cm、厚さ3.5cm。色調は淡橙色～茶灰色。18は縦7cm、横10.4cm、厚さ10.9cm。色調は淡橙色～茶灰色。

6SX025明灰色土出土遺物（Fig.47）

瓦

軒丸瓦（19） 瓦当部の破片。右回りの巴文。焼成・燻し、ともに良好。頭部は丸く大きい。尾は細長く伸びて、他の尾と近づいてそれぞれの尾で圈文を形作っている。

6SX025黒色土出土遺物（Fig.47）

須恵質土器

捏鉢（20） 口縁部破片。焼成・還元ともに不良。色調は淡灰白色、口縁部外面に濃灰褐色。東播系か。

6SX025暗灰色土出土遺物（Fig.47）

土師器

小皿a（21） 復元口径7.4cm、器高0.9cm、復元底径6cm。小破片。底部回転糸切りのち板状圧痕。色調は暗褐灰色。

坏a（22） 復元口径13.6cm、器高2.2cm、復元底径8.8cm。底部回転糸切りのち板状圧痕。焼成は良好。色調は明黄灰色。XVII期。

土師質土器

鍋（23） 復元口径43.2cm、器高16.8cm。焼成良好。色調は褐茶色だが、内面は黒褐色に変色している。外面は煤が付着している。1mm程度の白色粒子を多量に含む。内外面刷毛目調整。

第5遺構面 6SD058

6SX020黒灰色土

6SX025

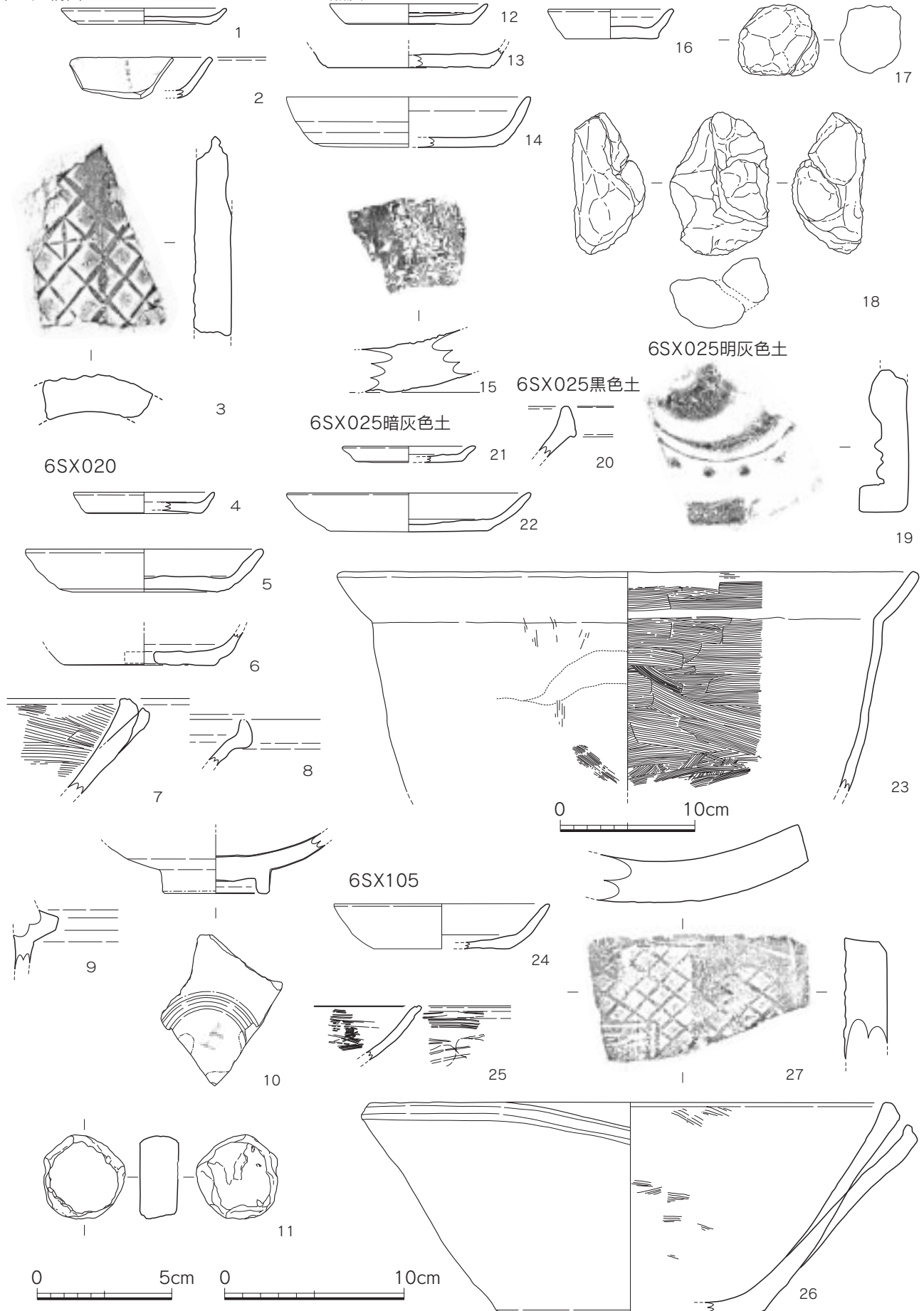


Fig.47 第5遺構面 6SD058、6SX020、020黒灰色土、025、025明灰色土、025黒色土、025暗灰色土、105出土遺物実測図 (1/2は11、1/4は23、その他は1/3)

6SX105出土遺物 (Fig.47)

土師器

坏a (24) 復元口径12cm、器高2.5cm、復元底径7.6cm。底部回転糸切り。焼成やや良好。色調は明黄灰色。XVIII期。

瓦器

椀 (25) 口縁部破片。胎土は灰白色で密。1mm程度の白色粒子をごくわずかにふくむ。口縁部端部内側に沈線が巡る。外面に指頭圧痕あり。内面に水平方向に1mm単位の細かい単位のミガキcをすきまがないほど密にほどこす。外面は内面に比べるとややミガキの単位が粗になり、器壁がみえる。畿内産瓦器椀で、楠葉型瓦器椀編年Ⅱ-1期のものと考えられる。(『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会 1980)

須恵質土器

捏鉢 (26) 復元口径29.2cm、器高11.7cm、復元底径14.6cm。焼成・還元ともに不良のため瓦質になっている。色調は灰白色。片口。表面が剥離した上に摩滅をうけているため、調整は不明。東播系か。

瓦

平瓦 (27) 破片。凸面に格子目、方形の二重界線。端部をヘラ切り調整する。

6SX109出土遺物 (Fig.48)

土師器

小皿a (1) 口径7.3cm、器高1.1cm、底径5.1cm。焼成は良好。色調は褐黄色。胎土に1mm以下の金色雲母を大量に含む。底部回転糸切り。XX期～。

坏a (2) 復元口径12.2cm、器高2.5cm、復元底径8.2cm。焼成はやや不良。色調は黄灰色。表面は摩滅しているため、調整は不明。

壺 (3) 復元口径5.8cm、器高5.1cm、底径4.5cm。轆轤水挽き成形。回転ナデ調整される。焼成は良好。胎土は密。色調は明橙褐色。

国産陶器

椀 (4) 復元口径11.3cm、器高6.2cm、高台径4.5cm。釉調は黄緑灰色。表面に微細な貫入が入る。胎土は明黄灰色を呈し、微細な砂粒を少量含む。ピンホールが多くやや粗い。高台部に一部、釜詰め時の砂粒が吸着している。

播鉢 (5) 口縁部破片。焼成・還元はともに良好で堅く焼き締まっている。色調は内面が明橙色で、外面が暗赤褐色。内面は横方向の刷毛目調整のあとに、4条を1単位にした播目が間隔をあけて施される。片口。備前系か。

肥前系磁器

猪口 (6) 復元口径7.1cm、器高5.5cm、復元高台径4.7cm。染付。釉調は内外ともに青みを帯びた透明釉を薄く施す。呉須は青みがある藍色、口縁部には濃茶褐色の鉄釉による口錆があり。外面は草花文。

椀 (7、8) 7は口径8.8cm、器高5cm、復元高台径4.4cm。染付。釉調は呉須で明るい紺色で化学顔料だと思われる。外面に達磨大師(?)と青海文を描く。8は復元口径10.4cm、器高5.95cm、復元高台径3.9cm。8は復元口径10.4cm、器高5.95cm、高台径3.9cm。見込み中央部に昆虫文。外面に草花文を描く。

国産磁器

皿 (9) 復元口径14.6cm、器高3.9cm、高台径4.55cm。見込み蛇ノ目釉剥ぎ。釉調は淡青灰色の不透明釉を薄く施釉する。胎土は精良で灰白色、微細なごく薄い黒色粒を多量に含む。見込みに「コシ」と墨書する。高台などの釉がかかっていない箇所は赤褐色。

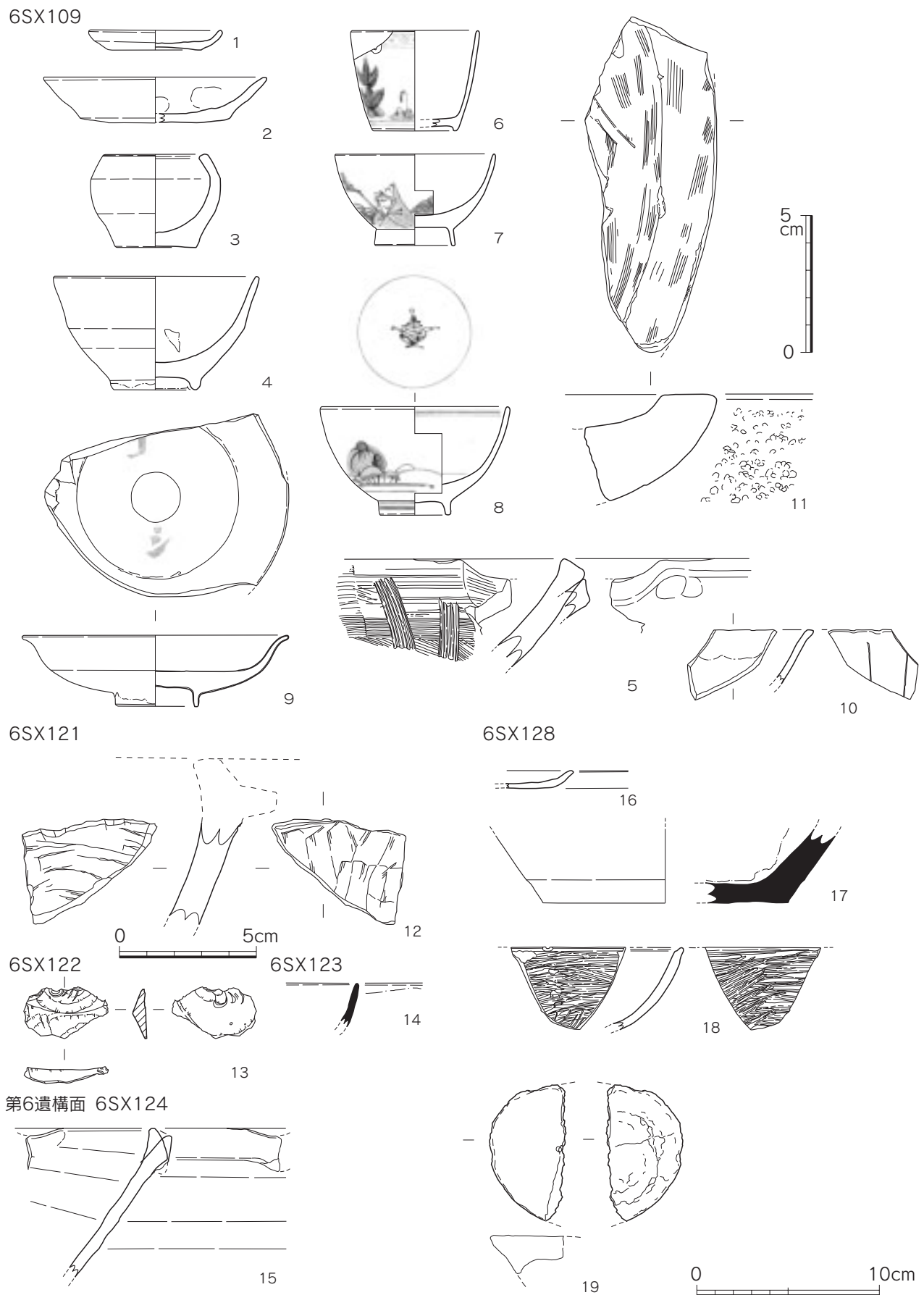
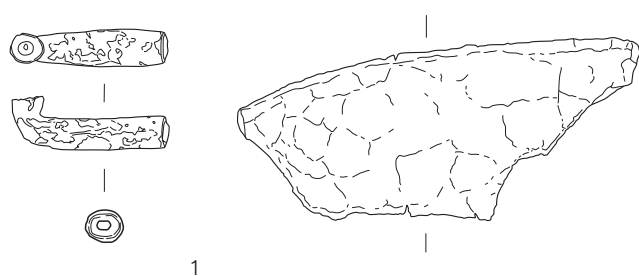
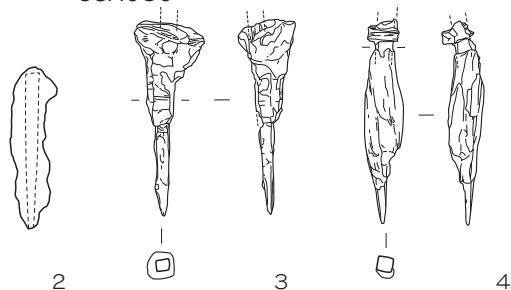


Fig.48 第5遺構面 6SX109、121、122、123、第6遺構面6SX124、128出土遺物実測図（1/2は11、13、その他は1/3）

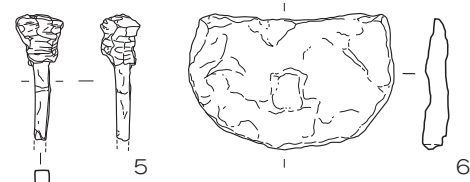
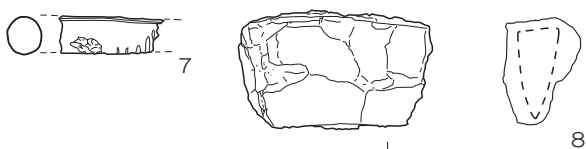
第2遺構面6SX040 6SX043



6SX050



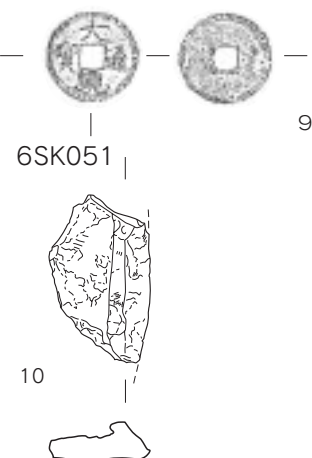
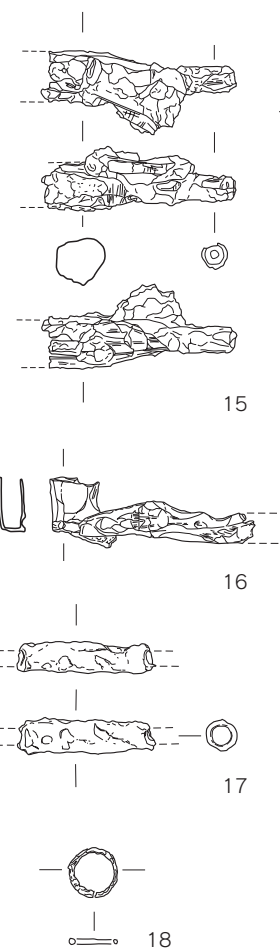
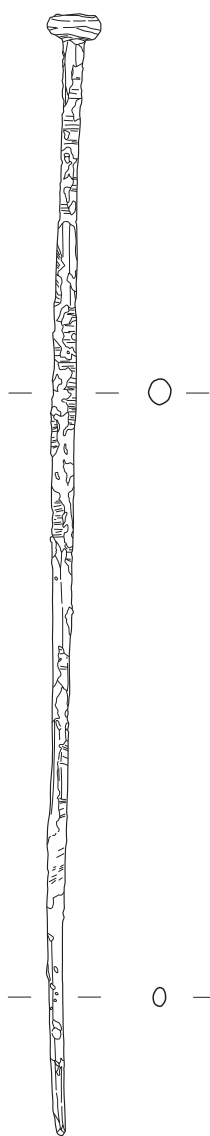
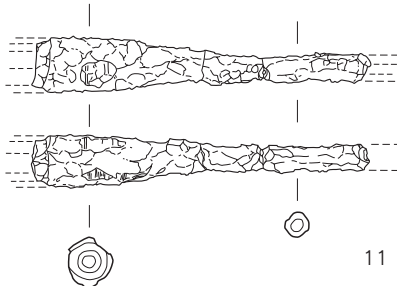
第3遺構面6SX075



第4遺構面6SX090明灰黄色土

6SX090茶灰色砂

第4遺構面6SE095



6SK051

0 10cm

Fig.49 出土金属製品実測図 (1/2)

龍泉窯系青磁

椀(10) 口縁部破片。上田D類。

石製品

石臼(11) 破片。残存高3.9cm。重量は245.5g。色調は淡緑灰色。外面に外面は細かく叩打で仕上げている。内面は平滑に仕上げている。石材は砂岩。

6SX121出土遺物 (Fig.48)

石製品

石鍋(12) 小破片。突帯下部の区分線がわずかに確認できる。滑石製。

6SX122出土遺物 (Fig.48)

石製品

剥片(13) 縦1.9cm、横3.1cm、厚さ0.5cm。安山岩。

6SX123出土遺物 (Fig.48)

須恵器

坏(14) 口縁部の小破片。焼成・還元ともに良好。1mm程度の白色粒子をわずかに含む。

第6遺構面出土遺物

6SX124出土遺物 (Fig.48)

須恵質土器

捏鉢(15) 口縁部破片。焼成・還元ともに不良。瓦質化している。色調は褐灰白色。片口。東播系。

6SX128出土遺物 (Fig.48)

土師器

小皿a(16) 器高0.95cm。口縁部の小破片。色調は灰黄色。摩耗に調整不明。

須恵器

壺(17) 底部破片。焼成・還元ともに良好。色調は青灰色。胎土は3mm以下の白色粒を多量に含む。

瓦器

椀(18) 口縁部破片。残存高4.5cm。焼成は良好。胎土は精良で灰白色を呈す。口縁部内側に沈線をもつ。内外面ともに細かいミガキcを密に施す。内定面のミガキが平行線としてわずかに確認できる。外面も口縁部からミガキcを全域に施し、斜行状に重なるように磨いている。器壁に3mm程度の気泡がはじけたものを多数確認できる。以上の特徴から畿内産瓦器椀で、楠葉型瓦器椀と推定できる。

金属製品

不明品(19) 縦4cm、横2.8cm、厚さ1.4cm。銅製。淡緑灰色の緑青錆に覆われる。平坦な面がある。

各遺構出土金属器

第2遺構面

6SX040出土遺物 (Fig.49)

金属製品

煙管(1) 雁首部の破片。縦1.5cm、横4.1cm火皿の直径7.5mm。羅字に続く小口には金属製の導管が残存する。

6SX043出土遺物 (Fig.49)

金属製品

鍬(2) 鍬先の一部。縦4.3cm、横10.7cm、厚さ1cm。

6SX050出土遺物 (Fig.49)

整理 番号	遺構名	土色	銭 名	銭径(A)mm/銭径(B)mm	内径(C)mm／同(D)mm		銭 厚(mm)	量 目(g)	編年	備 考	
27(1)	6SX090	茶灰色砂	—	—	—	—	—	6.2	—	4枚以上重なる。 緑青で覆われる。	
27(2)	6SX090	茶灰色砂	—	—	—	—	—	4.6	—	2枚以上重なる。 緑青で覆われる。	
27(3)	6SX090	茶灰色砂	—	—	—	—	—	8	—	ハの字に3枚以上重なる。 緑青で覆われる。	
27(4)	6SX090	茶灰色砂	—	—	—	—	—	4.7	—	緑青で覆われる。	
27(5)	6SX090	茶灰色砂	—	—	—	—	—	2.2	—	破片1/2。緑青で覆われる。	
28	6SX090	茶灰色砂	—	—	—	—	—	49.5	—	2枚以上重なる。緑青で覆われる。 石と吸着している。	
29	6SX090	茶灰色砂	—	—	—	—	—	42.6	—	11枚以上重なる。緑青で覆われる。	
30(1)	6SX090	茶灰色砂	寛永通寶	26.5	26.5	20.3	20.4	—	16.1	2・3期	4枚以上重なる。 全面を緑青と錆で覆われる。
30(2)	6SX090	茶灰色砂	—	—	—	—	—	9.6	—	3枚以上重なる。緑青で覆われる。	
31	6SX090	茶灰色砂	—	—	—	—	—	15.1	—	4枚以上重なる。緑青で覆われる。	
32	6SX090	茶灰色砂	—	—	—	—	—	11.6	—	3枚以上重なる。緑青で覆われる。	
33	6SX090	茶灰色砂	寛永□寶	23.35	—	19.8	—	1.15	1.2	2・3期	破片2/3。両面は緑青で不明。
34	6SX090	茶灰色砂	寛永通□	23.15	—	18.7	—	1.0～1.1	1	2・3期	破片2/3。両面は緑青で不明。
35	6SX090	茶灰色砂	寛永通寶	19.5	19.5	19.8	20	1.05～1.1	1.7	1期	
36	6SX090	茶灰色砂	寛永通寶	25.4	25.4	20.45	20	1.35～1.8	2.4	2期	背面「文」
37	6SX090	茶灰色砂	寛永通寶	—	—	—	—	—	40.7	2・3期	9枚以上固着
38	6SX090	茶灰色砂	寛永通寶	25.35	25.4	20	19.9	1.2～1.35	2	2期	背面「文」
39	6SX090	茶灰色砂	—	—	—	—	—	—	6.8	—	3枚以上重なっている。 緑青で覆われて不明。
40	6SX090	茶灰色砂	—	15.1	24.55	20.3	23	1.40～1.65	1.8	—	全面を緑青に覆われて不明。
41	6SX090	茶灰色砂	—	—	—	—	—	—	0.9	—	破片1/3。全面を緑青に覆われる。
42	6SX090	茶灰色砂	—	—	—	—	—	—	3	—	破片1/3。全面を緑青・砂粒に 覆われる。
44	6SX090	茶灰色砂	寛永通寶	24.38	24.8	19.5	19	1.1～1.35	2.1	3期	
45	6SX090	茶灰色砂	—	—	—	—	—	—	0.8	—	小片
48-1	6SX090	茶灰色砂	—	—	—	—	—	—	1.7	—	全面を緑青・砂粒に覆われる。
48-2	6SX090	茶灰色砂	□□通□	—	—	—	—	1.15	0.9	—	破片1/4
48-3	6SX090	茶灰色砂	—	—	—	—	—	—	1.2	—	小片
50	6SX090	茶灰色砂	寛永通寶	25.7	25.7	20.4	20	1.25～1.43	2.4	2期	背面「文」
51	6SX090	茶灰色砂	寛永通寶	24.3	24.45	19.4	19.28	—	5.3	1期	2枚重なっている
52	6SX090	茶灰色砂	寛永通寶	23.85	23.85	19	18.4	1.30～1.75	2.8	1期	
53	6SX090	茶灰色砂	寛永□寶	23.39	23.6	19	18.8	1.10～1.70	2.1	2・3期	背面は緑青で不明。
54-1	6SX090	茶灰色砂	寛永通寶	20.4	20.5	20.3	19.6	1.2～1.25	1.3	2・3期	背面は緑青で不明。
54-2	6SX090	茶灰色砂	□永通寶	—	—	—	—	1.20～1.30	1.2	1期か	破片1/2
56	6SX090	明灰黄色土	—	—	—	—	—	—	1.8	—	砂粒が吸着して不明。
60-1	6SX090	明灰黄色土	寛□通□	—	—	—	—	1.20～1.29	0.8	3期	破片1/2
60-2	6SX090	明灰黄色土	□永□寶	—	—	—	—	1.15～1.45	0.6	—	破片1/2

整理 番号	遺構名	土色	銭 名	銭径(A)mm/銭径(B)mm	内径(C)mm／同(D)mm	銭 厚(mm)	量 目(g)	編年	備 考		
8	6SX043		寛永通寶	25.3	20.3	20.3	20.7	1.15～1.45	2.9	2期	背面「文」
10	6SX043		元豐通寶	24.3	24.7	18.8	18.6	1.25～1.5	3.1	—	行書。
81	橙褐色土		—	—	—	—	—	—	1.7	—	割れて2点に。
85	橙褐色土		寛永通寶	—	—	—	—	—	1.2	3期	破片2/3。
86	橙褐色土		寛永通寶	23.6	23.9	18.9	18.6	1.3～1.55	1.8	3期	
87	橙褐色土		寛永通寶	23.95	22.9	18.5	18.5	1.5～1.6	1.8	3期	
88	橙褐色土		寛永通寶	22.27	22.6	18.35	17.7	1.38～1.4	2	3期	一回り小さい。
89	橙褐色土		—	—	—	—	—	—	1.1	—	外周が削られている。
90	橙褐色土		寛永通寶	24.6	24.6	18.85	19.7	1.5～1.7	3.4	1期	
92	橙褐色土		□永通寶	22.4	22.3	16.68	17.2	1.0～1.2	1.9	3期	
95	橙色土		寛永通寶	23.9	23.8	18.87	19.3	1.6～1.7	2.7	3期	
96	橙色土		寛永通寶	24.65	24.7	19.9	20	1.2～1.25	3.7	1期	
98	橙色土		—	—	—	—	—	—	2.3	—	全面を緑青に覆われて不明。
100	橙色土		—	—	—	—	—	—	1.3	—	破片。
101	橙色土		寛永通寶	23.4	23.5	18.85	18.85	1.0～1.2	2.2	3期	
102	橙色土		寛永通寶	23.2	23.6	19.3	18.6	1.1～1.2	1.9	3期	
103	橙色土		寛永通寶	25	24.5	19.6	19.8	1.5～1.55	6		2枚重なっている。
106	表土		寛永通寶	24	19.3	—	18.5	1.2～1.5	2.1	3期	
107	表土		寛□通□	—	—	—	—	1.2～1.35	1.1	—	
108	表土		寛永通寶	25.5	25.5	20.75	20.5	1.35～1.7	3.5	2期	背面「文」
109	表土		永樂通寶	24.7	24.5	21.35	20.6	1.45～1.55	4.1	—	
110	表土		寛永通寶	24.55	24.7	19.5	19.8	1.5～1.7	2.7	3期	
112	表土		寛永通寶	24	24.4	18.6	19.2	1.2～1.35	2.2	1期	

Tab.1 銭貨計測表

金属製品

鉄釘（3～5） 木質と錆が吸着しているが、それぞれ厚みが3～4mm幅の角型の鉄釘。

不明品（6） 縦3.6cm、横4.4cm、厚み0.6cm。

第3遺構面

6SX075 (Fig.49)

金属製品

煙管（7） 吸口部の破片。直径1cm。

刀子（8） 縦3.1cm、横5.1cm、厚み1.9cm。

第4遺構面

6SE095出土遺物 (Fig.49)

錢貨（9） 大観通寶。錢径（A）24.3mm、錢径（B）24.3mm、内径（C）20.9mm、内径（D）21.1mm。錢厚1.7mm、量目3.8g。

6SK051出土遺物 (Fig.49)

鋤先（10） 縦4.45cm、横2.6cm、厚み1cm。端部で折り返して強度を高めている。

6SX090明灰黄色土出土遺物 (Fig.49)

煙管（11～13） 11は吸口部。長さ8.9cm、小口径1cm。12は吸口部の破片。小口径約1.2cm。13は雁首部の破片。火皿部が半分欠損。

6SX090茶灰色砂出土遺物 (Fig.49)

火箸（14） 全長29.7cm。頂部の径1.85cm。

煙管（15～17） 15は吸口部の破片。16は雁首部の破片だが、火皿部がつぶれている。17は吸口部。

銅環（18） 1.3cmの円環。太さ1mm。

6SX090出土錢貨について

6SX090でまとまって寛永通寶が出土したので、計測表 (Tab.1) に記載した。（計測の仕方については、永井久美男編1994に従った。合わせて他から出土した錢貨類に関しても、本文中に触れられていないものはここに記載をした。）

6SX090の寛永通寶に関しては、編年の1～3期（永井久美男編1998）にわたって出土が認められており、時期的な偏りは認められない。河川によって流された資料が多いために、砂や石などが錢貨と吸着をしまい、情報が得られないものが多かった。河川内から多量に錢貨が出土した理由については、現時点では説明のためのデータが少ないため上手く説明できない。上流及びその周辺地での調査例の増加を待ちたい。

錢貨分類参考資料

永井久美男編『中世の出土錢―出土錢の調査と分類―』兵庫埋蔵錢調査会 1994

永井久美男編『近世の出土錢Ⅱ―分類図版篇―』兵庫埋蔵錢調査会 1998

土層出土遺物

表土出土遺物 (Fig.50)

国産磁器

猪口（1） 口径5.5cm、器高2.9cm、高台径2cm。白磁。見込み中央部に「質素」を黒灰色、見込みから体部内面中央に「支那事変記念」を赤色、内面口縁部に「在営記念」「谷」を金色でそれぞれ書いて

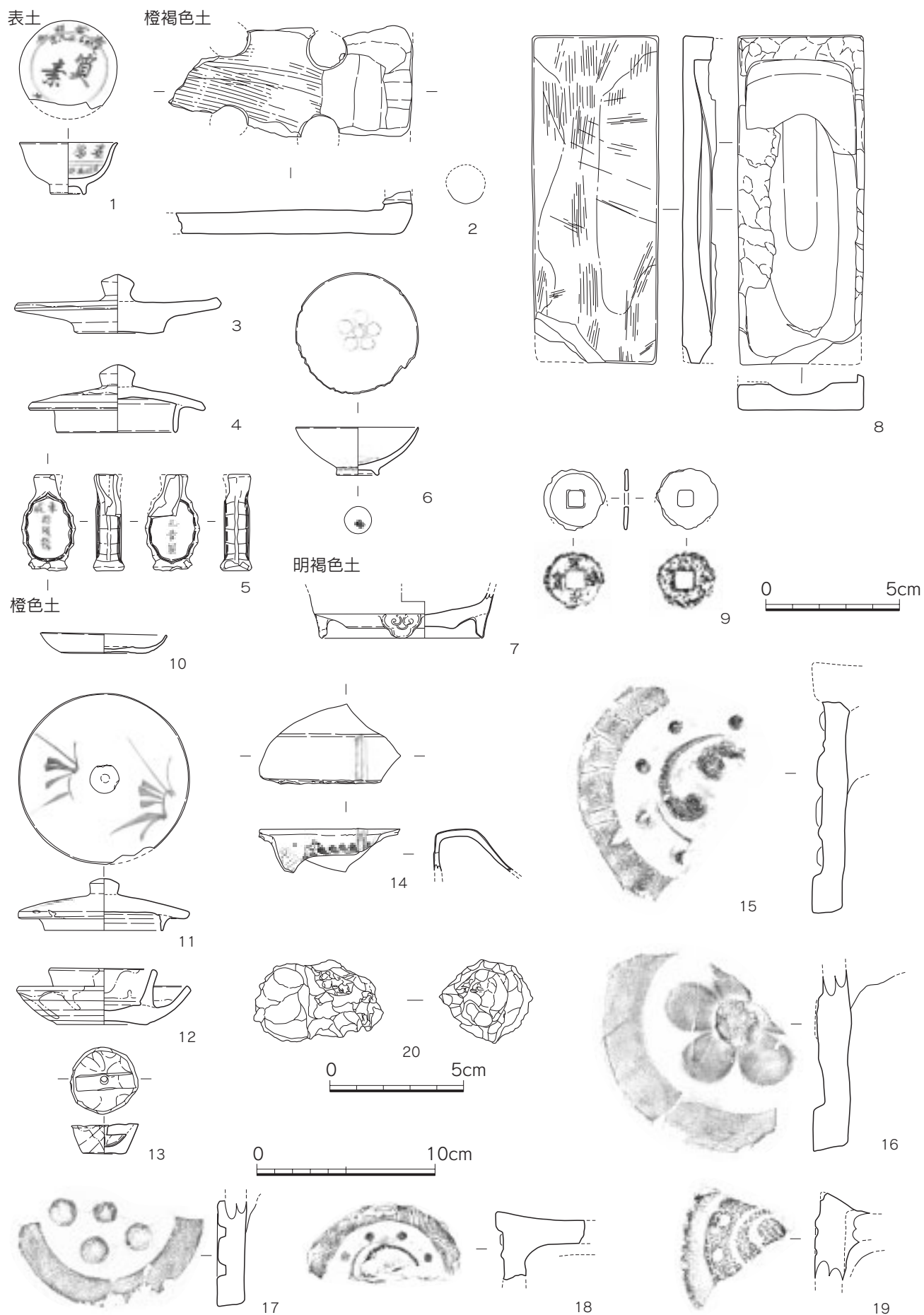


Fig.50 表土、橙褐色土、明褐色土、橙色土その1出土遺物実測図 (1/2は8、9、20、その他は1/3)

橙色土

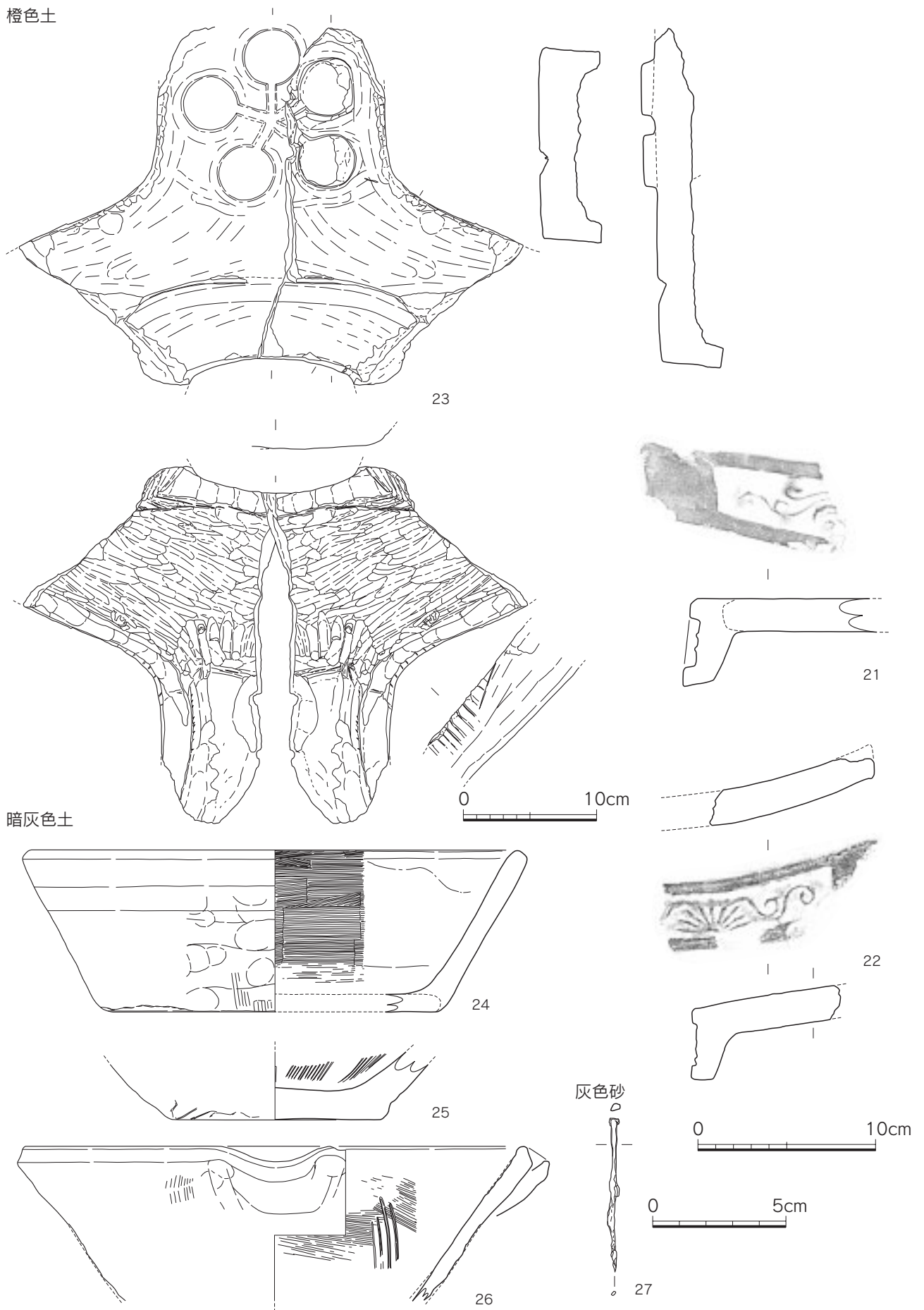


Fig.51 橙色土その2、暗灰色土、灰色砂出土遺物実測図（1/2は26、1/4は22、その他は1/3）

いる。これは、いわゆる日中戦争時に記念品として作られたものだろう。

橙褐色土出土遺物 (Fig.50)

七輪 (2) サンの破片。円形のサンではない長方形のものと思われる。厚みは、1.4cm。色調は内面が橙黄色、外面が灰黄色～暗灰黄色を呈す。胎土は3mm以下の白色砂粒と金色雲母を多く含む。

国産陶器

蓋 (3、4) 3はほぼ完形。釉調は外面の天井部とつまみに関しては、全体に白色化粧土を掛け、その上に透明釉を掛けている。色調は白黄色を呈す。外面天井部の一部には鉄釉が掛かり、褐色を呈す。胎土の色調は淡赤褐色を呈し、1mm以下の白色砂粒をと黒色粒を多く含む。焼成良好。唐津産か。水柱もしくは土瓶の蓋と考えられる。4は、口径11.6cm、器高3.3cm、底径3cm。釉調は天井部外面とつまみに鉄釉がかかり、暗赤灰色を呈す。釉が掛かっていない部位は、にぶい橙色に発色している。胎土は1mm以下の白色砂粒や、2mm以下の赤褐色粒、黒褐色粒を多く含む。水差・茶入の蓋と考えられる。

肥前系磁器

瓶 (5) 復元口径1.6cm、器高5.4cm、復元底径2.2cm、胴最大径3cm。釉調は表面に透明釉が薄く施釉されている。胎土は白色を呈し、0.5mm以下の黒褐色粒をわずかに含む。型押し成形で半分の型を作り中央で合わせて接合をしている。呉須で表裏に文字を描く。「車城 □□□□」「□□元堂製」薬瓶か。

椀 (6) 復元口径6.9cm、器高2.7cm、高台径2.4cm。染付色絵小皿。釉調は内外面に透明釉が薄く掛かっている。呉須は藍色を呈す。胎土は白色を呈し精良である。内面に金色で梅鉢文を描く。高台内に染付で銘款「渦福」の一種か。

石製品

硯 (8) 長さ12.3cm、幅4.5cm、高さ1.3cm。泥岩製。色調は淡緑灰色。硯海部には墨が残存している。硯を磨った部位と思われる中央には深く溝ができています。

金属製品

銭貨 (9) 寛永通寶。3期。

明褐色土出土遺物 (Fig.50)

国産青磁

香炉 (7) 残存高2.6cm、高台径9.2cm。高台部の破片。釉調は淡灰緑色の半透明ガラス質の釉を掛ける。

橙色土出土遺物 (Fig.50、51)

土師器

小皿a (10) 口径7.1cm、器高1.1cm、底径4.7cm。底部回転糸切り。色調は淡橙色～淡黄褐色。

国産陶器

蓋 (11) 口径6.6cm、器高2.9cm、受部径7.75cm。釉調は白濁釉を薄く施釉する。細かい貫入が全面に入る。天井部に鉄絵を描く。土瓶の蓋か。

灯明皿 (12、13) 12は口径内側6.1cm、口径外側9.8cm、器高3.2cm、底径5.1cm。釉調は透明釉を薄く施釉して所々に鉄釉がみられる。胎土は暗茶褐色を呈す。13は口径3.8cm、器高1.65cm、底径2.4cm。手づくねで成形されたあとに、中央に穿孔がされた棒状の橋をかけている。焼成は良好。胎土は0.5mm～1.5mm以下の白色砂粒・石英をとともに多量に含む。

陶枕 (14) 縦2.4cm、幅4.4cm、横7.9cmを測る破片。外面に文様を彫りだして、その部分に呉須にて絵付け後、透明なガラス質の釉を施す。正面の部位には施釉後に赤茶色の釉で施す。胎土は、淡灰白色で精良で密。0.5mm未満の微細な黒色粒子を雲母片をわずかに含む。

赤褐色土

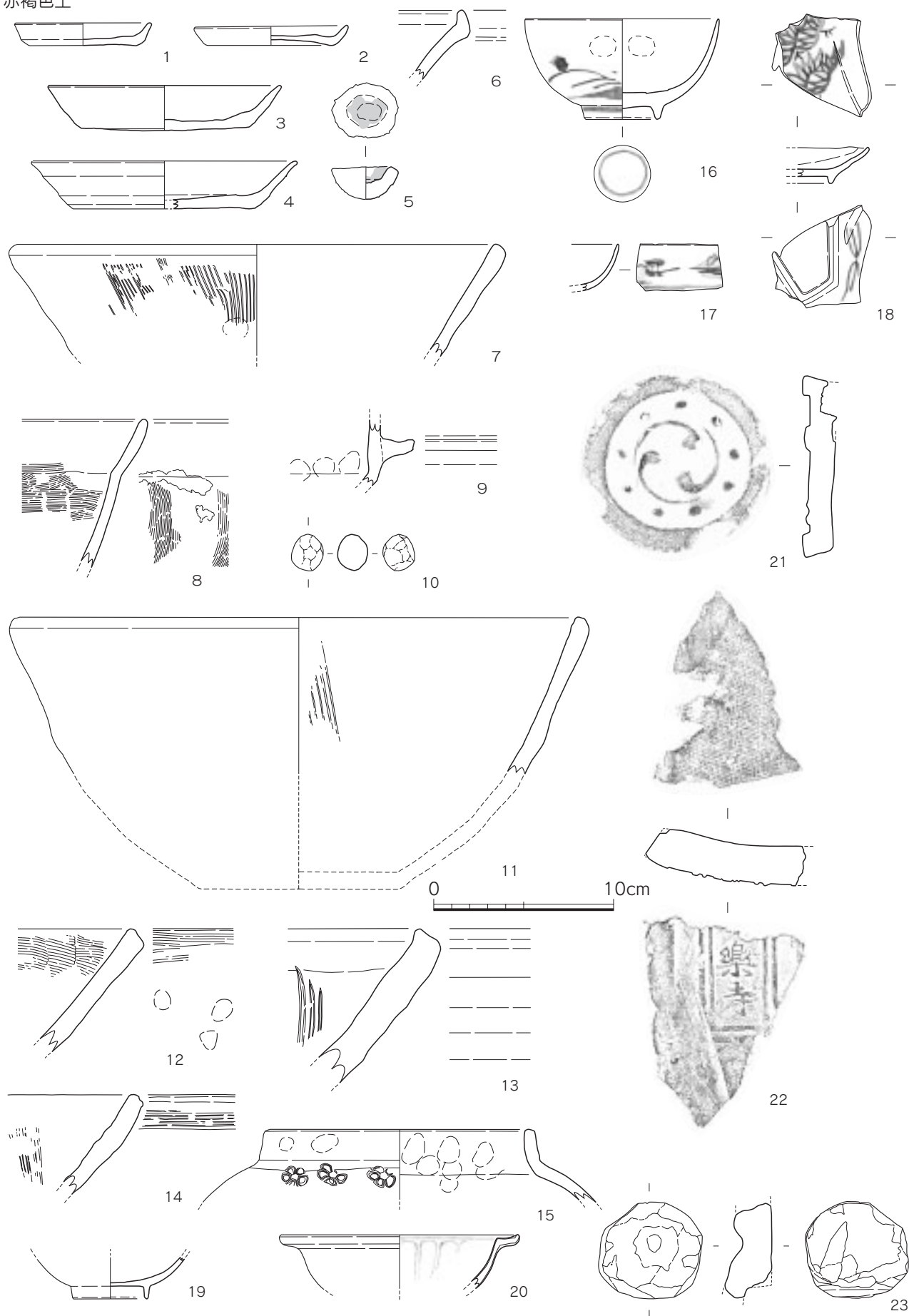


Fig.52 赤褐色土出土遺物実測図 (1/3)

瓦

軒丸瓦（15～19） 15は瓦当面の破片。縦11.8cm、横7.8cm、厚さ1.7cm。右回りの三巴文。16は瓦当面の破片。直径15.2cm、厚さ2cm。梅鉢文。17は瓦当面の破片。復元径11cm、厚さ1.5cm。梅鉢文。18は瓦当面の破片。縦4.8cm、横9cm、厚さ1.3cm。右回りの巴文。19は瓦当面の破片。右回りの巴文。

軒平瓦（21、22） 21は瓦当部破片。幅11.5cm、長さ10.8cm、高さ4.95cm、厚さ1.9cm。唐草文。22は縦8.4cm、横9.3cm、厚さ1.9cm。瓦当面の中心飾りには9弁の花文を据えて、左右に唐草文を配す。

鬼瓦（23） 縦25.8cm、横25cm、厚さ3.8cm。胎土は淡白灰色の0.5mm～1mm大の砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は表面は黒灰色。断面は淡白灰色を呈す。表面の一部は火を受けている。表はナデ調整で平滑に仕上げている。裏は削りの痕跡が明瞭に観察できる。足元部は破損して欠落している。上部の文様は残存部から復元すると、梅鉢文になると考えられる。

金属製品

鉄塊（20） 縦3.1cm、横4.9cm、厚さ3.5cm。鉄が残存している部位は茶第褐色を呈す。

暗灰色土出土遺物（Fig.51）

土師質土器

鉢（24） 復元口径28.4cm、器高9.1cm、復元底径18.7cm。内面は刷毛目調整、外面は指頭圧痕の後に、ナデ調整。底部から外面への立ち上がり部へラ状工具によりたてナデを施している。

擂鉢（25） 底部の破片。残存高3.8cm、底部径11.8cm。内面に擂目を施す。

瓦質土器

擂鉢（26） 復元口径29cm、残存高8.7cm。内面は刷毛目調整の後に、縦方向に擂目を施す。擂目は4条を一単位。片口部は押し出した後にナデ調整で仕上げている。

灰色砂出土遺物（Fig.51）

金属製品

釘（27） 長さ5.75cm、幅0.15cm、厚さ0.1cm。

赤褐色土出土遺物（Fig.52）

土師器

小皿a（1、2） 1は復元口径7.6cm、器高1.25cm、復元底径5.8cm。底部糸切り。2は口径8.6cm、器高1.1cm、底径7cm。回転糸切りの後に、板状圧痕。

杯a（3、4） 3は復元口径13cm、器高2.5cm、底径9.3cm。底部糸切りの後に板状圧痕。4は復元口径14.8cm、器高2.7cm、復元底径10.2cm。底部回転糸切りの後、板状圧痕。

とりべ（5） 口径3.7cm、器高1.8cm、底径1.3cm。色調は外面、灰黄褐色、内面は灰褐色を呈す。胎土は、2mm以下の白色砂粒を含む。4mm以下の長石、微細な金色雲母を含む。

須恵質土器

捏鉢（6） 口縁部破片。色調は灰白色。焼成・還元は良好。東播系。

土師質土器

鉢（7） 復元口径27.6cm、残存高6.2cm。口縁部の破片。内面は回転ナデ調整、外面は指頭圧痕の後は毛目調整。外面には全面に煤が付着している。色調は淡茶橙色～濃茶黒色。

鍋（8） 口縁部破片。内面横方向の刷毛目調整。外面は縦方向の刷毛目調整。外面には全体に煤が付着している。色調は内面、灰褐色、外面は黒色を呈す。胎土は1mm以下の白色砂粒・金色雲母を少量含む。

羽釜（9） 鰐部の破片。鰐を貼り付けた後にヨコナデを施す。

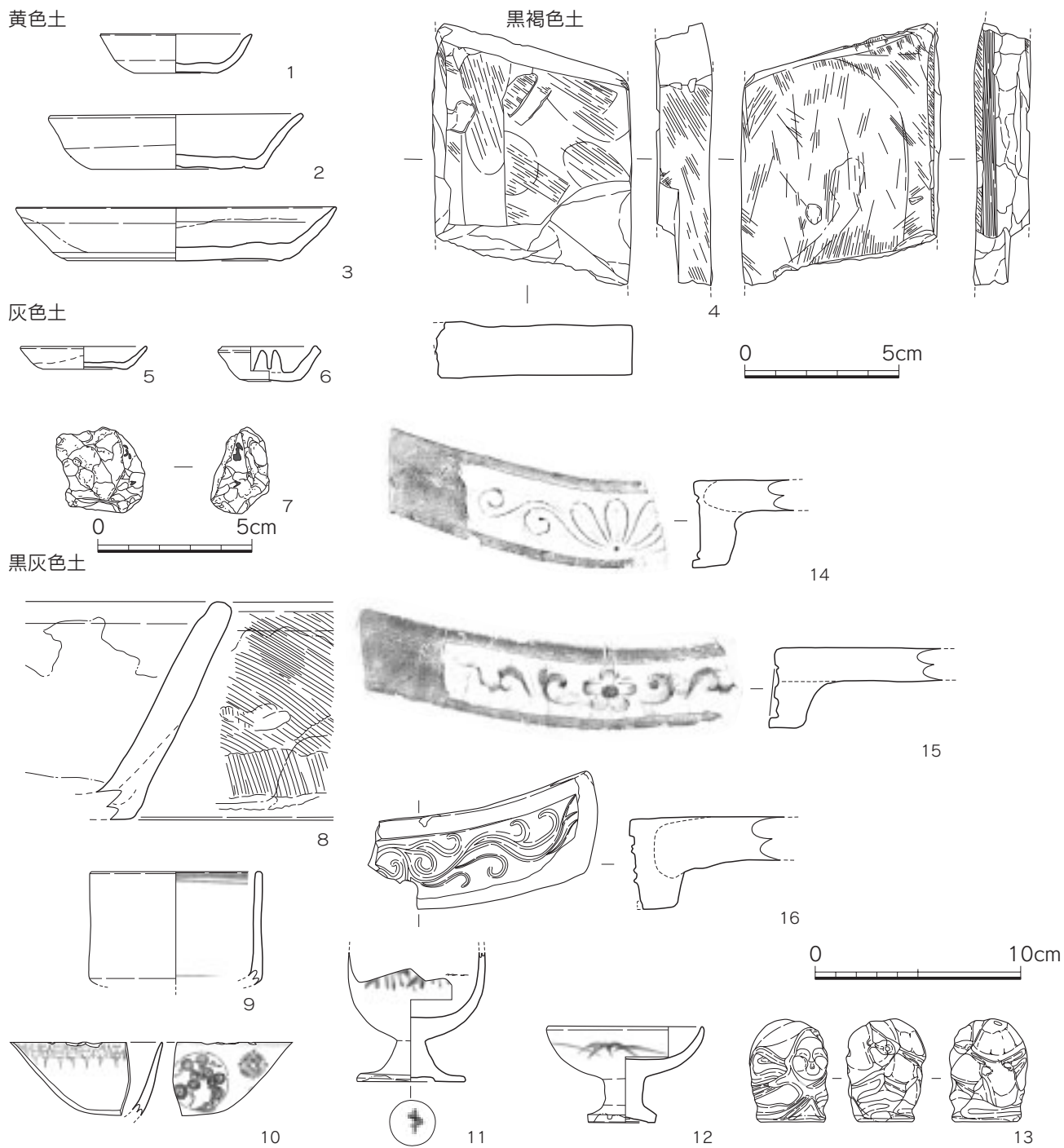


Fig.53 黄色土、灰色土、黒褐色土、黒灰色土その1出土遺物実測図（1/2は4、7、その他は1/3）

土玉（10） 長さ2cm、幅1.7cm、厚さ1.7cm。色調は明黄橙色。胎土は0.5mm以下の白色砂粒を含む。

瓦質土器

鉢（11） 復元口径32.2cm、残存高8.7cm。口縁部の破片。色調は淡灰色～暗灰白色。内面刷毛目調整。外面は不明瞭。胎土は密で1mm以下の白色砂粒、黒色粒子、雲母片を微量に含む。

擂鉢（12～14） 12は内面はよこ方向の刷毛目調整。外面は指頭圧痕の後にナデ調整。口縁端部は横方向のナデ調整で仕上げる。13は内面に横ナデ調整後に縦方向に擂目を入れる。色調は内面灰色、外面は黒灰色。胎土は粗で、3mm以下の白色砂粒砂粒を多量に含む。14は内面に擂目がわずかに残る。色調は灰色～黒灰色。表面が剥離しており、調整は不明確。

壺（15） 復元口径15cm、残存高4cm。口縁部の破片。焼成は良好。燻しが不完全で還元炎焼成になり、色調は灰白色を呈す。口縁部と体部の境に五弁花文のスタンプを列状に施す。

肥前系磁器

椀（16、17） 染付椀。復元口径10.8cm、器高5.6cm、高台径4cm。外面に呉須で山水文を絵付けする。18は、口縁部の破片。外面に呉須で山水文、圈文を絵付けする。

皿（18） 染付角皿の破片。器高2cm。糸切り細工成形。内面に笹葉文、外目に唐草文を絵付けする。

国産磁器

椀（19） 白磁椀。残存高2.8cm、高台径4cm。釉調、透明な釉を薄く施釉している。胎土は白色で、0.5mm以下の黒色粒をわずかに含む。

龍泉窯系青磁

坏（20） 復元口径13.4cm、残存高3cm。坏Ⅲ-3b。

瓦

軒丸瓦（21） 瓦当面の破片。左回りの三巴文。巴文の尾は細く長いが他の文に接してはいない。珠文は9個。色調は灰色。胎土は1mm以下の白色砂粒を少量を含む。金色雲母を含む。

平瓦（22） 破片。凸面に長方形の二重界線に「□□楽寺」の銘がある。これは安楽寺だと考えられる。

瓦玉（23） 幅5.3cm、高さ2.3cm。丸瓦の玉縁部の破片を加工している。凹面で確認できる削り込み痕跡などは、二次的にこの物が使用されたことの証左となるだろう。

黄色土出土遺物（Fig.53）

土師器

小坏a（1） 1は復元口径7.4cm、器高1.9cm、底2cm。底部回転糸切りの後にナデ調整。

坏a（2、3） 2は口径12.4cm、器高2.7cm、底径8.4cm。底部回転糸切りの後に板状圧痕。色調は淡黄褐色。3は復元口径15.6cm、器高2.6cm、底径11.1cm。底部回転糸切り。

黒褐色土出土遺物（Fig.53）

石製品

砥石（4） 幅6.4cm、厚さ1.7～1.8cm、長さ8.5cm。石材は泥岩。3面に使用痕跡が残る。

灰色土出土遺物（Fig.53）

土師器

小皿a（5） 14は口径6.2cm、器高1.1cm、底径4cm。底部回転糸切り。色調は明黄橙色。外面の一部は淡青灰色変。胎土は5mm以下の白色砂粒を少量含む。金色雲母片を少量含む。

灯明皿（6） 15は口径5cm、器高1.7cm、底径3cm。内面中央部に高さ1.8cmの突起があり、それは灯明芯を挟めるように二股になっている。色調は黄橙色。

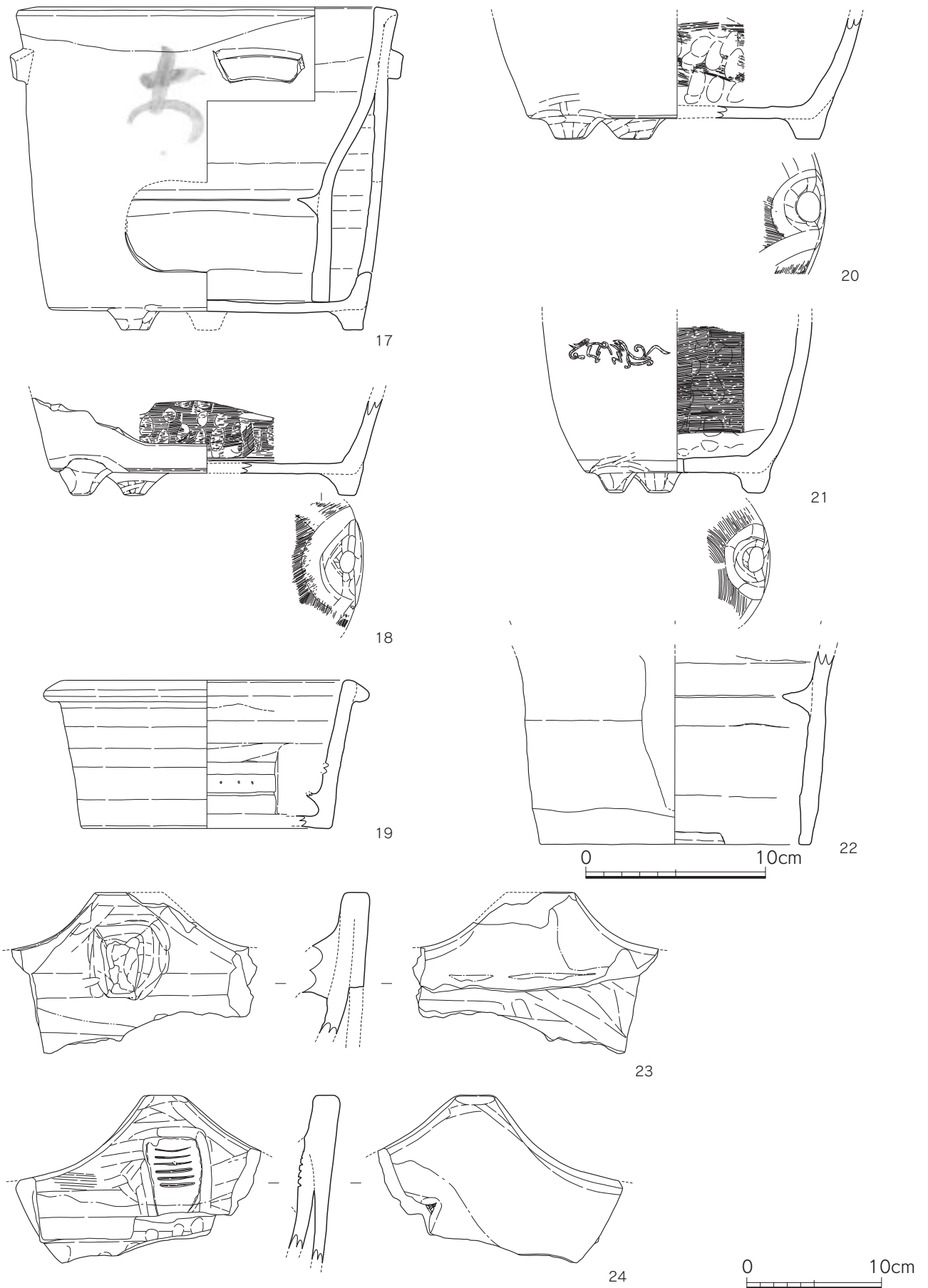


Fig.54 黒灰色土その2出土遺物実測図（1/3は19、22、その他は1/4）

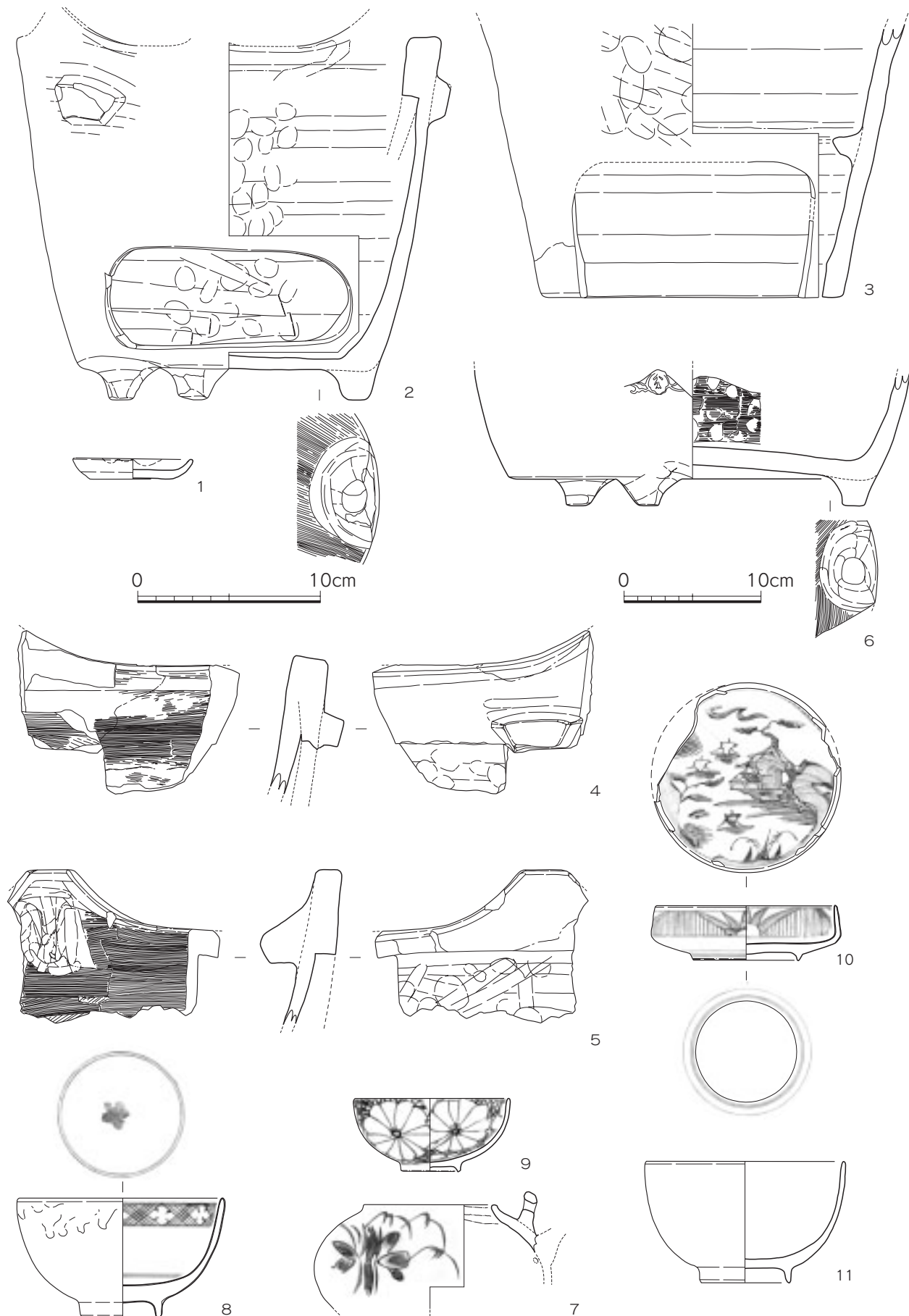


Fig.55 灰茶色砂その1出土遺物実測図（1/4は2,4～6、その他は1/3）

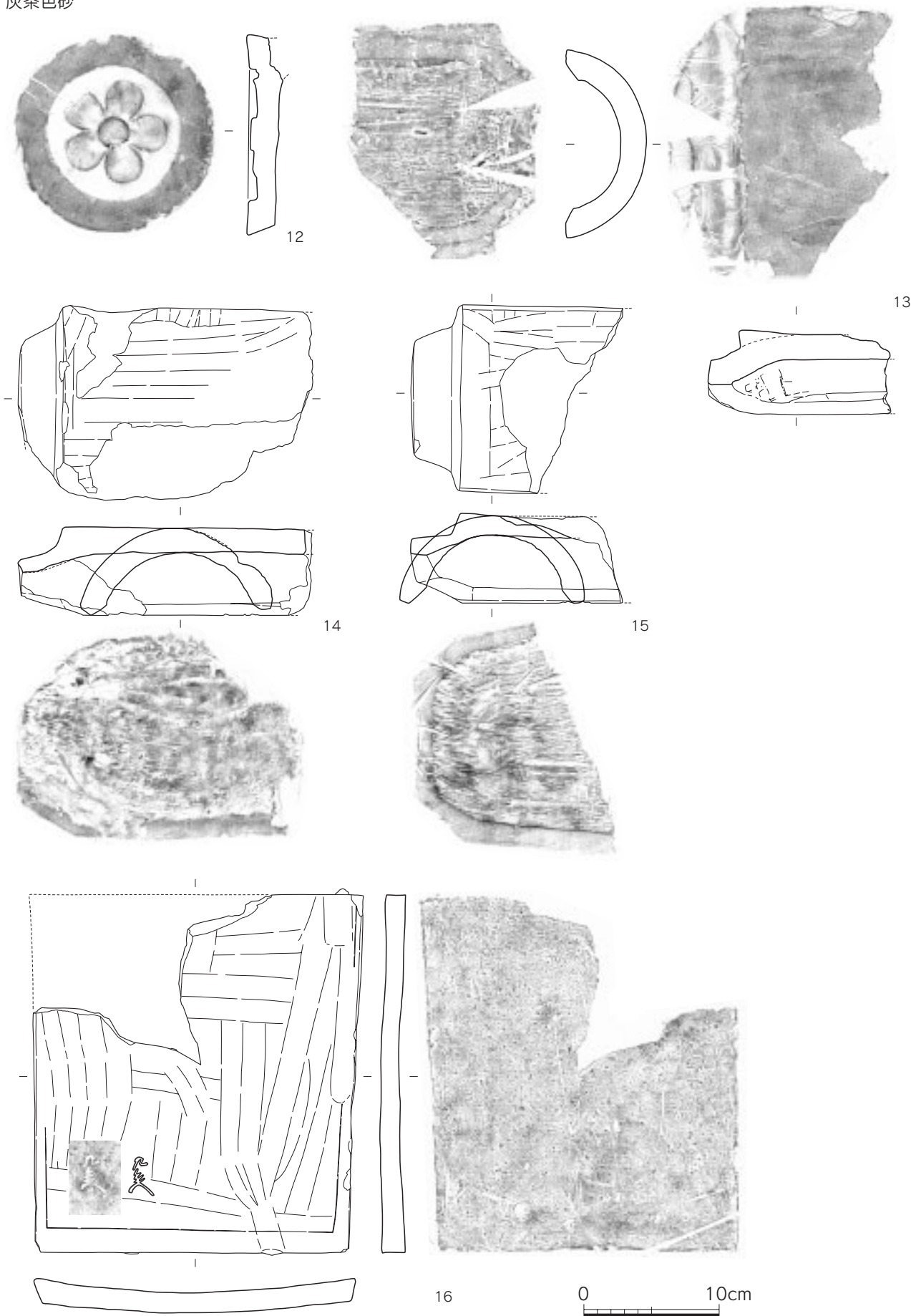
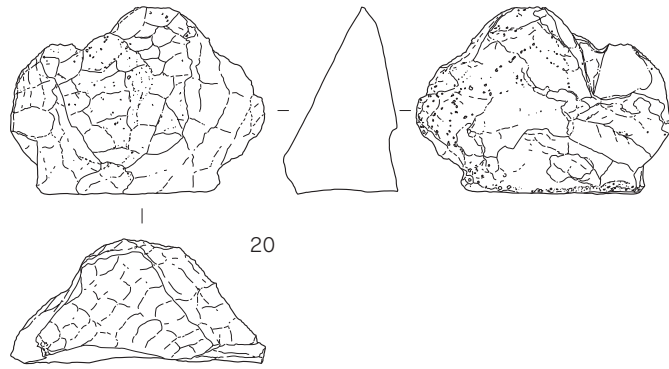


Fig.56 灰茶色砂その2出土遺物実測図 (1/4)

灰茶色砂



明灰黄色土

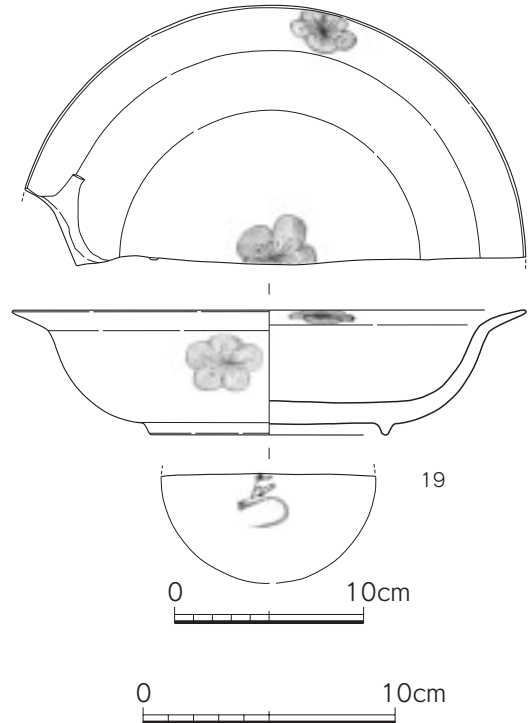
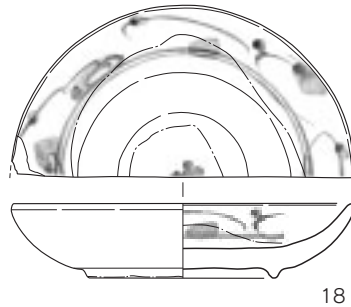
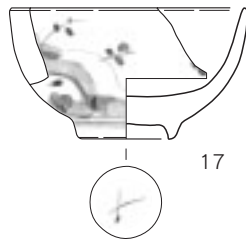


Fig.57 灰茶色砂その3、明灰黄色土出土遺物実測図（1/4は19、その他は1/3）

土製品

焼土塊（7） 長さ2.8cm、幅2.85cm、厚さ1.9cm。色調は明橙茶色～明灰茶色。炭素の小粒子が付着している。

黒灰色土出土遺物（Fig.53、54）

土師質土器

鉢（8） 破片。残存高10.6cm。内面調整は回転ナデ、外面調整は刷毛目調整、口縁部は回転ナデ調整で仕上げる。内外面に煤が付着している。

肥前系磁器

椀（9） 復元口径8.4cm、残存高5.5cm。底部欠損。青磁染付筒形椀。釉調は外面は淡緑色の青磁釉を厚く掛ける。内面は薄い同釉をかける。内面口縁部に呉須による圈線を巡らす。

椀（10） 口縁部破片。染付椀。残存高3.55cm。内外面に呉須で型紙摺りで文様を絵付けする。

仏飯具（11、12） 11・12ともに染付。11は口径7.65cm、器高6.7cm、脚部径3.35cm。外面に呉須で笹葉文を描く。12は残存高6.3cm、脚部径5.25cm。口縁部は欠損。外面に呉須で文様を描く。底部内面に墨書あり。

国産磁器

人形（13） 幅3.8cm、高さ5cm。白磁に色絵で彩色している。部分的に金色の痕跡が残る。釉調は白濁釉を厚く施釉する。艶人形の類か。

瓦

軒平瓦（14～16） 14は瓦当面の破片。文様は中心飾りに上向きの細線で三葉文、両側に唐草文を配す。15は瓦当面の破片。中心飾りは五弁花文。左右に唐草文を配す。16は瓦当面の破片。文様は唐草文。内外区は無文。凹面に布目痕がわずかに残る。凸面はヘラ削り。平安期のものか。

土師質土器

七輪（17～24） 17は完形に近い七輪である。この個体を観察すると炭受け部と外壁との関係が明瞭にわかる。復元口径28.3cm、器高24cm、底径23.5cm。口縁部は平坦。外面に扇状の細長い突帯を設ける。外面には墨書で文字が書かれる。「十口」か。18は底部破片。底径23.3cm。19は復元口径34.2cm、器高11cm、底径18.7cm。内面の底面近くに断面三角形を呈す突帯を巡らす。突帯の上部に刺突文が巡る。炭支え部のバリエーションの1つか。20は底部破片。復元底径22.3cm。21は七輪としたが、火鉢の可能性もある。底径13.8cm。外面にスタンプ文を巡らす。22は炭受け部の破片。23、24はともに口縁部の破片。台形状に突出する部位。内面に網受け用の三角の受け部を貼り付ける。その貼り付け部には事前に吸着を良くするために、横方向にヘラによる刻み目をいれることが8の例でわかる。

灰茶色砂出土遺物（Fig.55～57）

土師器

小皿a（1） 復元口径6.5cm、器高1.1cm、底径4.4cm。底部回転糸切り。色調は茶褐色。

土師質土器

七輪（2～5） 2は復元口径31cm、残存高27.2cm、高台径は22cm。手前側に灰の掻き出し口が大きく開いている。外面はミガキで平滑に仕上げているが、内面は指頭圧痕が目立つ。3は炭受け部。灰出しのための掻き出し口が大きく開いている。残存高15cm、底径16.6cm。色調は黄橙色。

瓦質土器

火鉢（6） 底部の破片。残存高9.95cm、高台径26.9cm。三脚がつく。外面にスタンプを施す。内面は指頭圧痕の後に刷毛目調整。焼成良好。燻しも良好。色調は黒灰色。

国産陶器

土瓶（7） 復元口径9.75cm、残存高7.6cm、胴径17.3cm。釉調は外面と内面口縁部まで白化粧し、透明釉を薄く施釉する。全体に細かい貫入が認められる。外面に鉄釉で草花文を描く。

肥前系磁器

椀（8、9） 8は復元口径8.6cm、器高4cm、高台径3.2cm。内外面に呉須により菊花文を散らしている。復元口径11.2cm、器高6.5cm、高台径4.4cm。青磁染付椀。内面は呉須により絵付けをする。見込み中央部にはコンニャク印判で五弁花文をおす。外面は厚い淡緑色の青磁釉を掛ける。

皿（10） 口径9.9cm、器高3cm、高台径5.8cm。内面に呉須によって山水文を描くが一部鉄釉を用いている。外面に縦線を呉須で描く。釉調はやや光沢がある透明釉が内外面に均一に掛かる。

国産磁器

椀（11） 口径11cm、器高6.65cm、高台径5cm。白磁椀。

瓦

軒丸瓦（12） 瓦当面の破片。梅鉢文。

丸瓦（13～15） 13は縦13.5cm、横13.8cm、厚さ1.9cm。14は縦21.8cm、幅14.1cm、高さ6.5cm。厚さ2cm。15は長さ15.65cm、幅13.8cm、高さ6.6cm、厚さ1.4cm。凸面に布目痕跡のあとに棒状の工具で掻き取りをしている。

平瓦（16） 幅24.5～23.2cm、長さ26.4cm、厚さ1.5～1.7cm。焼成良好。色調は暗灰色。凹面に外形に沿った長方形の段差が認められるが、これは型押しによる成形痕跡か。凹面にスタンプによって銘款を押している。

石製品

五輪塔（20） 縦9.8cm、横13.3cm、厚さ5.7cm。一部の破片。二面を平坦に仕上げている。石材は花

崗岩。火輪の可能性がある。

明灰黄色土出土遺物 (Fig.57)

肥前系磁器

碗 (17) 復元口径9.4cm、器高5.2cm、底径3.85cm。染付碗。外面に呉須で草花文を絵付けする。底部外面にも染付で絵付けする。釉調はやや緑味を帯びた透明釉を全面に施す。

皿 (18) 口径13.6cm、器高2.95cm、高台径7.6cm。内面見込みを蛇ノ目釉剥ぎする。見込み中央部には五弁花文を描く。内面に草花文を絵付けをする。

鉢 (19) 復元口径27.2cm、器高6.6cm、高台径12.7cm。内画面に呉須によって梅の花を描く。高台内面には「上衛門」と呉須で文字を描く。

(5) 小結

馬場遺跡第6次の調査の成果と今後の課題について簡潔に記載しておく。

まず、成果としては今まで知られていなかった太宰府天満宮の南側に広がる地域の歴史の変遷がおえたことがあげられる。東から西へ流れる藍染川によって土砂と礫が堆積する河川域を、中世段階（12世紀前半）に整地をして、北側から土地利用を始めた。（第6遺構面）この時期の出土遺物として、注目されるものは、畿内産の瓦器碗である。破片ではあるが、楠葉型瓦器碗でⅡ期に位置づけ可能とみられる破片が出土している。近年は中世土器の流通（分布）に関して、いろいろな視点から分析が進んでいる。そうしたなかで、破片ではあるが資料が提示できたことは意味あることだと思われる。

第4・5遺構面では北部の南北溝（6SD058）と南部で検出された6SE095の井戸が出土遺物から中世前半に位置づけられ土地利用が利用がわかる例である。他にも小穴が点在するが6SA015を除いてまとまって位置づけることが難しい。

江戸時代後期（18世紀後期）になってからは、調査区北側に石垣をつくって、土地の利用を区分するようになった。この石垣は、北側の空間に対して南側が崩れないようにした護岸的な性格が推測される。おそらくは、絵図などに残されている弁天池（浮殿の前にあったとされるもの）用のものだったと推定できる。

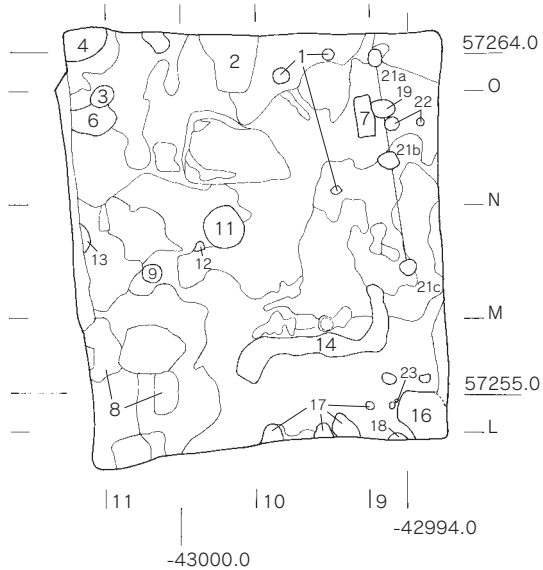
江戸時代後期から近代にかけては大きく2回にわたる整地を北部と南部ともに繰り返しており、この地の土地利用が活発に行われたことがわかる。近代から現在にかけても整地が行われており、土地の利用を差し示している。これらの整地からは大量の瓦・陶磁器が出土しており、近隣に瓦葺き屋根をもつ建物があったことが想定できる。

残された改題としては、藍染川の変遷、土地利用の面的把握、江戸時代後期の食器類組成の近隣との出土例の比較などがあげられるだろう。

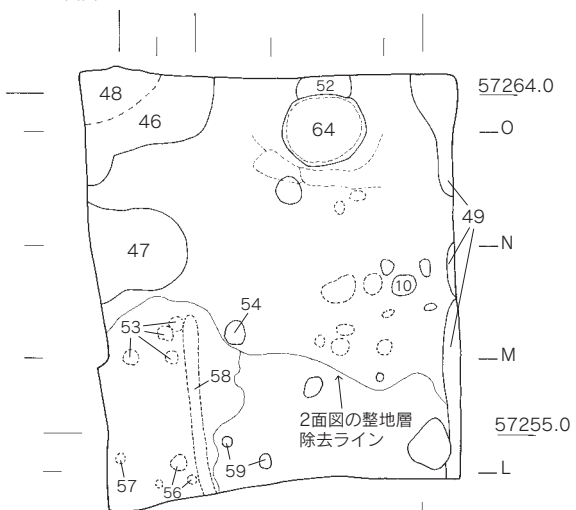
立地の面からも考えると、天満宮からの南下する道が、藍染川と交差するいわゆる「辻」に位置することなども、この地の土地利用を考える上での重要な要素になってくるとと思われる。

以上のように簡単ではあるが、馬場遺跡第6次調査の成果と課題をまとめて、今後の調査成果と地域への歴史資料として提示を行い、市民への還元をしていきたい。（高橋 学）

1面図



3面図



2面図

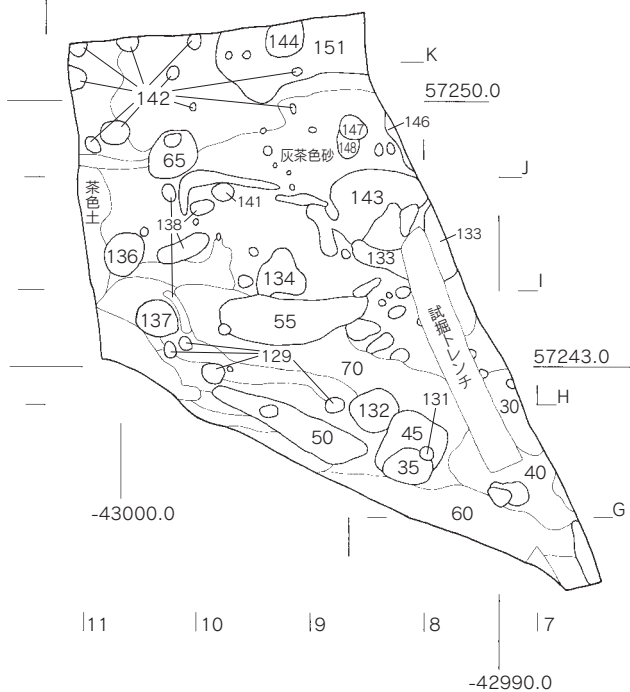
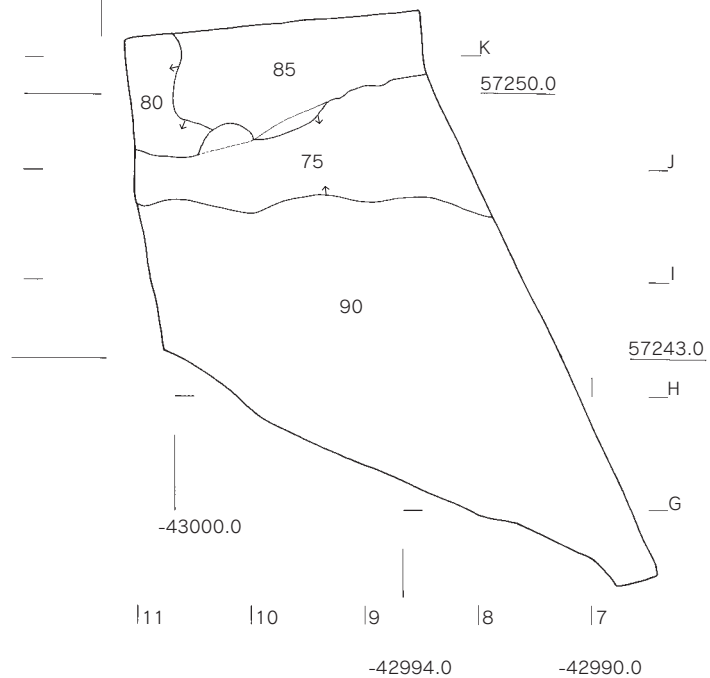
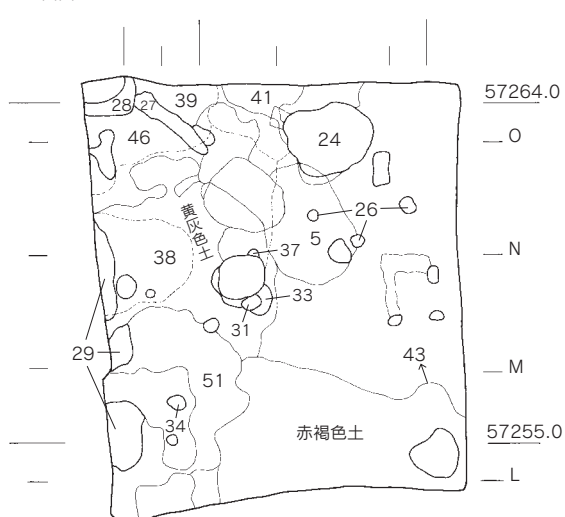
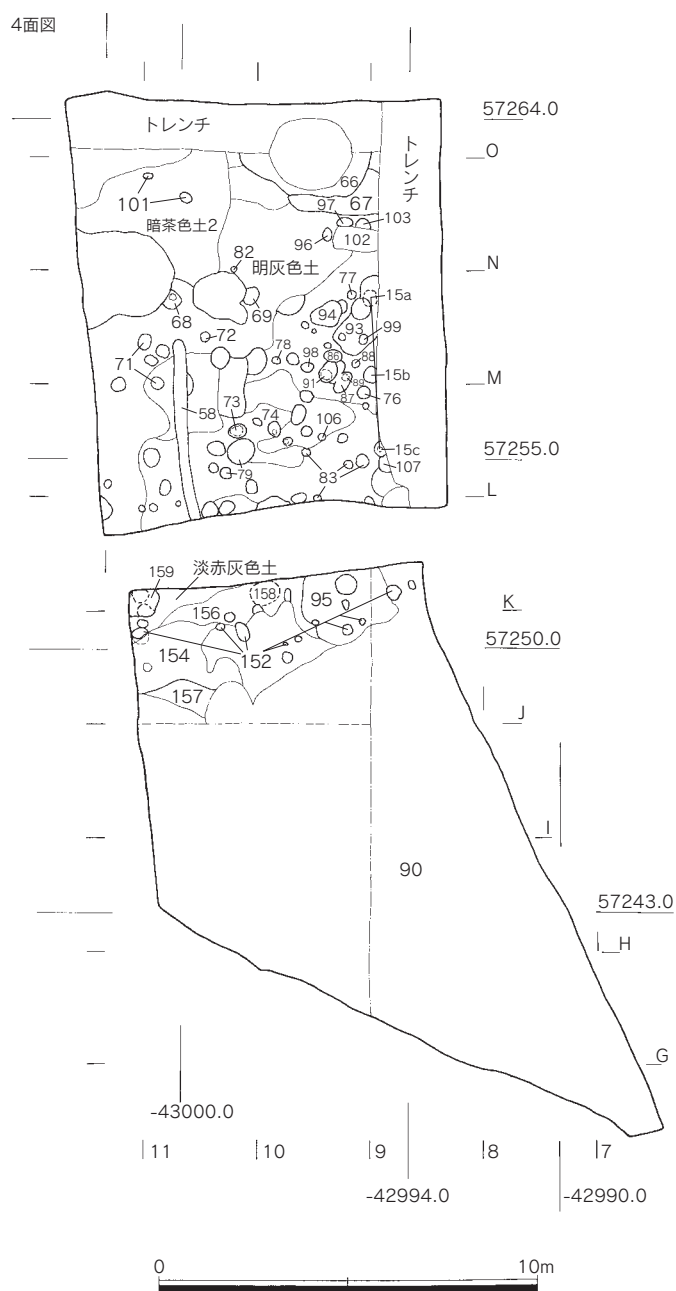
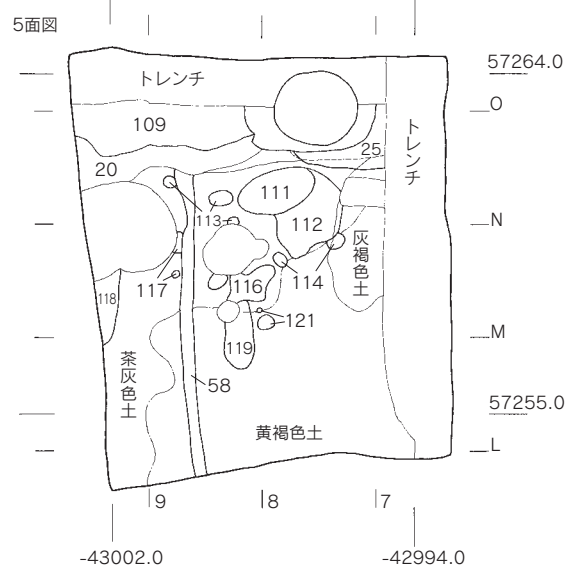


Fig.58 馬場遺跡第6次調査 遺構略測図第1・2・3遺構面 (1/200)

4面図



5面図



6面図

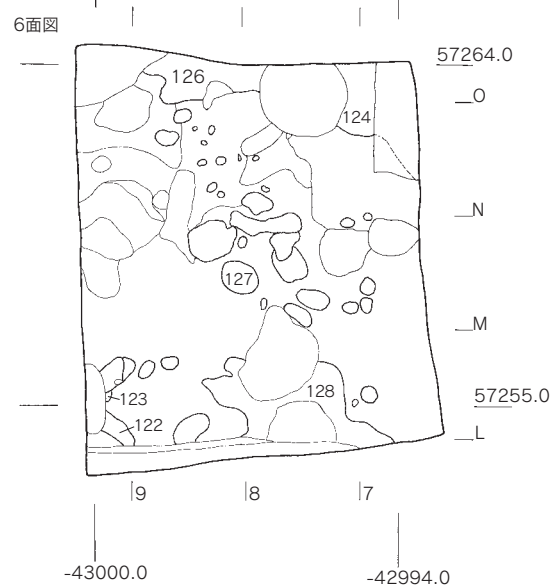


Fig.59 馬場遺跡第6次調査 遺構略測図第4・5・6遺構面 (1/200)

Tab.2 馬場遺跡第6次調査遺構番号台帳 (1)

※「遺構面」で未記入のものは、1 面目および遺構面不明のものを含む。

S-番号	遺構番号	種 別	備 考	埋土状況 (古→新)	遺構間切合 (古→新)	遺構面	時 期	地区番号
1	6SX001	小穴				1	近代?	O9
2	6SX002	窪み				1		O10
3	6SK003	土坑				1	現代	N11
4	6SK004	土坑orゴミ穴				1	近代	O11
5	6SX005		18c後半代の土器・瓦集中区			2	18c後半	N9
6	6SK006	土坑				1	現代?	O11
7	6SX007		長方形の土坑	炭層→灰色土→橙褐色土		1		N9
8	6SK008	土坑		暗灰色土 (炭混じり)		1	近世～	L10・11
9	6SX009	小穴		明灰色土		1		M10
10	6SB010	建物基礎+小穴				2		M8
11	6SE011	井戸	井戸コンクリ枠	橙色土→暗褐色土		1	近代	M10
12	6SX012	窪み	炭			1	近代?	M10
13	6SK013	土坑		暗灰色土		1	近世	M11
14	6SX014		建物基礎、浅い掘り込み内に20cm程の石を敷き詰める			1	現代	L9
15	6SA015	柵列	北からa.b.c...とつける			4	中世	M9
16	6SK016	土坑	現代のゴミ穴			1	現代	L8
17	6SX017	窪み	上層の残りか	明灰色土		1	近代～	L9
18	6SK018	土坑		黒色炭層		1	近代?	K8
19	6SK019	土坑		暗灰色土		1	近世	N8
20	6SX020		石組み遺構	明灰色土	S-20→S-109	5	鎌倉後～	
21	6SA021	柵列	灰色土とこぶしよりやや大きめの礫をつめる			1		O8他
22	6SX022	小穴群		暗灰色土		1	近世～	N22
23	6SX023	杭				1		L8
24	6SE024	井戸		明橙色土→埋土整地した土		2		N9他
25	6SX025	落ち	6SX020の続き		S-25→S-64	5		N9
26	6SX026	小穴群	整地前の窪みに整地土が残ったものか	明橙色土		2		N8他
27	6SX027	窪み	整地前の窪みに整地土が残ったものか	明橙色土		2		O10
28	6SK028	土坑		暗灰色土		2	近世後	O11
29	6SX029	窪み群		暗灰色土		2	18c後半	M11
30	6SX030	整地土		明灰色土 (炭化物混じり)	40→30	2	江戸末～	G7・H7
31	6SK031	窪み	盛土の残りか	橙色土	32→31	2	～近代?	M10
32	6SK032	土坑		灰黒色土	32→31→11	2	18c後半～	M10
33	6SX033		瓦囲みの遺構		33→32→31→11	2	18c後半～	M10
34	6SX034	窪み		暗灰色土		2	?	L10
35		土坑		淡赤色粘質土	35→131	2	江戸末～明治	G8
36	6SX036	窪み		明灰色土		2	?	M10
37	6SX037	小穴		黒色土		2	?	N10
38	6SX038	包含層	2面の遺構が切り込む	黄灰色土		2		M10他
39	6SX039	包含層		黒色土 (茶色ブロック混)		2		O10
40	6SX040	整地土		暗茶色土 (炭混じり)	40→60	2	江戸末～	G6～H7
41	6SX041	包含層	II面形成面	黄色土		2	18c代	O10
42	6SX042	包含層	II面形成面	黄色土		2		O10
43	6SX043	包含層	火災処理埋土?	黒灰色土 (炭混じり)		2	18c	M9他
44	6SX044		埋蔵こえだめ?	黒灰色土 (炭混じり)、 白灰色土→黒灰色土		3	18c	N9
45	6SK045	土坑	底面に粘土を貼っている>粘土30cm堆積	赤色粘質土	132→45	2	江戸末～	G7・8
46	6SX046	土坑×窪み	底に右列→S-48とした	黒色灰土 (炭混じり)		3	18c	O10
47	6SK047	土坑		明茶灰色土		3	18c	M11
48	6SX048		石囲い遺構			3	18c	O11
49	6SX049	窪み	S-43の埋土がたまっている。			3	18c	O8
50	6SX050	窪み	鉄釘出土	暗灰色粘質土		2		G8～H9
51	6SX051	包含層		灰色土		4		L10他
52	6SK052	土坑		黄色土 (茶色ブロック混入)		3		O9
53	6SX053	小穴群		灰色土		4	平安後～?	M11
54	6SX054	小穴		黒色土 (炭混じり)		4	平安後～?	M10
55	6SK055	土坑		灰色粘質土→暗茶灰色土	134→55	2	江戸後半～	H8
56	6SX056	小穴群		灰色土		4	平安後～	L10
57		小穴		黒色土		4	平安後～	L11
58	6SD058	溝		灰色土		2	平安後～	L10
59		小穴群		暗灰色土		4	平安後～	L10
60	6SX060	石垣	石垣の裏込め	茶灰色砂		2	近現代～	F6～
61		杭列	3面のトレンチ掘削中に検出。 全て腐って原形をとどめていない。			3		O10
62		杭	3面のトレンチ掘削中に検出。原形をとどめておらず図にポイントを落としたのみ。			3		O10
63	6SX063	落ち		黒砂色土		4		O8
64	6SE064	井戸	6SE024と同一遺構	灰茶色土		3	18c	N9
65		土坑				4		J10
66	6SX066	窪み		黒色土		4		N9
67	6SX067	窪み		灰色粘土		4		N9
68		柱穴	柱穴→S土色は同じ			4		M10
69		柱穴	柱穴→S土色は同じ			4		M10
70	6SX070	整地		黒灰色土	70→55	2	江戸末～明治	H7～H10
71		柱穴		黒灰色土		4		M11
72		柱穴		黒灰色土		4		M10
73		柱穴		黒灰色土		4		L10
74		柱穴		黒灰色土		4		L9
75	6SX075	たまり×整地		黒茶色土	90→75	3	18c後半～	I8～I10
76		柱穴	柱穴→S土色は同じ			4		L9
77		柱穴	柱穴→S土色は同じ			4		M9
78		柱穴	柱穴→S土色は同じ			4		M9

Tab.3 馬場遺跡第6次調査遺構番号台帳(2)

S-番号	遺構番号	種 別	備 考	埋土状況(古→新)	遺構間切合 (古→新)	遺構面	時 期	地区番号
79		窪み				4	中世	L10
80	6SX080	整地		茶赤土	85→80→75	3	中世	J10
81		小穴				4	中世	L10
82		小穴群				4	中世	N10・M9
83		小穴群				4	中世	L9
84		小穴				4		
85	6SX085	整地		灰褐色土	85→80	3		J8～K10
86		小穴				4		M9
87		小穴				4		M9
88		小穴				4		M9
89		小穴				4		M9
90	6SX090	河川堆積	河川堆積及び整地土	灰色砂→茶灰色砂→明灰黄色土	90→75	3	江戸後半～	G7～H10
91	6SX091	小穴				4	平安後	M9
92		小穴				4		M9
93		窪み				4		M9
94		窪み				4		M9
95	6SE095	井戸	I 面目からの掘り込み	青灰色土		4	中世	K9
96		小穴				4	中世?	N9
97		小穴				4	中世	N9
98		小穴				4	中世	M9
99		小穴				4		M9
100	6SX100	整地		褐灰色土 (灰黄色シルト混じり)		4	鎌倉～	J10
101		小穴群				4	中世	N10
102		土坑				4		N9
103		小穴				4		N9
104		窪み				4		M9
105	6SX105	河川堆積		白色砂(礫混じり)		5	鎌倉～	J10
106		小穴				4	中世末	L9
107		小穴				4	中世	L8
108		小穴				4		K9
109	6SX109	落ち				5	中世後	N10
110		欠番						—
111		窪み		暗灰色土		5	中世?	N9
112		窪み		明灰色土		5		N9
113		小穴群				5	中世	N10
114		小穴群		暗灰色土		5	中世	M9
115		欠番						—
116		窪み		暗灰色土		5	中世?	M10
117		小穴		黒色土		5	中世	M10
118		土坑		灰色土(炭混じり)		5	中世	M11
119		窪み				5	中世	M10
120		欠番						—
121	6SX121	小穴群				5	中世	M10
122	6SX122	自然流路		茶色砂		5		L11
123	6SX123	窪み		灰色土		5		L11
124	6SX124	落ち、包含層?		黒色土		6	12c～13c	O9
125		欠番						—
126	6SX126	落ち	6SX124の続きか			6		O10
127		窪み	炭化物が層をなしている。壁面が焼けている。自然に焼けたものか。無遺物	灰色土		6		M10
128	6SX128	自然流路		茶色砂→灰色土		6	12c～	L9
129	6SX129	小穴群		暗褐色土	50→129	2	江戸末～	H8～10
130		欠番						—
131		小穴、炭窪み		暗黒色土		2		G7
132	6SK132	土坑		茶褐色土	132→45	2		H8
133	6SX133	土坑×整地		黒茶色土		2	江戸末～明治	I7
134		窪み		灰白色土		2	～江戸末?	I9
135		欠番						—
136		土坑		茶灰色土		2		I11
137	6SK137	土坑		灰褐色土		2	～江戸末	H10
138		窪み		灰青色土		2		I11
139		小穴群		茶色土		2		H7
140		欠番						—
141	6SX141	小穴	石が充填してある。建物基礎か? 石組み遺構	茶色土		2	江戸末～明治	I9
142		小穴群		灰茶色土	151→142	2	江戸末～明治	J10
143	6SX143	窪み×整地		灰茶色土		2	江戸末～明治	I8
144		窪み	石が集中している。6SE095の石組の壊れたものか	茶色土		2		K9
145		欠番						—
146		土坑×整地		灰茶色土		2		J8
147		土坑		黒茶色土	148→147	2		J8
148		土坑		灰茶色土	148→147	2		J8
149		小穴		灰色土		2		J8
150		欠番						—
151	6SX151	整地×土坑	6SE095に伴う窪みか	暗茶色土	151→144	2	中世～	K9
152		小穴群		灰色土		4	中世～	J9～10
153		窪み		灰色粘		4	中世～	J9～10
154	6SX154	窪み		茶褐色土		4	中世～	J10
155		欠番						—
156	6SX156	整地		茶褐色土		4	13c～、中世～	J9～10
157	6SX157	整地		明褐色土		4	江戸後期～	J10
158		窪み		褐灰色土	158→156	4		K9
159		窪み	2面目小穴の残りか	灰茶色土		4		K11

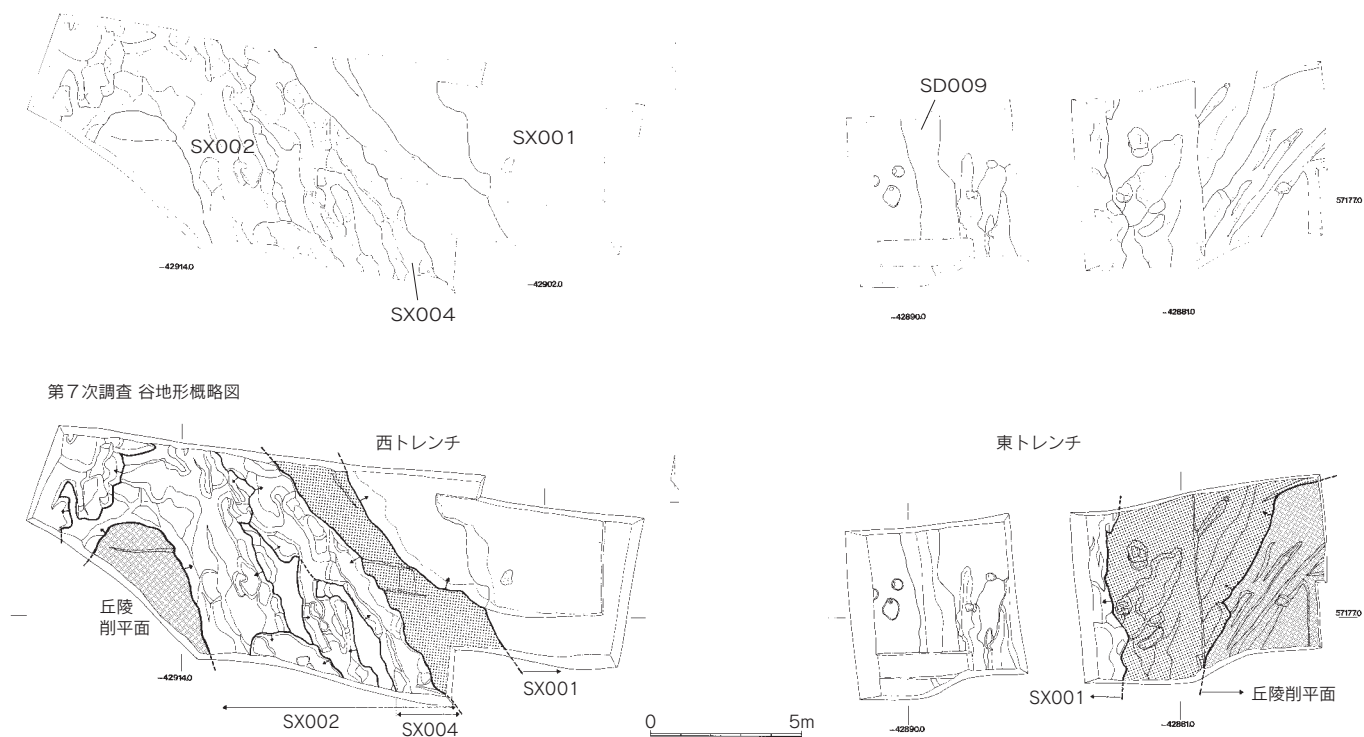


Fig.60 馬場遺跡第7次調査 遺構全体図および谷地形概略図 (1/250)

2. 馬場遺跡第7次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市宰府4丁目978-6、978-1で、遺跡名は「馬場」としているが、小字で言えば「太郎左近」にあたる。(Pla.5-2)

九州国立博物館に至る散策路の整備に伴って、現況道路が拡幅されるため、2003（平成15）年7月7日に試掘調査を行い、遺構の存在が確認されたため、2003（平成15）年8月1日から9月30日にかけて発掘調査を実施した。調査は宮崎亮一が担当した。開発対象面積は974.79m²であるが、調査地が深く、周囲の擁壁等の崩落防止と人為的な遺構が少なかったため、調査範囲はかなり狭くなり、調査面積は173m²である。

(2) 基本層位 (Fig.61)

現在調査地のある谷部には市道が通り抜け、周囲も住宅地になっているが、戦後すぐの旧地形をみると東に標高94m、西に標高84mの丘陵に挟まれる形で谷が形成され、調査地から南に約140m地点に標高

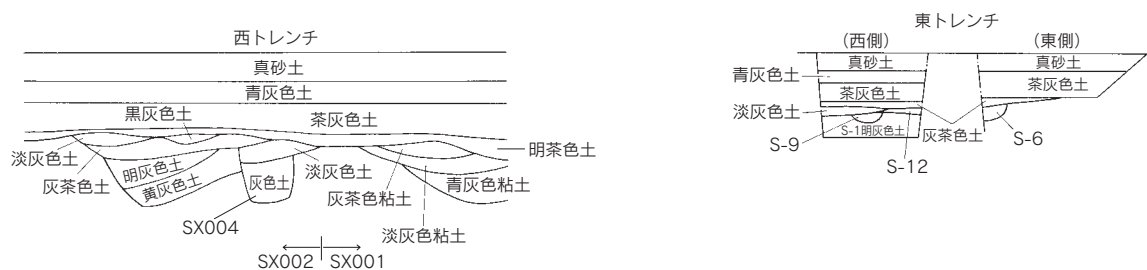


Fig.61 馬場遺跡第7次調査 土層模式図

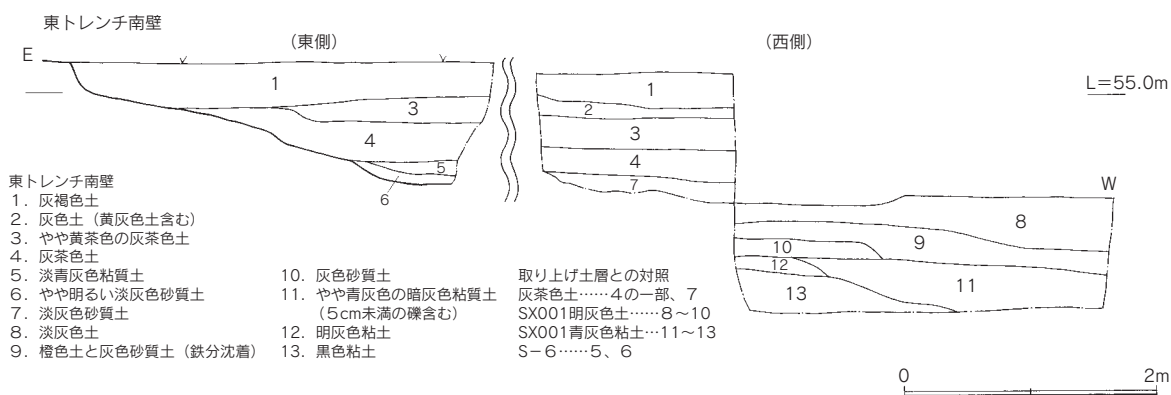
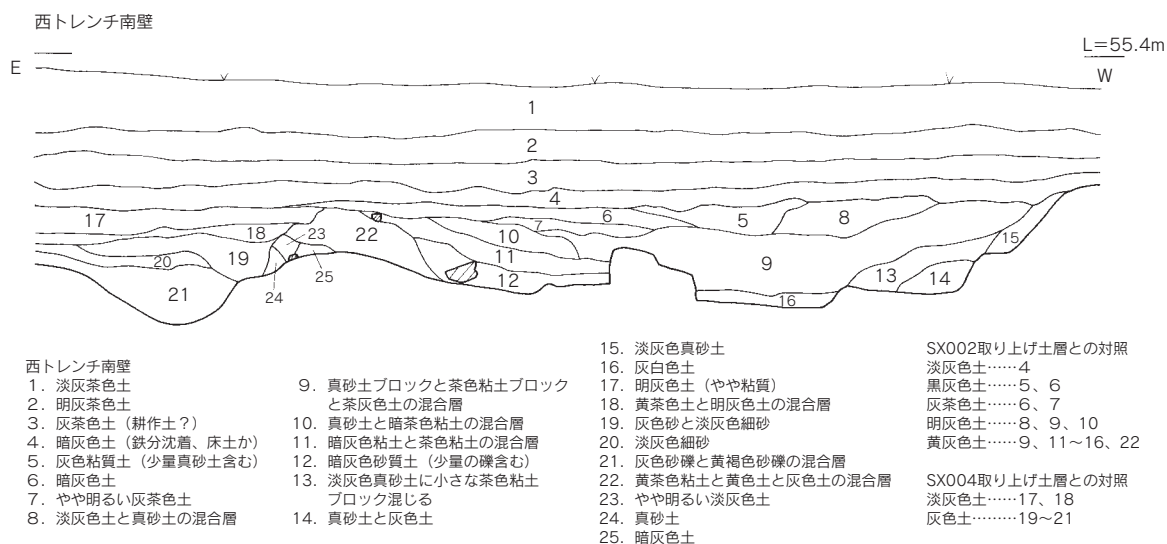
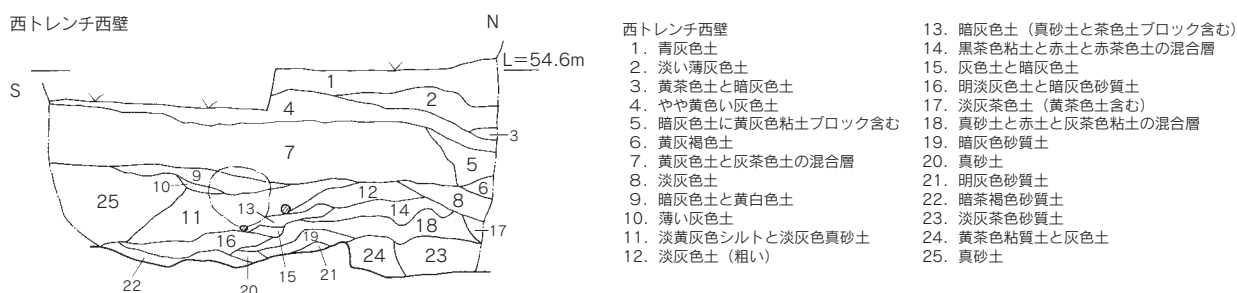
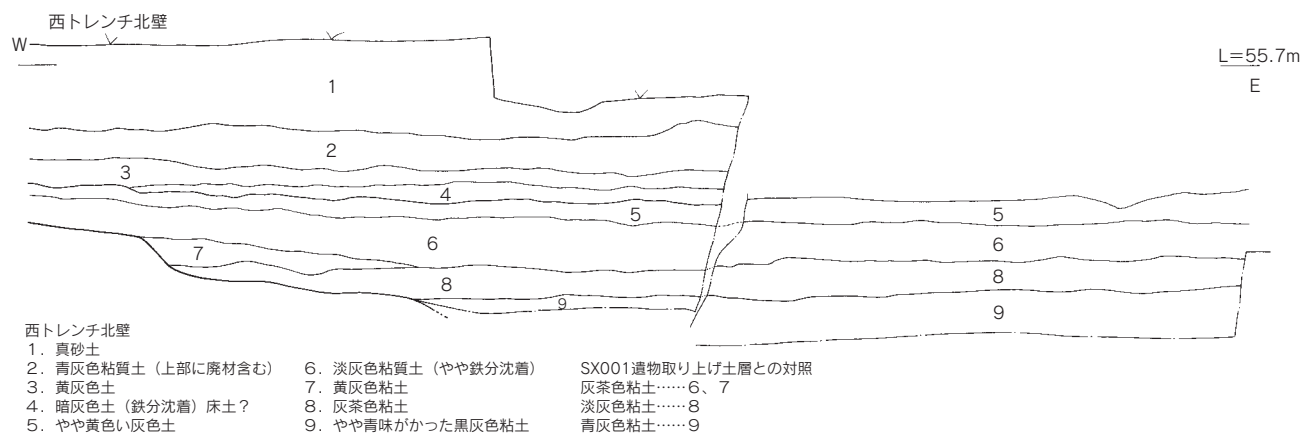


Fig.62 馬場遺跡第7次調査 土層実測図 (1/60)

約75mの谷の最高点があった。調査地とは約20mの標高差があり、その谷下半部には田畑が棚田状に並んでいた。しかし、昭和40年代から住宅化が進み、調査直前には田畑は殆どなく、調査地には4軒の住宅が建ち並んでいた。

調査地は最上面に住宅地造成のための真砂土が厚く覆い、その下に耕作土が見られる。よって、この調査地の遺構面は耕作土（床土を含む）を除去した面となり、現況から約1mの深さになる。

（３）検出遺構

谷地形

対象地全体が大きな谷の堆積地で、幅は約40mで南側から北側に向かって広がっている。東側は隣接する山につづく真砂土の地山が確認されているが、西側は一部中州状に立ち上がった部分は確認されたものの西側にも流路が確認された。これらから現在の地形と同じく山間に形成された谷とみられる。深さは西トレンチで確認した最も深いSX001で地表面から2.4mを測る。長年にわたって土砂流出を繰り返していたらしく、流路の底面に数条の流れが確認された。その数条の流れに若干の違いがあるため分けて報告する。

7SX001 (Fig.60)

幅は最大約26m、深さは西岸から約0.3mで東に向かって緩やかに深くなっている。埋土はやや青っぽい黒色粘土が厚く堆積している。遺物は僅かではあるが全体的に散見される。底面は薄い水色粘土で遺物が見られないため地山と判断される。その境界付近は僅かに砂質土になっている。堆積状況はSX002やSX004と全く異なり、真砂土は全く含んでなく、全体的に粘質土が厚く堆積している。S-6は東トレンチに東側の調査区際で確認された南北の溝で、溝の東側は真砂土の地山である。西側立ち上がりは未調査であるが、約2mを挟んで西側のトレンチでは厚い堆積層があり、下層に黒色粘土層が堆積しているため、S-6はSX001の立ち上がりと推測される。

7SX002 (Fig.60)

北西方向に流れた流路で、幅約4.5～6.5m、深いところで1mほどある。底面の真砂土にも北西方向への凹凸が見られる。その窪みに砂礫が堆積している。礫は花崗岩で風化や摩滅が殆どなく遠くより流された状況を示していない。

埋土は幾層に分かれるが、レンズ状に土層堆積が見られ、典型的な自然堆積の様相を示している。SX002の西岸には一見地山と見間違えそうな締まった真砂土が堆積している。真砂土に赤土などが混じるものの、真砂土以外に混入した土が少ないため、川のように流されて堆積したというより、流路に近い地山が崩落し堆積したような真砂土である。最も新しい層は、下層に0.1～0.15m程の礫が多く堆積し、それを含んだ上層は砂質である。

調査区西端では、真砂土に斜めに黄灰色土が入り込むという一見縦ずれ断層のような層位を確認できたが、これは真砂土の塊がずれ落ちたことによるものだろうと推測される。

7SX004 (Fig.60)

SX004はSX002の最終段階で北西方向に流れた流路で、幅約1～2m、深さ約0.5mを測る。埋土は0.03～0.1m程の黄褐色の花崗岩レキを含む砂礫層で、底面は凸凹である。礫が殆ど風化していないため、周辺から流され短期間で堆積したと考えられる。

溝

7SD009 (Fig.60)

幅0.8～1.5m、深さ0.1mを測る南北溝で、断面形状は緩いU字形を呈している。埋土は淡灰色土。谷地

形の堆積土の上層面にあり、耕作土層に近い。この検出面でピット状のものも確認しているが、安定面なのか耕作関係の掘り込みの名残りなのか不明瞭である。

(4) 出土遺物

流路出土遺物

7SX001灰茶色粘土出土遺物 (Fig.63)

土師器

小皿a (1) 復元口径7.0cm、器高1.2cm、復元底径6.1cm。その他調整は磨滅。

坏a (2、3) 2は復元口径15.0cm、器高3.0cm、復元底径10.8cm。その他調整は磨滅。3は復元底径7.1cm、底部切り離しは回転糸切りで板状圧痕が残る。

7SX001明灰色土出土遺物 (Fig.63)

土師器

小皿a (4) 底部切り離しは回転糸切り。内面の一部にヨコナデ残る。

中国陶器

耳壺 (5) V-2類。

7SX001青灰色粘土出土遺物 (Fig.63)

土師器

小皿a (6～8) 6は復元口径9.0cm、器高0.9cm、復元底径7.0cm。底部切り離しはヘラ切りか。内外面とも回転ナデ。7は復元口径10.2cm、器高1.25cm、復元底径8.1cm。底部切り離しはヘラ切り。8は器高1.1cm。内外面とも回転ナデ。

椀 (9) 復元口径16.2cm、内外面とも回転ナデ。

丸底坏 (10、11) 10は破片の下方に僅かに屈曲があり、その下はナデ、それ以外は回転ナデ。11は内面にミガキb、外面下方に指頭圧痕が僅かに残る。

瓦質土器

椀 (12) 内面はミガキc、外面下半は指頭圧痕が残る。

白磁

椀 (13) V-1a類。

7SX001出土遺物 (Fig.63)

調査時はS-6として取り上げたもので、検討したところSX001の一部と推測されるため、ここで報告する。

土師器

小皿a (14～16) 14は復元底径6.9cm。15・16は底部切り離しは糸切り。

小皿a×坏a (17) 復元底径7.8cm。底部切り離しは回転糸切り。内面底部はナデ、他は回転ナデ。

須恵質土器

鉢 (18) 口縁部を肥厚させていて、内外面とも回転ナデ。東播系。

青白磁

皿 (19) 細い高台を付け、体部は外側に広がった後、中位で屈曲している。釉は青白色の透明釉で貫入が入る。高台畳付と高台内面は露胎。復元高台径3.4cm。

7SX002黒灰色土出土遺物 (Fig.63)

土師器

7SX001灰茶色粘土

7SX001青灰色粘土

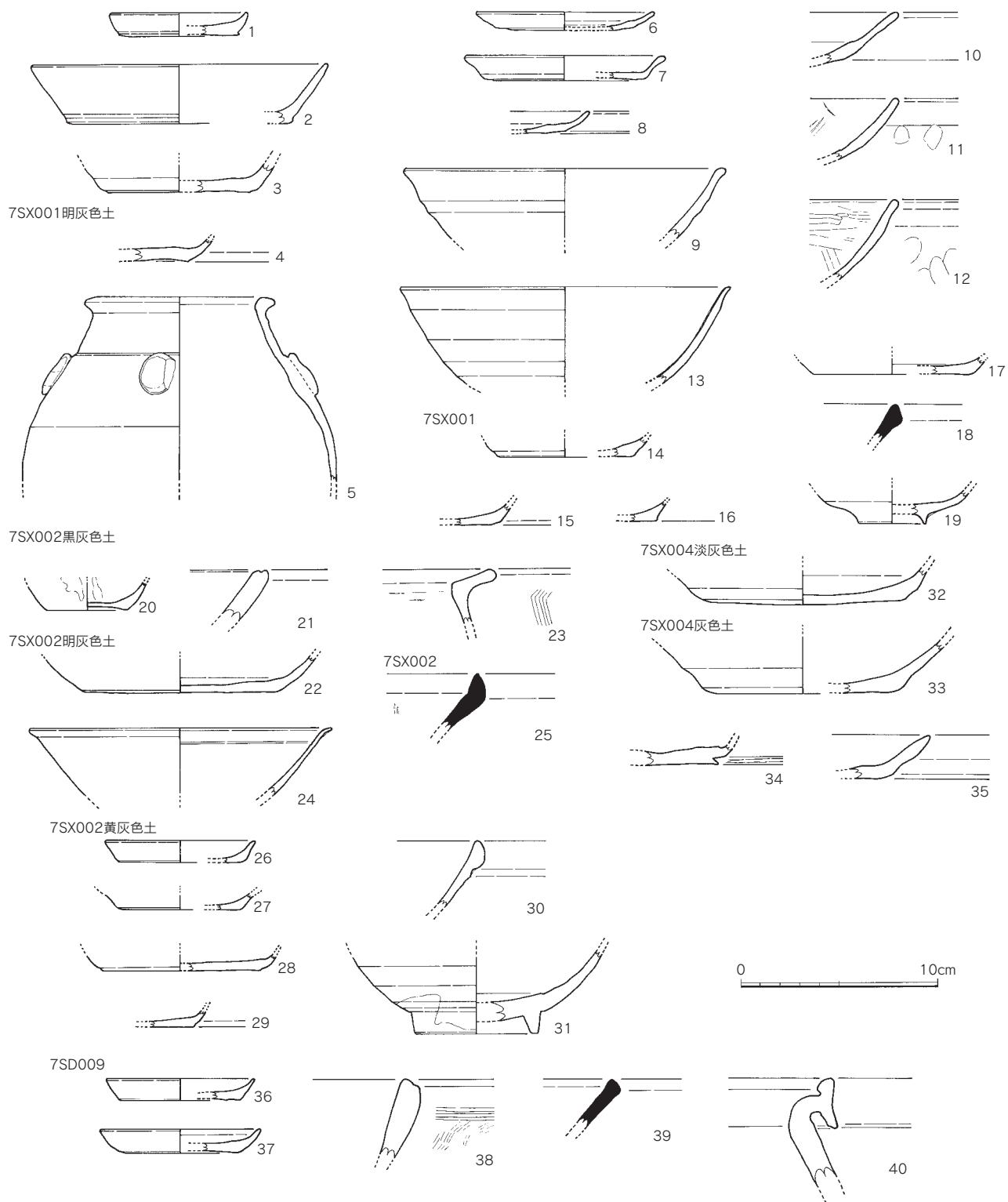


Fig.63 馬場遺跡第7次調査 遺構出土遺物実測図 (1/3)

小皿b (20) 底部切り離しは回転糸切り。その他は回転ナデ。内外面に油煙のようなものがみられる。
鍋×鉢 (21) 口縁端部には細い沈線が巡る。内面ナデ、外面ヨコナデ。

7SX002明灰色土出土遺物 (Fig.63)

土師器

坏a (22) 内面底部はナデ、外面底部には板状圧痕は残るが、切り離しは不明瞭。

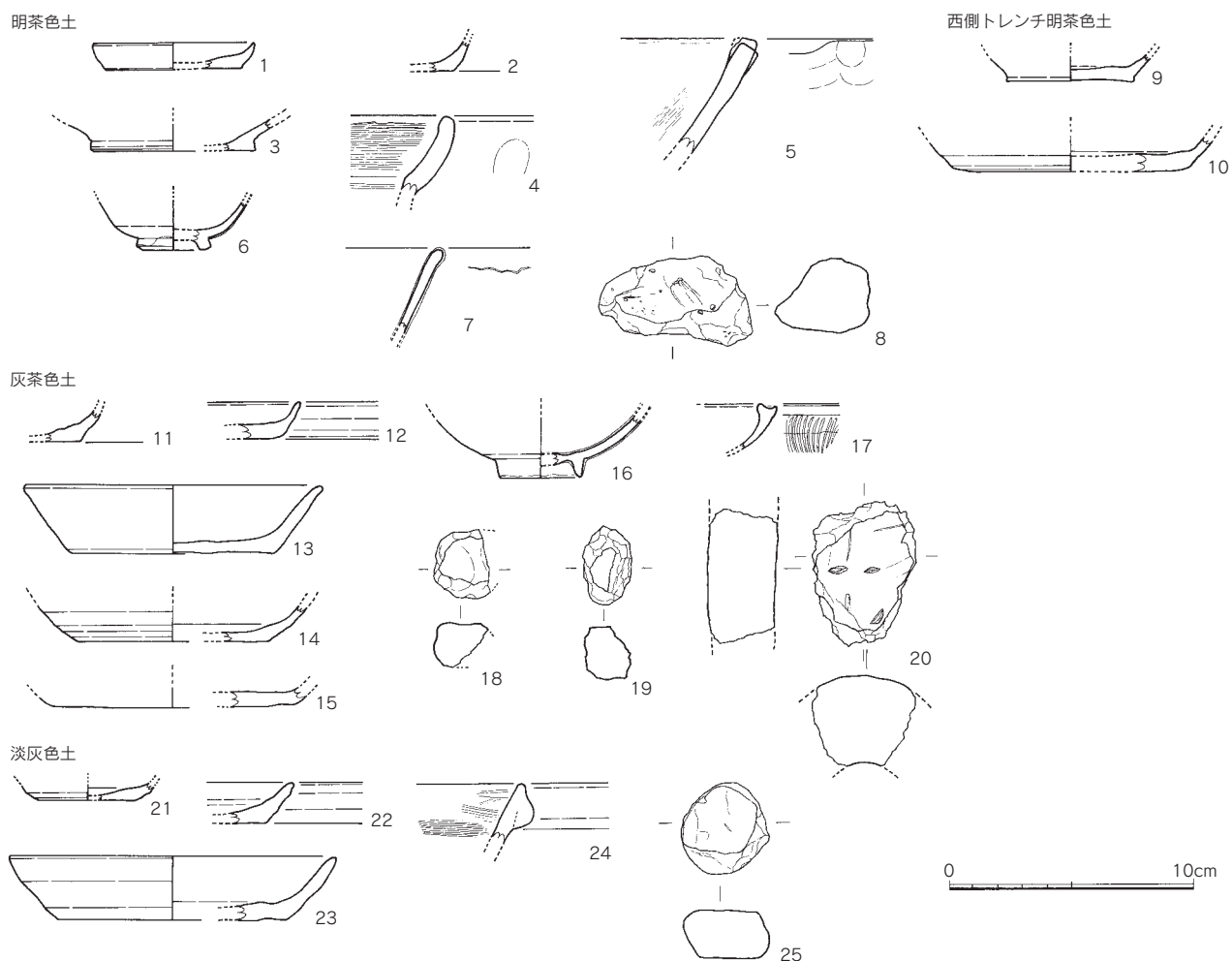


Fig.64 馬場遺跡第7次調査 土層出土遺物実測図 (1/3)

甕 (23) 外面タテハケ、内面横方向のヘラケズリ。

白磁

椀 (24) V-4×VIII-3類。

7SX002出土遺物 (Fig.63)

須恵質土器

鉢 (25) 口縁部を僅かに肥厚させる。内外面とも回転ナデで、内面に縦方向の摺り目のようなものが僅かに観察できる。東播系。

7SX002黄灰色土出土遺物 (Fig.63)

土師器

小皿a (26~29) 全体的に磨滅している。26は復元口径7.5cm、器高1.0cm、復元底径6.3cm。27は復元底径6.3cm。28は復元底径8.0cm、底部は回転糸切りか。29は底部切り離しは回転糸切り。

白磁

椀 (30、31) 30・31共にIV類。

7SX004淡灰色土出土遺物 (Fig.63)

土師器

坏a (32) 底部には板状圧痕が残るが切り離しは不明。内面底部は不定方向のナデ。復元底径10.2cm。

7SX004灰色土出土遺物 (Fig.63)

土師器

坏a (33～35) 33は内面が回転ナデとナデだが、磨きのようなものがみられる。外面回転ナデ。復元底径8.4cm。34は底部切り離しが回転糸切りで板状圧痕が残る。内外面とも回転ナデ。35は胎土が若干粗い。内外面回転ナデ。

溝

7SD009出土遺物 (Fig.63)

土師器

小皿a (36、37) 36は復元口径7.5cm、器高1.1cm、復元底径6.2cm。底部切り離しは回転糸切りか。37は復元口径8.1cm、器高1.2cm、復元底径6.1cm。底部切り離しは回転糸切り。

瓦質土器

鉢 (38) 口縁部の破片で、僅かに肥厚している。外面には僅かにハケ目が残る。色調は淡灰色を呈する。

須恵質土器

鉢 (39) 内外面とも回転ナデで、内面には使用によるための磨滅がみられる。

国産陶器

甕 (40) 口縁部を丸く屈曲させ、折り曲げた常滑産とみられる破片である。

その他の土層

明茶色土出土遺物 (Fig.64)

土師器

小皿a (1、2) 2点とも底部切り離しは回転糸切り。1は復元口径6.6cm、器高1.1cm、復元底径5.6cm。

坏a×b (3) 底部切り離しは回転糸切り。復元底径6.8cm。

鍋 (4) 外反した口縁部で、内面は細かいヨコハケ、外面は指頭圧痕が僅かに残り、煤のようなものが僅かに付着する。

土師質土器

鉢 (5) 注ぎ口付近の破片で、内面に僅かにナナメハケが残る。

白磁

小碗 (6) 高台畳付と高台内部は露胎。その他には透明釉が施されている。復元高台径3.0cm。

龍泉窯系青磁

碗 (7) IV類。胎土は明茶色で、釉は淡い灰緑色が厚く掛かり、大きな貫入が入る。口縁部が僅かに外反する。

土製品

焼土塊 (8) 大きさは6.2×3.6×3.8cm。0.2～0.3mm前後の砂粒を多く含み、スサの痕跡がみられる。色調は淡黄褐色から赤橙色を呈する。

西側トレンチ明茶色土出土遺物 (Fig.64)

土師器

小皿a (9) 底部切り離しは糸切り痕がぼんやり残る。復元底径5.2cm。

坏a (10) 底部切り離しは回転糸切りで一部に板状圧痕のようなものが残る。内面底部は不定方向のナデ。復元底径9.2cm。

灰茶色土出土遺物 (Fig.64)

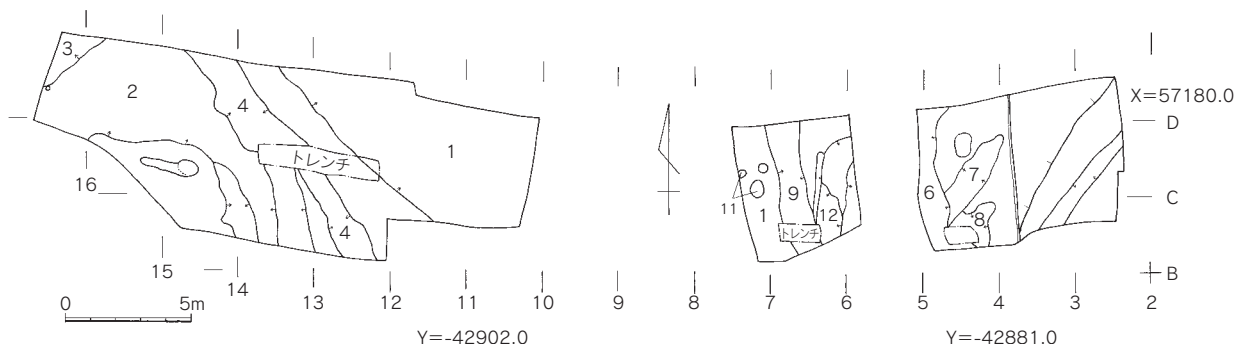


Fig.65 馬場遺跡第7次調査 遺構略測図 (1/300)

土師器

小皿a (11) 底部付近の小片。底部切り離しは糸切り。その他は回転ナデ。

小皿b (12) 底部切り離しは不明瞭。内面底部はナデ、その他は回転ナデ。器高1.5cm。

坏a (13~15) 底部切り離しは全て糸切り。13は復元口径12.2cm、器高2.8cm、復元底径8.2cm。内面底部は不定方向のナデ。14は復元底径7.8cm。15は復元底径9.8cm。

龍泉窯系青磁

小椀 (16) IV類。淡青緑灰色の釉が厚め掛けられ、高台畳付は露胎である。

国産陶器

紅皿 (17) 受け部と外面下半は露胎で、その他には光沢のある乳白色の釉を掛ける。

瓦製品

瓦玉 (18、19) 18は2.8×2.3cm、厚さ2.1cm。19は3.2×2.0cm、厚さ2.1cm。

土製品

轆轤口 (20) 全体的に淡茶灰色で、二次焼成で焼けた痕跡は見られない。外側はナデで、靱痕が観察できる。

淡灰色土出土遺物 (Fig.64)

土師器

小皿a (21) 底部切り離しは回転糸切り。内面ナデ、復元底径4.0cm。

坏a (22、23) 22は底部切り離しは糸切り、その他は回転ナデ。23は底部切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。復元口径13.4cm、器高2.6cm、復元底径9.4cm。

鉢 (24) 口縁端部で、肥厚させている。内面に細かいヨコハケを施し、外面には煤が薄く付着している。

瓦製品

瓦玉 (25) 3.7×3.5cm、厚さ1.9cm。側面を打ち欠き、円形に作っている。全面淡白色。

(5) 小結

調査区の大半を占める谷地形は、堆積土に11世紀後半から14世紀にかけての遺物が混在しており、谷地形は14世紀代までに殆ど埋没し、現況に近い地形になったと推測される。谷地形は人為的な掘削がほとんど確認できず、また、谷埋没後の土地利用も活発ではない。しかし、これらの遺物により調査区の南側丘陵部にこの時期の人為的な営みがあったことを物語っている。また、近隣の一部の住民は東側の山を「アマデラ」と呼称していたらしく、今回の調査地はその裾に当たるため、あまり入って遊んではいけないと言われていたという。しかし、今回の調査で寺に関係するような遺構や遺物は確認されていない。今後の周辺調査に期待される。(宮崎亮一)

Tab.4-1 馬場遺跡第7次調査 出土遺物一覧表

S-1明灰色土			
土	師	器	坏a(仆)、坏
瓦		器	破片
中	国	陶	器 耳壺V-2
金	属	製	品 鉄釘

S-1灰茶色粘土			
土	師	器	坏a(仆)、碗c、小皿a(仆)、破片
同	安	窯	系 青磁 碗I-1b
白		磁	碗:V、V-4×Ⅷ-1×3、Ⅳ～Ⅷ
同	安	窯	系 青磁 碗I-1b
肥	前	系	陶 磁器 破片
瓦		類	平瓦(格子)、瓦玉

S-1淡灰色粘土			
土	師	器	坏、破片
瓦		類	平瓦(格子)
石	製	品	丸石

S-1青灰色粘土			
土	師	器	坏a、丸底坏、碗c、鉢?、小皿a、甕?、破片、碗
黒	色	土	器 A 破片
瓦		器	碗
瓦	質	土	器 碗
白		磁	碗：V-1a、Ⅳ～Ⅷ、破片
瓦		器	碗
瓦		類	平瓦(格子)、破片

S-2			
須	恵	器	破片
土	師	器	坏a、カマド
土	師	質 土 器	耳(湯釜?)
須	恵	質 土 器	鉢
瓦		類	破片(無文)

S-2黒灰色土			
須	恵	器	甕
土	師	器	坏、小皿b、破片、甕、坏a、鍋×鉢
白		磁	碗V-4×Ⅷ-3
瓦		類	平瓦

S-2淡灰色土			
土	師	器	坏、鍋?
瓦		類	平瓦(格子)

S-2灰茶色土			
土	師	器	坏、坏a(仆)、甕、破片
須	恵	質 土 器	破片

S-2明灰色土			
土	師	器	坏a、甕
白		磁	碗V-4×Ⅷ-1×3

S-2黄灰色土			
土	師	器	坏、坏a(仆)、坏b、小皿a(仆)、破片
国	産	陶	器 破片
白		磁	碗：Ⅳ、Ⅴ、Ⅳ～Ⅷ
同	安	窯	系 青磁 破片
中	国	陶	器 壺
瓦		類	燵し瓦?

S-3			
土	師	器	破片

S-4淡灰色土			
須	恵	器	破片
土	師	器	坏a、破片
瓦		類	丸瓦(格子)
土	製	品	焼土塊

S-4灰色土			
土	師	器	坏a、坏a(仆)、破片
白		磁	碗Ⅳ、皿Ⅵ
同	安	窯	系 青磁 碗I-1b
石	製	品	チャート、滑石片

S-6			
須	恵	器	甕
土	師	器	坏、坏a(仆)、小皿a(仆)、破片、坏a×小皿a
須	恵	質 土 器	鉢
青	白	磁	皿
瓦		類	平瓦(格子、無文)、丸瓦(格子)
土	製	品	焼土塊

S-7			
須	恵	器	甕?
土	師	器	坏、鍋、破片
国	産	陶	器 破片
白		磁	破片
瓦		類	燵し瓦、平瓦(無文)

S-8			
土	師	器	破片
灰	釉	陶	器 甕

S-9			
土	師	器	小皿a(仆)
須	恵	質 土 器	鉢
土	師	質 土 器	鉢
国	産	陶	器 甕(常滑)
瓦		類	平瓦(無文)

S-11			
土	師	器	破片

S-12			
土	師	器	坏a、小皿
瓦		類	破片

明茶色土			
土	師	器	坏、坏a(仆)、小皿a(仆)、鍋、甕、貯蔵具片、破片
			坏a×b
白		磁	碗Ⅳ～Ⅷ、小碗、破片
龍	泉	窯	系 青磁 碗Ⅳ、皿I-2a
中	国	陶	器 耳壺V×Ⅵ、褐釉破片、破片
土	師	質 土 器	鉢
肥	前	系	陶 磁器 破片
瓦		類	平瓦(格子、無文)
金	属	製	品 鉾滓
土	製	品	焼土塊

灰茶色土			
土	師	器	坏、坏a(仆)、坏b、小皿a(仆)、鍋、貯蔵具片、小皿b
龍	泉	窯	系 青磁 碗：Ⅳ、Ⅱb、破片、小碗Ⅳア
須	恵	質 土 器	破片
白		磁	碗Ⅴ、破片、Ⅳ～Ⅷ
中	国	陶	器 耳壺、耳壺XⅢ、甕、茶入×小皿
肥	前	系	陶 磁器 坏、碗
国	産	磁	器 紅皿
瓦		類	燵し瓦、平瓦(格子)、瓦玉
金	属	製	品 鉄片、鉄釘(丸釘)
土	製	品	轆羽口
石	製	品	丸石、剥片

淡灰色土			
土	師	器	坏、坏a(仆)、坏b、小皿a(仆)、鍋、破片
須	恵	質 土 器	鉢
瓦	質	土 器	破片
白		磁	皿Ⅵ×Ⅶ
瓦		類	平瓦(無文)、瓦玉

表土			
土	師	器	坏a、碗c、小皿a、鍋?、破片
白		磁	碗Ⅴ～Ⅷ、小壺、破片
中	国	陶	器 壺破片
国	産	陶	器 破片、碗
国	産	磁	器 破片
肥	前	系	陶 磁器 碗、破片
瓦		類	燵し瓦、平瓦(無文)
金	属	製	品 鉾滓、鉄片

Tab.4-2 馬場遺跡第7次調査 遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種 別	時 期	地 区
1	7SX001	谷	11世紀後半～近世	BCD6.7.10～12
2	7SX002	流路 S-2の堆積の一部	12世紀～	13～15
3		段落ち S-2の一部		D16
4	7SX004	流路 S-2→4 灰色土は砂混じり S-2の最終段階	12世紀～	BCD12～14
6		段落ち S-1の東側立ち上がりか?	12世紀～近世	BC4
7		溝	近世	BC4
8		窪み		B4
9	7SD009	溝 淡灰色土	14世紀代	BC6
11		ピット群		C7
12		堆積土 S-1の上層の堆積か		BC6

IV. 自然科学分析

1. 馬場遺跡第8次調査出土の鑄造関連遺物について

鑄造関連遺物の分析結果と出土遺物から、馬場遺跡第8次調査での金属生産について検討しておきたい。

まず、分析に出した試料は炉壁、送風管、再結合滓、鉄塊系遺物、椀型鍛冶滓の11点である。炉壁について（BAB-1.2.7.8.11）は胎土に大粒の白色砂粒やスサ、土器片などを大量に含み、非常に粗い胎土である。炉壁の観察から、溶解面が二重になっており、修復されているもの（馬場遺跡2図63-7）が確認でき、残存する炉壁の厚さは平均8cm前後を測る。送風管はその口径が平均で10.2cmを測る。なお、送風管は馬場遺跡2での報告では轆羽口として報告している。炉壁、送風管、再結合滓、鉄塊系遺物は茶灰色土の整地層（8SX080）に切り込む2面目の遺構から出土している。遺構の時期は12世紀中頃～13世紀前半である。椀型鍛冶滓については3面目の南北溝（8SD133）から出土している。

2面目では分析に出した試料以外に、鍋や獣脚、華瓶などの鑄型が出土している。出土遺物とその分布について計測を行った結果、鑄造関連遺構が検出された2面目で集中して検出されている。2面目の鑄造関連遺構は8SK045・062・064である。井

戸8SE050の埋没に伴い炉壁片や羽口などの多量な鑄造関連遺物が廃棄されている。これらの遺構は観世音寺前面の大宰府史跡111次SX3305などの鑄造関連遺構と同時期の可能性が高く、出土した鑄型から仏具を主体とする調度品を生産していること、生産に関連して副次的に創出される滓はまったく出土していないなどの状況から、鉄製品よりも銅製品生産の可能性を考えていた。周辺の大町遺跡1次や奥園遺跡4,5次調査においても小型のトリベなど鑄銅関連遺物が出土しており、本報告分についてもこれらと関連するものと位置付けられよう。

今回の金属分析では、遺物群は鑄造鉄器製作に伴う可能性が高いという結果となった。観世音寺前面の鑄造関連遺構での出土例では考古的な考察も科学分析の結果からも鉄生産と銅生産が混在した状況を示すとされている。馬場遺跡第8次調査は調査区の関係上、生産の規模は推定しにくいだが、時期や出土遺物の状況などから同様の生産実態が展開していたと想定される。このことは平安後期の大宰府における金属生産は観世音寺周辺と天満宮安楽寺周辺との二箇所が並立していたことになる。（柳 智子）

参考文献

- 太宰府市教育委員会（2006）『馬場遺跡2』
九州歴史資料館（2007）『観世音寺－考察編－』
九州歴史資料館（2007）『観世音寺－遺物編2－』

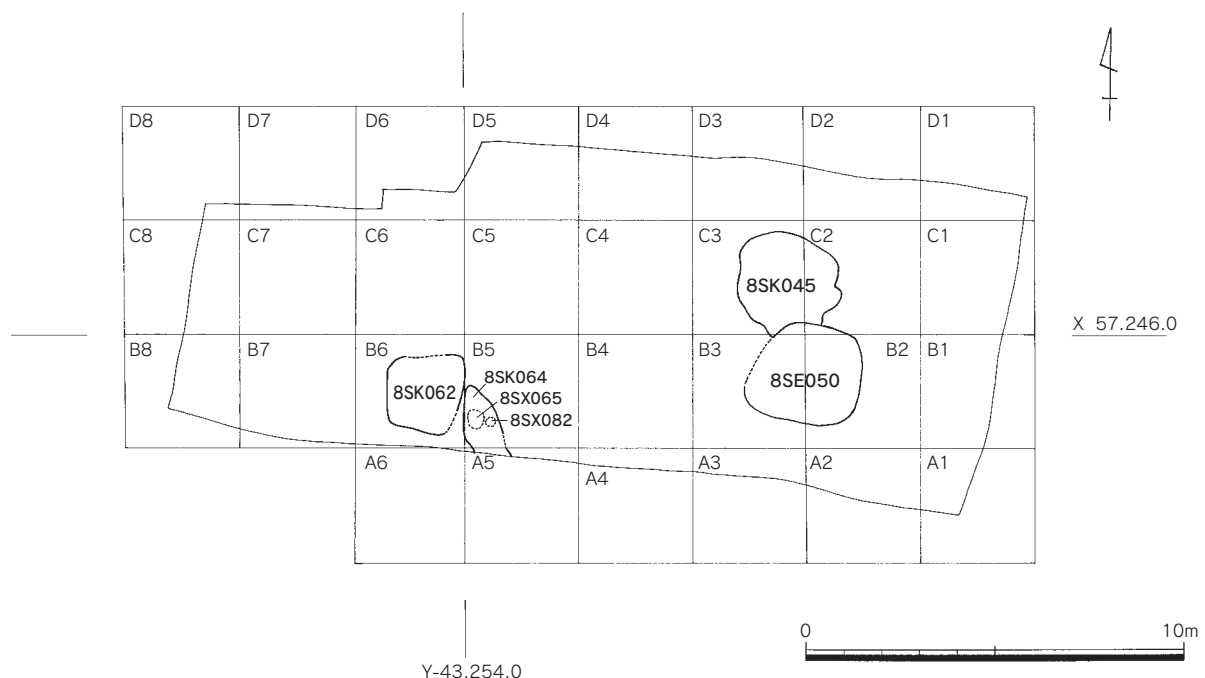


Fig.66 馬場遺跡第8次調査 主要遺構と取り上げグリッド図 (1/200)

Tab.5 馬場遺跡第8次調査 鑄造関連遺物計測表

1 面目

地区番号	層位	破片数/重量 (g)								
		炉壁	焼土塊	韃羽口	鋳型	粘土塊	鑄造関連	石	金属製品	鉍滓
A2	1								3/15.1	
A3・4	1			2/73.7						1/7.1
B・C4	1		1/11.6	1/12.6						1/46.9
B1	1				1/16.6					
B2	1								1/7.2	
B3	1								1/3.7	1/4.3
B4	1			1/64.6	1/5.2					2/27.4
B5	1		2/5.2	1/7.0	4/56.4		3/48.5		2/2.2	1/26.4
B6	1	6/431.0	2/4.3	2/68.0			7/36.6			8/97.7
B7	1	1/32.5	5/96.2	11/510.1	1/47.2		4/148.1		1/5.6	12/138.6
B8	1	3/133.3	2/29.3	2/32.4	2/85.1				2/12.2	9/41.9
C1	1				1/27.6					
C2	1								2/8.2	
C3	1		2/16.1		3/73.8					2/8.6
C4	1								1/3.8	
C5	1	1/43.8	1/13.1	2/82.6						
C6	1	1/16.1	1/3.9							
C7	1			3/106.7	1/68.8	1/11.9	1/19.0			
C8	1	2/26.4	1/156.6	2/307.1	2/22.6		2/43.5			5/160.3
D4	1	3/331	2/14.9	1/35.7	1/9.3				1/2.6	
D5	1		1/4.5						1/14.2	
合 計		17/1014.1	20/335.7	28/1300.5	17/412.6	1/11.9	17/295.7	0	15/74.8	42/559.2

2 面目

地区番号	層位	破片数/重量 (g)								
		炉壁	焼土塊	韃羽口	鋳型	粘土塊	鑄造関連	石	金属製品	鉍滓
B3	2	48/4927.6	1/3.4	7/487.5	1/18.7			1/306.5	2/8.8	9/99.6
B4	2				1/65				1/1.7	3/23.8
B5	2	10/3320.8	1/15	4/221.1	4/69.8	2/19.7	12/261.9			8/2404.1
B6	2	14/1034.1	5/169.4	16/1156	25/2577.7	28/372.3	3/357.4		1/27.6	4/48.5
B7	2	1/136.6		3/78						4/29.2
C3	2	53/12499.3	8/180.8	45/2567	20/876.1	2/434.8	21/220.6	2/528.7		3/17.0
C4	2				6/189		7/45.4		1/3.9	2/257.9
C5	2				2/113.1					
C6	2		1/29.7	1/42.9						
C7	2	1/164.4	2/103.2	4/141.7			1/54.6			8/32.1
C8	2									2/172.5
D3	2	1/136.8		2/95.2	1/196.8					
D4	2						1/77.9	1/508		1/19.1
合 計		128/22219.6	18/501.5	82/4789.4	56/4106.2	32/826.8	45/1017.8	4/1343.2	5/42	44/3103.8

3 面目

地区番号	層位	破片数/重量 (g)								
		炉壁	焼土塊	韃羽口	鋳型	粘土塊	鑄造関連	石	金属製品	鉍滓
C4	3		1/14.6							
C5	3	3/111.1	2/24.3	3/230.1	1/51.2					
C7	3		1/5.3					1/1182.2	1/133	
C8	3	1/19.7	1/43.0	1/42.3						1/14.7
B7	3			3/1023.0						
B8	3	3/266.3		1/62.4	1/13.7					
合 計		7/397.1	5/87.2	8/1357.8	2/64.9	0	0	1/1182.2	1/133	1/14.7

2. 馬場遺跡（第8次調査地区）出土鑄造関連遺物の金属学的調査

九州テクノリサーチ・TACセンター

1. いきさつ

馬場遺跡は太宰府市宰府に所在する。第8次調査地区からは、12世紀中頃から13世紀前半と推定される遺構群とともに、炉壁・送風管・鑄型・鉄塊系遺物などの鑄造関連遺物が多数出土している。このため当遺跡は天満宮安楽寺周辺の開発に連動した工房で、獣脚や鍋など、仏具を含む調度品を製作した可能性が指摘されている（注1）。今回さらに遺跡内での鉄器生産の詳細を検討する目的から、金属学的調査を行う運びとなった。

2. 調査方法

2-1. 供試材

Tab.6-1に示す。鑄造関連遺物計11点の調査を行った。

2-2. 調査項目

（1）肉眼観察

分析調査を実施する遺物の外観の特徴や、遺物調査用に調整された特殊金属探知機（注2）での反応の有無など、調査前の観察所見を記載した。この結果をもとに、分析試料の採取位置を決定した。

（2）マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、ここでは顕微鏡埋込み試料の断面全体を、低倍率で撮影した写真を指す。当調査は顕微鏡検査よりも、広範囲で組織の分布状態、形状、大きさなどが観察できる利点がある。

（3）顕微鏡組織

鋳造の鋳物組成や金属部の組織観察、非金属介在物調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3 μ と1 μ で鏡面研磨する。

また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して、50倍から400倍で写真撮影を行った。なお金属鉄の調査では3%ナイトル（硝酸アルコール液）を腐食（Etching）に用いた。

（4）ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行い、文献硬度値に照らし、鋳造中の晶出物の判定を行った。また金属組織（合金相）の硬さ測定も同様に実施した。

試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用し、荷重は50gfで測定した。

（5）EPMA（Electron Probe Micro Analyzer）調査

鋳造中の鋳物組成や、金属中の非金属介在物、金属合金各相の組成の確認を目的とする。

試料面（顕微鏡試料併用）に真空中で電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

反射電子像（COMP）は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される金属（合金）や鋳造中の晶出物ほど明るく、軽い元素で構成される晶出物ほど暗い色調で示される。

これを利用して組成の違いを確認後、定量分析を実施する。

また元素の分布状態を把握するため、反射電子像に加えて、適宜特性X線像の撮影も行った。

(6) 化学組成分析

出土遺物の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。

全鉄分 (Total Fe)、金属鉄 (Metallic Fe)、酸化第一鉄 (FeO) : 容量法。

炭素 (C)、硫黄 (S) : 燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素 (SiO_2)、酸化アルミニウム (Al_2O_3)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化カリウム (K_2O)、酸化ナトリウム (Na_2O)、酸化マンガン (MnO)、二酸化チタン (TiO_2)、酸化クロム (Cr_2O_3)、五酸化燐 (P_2O_5)、バナジウム (V)、銅 (Cu)、酸化ジルコニウム (ZrO_2) : ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法 : 誘導結合プラズマ発光分光分析。

(7) 耐火度

炉材の性状調査を目的とする。耐火度は、溶融現象が進行の途上で軟化変形を起こす状態の温度で表示される。胎土をゼーゲルコーンという三角錐の試験片に作り、1分間当り 10°C の速度で温度 1000°C まで上昇させ、以降は 4°C に昇温速度を落とし、試験片が荷重なしに自重だけで軟化し崩れる温度を示した。

3. 調査結果

BAB-1 : 炉壁 (含鉄)

- (1) 肉眼観察 : 熱影響を受けて、内面表層が若干ガラス質化した大型の炉壁破片である。さらに内面表層には茶褐色の錆化鉄が広い範囲に付着しており、鑄造時の溶着金属の可能性が考えられる。ただし錆化が進んでおり、特殊金属探知機での反応はみられない。また炉壁胎土部分は淡褐色で、石英・長石類などの真砂 (花こう岩の風化砂) や粉殻などが混和されている。
- (2) マクロ組織 : Photo.1①に示す。炉壁内面と表層の付着物を観察した。写真上側の明灰色部は錆化鉄である。また暗色部は炉壁胎土で、表層部はガラス質化が進んでいる。
- (3) 顕微鏡組織 : Photo.1②~④に示す。内面表層に付着した錆化鉄部の拡大である。金属鉄は確認できなかったが、錆化鉄中には片状黒鉛が残存しており、ねずみ鑄鉄と判明した。
- (4) 化学組成分析 : Tab.6-2に示す。胎土部分の強熱減量 (lg loss) は6.82%であった。熱影響を受けて、結晶構造水の一部が飛散した状態での分析である。鉄分 (Fe_2O_3) は0.99%と低値で、酸化アルミニウム (Al_2O_3) は17.89%と高めであった。耐火性には有利な成分系といえる。

以上の調査の結果、内面表層の溶着金属 (ねずみ鑄鉄) から、当試料は鑄鉄の溶解・鑄造に用いられた炉壁片と推定される。

BAB-2 : 炉壁

- (1) 肉眼観察 : 強い熱影響を受けて内面表層が黒色ガラス質化した、大型の炉壁破片である。また内面には茶褐色の錆化鉄粒が点々と固着しており、鑄造時の溶着金属と推測される。炉壁胎土部分は淡褐色で、石英・長石類などの真砂や、粉殻などが多量に混和されている。
- (2) マクロ組織 : Photo.2①に示す。内面表層付着物の観察を行った。写真上側中央付近の明灰色部は鉄酸化物の滓である。付着滓の鉙物組成に関しては、EPMA調査の項で詳述する。また炉壁内面は黒色ガラス質化が進んでいる。
- (3) 顕微鏡組織 : Photo.2②~④に示す。炉壁内面黒色ガラス質滓中に多数点在する、微小金属鉄粒を

示した。3%ナイトルで腐食したところ、過共析組織～亜共晶組成白鑄鉄組織が観察された。

- (4) EPMA調査：Photo.3①に内面表層付着滓の反射電子像（COMP）を示す。1の灰褐色不定形結晶の定量分析値は89.8%FeO－1.7%MgOであった。微量マグネシウム（MgO）を固溶する、マグネタイト（Magnetite：FeO・Fe₂O₃）に同定される。

またPhoto.3②③に黒色ガラス質滓中の微小金属粒の反射電子像（COMP）を示す。1～5の金属粒の定量分析値は96.3%～100.0%Feであった。金属鉄（Metallic Fe）と同定される。

- (5) 化学組成分析：Table2に示す。胎土部分の強熱減量（Ig loss）は5.72%であった。熱影響を受けて、結晶構造水の一部が飛散した状態での分析である。また鉄分（Fe₂O₃）は1.35%と低値で、酸化アルミニウム（Al₂O₃）が18.00%と高めであった。耐火性には有利な成分系といえる。

- (6) 耐火度：1320℃であった。中世の鑄造用溶解炉としては、ごく一般的な範疇の耐火性である。

以上の調査の結果、内面表層ガラス質滓中の溶着金属は鉄（Metallic Fe）と確認されたため、当試料も鑄鉄の溶解・鑄造に用いられた炉壁片と推定される。

BAB-3：送風管

- (1) 肉眼観察：熱影響を受けて外面全体がガラス質化した、薄手の送風管の先端破片である。内側には通風孔の痕跡が残存する。通風孔部表層には青灰色の滓が付着するが、この部分は磁着するため、マグネタイトと推察される。また胎土部分は橙色で、石英・長石類などの真砂や、粉殻などが多量に混和されている。
- (2) マクロ組織：Photo.4①に示す。写真右上の外面側はガラス質化が進んでいる。また写真下側の明灰色部が、通風孔部の付着滓である。
- (3) 顕微鏡組織：Photo.4②～④に示す。通風孔部の拡大である。②の上側および③の暗色部は送風管の内面表層部である。熱影響を受けて、この部分の素地の粘土鉱物もガラス質化している。②の下側及び④は付着滓である。結晶の色調や形態、後述の断面硬度測定結果から、灰褐色多角形結晶はマグネタイト（Magnetite：FeO・Fe₂O₃）、白色多角形結晶はヘマタイト（Hematite：Fe₂O₃）と推定される。
- (4) ビッカース断面硬度：紙面の構成上、硬度を測定した圧痕の写真を割愛したが、付着滓部分の硬度を測定した。Photo.4④の灰褐色多角形結晶の硬度値は495Hvであった。マグネタイトの文献硬度値500～600Hv（注3）の下限を若干下回るが、誤差の範囲内といえる。またPhoto.4④の白色多角形結晶の硬度値は959Hvと非常に硬質であり、ヘマタイトと推測される。
- (5) 化学組成分析：Tab.6-2に示す。胎土部分のみで分析試料量の確保が困難であったため、黒色ガラス質滓部分もあわせて調査を実施した。鉄分（Fe₂O₃）は2.51%とやや高めであるが、酸化アルミニウム（Al₂O₃）が19.73%と高いため、やはり耐火性には有利な性状と推測される。

当試料は通風孔部に鉄酸化物（マグネタイト・ヘマタイト）の付着滓が確認された。これは鑄鉄の溶解時、通風孔部周辺が酸化雰囲気曝されて生じた滓の可能性が考えられる。

BAB-4：再結合滓

- (1) 肉眼観察：非常に大型で厚手の再結合滓である。素地部分はややもろい淡褐色の土砂で、内部にごく微細な木炭破片、銹化鉄粒などが少量含まれている。
- (2) マクロ組織：Photo.5①に示す。土砂中には、ごく微細な木炭破片と銹化鉄粒が確認される。
- (3) 顕微鏡組織：Photo.5②～④に示す。②の左下は木炭組織（板目面）で、その右上に銹化鉄粒が溶着している。③④は銹化鉄部の金属組織痕跡の拡大である。内部には片状黒鉛が析出しており、ねず

み鑄鉄と判断される。

木炭破片は鑄鉄溶解時の燃料で、表面に熔融金属（ねずみ鑄鉄）が付着したものと推測される。

BAB-5：椀形鍛冶滓

- (1) 肉眼観察：表面全体に厚く茶褐色の土砂が付着した椀形鍛冶滓である。このため滓表面の観察が困難であるが、暗灰色でほぼ完形の椀形滓と推測される。
- (2) マクロ組織：Photo.6①に示す。表層（下面側）やや風化気味で、断面には細かい気孔が散在する。
- (3) 顕微鏡組織：Photo.6②に示す。中央の不定形明白色部は金属鉄である。また白色粒状結晶ウスタイト（Wustite： FeO ）、淡灰色柱状結晶ファイヤライト（Fayalite： $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ ）が晶出する。通常鍛錬鍛冶滓にみられる鉱物組成である。
- (4) EPMA調査：Photo.6③に滓部の反射電子像（COMP）を示す。2の淡灰色片状結晶の定量分析値は $63.0\%\text{FeO}-2.9\%\text{CaO}-2.6\%\text{MgO}-32.0\%\text{SiO}_2$ で、ファイヤライト（Fayalite： $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ ）に同定される。3の白色粒状結晶の定量分析値は $95.0\%\text{FeO}-1.1\%\text{TiO}_2$ であった。ウスタイト（Wustite： FeO ）に同定される。また4のガラス質部分の定量分析値は $36.8\%\text{SiO}_2-9.7\%\text{Al}_2\text{O}_3-11.1\%\text{CaO}-1.9\%\text{K}_2\text{O}-1.3\%\text{Na}_2\text{O}-34.5\%\text{FeO}-1.3\%\text{ZrO}_2$ であった。

ウスタイト粒内にチタン（ TiO_2 ）を微量固溶するため、当試料の始発（製鉄）原料は砂鉄の可能性が高いと考えられる。さらに素地部分にジルコニウム（ ZrO_2 ）を微量含むことから、始発原料は花こう岩起源の砂鉄（注4）と推測される。

- (5) 化学組成分析：Tab.6-2に示す。全鉄分（Total Fe）28.85%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.02%、酸化第1鉄（ FeO ）10.99%、酸化第2鉄（ Fe_2O_3 ）29.01%の割合であった。造滓成分（ $\text{SiO}_2+\text{Al}_2\text{O}_3+\text{CaO}+\text{MgO}+\text{K}_2\text{O}+\text{Na}_2\text{O}$ ）は43.46%と高値であるが、塩基性成分（ $\text{CaO}+\text{MgO}$ ）の割合は1.68%と低い。製鉄原料の砂鉄起源の二酸化チタン（ TiO_2 ）が0.92%、バナジウム（V）は0.21%含まれる。さらに二酸化ジルコニウム（ ZrO_2 ）は0.41%と高値傾向を示す。また銅（Cu）は $<0.01\%$ と低値であった。

以上の鉱物・化学組成の特徴から、当試料は鍛錬鍛冶滓と推定される。なお製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分は低減しているが、珪長質深成岩に特徴的な二酸化ジルコニウム（ ZrO_2 ）の高値傾向が特徴的なことから、周辺地域に分布する主部花こう岩（注5）を母岩とする砂鉄が製鉄原料であった可能性が考えられる。

BAB-6：再結合滓

- (1) 肉眼観察：やや小型で偏平な再結合滓片である。素地部分はややもろい淡褐色の土砂で、内部にごく微細な滓破片や木炭片、銹化鉄粒などが点在する。
- (2) マクロ組織：Photo.7①に示す。内部には小型で歪な粒状を呈する黒色ガラス質滓が多数含まれている。さらにごく微細な木炭破片や、銹化鉄粒も確認される。
- (3) 顕微鏡組織：Photo.7②～⑤に示す。②③は銹化鉄粒の拡大である。内部には片状黒鉛が残存しており、ねずみ鑄鉄と判断される。また④⑤はガラス質滓の拡大である。中央の明白色粒は金属鉄である。3%ナイトルで腐食したところ、亜共析組織が確認された。

当試料は鑄鉄の溶解・鑄造時に生じる、微小金属鉄を含むガラス質滓、ねずみ鑄鉄粒、木炭破片などを含む再結合滓であった。

BAB-7：炉壁（含鉄）

- （1）肉眼観察：広い範囲に茶褐色の銹化鉄部がみられる炉壁片である。特殊金属探知機のH（○）で反応があり、内部には金属鉄が遺存すると推測される。また細かい気孔が点在する黒色ガラス質滓や、淡褐色の炉壁粘土部分も観察される。胎土中には石英・長石類などの真砂や、粃殻などが多量に混和されている。
- （2）マクロ組織：Photo.8①に示す。写真上側は銹化鉄部で、左端に若干金属鉄が残存している。また写真下側は黒色ガラス質滓～被熱胎土部分である。
- （3）顕微鏡組織：Photo.8②③に示す。金属鉄部の拡大である。③中央部は蜂の巣状のレデブライト（ledeburite）で、亜共晶組成白鑄鉄組織（C<4.26%）を呈する。なお素地のパーライト（Pearlite）が分解して、不全球状セメンタイト（Cementite： Fe_3C ）化しているのは、炉熱の影響と推測される。
- （4）EPMA調査：Photo.8④に鉄中非金属介在物の反射電子像（COMP）を示す。9の微小黄褐色遺物の定量分析値は63.5%Fe-1.2%Mn-36.3%Sであった。若干マンガン（Mn）を固溶する硫化鉄（FeS）と推定される。

当試料は表層に亜共晶組成白鑄鉄が溶着しており、鑄鉄の溶解・鑄造に用いられた炉壁片と推定される。

BAB-8：炉壁（含鉄）

- （1）肉眼観察：内側に茶褐色の銹化鉄が分厚く固着した、ごく小型の炉壁片である。銹化鉄部は厚みが最大15mmほどあるが、完全に銹化しており特殊金属探知機の反応はない。また外面側には淡褐色の炉壁粘土が観察される。胎土中には石英・長石類などの真砂や、粃殻などが多量に混和されている。
- （2）マクロ組織：Photo.9①に示す。写真上側の暗色部は銹化鉄、写真左下の灰色部はガラス質滓部分である。
- （3）顕微鏡組織：Photo.9②～④に示す。②には銹化鉄部（上側）とガラス質滓（下側）の境界部分を示した。また③④は銹化鉄部の拡大で、亜共晶組成白鑄鉄組織痕跡が残存する。

当試料も炉壁（含鉄）（BAB-7）と同様、表層に亜共晶組成白鑄鉄が溶着している。やはり鑄鉄の溶解・鑄造に用いられた炉壁片と推定される。

BAB-9：鉄塊系遺物

- （1）肉眼観察：表面が淡褐色の土砂に覆われた、不定形小型の鉄塊系遺物である。表面には明瞭な滓部はなく、鉄主体の遺物と推定される。特殊金属探知機のM（◎）で反応があり、内部には金属鉄が遺存すると推定される。
- （2）マクロ組織：Photo.10①に示す。全面斑鑄鉄組織を呈する鑄鉄塊であった。
- （3）顕微鏡組織：Photo.10②～④に示す。白色板状のセメンタイト、蜂の巣状のレデブライト、黒色層状のパーライトおよび片状黒鉛が観察される。

当試料は斑鑄鉄組織を呈する鑄鉄塊であった。小型不定形の形状からは、鑄込み時の湯こぼれの可能性が高いと考えられる。

BAB-10：送風管

- （1）肉眼観察：外面が全面黒色ガラス質化した、薄手の送風管の先端部破片である。内側は緩い弧状を呈する通風孔部で、先端に強磁性の青灰色の滓が付着する。胎土部分は橙色で、石英・長石類など

の真砂や、粉殻などが多量に混和されている。

(2) マクロ組織：Photo.11①に示す。写真上側が通風孔部で、明灰色の滓が固着している。また下側は外面側でより熱影響が強く、ガラス質化が進んでいる。

(3) 顕微鏡組織：Photo.11②～⑤に示す。②③は通風孔部の付着滓の拡大である。灰褐色多角形結晶はマグネタイトと推定される。なおより色調の暗い結晶が若干混在するが、これは鉄以外の元素を固溶する割合が高いためと考えられる。

④⑤は外面の黒色ガラス質滓部分の拡大で、中央の明白色粒は金属鉄である。

付着滓および微小金属粒の組成に関しては、EPMA調査の項で詳述する。

(4) EPMA調査：Photo.12①に付着滓の反射電子像（COMP）を示す。金属反射顕微鏡下で観察された明暗2相はほとんど観察されないため、両者の鉱物組成はきわめて近似していると判断される。ただし定量分析値は11が79.9%FeO—7.0%MgO—6.9%Al₂O₃、12は86.5%FeO—3.7%Al₂O₃であった。ともにマグネタイト（Magnetite：FeO・Fe₂O₃）に近い組成であるが、マグネシア（MgO）、アルミナ（Al₂O₃）の固溶量の違いが、顕微鏡観察時の色調差となって表れたと考えられる。また13のガラス質部分の定量分析値は67.9%SiO₂—15.9%Al₂O₃—4.2%CaO—2.6%MgO—3.8%K₂O—6.9%FeOであった。素地部分でも微量鉄分を固溶している。

またPhoto.12②に微小金属粒の反射電子像（COMP）を示す。定量分析値は88.5%Fe—11.1%Pで、燐化鉄共晶（α+Fe₃P）と推定される。

以上のように、付着滓が鉄酸化物（マグネタイト）であることや、ガラス質滓中に金属鉄が含まれることから、当試料も鑄鉄の溶解・鑄造に用いられた、通風管の破片の可能性が高いと考えられる。

BAB—11：炉壁

(1) 肉眼観察：強い熱影響を受けて、内面が黒色ガラス質化した炉壁片である。なお一部側面では黒色ガラス滓が2層確認されるため、補修しながら複数回鑄造に用いられた可能性が考えられる。外面の胎土部分は淡褐色で、石英・長石類などの真砂や、粉殻などが多量に混和されている。

(2) マクロ組織：Photo.13①に示す。写真左側が内面表層の黒色ガラス質滓部分である。なおこの観察面でも、ガラス質滓が2層確認される。

(3) 顕微鏡組織：Photo.13②～④に示す。ガラス質滓部分の拡大である。灰褐色多角形結晶マグネタイトが晶出する。また粘土中に混和された石英粒は、ほとんど溶融せずにガラス質滓中に残存している。

(4) 化学組成分析：Tab.6-2に示す。胎土部分の強熱減量（Ig loss）は6.63%であった。熱影響を受けて、結晶構造水の一部が飛散した状態での分析である。鉄分（Fe₂O₃）は2.92%とやや高めであるが、酸化アルミニウム（Al₂O₃）が21.19%と高値傾向が顕著で、耐火性に有利な成分系といえる。

(5) 耐火度：1470℃であった。中世の鑄造用溶解炉としては、非常に耐火性の高い性状であった。

当試料は明瞭な溶着金属はみられなかったが、ガラス質滓中には広範囲に鉄酸化物の（マグネタイト）結晶が確認された。これは炉壁（BAB—2）、通風管（BAB—3、10）とも共通する特徴であり、当試料も鑄鉄の溶解・鑄造に用いられた可能性は考えられる。

4. まとめ

馬場遺跡（第8次調査地区）から出土した鑄造関連遺物を調査した結果、当遺跡では主に鑄鉄の溶解・鑄造が行われたものと推測される。詳細は以下の通りである。（Tab.7参照）

〈1〉当遺跡から出土した炉壁（BAB—1、2、7、8、11）、通風管（BAB—3、10）は、鑄鉄製品の製作

に用いられた、鑄造用溶解炉の部材破片の可能性が高いと考えられる。

炉壁（BAB-1、7、8）の内面表層には、ねずみ鑄鉄・亜共晶組成白鑄鉄が溶着している。また他の試料にも微細な金属鉄粒や、熔融金属鉄が酸化雰囲気曝されて生じたと考えられる、鉄酸化物（マグネタイト・ヘマタイト）の付着滓が確認された。

〈2〉再結合滓（BAB-4、6）中には、内部に微小金属鉄粒を含むガラス質滓、銹化鉄粒（ねずみ鑄鉄）、木炭破片が確認された。これらは、やはり鑄鉄の溶解・鑄造時に生じた微細遺物群と推定される。

〈3〉鉄塊系遺物（BAB-9）はきれいな斑鑄鉄塊であった。小型不定形の形状からは、鑄込み時の湯こぼれの可能性が高いと考えられる。

〈4〉以上のように今回分析調査を実施した鑄造関連遺物は、すべて金属鉄かその銹化物、あるいは鉄酸化物の滓のみが確認されて、金属銅あるいは銅合金（銹化物を含む）は確認されなかった。この調査結果から、これらの遺物群は鑄造鉄器製作に伴うものである可能性が高いと考えられる。

しかし同じ鑄物師集団が、鉄鑄物も青銅鑄物も製作するのはごく普通の業態であるため、今回、分析試料中に金属銅・銅合金（銹化物を含む）が確認されなかったとって、当遺跡で青銅鑄物が鑄造された可能性を否定するものではない。

〈5〉椀形鍛冶滓（BAB-5）は、周辺地域の主部花こう岩起源の砂鉄を始発原料とする、鍛錬鍛冶滓の可能性が高いと考えられる。製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分（ TiO_2 、V）は低減しているが、珪長質深成岩に特徴的な二酸化ジルコニウム（ ZrO_2 ）の高値傾向が著しい。

ただし分析調査を実施した遺物の中で、他に明瞭な鍛冶関連遺物（粒状滓・鍛造剥片など微細遺物を含む）がみられないため、鍛冶作業の存在を断定するのは困難である。

鑄造原料の銑（鑄鉄）は融点が鋼より低いため、砂鉄製錬時の滓との分離が良好で、こうした砂鉄起源の脈石成分（ TiO_2 、V、 ZrO_2 ）を含む可能性は低いと予想されるが、鉄鑄鉄溶解時の吹き減り（酸化による損失）などの可能性も、考慮する必要がある。

（注）

（1）『馬場遺跡 2-太宰府市の文化財 第87集-』太宰府市教育委員会 2006

（2）天辰正義・穴澤義功・平井昭司・藤尾慎一郎『鉄関連遺物の分析評価に関する研究会報告』（社）日本鉄鋼協会 社会鉄鋼工学部会 2005

（3）日刊工業新聞社『焼結鉍組織写真および識別法』1968

ウスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファイヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている。

（4）黒田吉益・諏訪兼位『偏光顕微鏡と造岩鉍物 [第2版]』共立出版株式会社 1983 第5章 鉍物各論 D. ジルコン（zircon）

産状：ジルコンは副成分鉍物として、すべての火成岩に含まれる。火成岩のなかでも深成岩に多く、とくにNaに富む深成岩（閃長岩、花こう岩など）に多い。

（5）日本の地質『九州地方』編集委員会編『日本の地質9 九州地方』共立出版（株） 1992

Tab.6-1 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値			調 査 項 目							備 考		
					大きさ(mm)	重量(g)	メタル度	マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度		カロリー	
BAB-1	馬場 (第8次)	C3 S-50 灰色土	炉壁 (含鉄)	12c中頃 ～13c前半	166×177	1492.1	錆化 (△)	○	○				○				
BAB-2		C3 S-50 灰色土	炉壁		235×147	1688.2	錆化 (△)	○	○			○	○	○			
BAB-3	C3 S-45 茶色土	送風管			73×102	250.1	なし	○	○	○			○				
BAB-4	B5 S-82	再結合滓			226×158	2541.1	なし	○	○								
BAB-5	C7 S-133	梃形鍛冶滓			71×57	132	なし	○	○			○	○				
BAB-6	B5 S-65	再結合滓		110×110	368	なし	○	○									
BAB-7	C4 S-45 暗灰土	炉壁 (含鉄)		80×62	250.5	H (○)	○	○				○					
BAB-8	D3 S-45 灰色土	炉壁 (含鉄)		63×60	136.1	錆化 (△)	○	○									
BAB-9	C3 S-50 灰色土	鉄塊系遺物		32×28	17.3	M (◎)	○	○									
BAB-10	B6 S-62	送風管		108×55	152.2	なし	○	○				○					
BAB-11	C3 S-45 茶色土	炉壁		106×68	264.4	なし	○	○					○	○			

Tab.6-2 供試材の化学組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸 化 第1鉄 (FeO)	酸 化 第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化 珪素 (SiO ₂)	酸化アル ミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カル シウム (CaO)	酸化マグ ネシウム (MgO)	酸化ナ トリウム (Na ₂ O)	酸化マン ガン (MnO)	二酸化チ タン (TiO ₂)	酸化クロ ム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化磷 (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	二酸化 ジルコニウム (Zr ₂ O ₃)	耐火度 (℃)	Σ*			注	
																								造滓成分 Total Fe	造滓成分 Total Fe	TiO ₂ Total Fe		
BAB-1	馬場 (第8次)	C3 S-50 灰色土	炉壁	12c中頃 ～13c前半	2.03	<0.01	1.72	0.99	61.99	17.89	0.45	0.51	3.32	0.80	0.16	0.58	<0.01	0.008	1.98	lg loss 6.82	<0.01	<0.01	0.01		84.96	41.852	0.286	
BAB-2		C3 S-50 灰色土	炉壁		2.40	<0.01	1.87	1.35	62.22	18.00	0.43	0.51	3.39	0.80	0.16	0.56	<0.01	0.009	1.96	lg loss 5.72	<0.01	<0.01	1320	85.35	35.563	0.233		
BAB-3		C3 S-45 茶色土	送風管		2.64	0.16	0.93	2.51	65.83	19.73	1.13	0.71	3.76	1.05	0.08	0.62	<0.01	0.005	0.24	0.10	<0.01	0.02		92.21	34.928	0.235		
BAB-5		C7 S-133 梃形鍛冶滓			28.85	0.02	10.99	29.01	28.95	9.65	1.38	0.30	2.32	0.86	0.11	0.92	0.17	0.023	3.26	0.34	<0.01	0.41		43.46	1.506	0.032		
BAB-11		C3 S-45 茶色土	炉壁		2.39	<0.01	0.45	2.92	57.62	21.19	0.36	0.70	3.22	0.77	0.07	0.69	<0.01	0.009	2.34	lg loss 6.63	<0.01	<0.01	1470	83.86	35.088	0.289		

Σ *

Tab.7 出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化 学 組 成 (%)							所 見
						Total Fe	Fe ₂ O ₃	塩基性成分	TiO ₂	V	MnO	造滓成分	
BAB-1	馬場 (第8次)	C3 S-50 灰色土	炉壁 (含鉄)	12c中頃 ～13c前半	炉壁部分：黒色ガラス質溶～被熱胎土、 内面表層錆化鉄部：ねずみ錆鉄組織痕跡	2.03	0.99	0.96	0.58	<0.01	0.16	84.96	鉄鉄の溶解・鋳造に用いられた炉壁片
BAB-2		C3 S-50 灰色土	炉壁		黒色ガラス質溶～被熱胎土、 微小金属鉄粒：過共析組織～亜共晶組成白錆鉄組織	2.40	1.35	0.94	0.56	<0.01	0.16	85.35	鉄鉄の溶解・鋳造に用いられた炉壁片、耐火度：1320℃
BAB-3		C3 S-45 茶色土	送風管		黒色ガラス質溶～被熱胎土、 通風孔部付着滓：マクネタイト・ヘマタイト	2.64	2.51	1.84	0.62	<0.01	0.08	92.21	鉄鉄の溶解・鋳造に用いられた送風管破片の可能性が高い
BAB-4		B5 S-82	再結合滓		木炭破片、錆化鉄粒：ねずみ錆鉄組織痕跡	—	—	—	—	—	—	—	鉄鉄の溶解・鋳造時に生じた微細遺物を含む再結合滓
BAB-5		C7 S-133	椀形鍛冶滓		微小金属鉄、滓部：ウスタイト・ファイヤライト	28.85	29.01	1.68	0.92	0.21	0.11	43.46	鍛鋼鍛冶滓 (始発原料珪長質深成岩起源の砂鉄) の可能性が高い
BAB-6		B5 S-65	再結合滓		ガラス質溶 (微小金属鉄を含む)、 錆化鉄粒：ねずみ錆鉄組織痕跡、木炭破片	—	—	—	—	—	—	—	鉄鉄の溶解・鋳造時に生じた微細遺物を含む再結合滓
BAB-7		C4 S-45 暗灰土	炉壁 (含鉄)		炉壁部分：黒色ガラス質溶～被熱胎土、 内面表層残存金属鉄：亜共晶組成白錆鉄	—	—	—	—	—	—	—	鉄鉄の溶解・鋳造に用いられた炉壁片
BAB-8		D3 S-45 灰色土	炉壁 (含鉄)		炉壁部分：黒色ガラス質溶～被熱胎土、 内面表層錆化鉄部：亜共晶組成白錆鉄組織痕跡	—	—	—	—	—	—	—	鉄鉄の溶解・鋳造に用いられた炉壁片
BAB-9	BAB-10	C3 S-50 灰色土	鉄塊系遺物		珪鉄鉄 (セメントタイト・レデブブライト・パーライト・片状黒鉄)	—	—	—	—	—	—	—	鉄鋳物鋳込み時の濁こぼれの可能性が高い
BAB-10		B6 S-62	送風管		黒色ガラス質溶～被熱胎土、微小金属鉄粒 通風孔部付着滓：マクネタイト	—	—	—	—	—	—	—	鉄鉄の溶解・鋳造に用いられた送風管破片の可能性が高い
BAB-11		C3 S-45 茶色土	炉壁		黒色ガラス質溶、マクネタイト～被熱胎土	2.39	2.92	1.06	0.69	<0.01	0.07	83.86	鉄鉄の溶解・鋳造に用いられた炉壁片の可能性が高い

BAB-1

炉壁（含鉄）

- ①マクロ組織、内面表層(上側)明灰色部：銹化鉄部
- 内側暗色部：被熱胎土、素地：粘土鉱物非晶質化、石英・長石粒多数混在
- ②内面表層部拡大
- ③④銹化鉄部拡大
- ねずみ銹鉄組織痕跡残存

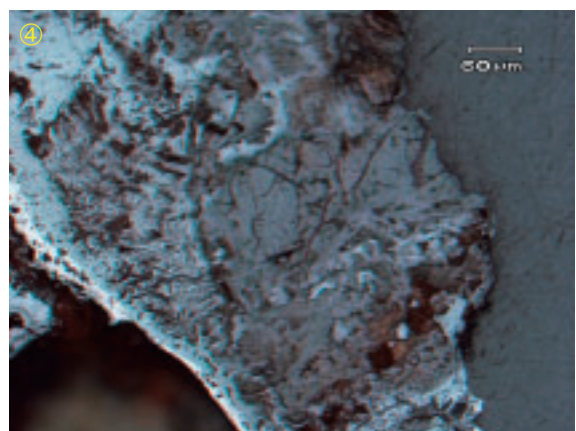
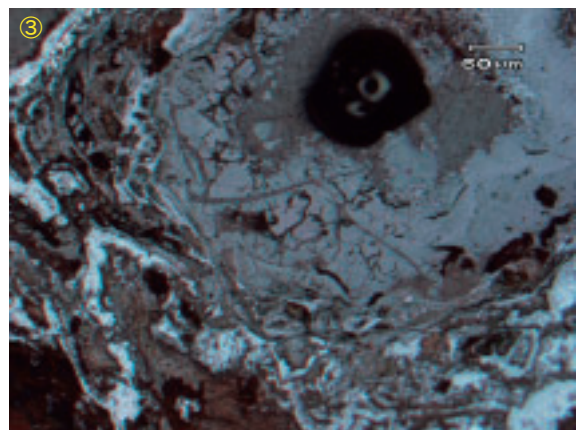
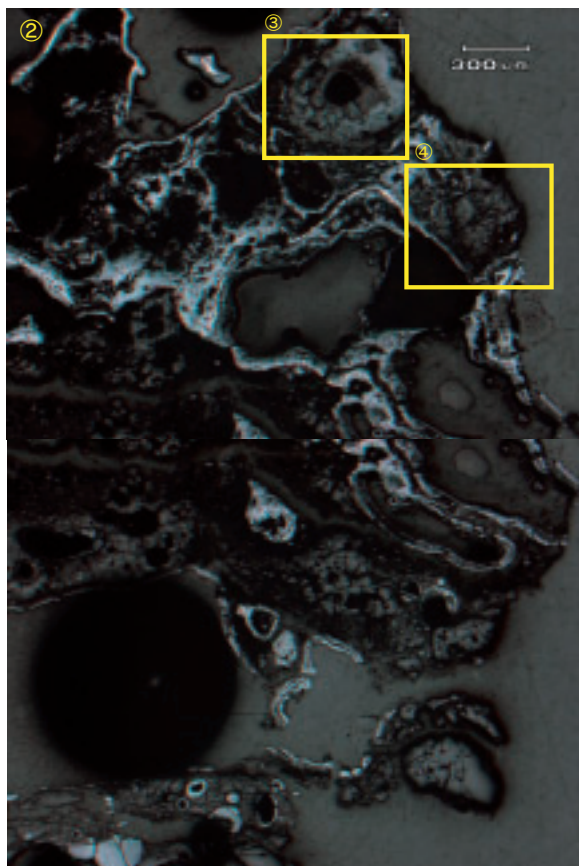
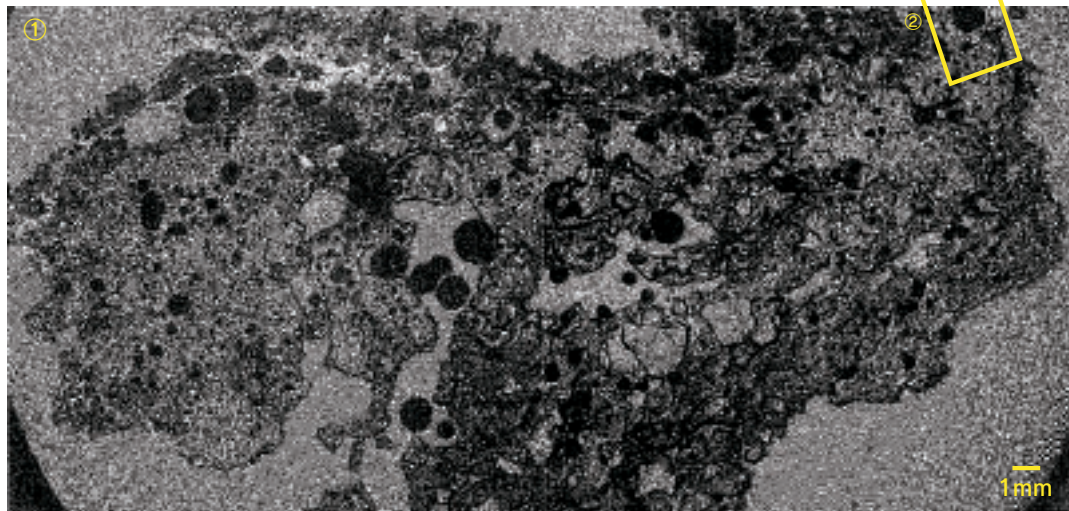


Photo.1 炉壁（含鉄）の顕微鏡組織

BAB-2

炉壁

①マクロ組織、内面表層（上側）明灰色部：付着滓、マグネタイト、酸化鉄、
内面表層：黒色ガラス質滓
内側：炉壁胎土、石英・長石粒混在

②～④ガラス質滓部分拡大
微小金属鉄多数散在、ナイトルetch 過共析組織～亜共晶組成白鑄鉄組織

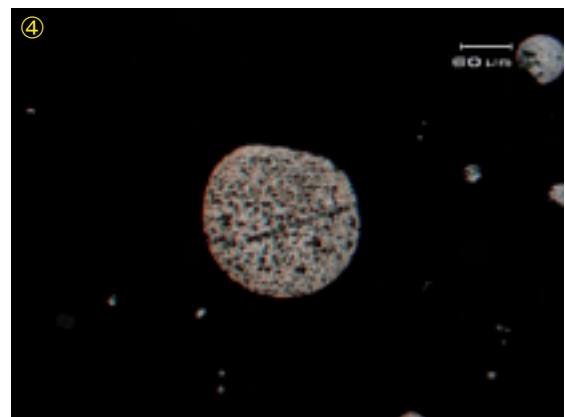
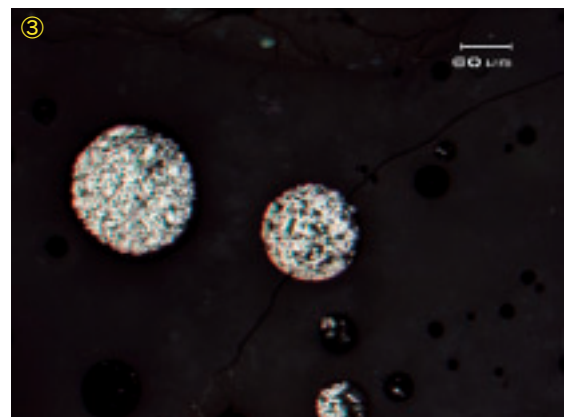
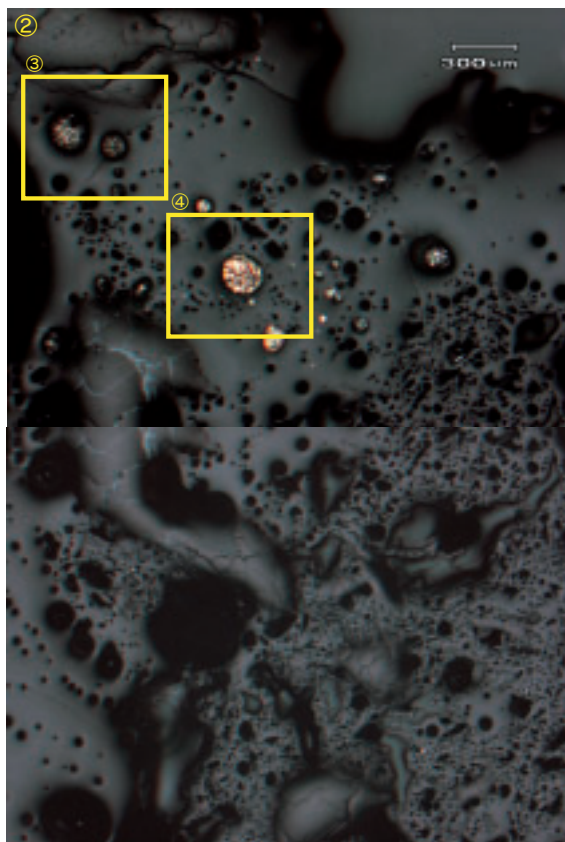
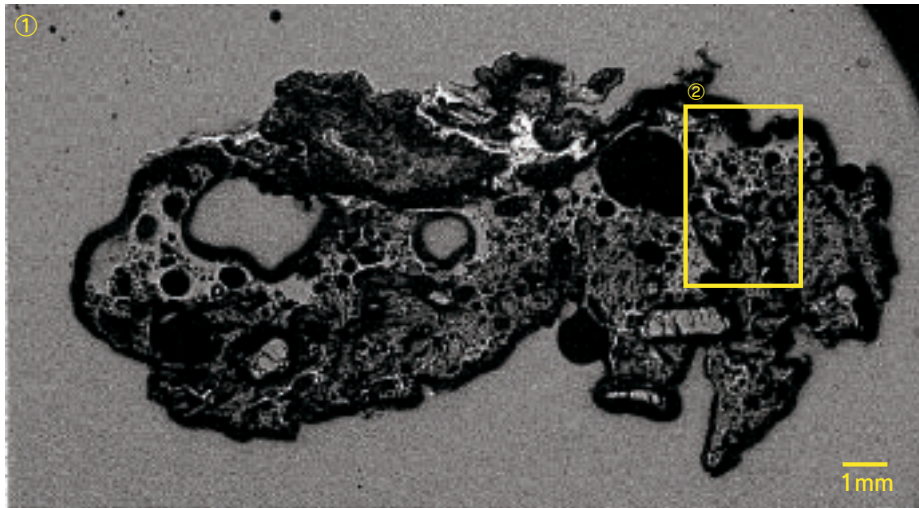
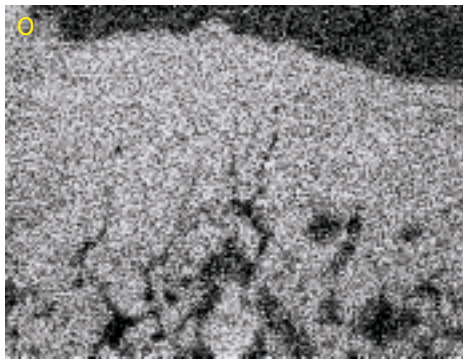
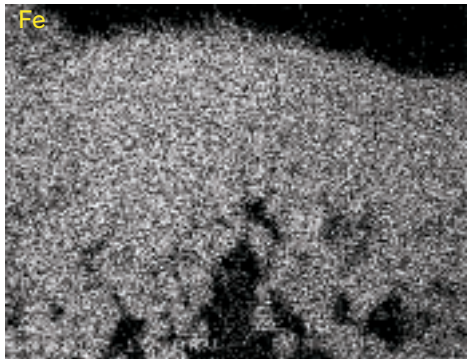
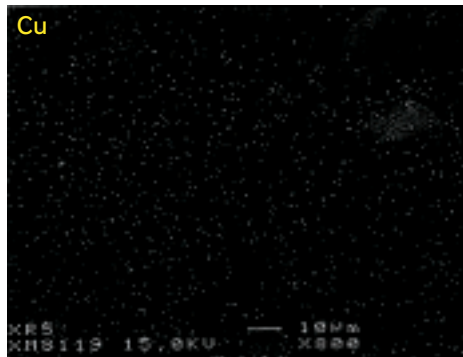
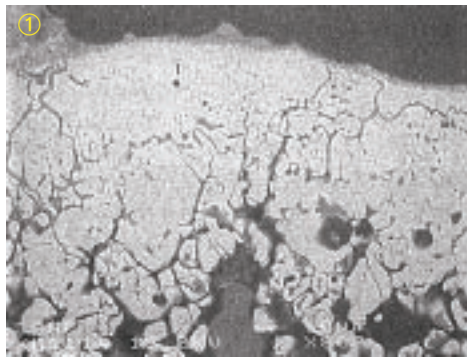


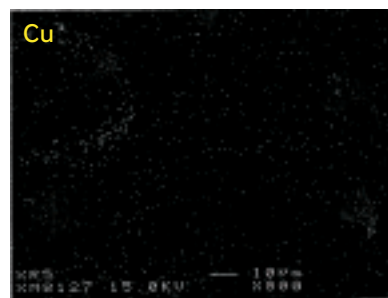
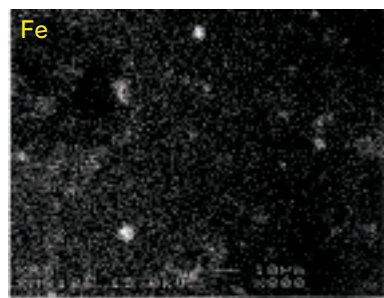
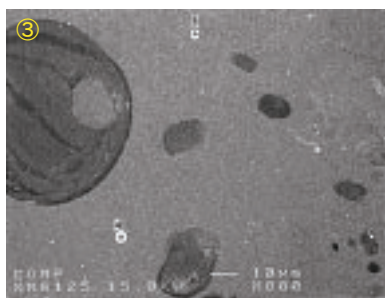
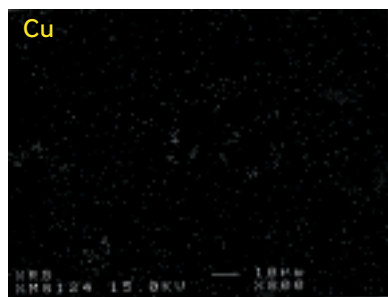
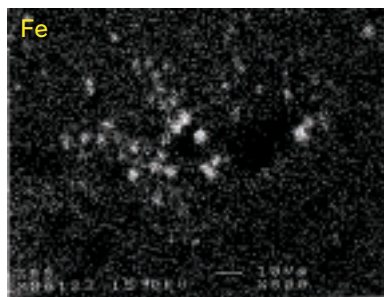
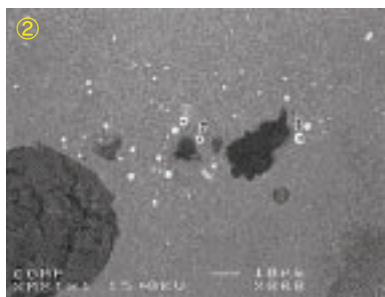
Photo.2 炉壁の顕微鏡組織



定量分析値

Element	1
F	-
Na ₂ O	-
MgO	1.719
Al ₂ O ₃	0.749
SiO ₂	0.341
K ₂ O	0.029
CaO	0.101
S	-
P ₂ O ₅	-
TiO ₂	0.094
Cr ₂ O ₃	0.004
MnO	0.213
FeO	89.763
ZrO ₂	0.066
CuO	-
V ₂ O ₅	0.006
As ₂ O ₅	-
Total	93.085

内面表層付着滓の鉍物組成調査結果



定量分析値

Element	1	2	3	4	5
O	0.610	1.264	0.453	0.196	0.579
P	0.023	0.018	0.005	0.056	0.122
S	-	0.047	0.049	-	0.026
Fe	98.961	97.526	100.798	100.006	96.256
Mn	-	-	-	0.052	-
Ti	0.005	0.019	0.051	0.026	0.030
Cu	0.126	0.148	0.083	0.489	0.454
Ni	-	-	-	-	-
Total	99.725	99.022	101.439	100.825	97.467

ガラス質滓中の溶着金属の組成調査結果

Photo.3 炉壁（BAB-2）のEPMA調査結果

BAB-3

通風管

①マクロ組織、外面表層（右上）黒色ガラス質滓、内側：被熱胎土、素地：粘土鉱物非晶質化

石英・長石粒混在
通風孔部表層付着滓（下側）

②～④付着滓部拡大
マグネタイト・ヘマタイト

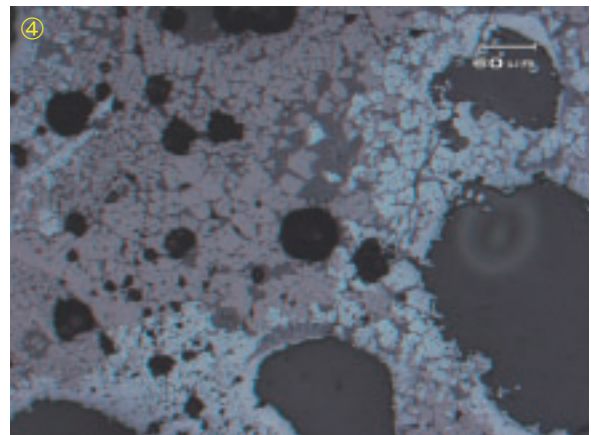
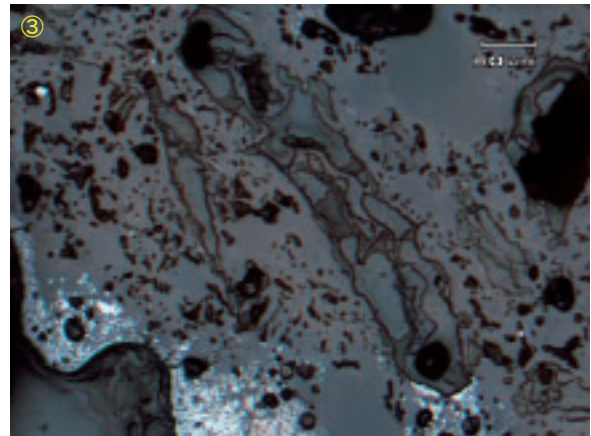
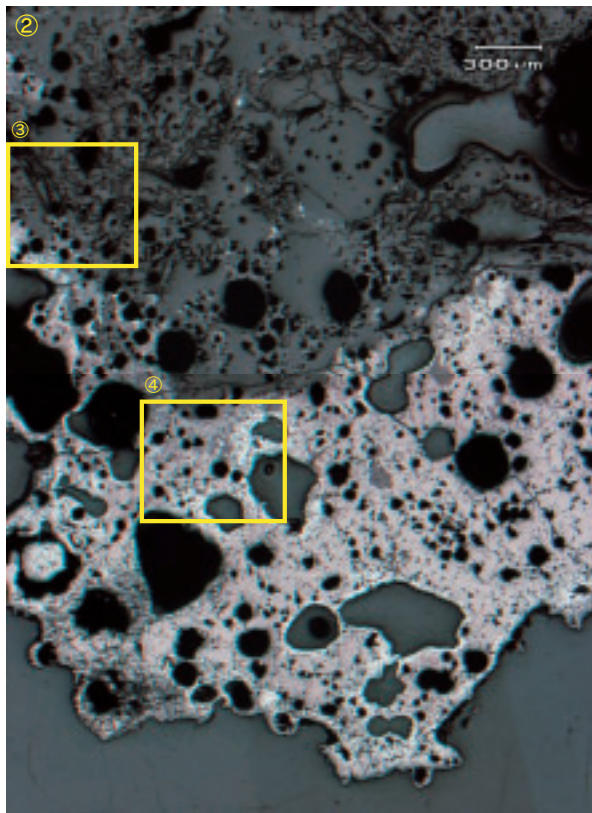
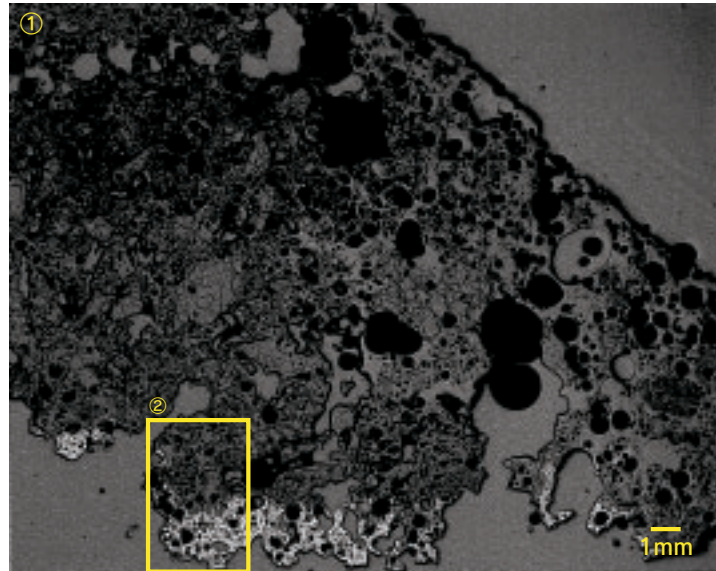


Photo.4 通風管の顕微鏡組織

BAB-4

再結合滓

- ①マクロ組織、素地部分：土砂微細木炭破片、錆化鉄散在
- ②木炭破片、付着錆化鉄粒拡大
- ③④錆化鉄粒拡大、ねずみ鋳鉄組織痕跡

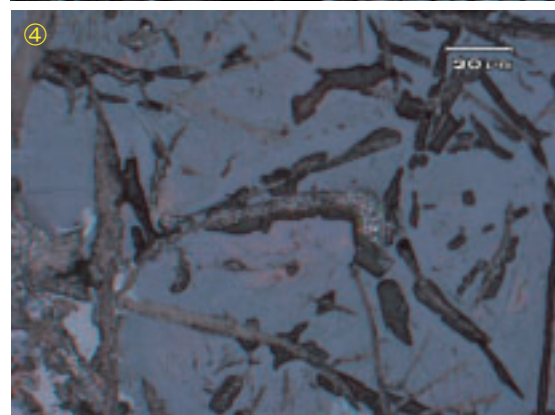
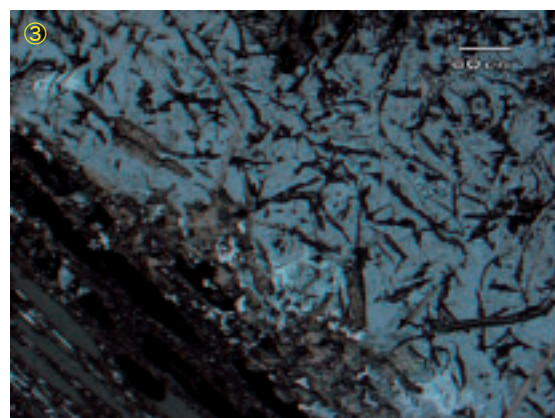
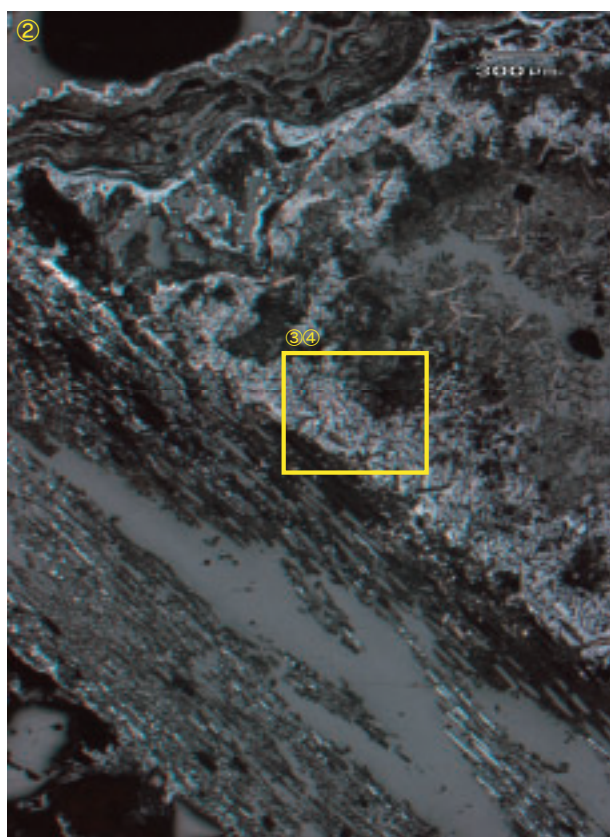
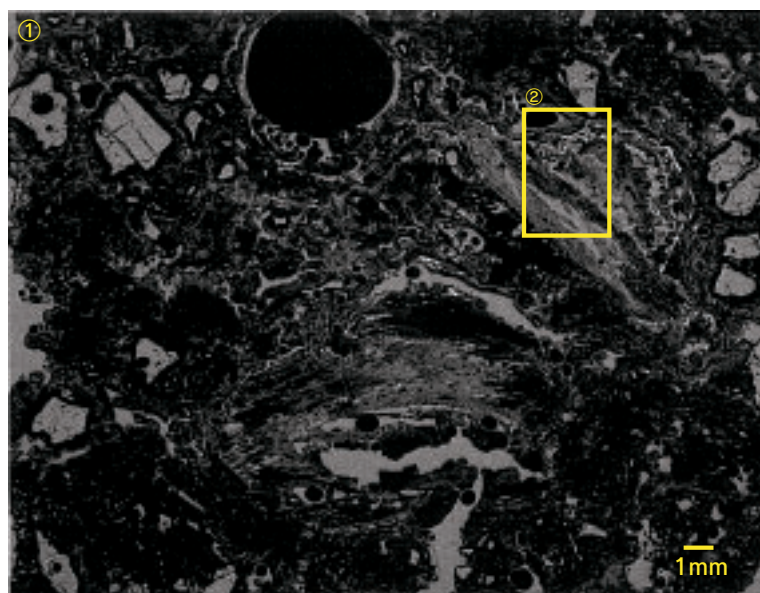


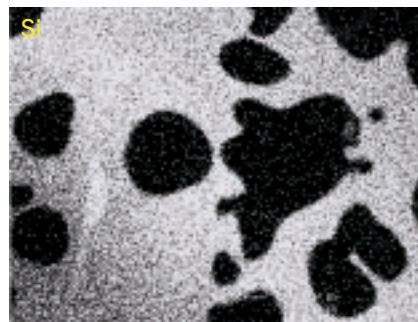
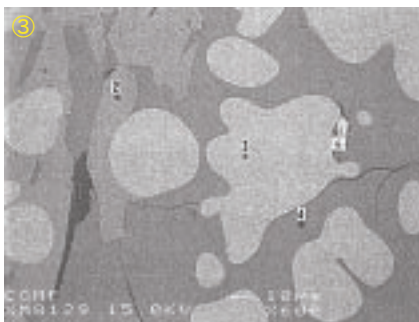
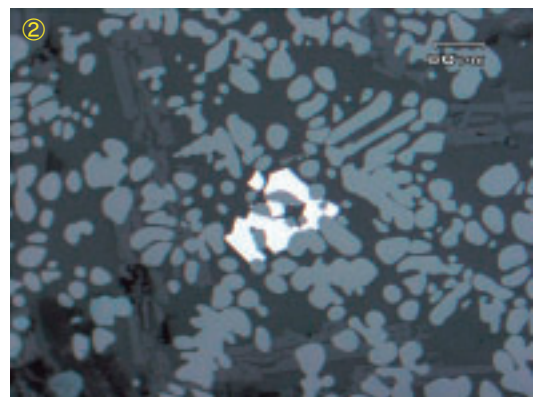
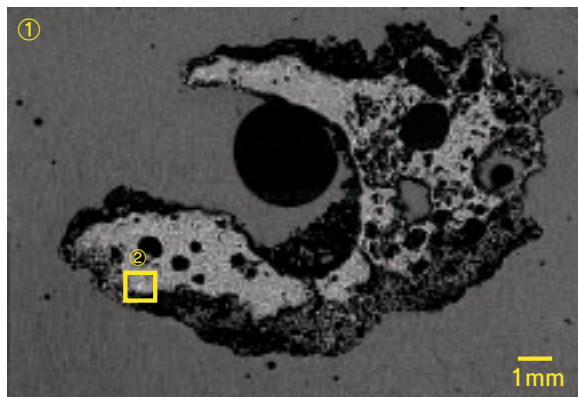
Photo.5 再結合滓の顕微鏡組織

BAB-5

梘形鍛冶滓

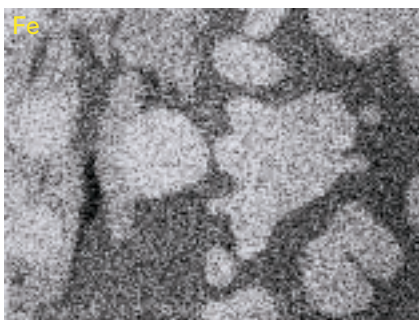
①マクロ組織

②中央明白色部：金属鉄
 ナイタルetch 変化なし、
 フェライトか
 周囲滓部：ウスタイト・
 ファイヤライト



定量分析値

Element	2	3	4
F	-	-	-
Na ₂ O	0.035	-	1.288
MgO	2.576	0.392	0.595
Al ₂ O ₃	0.095	0.843	8.677
SiO ₂	31.980	0.328	36.782
K ₂ O	0.026	-	1.903
CaO	2.898	-	11.140
S	-	-	0.130
P ₂ O ₅	0.058	-	0.696
TiO ₂	0.101	1.050	0.439
Cr ₂ O ₃	0.024	0.349	-
MnO	0.296	0.080	0.136
FeO	62.991	94.980	34.529
ZrO ₂	-	0.296	1.341
CuO	0.012	-	-
VO ₂	0.077	0.680	-
As ₂ O ₃	-	-	-
Total	101.165	98.978	96.624



Element	6
O	0.108
P	-
S	-
Fe	103.246
Mn	-
Ti	0.035
Cu	0.081
Ni	-
Total	103.470



滓部の鉱物組成および微小金属の組成調査結果

Photo.6 梘形鍛冶滓の顕微鏡組織・EPMA調査成果

BAB-6
再結合滓

- ①マクロ組織、木炭破片、
ガラス質滓、錆化鉄粒
- ②③錆化鉄粒拡大
- ねずみ銕鉄組織痕跡
- ④⑤ガラス質滓拡大
- 明白色粒：微小金属鉄
- ナイトルetch 亜共析組織

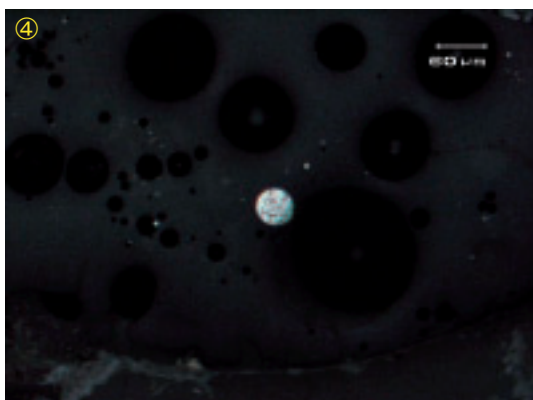
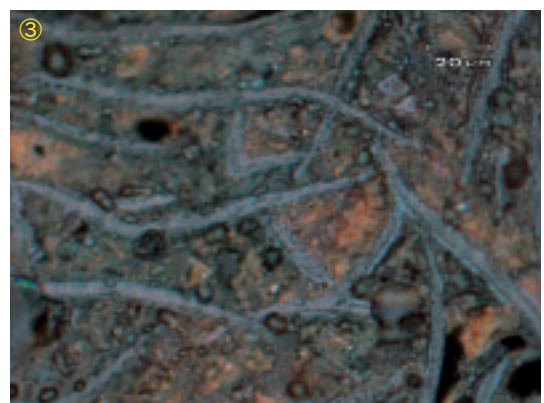
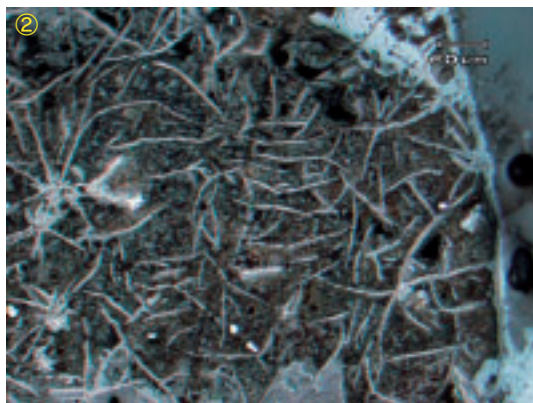
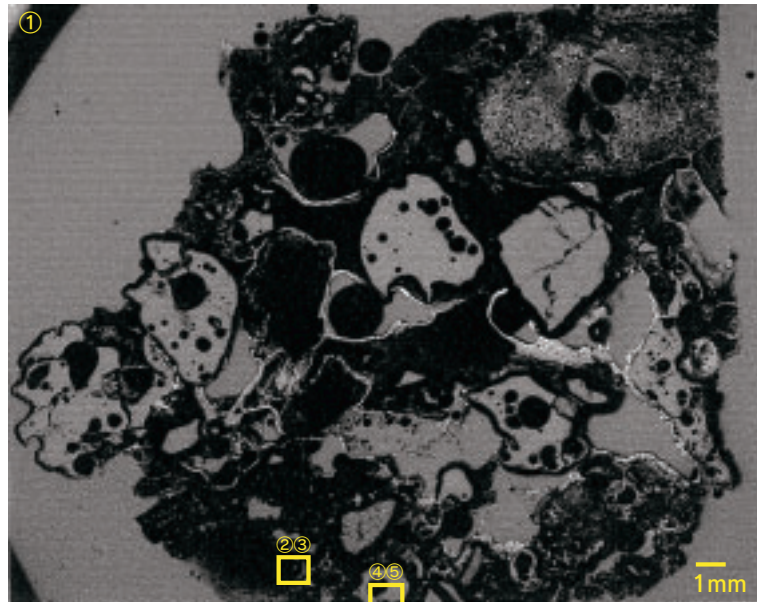


Photo.7 再結合滓の顕微鏡組織

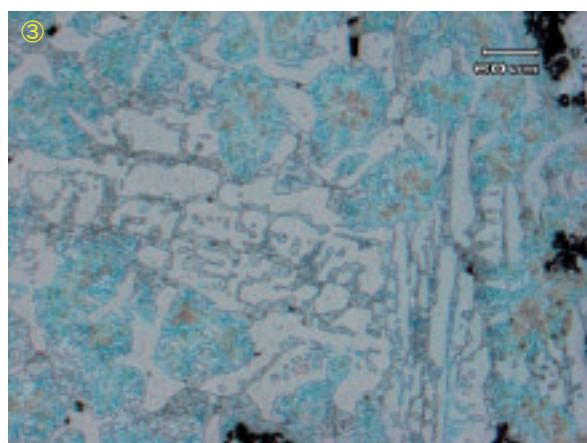
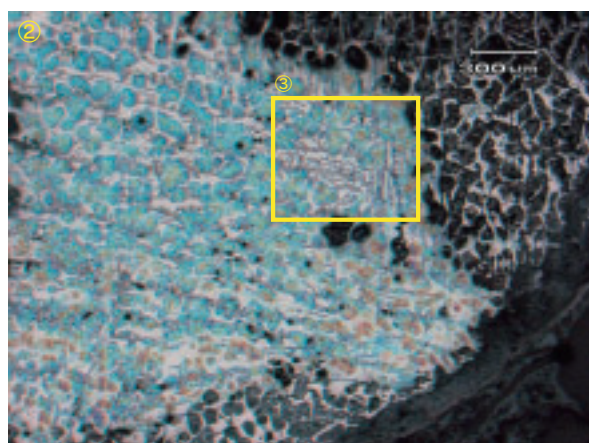
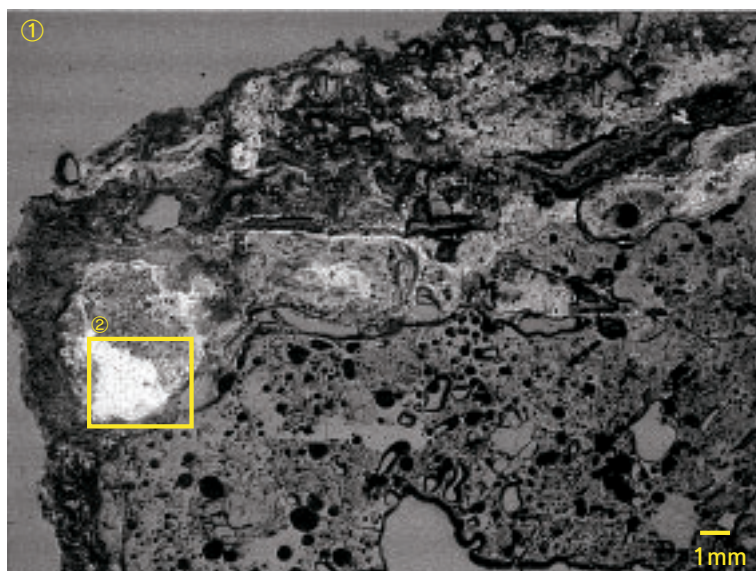
BAB-7

炉壁（含鉄）

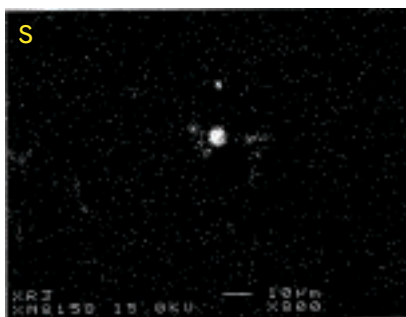
①マクロ組織、上側：
鉄部（左端）金属鉄残存、
下側：黑色ガラス質滓
～被熱胎土

②③金属鉄部拡大
ナイトルetch 亜共晶組
成白鑄鉄組織

中央：レデブライト



鉄中非金属介在物の組成調査結果



定量分析値

Element	9
O	-
P	0.011
S	36.251
Fe	63.534
Mn	1.231
Ti	0.050
Cu	0.481
Ni	-
Total	101.558

Photo.8 炉壁（含鉄）の顕微鏡組織・EPMA調査結果

BAB-8

炉壁 (含鉄)

①マクロ組織、上側暗色部：錆化鉄、下側明灰色部：ガラス質滓

②上側：錆化鉄部、亜共晶組成白鑄鉄組織痕跡、下側：ガラス質滓

③④白鑄鉄組織痕跡拡大

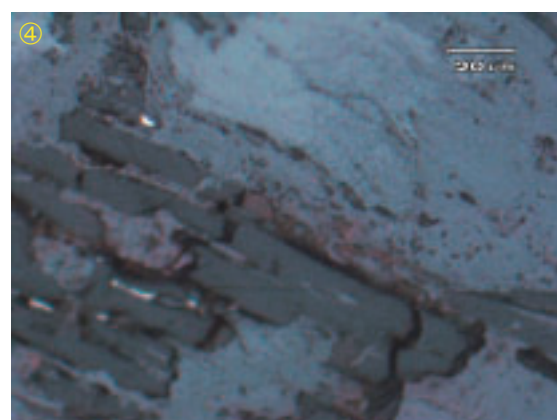
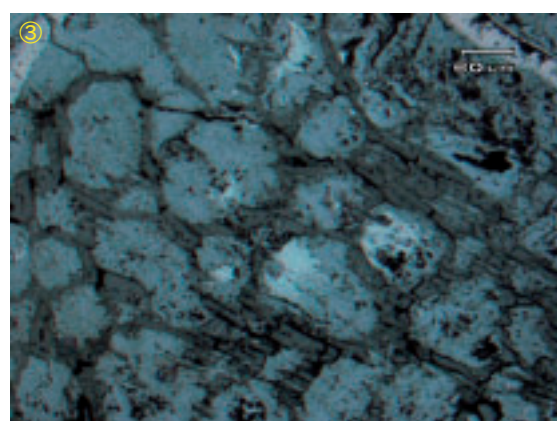
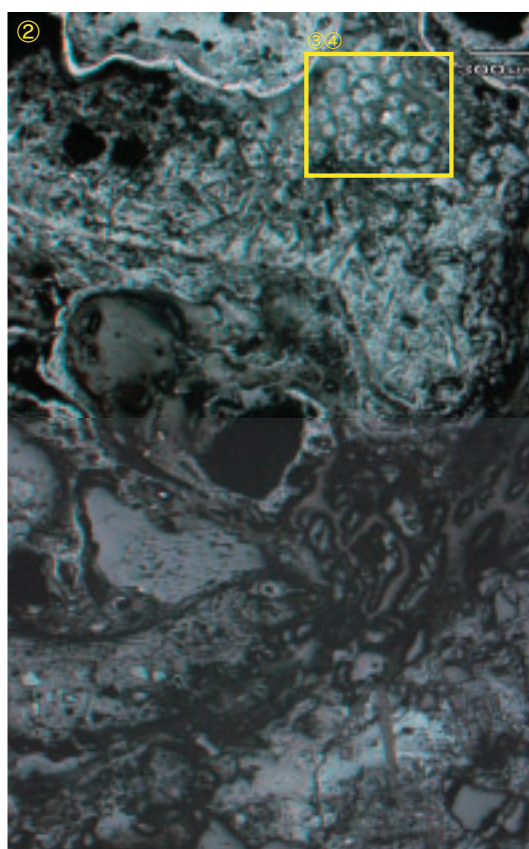
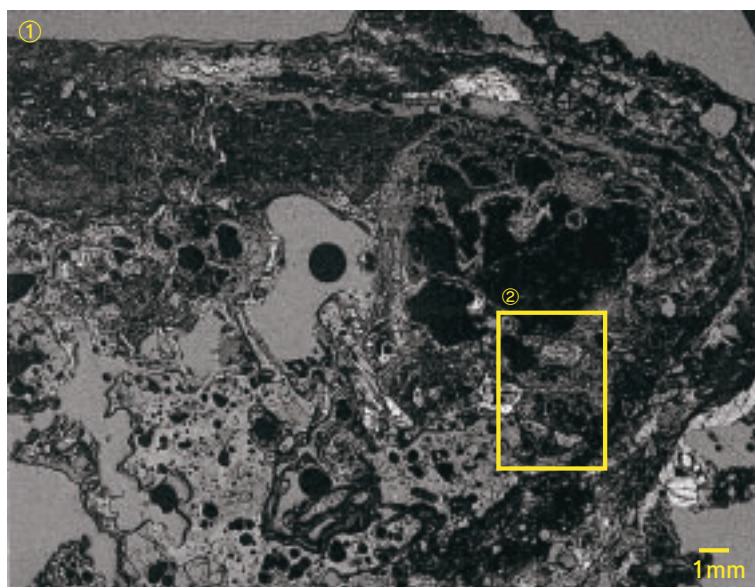


Photo.9 再結合滓の顕微鏡組織

BAB-9
鉄塊系遺物
 ①マクロ組織、斑鑄鉄塊、表層：錆化進行
 芯部：金属鉄残存、ナイタルetch
 ②～④金属組織拡大
 ⑤中央：片状黒鉛析出

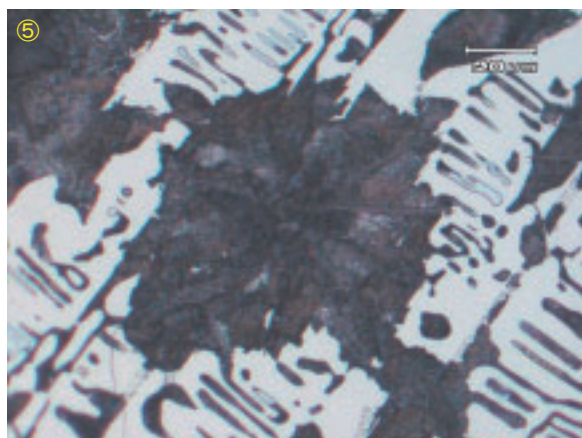
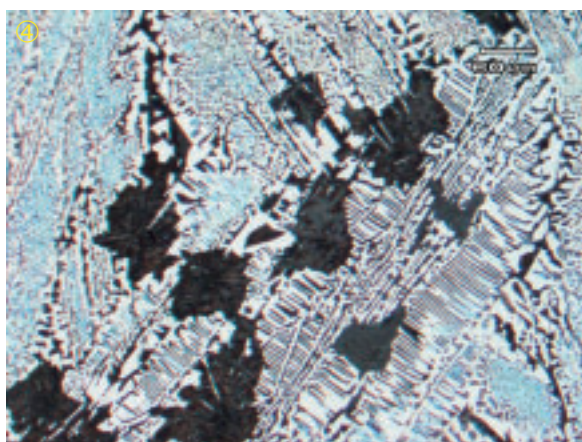
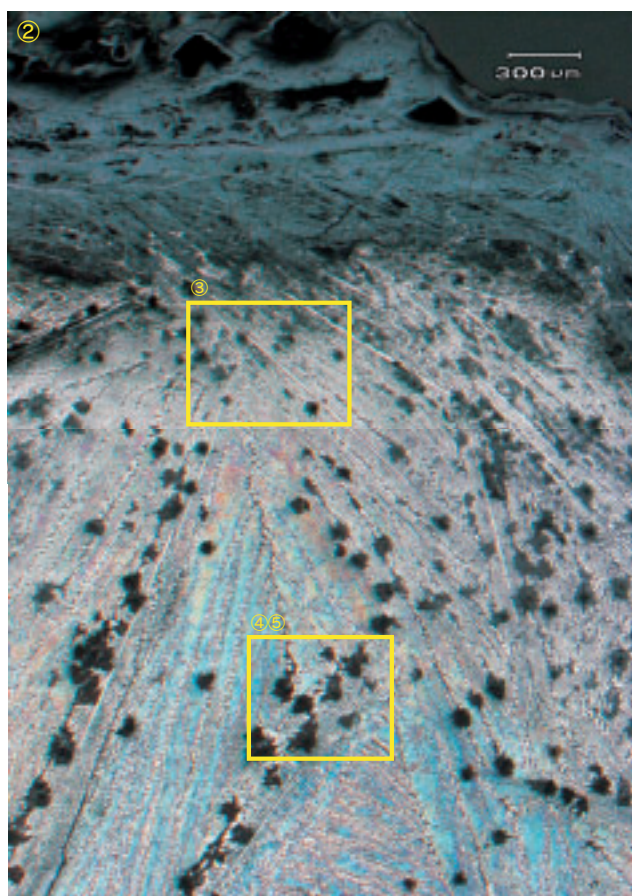
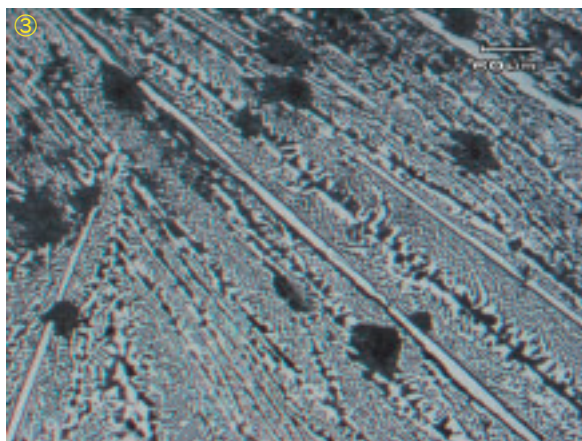
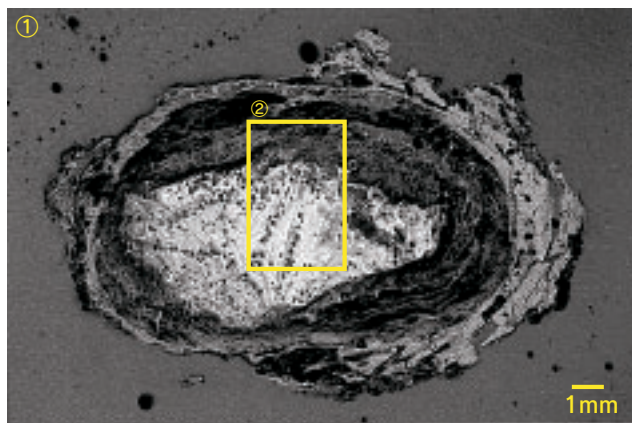


Photo.10 鉄塊系遺物の顕微鏡組織

BAB-10

通風管

①マクロ組織、上側：通風孔部

下側：外面黒色ガラス質滓

②③通風孔部付着滓拡大マ
グネタイト

④⑤黒色ガラス質滓部分拡大、中央：微小金属鉄

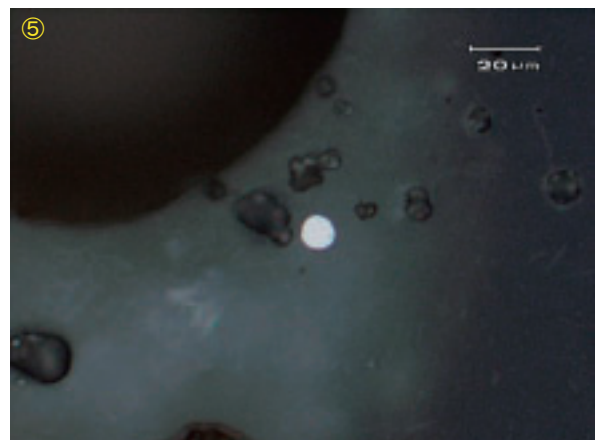
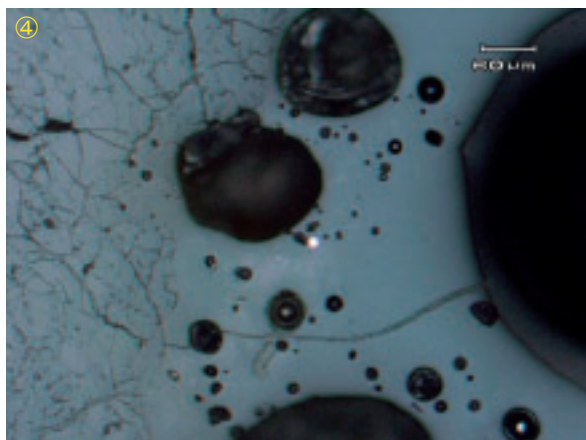
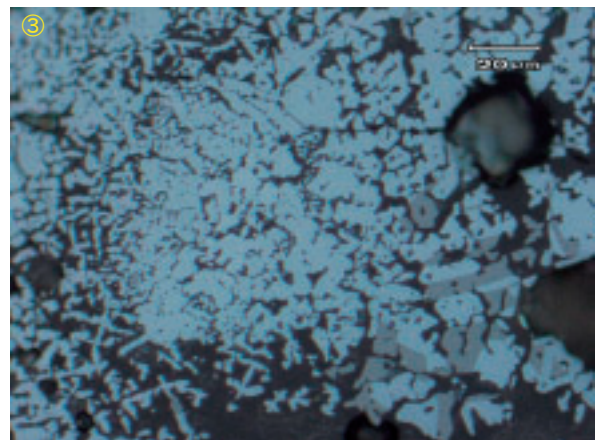
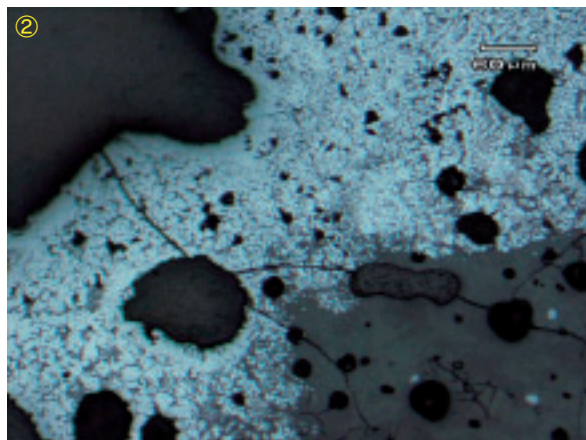
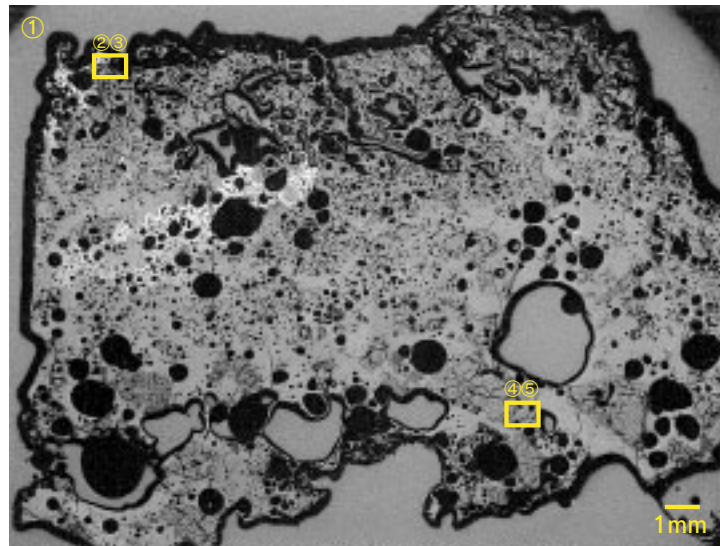
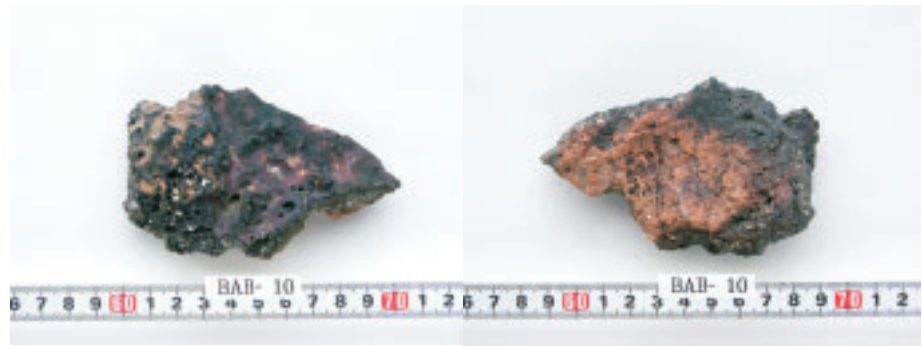


Photo.11 通風管の顕微鏡組織

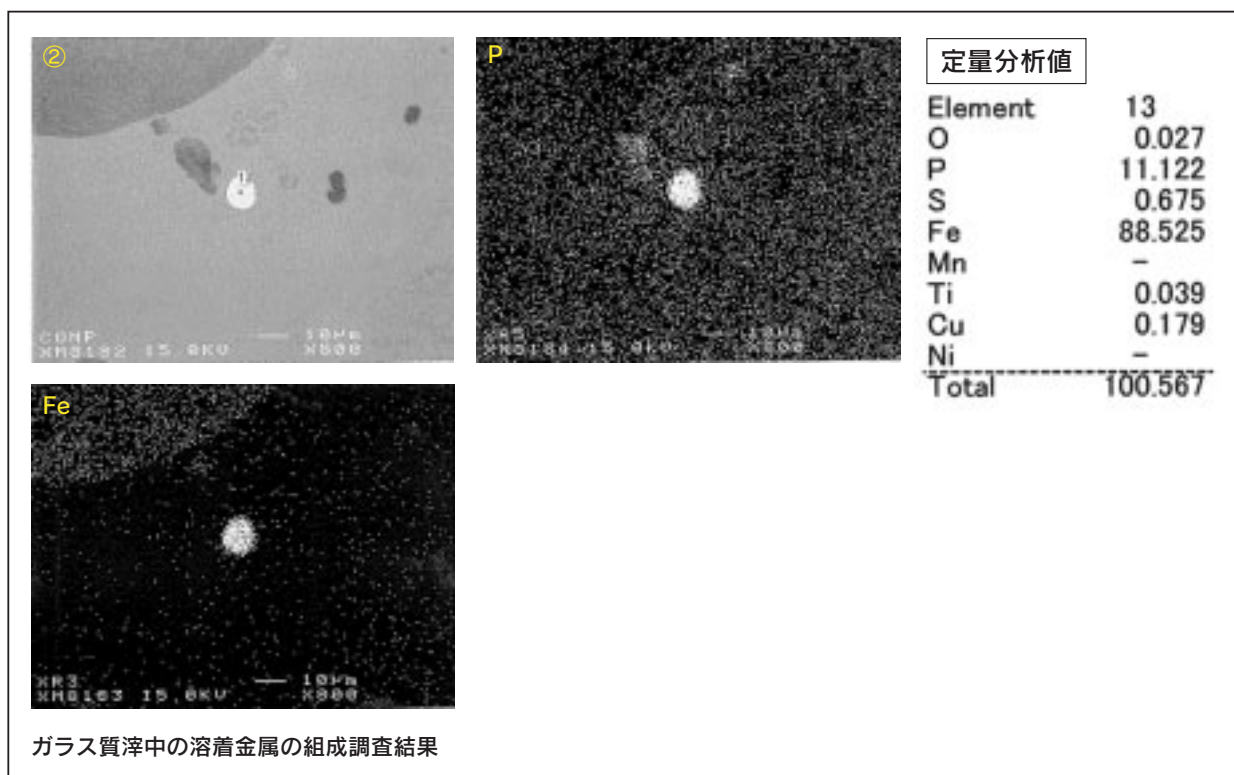
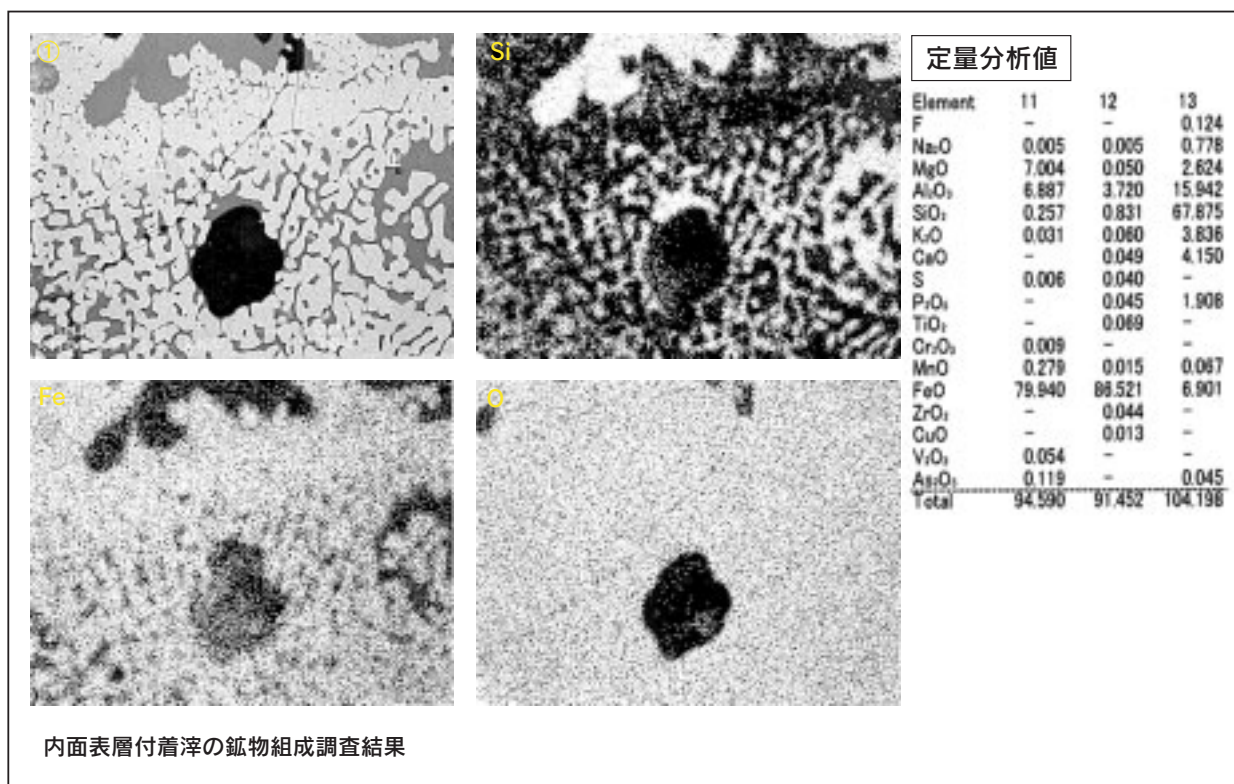


Photo.12 通風管（BAB-10）のEPMA調査結果

BAB-11

炉壁

①マクロ組織、内面（左側）：黒色ガラス質滓二層、補修痕か

外面（右側）：炉壁胎土

②～④ガラス質滓部分拡大
マグネタイト晶出

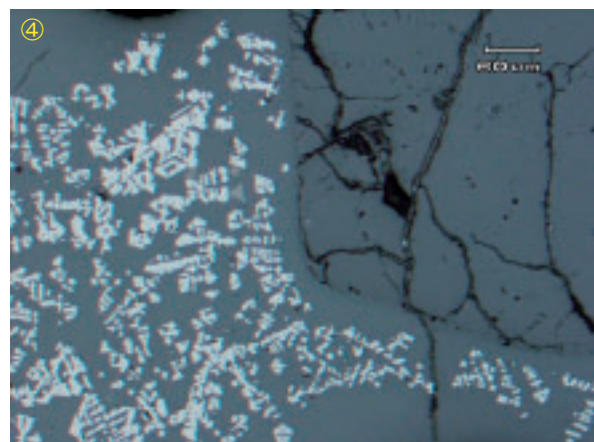
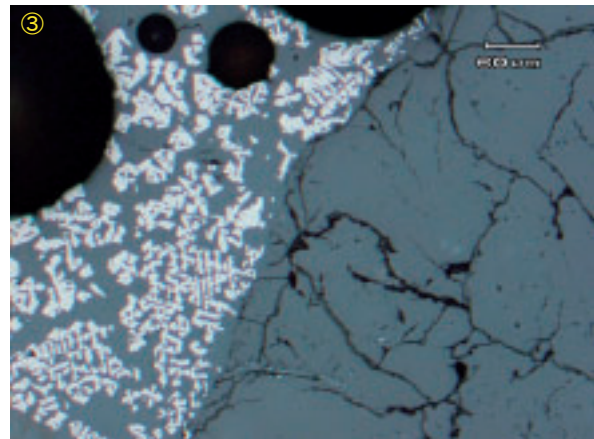
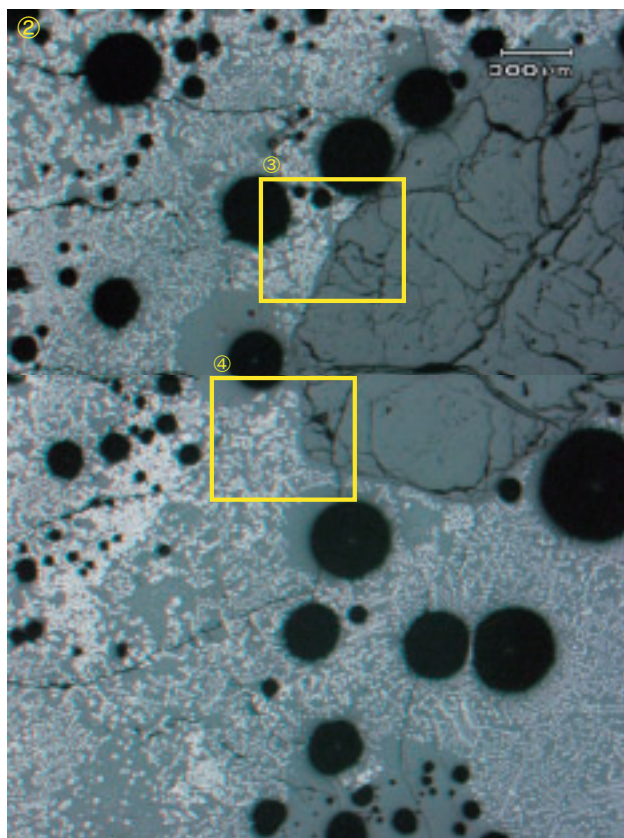
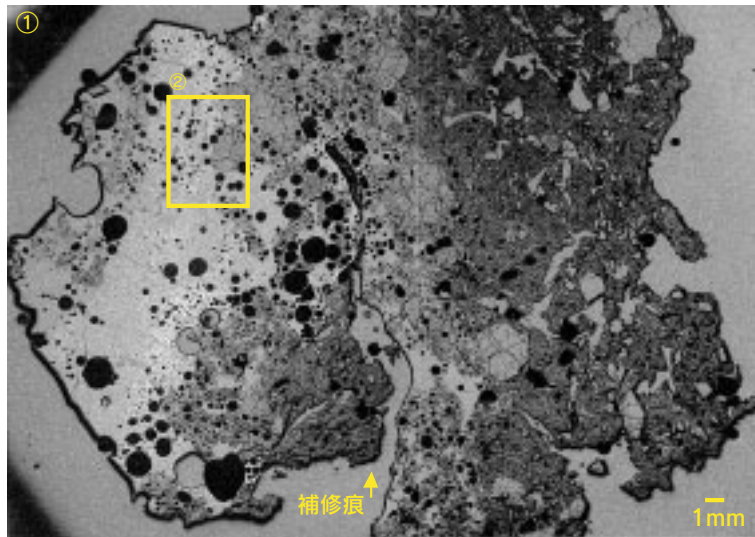


Photo.13 炉壁の顕微鏡組織

昭和初期和洋折衷住宅の移築再生プロジェクト

近畿大学産業理工学部 工 藤 卓

1 昭和初期和洋折衷住宅の移築再生プロジェクト

1-1 はじめに

この報告は、平成14年6月から平成17年3月にかけて太宰府市宰府2丁目の齋藤邸を移築保存し、同時に再利用のための修理修景を計ることを目的に実施された「昭和初期和洋折衷住宅の移築再生プロジェクト」の記録である。

1-2 プロジェクトの経緯とその歴史的文化的価値

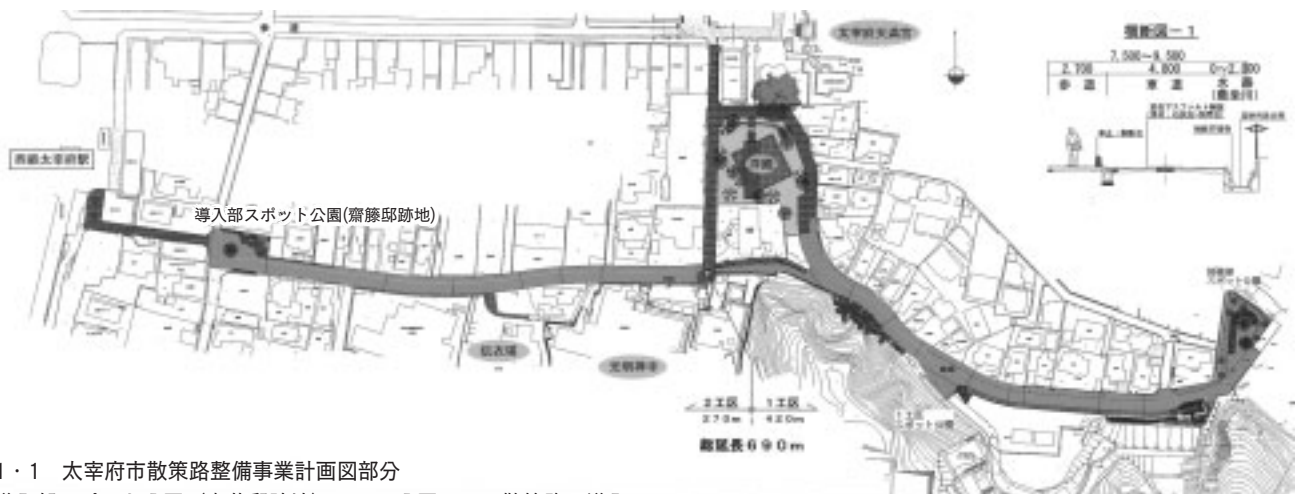
プロジェクトは、九州国立博物館（平成17年11月開館）の建設に先立って、西鉄太宰府駅からの「太宰府市散策路整備事業計画」に構想されたスポット公園用地確保のための要移転物件対象となったことがはじまりである。また丁度この時期に、齋藤家では太宰府市の整備計画の動きとは全く別に、当時空家となっていたこの住宅の改修計画の検討が行われていた。偶然にもこれら双方の計画時期が折よく重なりあったことが、このプロジェクトを景観まちづくりの一環として推進する力となった。さらに、この計画を住宅の保存再生計画として意味あるものに近づけた要因は、住宅の位置する前面路に沿ってわずか東20mに齋藤家が代代所有してきた菜園（移築当時は貸駐車場）が移築先の敷地として用意できたことによる。

齋藤邸は、太宰府天満宮に至る旧街道（錦町通り）と、歌枕にも詠まれる藍染川に沿った小路（浦町通り）が丁字に交わる角地にあった。昭和2年から4年にかけて建築された木造瓦葺き2階建て住宅で、玄関脇には洋窓を付けて西洋下見板を外壁に張った洋風の応接間を設け、主座敷と奥座敷には南面する庭があり、中廊下と台所・食事室を北側に間取りする、いわゆる

大正から昭和初期にかけての都市型文化住宅にみられる和洋折衷型住宅の特徴を見せている。景観的には、藍染川が流れる南に正面を向け、西の錦町通りに勝手口を設け、黒瓦の屋根と黒漆喰の外壁が複雑に重なる外観を表していた。さらに南と西の道路境には屋根付き板塀を廻し、庭園にマキなどの景観木を植栽するという角地の屋敷型住宅形式を意識した造りとなっていて、移築のために解体されるまでその建築当初の外観をほとんど変えることなく、地域に親しんだ景観を形成していた。

太宰府市の史料によれば、この住宅が建つ敷地一帯の地名は「溝尻」と呼ばれ、北側の三条地区から太宰府の町並みを流れてきた溝がこの付近で藍染川と合流して溝が終わることから付いた地名であり、江戸時代には、構口という宿場の境を示す施設があったという。また、市の文化財課によって行われた移築後の屋敷地発掘調査では、平安時代から江戸時代にかけての建物跡や井戸が見つかった。さらに、現在の道に沿うように、平安時代終わり頃の石積みを施した南北に続く溝も発掘され、この周辺の土地区画がその頃に行われたことが判ったという。

江戸期後半のこの屋敷地は現在よりもっと大きな区画となっていたようで、この住宅が建てられる以前には齋藤家の初祖である齋藤秋圃が住んだ屋敷が建っていた。秋圃は、秋月藩御用絵師として活躍し、この地に隠居してから太宰府のにぎわいを「博多太宰府屏風」に描いている。秋圃から現在まで継承されてきた齋藤家のこの地での住居景については、このプロジェクトに寄せた当時95歳になられた齋藤孝俊氏の手記に詳しい。太宰府に根ざして歴史を積み重ねた生活風景の史料として貴重であり、齋藤家の許可を得てその一部を次に引用する。



1-1 太宰府市散策路整備事業計画図部分

導入部スポット公園（齋藤邸跡地）：この公園には、散策路の導入部として重要な機能を付加させる。みちの「入り隅」を整備し、待ち合わせ場所として居心地の良い空間を造ると共に、以前存在した齋藤邸を連想できる整備を行う。西鉄太宰府駅から、光明寺方向への見えがかりに留意し、光明寺さらには国立博物館の道程を予感させる場とする。太宰府市都市整備部建設課「散策路整備事業の概要」（平成16年12月）より抜粋。

太宰府の家の移築に当って

平成14年8月吉日

齋藤孝俊記す

太宰府の家

私は幼少の頃、太宰府に住んでいた祖母スミの住まいによくあずけられた。祖母は、躰が厳しく、茶碗の持ち方やご飯を食べる時のマナーまで、例えば、肘をはって食べると叱られた。私の父の弟や妹達は、お互いの挨拶が丁寧で、まるで他人同志が挨拶しているように見えた。朝の洗面後、神棚に灯明とご飯を上げ、仏壇の前に正座して、祖母が木魚を叩いて、お経を唱えるのを、手を合わせて聞いた。その後、次の間で各々が食膳の前に座って挨拶の後、箸をとった。

奥座敷は広くて、10畳近い床の間のある畳敷きで、書院の反対側には互い違いの棚とその次が仏壇になっていて、反対側には襖が並んだ内側は物置になっていた。座敷の庭側には、一間廊下の板張りがあって、雨戸を立てるようになっていた。広い庭には、向いに石段二、三段上って二階建ての白壁の蔵が上窓を開いたままで建っていて、中には小作米を入れる戸櫃があった。私は、時タイタズラがすぎると抱えられて、この米粒の山の中にほうり込まれた。白い蔵の右は、築山のように高くなっていて、柿木や、もみじ、つつじなどが植えられていて、裏木戸がつづいていた。

座敷前の広い庭は、右に水のない池状の凹地があって、長円形に囲むように、つつじが植わっていた。母屋から、この池に沿って「く」の字形の板張り廊下があり、庭側は吹きぬけ、反対側は壁になった長い廊下で、便所につながっていた。夜はこ

の廊下を通して、手燭にロウソクを灯して便所に行かねばならないので、怖かった。

蔵の下、左側には、屋根つきの深い井戸があって、滑車で網の両側に水くみの桶がぶら下がっていて、水を汲んだ。この水は、生水では、決して飲むではならないと云われていた。昔の藍染め川の水系で隣近所の井戸水とつながっていて、伝染病が発生したことがあったと云う。井戸の周囲は洗い場になっていて、座敷側とは植木で境いされ、炊事場には戸を開いて入っていた。

座敷の次の間は、4畳半の畳敷きで、玄関の6畳敷きの間が続いていて、街道に向かってガラス戸のある明るい部屋であった。街道に面した所には、隙間のある格子が立っていて、次の間のおばあさん専用の長火鉢の位置からは、外の様子がよく見えた。中の間からは、炊事場の土間にも降りられたが、低い二階にも上がった。二階には、機織り機や糸車が置かれていた。玄関の間の右は、土間に降りて、板戸をくぐれば街道に出られた。

この家は、秋圃の次男である梅圃の長男・文山が、医者になり、太宰府で開業し、その妻スミ（私の祖母）と一緒に建てたものである。文山は、患者から結核を感染し、50歳の初頭で病没し、その長男の孝弘は医学校を卒業して、後に九州大学病院となった前身の福岡県立病院の内科医として勤務していた。文山とスミの間には、長男孝弘の次に妹チサとレキ及び末の男子として護邦（モリクニ）の4人の子供をもうけた。サチは裁判官と結婚し、後に長崎地方裁判所長を経て、福岡市で弁護士を開業していた。末弟の護邦は、京都帝大医学部卒業後、満鉄の吉林病



1・2 齋藤邸移築前の溝口から角地の齋藤邸を見る。(写真：城戸康利)



1・3 齋藤邸移築後の溝口から跡地スポット公園を見る。

院長となっていた。ただ一人、レキは結婚せずに、太宰府の祖母の許に同居していた。太宰府の家の小作人であった伝三郎の息子が、大工の棟梁になったが、これを機会に太宰府の旧宅に代わる立派な新築の家を建てさせて欲しいと私の父・孝弘に切願した。父は郷里に錦を飾りたいという願望があったので、この棟梁に万事を任せて贅を尽くした新築を建てることにした。祖母は反対したが、父が説得して、新築が完成した。祖母スミは、叔母レキと2人で、この家を守りつづけて90歳の生涯を終えた。

第二次世界大戦で、下関の医院も自宅も共に焼失したが、宰府の家は、残っていたので父母は戦時中ここに住み、終戦の年の3月に父・孝弘は72歳で死亡した。その4ヵ月後の7月下旬に6年振りに私が戦地から帰国して、母と妻と6歳になっていた息子仲道の3人と再会することが出来た。これも太宰府にこの家があったことで、感謝した次第である。思うにこの土地には92歳まで画筆をとった秋圃が、その子の梅圃と共に住んでいた家があって、孫の文山が医家としてこの地で開業した後、その家を建て替えたものであろう。秋圃、梅圃、文山、孝弘、孝俊とこの土地を継承してきた。将来も次々に受け継ぐようにして欲しいものである。このカド屋敷の土地は、市に道路拡張のために収用されたとしても、それに代わる昔の畑の自己の土地に、屋敷が移築されるのであれば、同じ土地として、継承しなければならない。

1-3 景観の保存修景

地域の歴史的な建造物や景観などの「保存」や「修復」の再

生デザインは、今後の都市景観の骨格形成に結び付く重要な課題である。再生デザインの目的は、歴史的文化的に価値ある景観を地域固有の「文化景観」として見極め、積極的に「継承・活用」を図って未来に引き継いで行くことである。「文化景観」は、単に建築の外観のみから映し出されるものではなく、歴史的に形成されてきた心地よい環境づくりや、人々の暮らし方を含めた地域社会が醸し出す生活の風景そのものである。

このプロジェクトは、「保存」と「修復」の実践として、太宰府天満宮周辺地域の日常風景の一部となってそこに存在し続けてきた和洋折衷住宅を、将来の登録文化財指定が可能となる「文化景観」の継承として住み続けていくための移築再生を取り扱っている。

近年の都市デザインや環境デザインは、ようやく「修復」のデザインのなかに未来の新しい生活文化を生み出していく理念を定着させるようになってきた。今後、地域の景観を形成する自然や文化遺産を修復することで、それらの持続的な活用を図り、地域の文化的期待に応える景観ストックの積み重ねを実践していく必要がある。

1-4 移築再生のデザインコンセプト

歴史的風致が激しく変化してやまない近年の太宰府の景観のなかで、この住宅が今日まで維持継承されてきたことは、太宰府の「文化景観」として十分に認識されてきた証であろう。長い歴史の中で、それぞれの時代の住宅が世代を超えて緩やかに変化していくことが、地域の中での望ましい景観の成長であるとするれば、この住宅の移築再生プロジェクトは、地域の景観と



1・4 角地に建つ移築前の齋藤邸



1・5 散策路整備前の藍染川に沿った浦町通りから移築前の齋藤邸を見る。

生活文化にとって意味がある。

したがって、本プロジェクトのデザインコンセプトは、第一に、解体移築前の建設時の住宅の構造と意匠・庭や塀、景観木を含めた景観そのものの継承を実現することである。第二には、変えるものと変えないものを見極め、日本の伝統的な住宅文化を継承発展させる独自の新しい現代の住宅文化を再構築することである。

1-5 解体移築の経過

木造2階建て瓦葺き233.99㎡の本住宅の解体は、平成15年4月から6月にかけて、すべての部材の再使用を原則として十分な作業時間をかけて行われた。住宅設備の撤去工事が先ず行われ、次に、天井、床の間、飾り棚、建具・造作、床、屋根瓦の順に解き外された。その後、塗り壁と竹小舞を取り払い、最後は小屋梁・牛梁など和小屋組みの上部木構造から順次に柱梁材の軸組を解いていった。

これら一連の解体は、後に移築再生を施工する大工職の手で行われた。解体と再生は連続した建築行為であり、数えきれないほどの木造部材の組合せは、精度の高い部材管理番付と解体の実態現場を経ないと掌握できないと考えたからである。特に木材の仕口や継ぎ手の解きと、再度の建築組立には細心の注意と大工の技術を必要とする。天井板を押さえる竹釘の一本一本も再生時には貴重な部材となる。これら移築再生の大工技術は、伝統的な木造建築文化を継承する手段として守り育てられなければならない。

解体を終えた段階で、柱や天井材など化粧材のほとんどが、

台湾ヒノキ材であることが分かった。床柱や飾り棚には、シタンやカキ、クワなどの銘木が使われていた。柱間の基準寸法は1980mmの京間である。これら選び抜かれた木材の組合せや基準寸法の設定もまた伝統的な木造の文化として貴重である。

地域になじんだ景観要素として、門と板塀も移築再生が可能となるように解体された。マキやソテツなどの主要な景観樹木は仮移植し、基礎石や庭石も符牒を付けて仮移設した。

1-6 角地の住宅を旗竿地に移築再生する

地域の人々から長く親しまれた角地の住宅景観を、規模も異なる旗竿地に移築再生することは、本プロジェクトでは最も難しい計画判断を要する関心事であった。前面道路と旗地の間には奥行きのある竿地が存在することから、本住宅の外観が奥深くに見えることになる。竿地のデザイン次第では、継承すべき景観の質が変わることになる。ただし、敷地の向きが角地と同じ方位の関係にあることは、伝統的な住宅の文化となっている南面重視の間取りと庭の位置取りを変えずに済むことになる。

移築再生主屋の敷地への配置は、竿地を通る玄関までの露地の軸上に玄関が正面となるように位置と向きの調整を行っている。そのため、1階東端に位置していた伝統的な住宅文化の一つである座敷奥の洗面所と廁の空間は切除せざるをえなかったが、その幅員を調整することで、敷地西端に勝手口に通じる裏路を確保できることになった。

1-7 昭和初期の和洋折衷住宅の文化を再構築する

住宅が建てられた昭和初期の住宅文化を表している建築外観



1・6 西鉄太宰府駅から続く小路の正面に建つ移築前の齋藤邸



1・7* 齋藤邸跡地に整備された小公園



1・8* 小公園に整備された史跡説明サイン

と、南側に配置される表向き室の玄関、洋間、主座敷、奥座敷、さらに2階の表向き室は、腐食や細材のため再利用できない部材を代替の新材に取り換える以外は、当初材をもって修復することを原則とした。

玄関は、間口1間半で入母屋屋根を構え、縦格子戸と箒欄間を建てている。踏み込み土間には菱形の人研ぎ石板を敷き、台湾ヒノキ材の式台と3畳間の柱間には舞良戸と明かり障子が建つ。この玄関は本住宅の象徴的な空間であり、屋根瓦も含めて可能な限り当初材を用いた修復を行っている。

玄関脇の応接間として造られていた洋室は、オリジナルな室内意匠を尊重したまま書斎に転用している。プラスター塗の壁と天井は当初の形状に修復し、床はチーク材で張り替えた。他の内装は、大正・昭和初期の洋風文化住宅の空気を表せるように、カーテンはウィリアム・モリスのデザイン生地を、ペンダント照明はアール・デコスタイルのグローブを折んで室内表装を新調している。さらに、勝手口脇の付室を書斎用の書庫に改修し、その裏手ホール側には住宅用エレベータを新設した。

10畳敷きの主座敷は、床の間と付書院、飾り棚、長押の座敷飾りを付け、出隅柱1本に支持された広縁を廻している。それらの座敷意匠と南面の庭を見晴らせる開放的な空間構成は、典型的な和風本座敷となっている。竿縁天井が張られた天上高は3.15mと高い。再構成にあたっては、襖を除く全ての座敷構成部材に洗いをかけ、わずかにオイルをしみ込ませて経年の風合いを損なわないようにしている。聚楽塗りの壁色は元の重厚な黒色から薄ネズ色にあえて塗り替えている。保存再生のデザインではあっても、住宅の色彩などは現代の感覚に合せて改修し

てよいと考えたからである。襖はこれまで数度の張り替えがあったと思われ、復元は難しく、今回は日本の古典的な色彩染めの絹地を張った建具に新装している。

2階では、和室8畳間が2間続く座敷空間を、板の間の広間に改修することにした。畳を外して床全面にウオールナットの板を張り、床に座る座式生活と椅子座式の立ち居振る舞いが共用できる住まい方を提案している。無垢の厚板仕様のウオールナット材の木質感は、やや高目の天井高（2750mm）の伝統的な座敷の室内意匠によく映え、彫り欄間や聚落塗り壁とも調和を見せている。なお、北の間の柱間装置で紫檀の床柱が付く床の間・飾り棚と南の間の柱間装置の配置を逆転して取り付け、さらに北の間に取り付けた一間幅の床の間地板を机甲板に転用している。伝統的な日本の木造住宅の改修でもっとも自在に創意工夫して造られてきたのがこの柱間装置であり、これらも現代の生活スタイルに合せて創意工夫されてよいと考えた。他にもウオークインクローゼットの増築や押し入れを改造したトイレの新設、エレベータの新設などの改修も行っている。ただし、南正面からの外観見えがかりには改修による変化が表われないように細心の注意を払っている。

1-8 中廊下と北側日常空間を改修する

1階北側に間取りされていた、勝手口、台所、食事室、トイレ、浴室などの日常頻繁に使用する裏向き室は、柱梁の軸組の位置を変えずに構造補強したうえで、最新の設備機器を備える機能空間に改修することにした。住宅を長年にわたって使い続けていくためには、このような住宅設備が伴う空間は順次更新

していく必要があり、その空間のデザインも時々の生活スタイルを反映した改修を重ねていくことが肝要である。

リビング、ダイニング、台所を合わせた面積42.64㎡、天井高2.950mmの空間ボリュームは、伝統的な木造住宅の軸組構造が自由な改修に向いているからこそ実現できた空間である。北側開口部には天井一杯までの縦繫明かり障子而建て、外部テラスと無段差で繋いでいる。床は、明るい色調の無垢のチェリー材を張り、壁と天井は珪藻土を塗って仕上げ、視覚と触覚に柔らかさを与えている。これら一室化されたりリビング・ダイニングと、勝手口、トイレ、風呂が並ぶユーティリティ空間とは、大型の間仕切り収納家具を用いた空間の分離を図っている。収納家具の扉は、日本の伝統的な朱色に似るボンベイエローで塗装し、新設した天窓の光で鮮やかに見せている。天井に配列したウォールウォッシャー型ダウンライトの光もまた、この扉の赤を引き立てている。また、背後の廊下には、大正や昭和初期の文化住宅の空気を感じ取るインテリア要素として、緑と風をモチーフにした天井一杯までのステンドグラスをデザイン制作してはめ込んでいる。

1-9 快適な住宅設備をデザインする

この住宅の寸法的な特徴は、京間寸法を基準として、1階床高と2階までの階高が一般住宅と比較して高いことである。そのため階段が急勾配となっていることから、今後の日常生活の上り下りの利便と安全を考慮して、小型ホームエレベータを新設した。

リビング・ダイニングと奥座敷8畳には、最新の省エネタイ

プの輻射冷暖房設備を設置した。この設備の放射面からの熱容量は緩やかなため放熱面積を大きく必要とするが、逆に、機器全体が縦格子状にパネル化されているため、視線を遮らない間仕切り装置として使える。EVホールとリビング・ダイニングの境には、幅3m、天井一杯までの白い格子パネルを熱放射と間仕切として設置した。このような解放的で天井の高い居室の冷暖房には快適な設備機器であり、改修などの再生デザインによる新しいライフスタイルの住まいには有効である。

1-10 伝統的な木造軸組住宅の構造補強

伝統的な軸組真壁構造の木造は、柱梁と泥壁下地の貫板や小舞によって応力の均衡がとれている。しかし、今回の移築再生では、その応力均衡のバランス設計ではなく、通常行われている許容応力度を確保する構造設計を行っている。そのため、貫板や小舞に替えてステンレスブレースと構造用合板を用いた耐力壁を要所に配することとなった。しかしそれでも座敷広縁の軒の出が大きく、隅柱1本にガラス引戸が建つ極めて開放的な構造であるために、肝心の耐力壁を容易に設置できないことが問題であった。ここでは柱径を太め、床面に火打を用いて水平剛性を高めるなど、建築全体の応力のバランスを良くすることでこの問題を解決している。

基礎については、地盤調査から判断して一般的な布基礎で十分な耐力を期待できたが、床下を防湿仕様に改造するなどの工事を行うために鉄筋コンクリート造のベタ基礎と布基礎を併用した複合基礎としている。

1-11 庭のデザイン

伝統的な住宅の庭は、敷地の向きや間取りと密接な関係にあり、住宅文化を語る重要な修景要素である。南の座敷庭は、灯籠や手水石などの石組やマキの景観木などを移植した観照庭として再構築している。ただし、奥座敷の東端に在った洗面とトイレの空間を敷地幅の不足から切除せざるを得なかったために、縁庭の手水鉢は、玄関脇の庭景として再利用することにした。

この住宅は、床下が高く、庭造りでも要所でバリアフリーの解決が必要であった。勝手口には風雨を避けるポーチを新しく設け、そのアプローチには車いすを使用できるようにデッキスロープの庭を挿入している。さらにそのポーチ越しには、浴室からも観照できるモミジを植栽した坪庭を配置している。

主屋の北側には、リビング・ダイニングの外庭として木製床のテラスを広げ、下草のクマササの中にハナミズキとコブシを植栽した。その背後にはアルミ角波板の境界塀を設けて、プライバシーの保護と日光の反射光を得ている。このテラスは、日常生活で活用する屋根のない自然空間としての奥庭である。

1-12 竿地のデザイン

旗竿地の竿地にあたる敷地には、新築するガレージと倉庫、門庭と玄関路地を修景デザインしている。ガレージと倉庫の形態と配置は、旗地に移築する主屋を前面道路の散策路からどのように透かして見せることができるか、また門から玄関までの余白を主屋に相応しく整えられるかがデザインの課題であった。ここでは、主屋の全体が垣間見えるように建物の高さを低く抑え、屋根と外壁を黒色塗装でまとめ、さらに外壁と天井の間に

透明ガラスの欄間を付けて洋間の窓が見通せるように工夫している。夜間にはこの欄間からのあかりが行灯効果となる。

新設の倉庫は、家財や日常品の収納蔵である。伝統的な日本住宅の「しつらい」のシステムを支えてきたのは蔵の存在とその文化である。本プロジェクトの移築再生の機会に、蔵の持つ意味と利用法を再び提案することは、伝統的な住宅を再活用するための有効なデザインと考えた。

門庭では、地域周辺の歴史的景観に繋がりを持たせようとして、門と板塀、景観木、灯籠を文化的な景観要素に見立てた修景を行っている。板塀から見越す庭園木には、角地の屋敷から移したマキの大木を植えるとともに、太宰府のシンボルツリーとなっているウメの古木を景観木として新規に植えている。

結果的にこの竿地のデザインは、角地の景観を旗竿地に押し込まざるを得ない敷地条件を逆手にとって、ガレージと倉庫を新築したことで、門と主屋との間に適度な奥深い空間が生まれ、新しい屋敷地のかたちを整えることになった。

1-13 まとめ

昭和初期の都市型住宅は、明治末・大正期の中廊下型住宅を受け継ぐとともに、洋風の応接間を玄関脇に付け加えた和洋折衷型住宅をつくり出していた。しかし現在ではこの時期に建てられた本格的な和洋折衷型住宅は数少なく遺されている状況になっている。幸いにもこのプロジェクト住宅は、今回の移築再生工事によって、この時期の住宅様式とその生活文化を壊すことなく、むしろ将来の登録文化財住宅として評価される整備をととのえることができた。

このプロジェクトの目的のひとつが、昭和初期和洋折衷住宅とその背景がつくり出す景観を、地域の文化として継承・育成するデザインを行うことであった。およそ3年に渡るプロジェクトであったが、太宰府市や地域住民のご好意と関係者の熱意で、この所期の目的を達成できた。

もうひとつのプロジェクトの目的は、伝統的な生活文化を継承しながら、現在の住み手の生活スタイルに合せた新しい住空間に再生するというものであった。施主であり住まい主となられる齋藤様には、秋園の代から受け継がれてきた生活文化の再発見に努めてゆとりある新しい生活を工夫していくというご理解をいただいている。新築住宅の場合と異なり、伝統的な木造住宅の再生には、時を経て生き続けてきた空間を活かして未来の新しい住まい方を創造していく楽しみがある。

本プロジェクトでは、伝統的な木造住宅の修復を基本として、地域景観への配慮、多様な庭の配置、蔵システムの再生、木構造補強、床段差の解消や浴室のバリアフリー、通風の確保と輻射冷暖房設備の併用、エレベータの新設、暗さを解消する天窓採光、適切な照明環境、全ての設備の省エネ電化など、現代住宅としての十分な機能性と快適性を備えている。

おわりに、本報告の図面作成は佐野正樹氏、*付写真の提供は藤本健八氏によるものである。謝してお礼申し上げます。

建築の概要：

1. 用途：専用住宅
2. 用途地域：第1種住居地域

3. 建築概要：

- 1) 構造・構法／木造軸組民家型工法
 - 2) 基礎／鉄筋コンクリート布基礎＋ベタ基礎
 - 3) 規模／地上2階、1階階高3,650mm、2階階高3,275mm、最高高さ9,330mm、
 - 4) 面積／敷地597.33㎡、建築236.03㎡
(建ぺい率：39.51%＜60%)
 - 5) 各階床面積／1階177.90㎡、2階70.56㎡、倉庫・駐車場58.14㎡
 - 6) 延べ床面積／306.60㎡ (容積率：51.33%＜200%)
 - 7) 主要外部仕上げ／屋根：日本瓦引掛葺瓦葺、外壁：漆喰塗り、下見板張 (洋室部)
 - 8) 主要内部仕上げ／床：畳敷、板敷 壁：聚楽塗り
天井：台湾ヒノキ竿縁天井、プラスター (洋室部)
 - 9) 主要冷暖房／輻射式冷暖房＋パッケージ型エアコン
 - 10) 主要家具／間仕切り・台所：オリジナル設計制作
ダイニングテーブル：Arflex リビング家具：Cassina
- #### 4. 施主／齋藤 仲道
5. 所在地／福岡県太宰府市
 6. 設計・監理／近畿大学 工藤 卓
 7. 設計協力／AL architects 佐野 正樹
 8. 構造設計／坂田一級建築士事務所 坂田 寛
 9. ステンドグラスデザイン 工藤 啓子
 10. 家具デザイン制作／森岡 陽介
 11. 工事施工／大庭建設株式会社 大庭 敬詞
 12. 工事期間／平成15年4月～平成17年5月

2 齋藤家画稿について

橋富博喜（近畿大学産業理工学部）

太宰府齋藤家の画稿類の存在をはじめて知ったのは、2003年春のことであった。齋藤家の移転設計を担当されていた近畿大学産業理工学部の工藤卓先生よりその存在を知らされ、同年4月、建築を請け負う建設会社の倉庫に保管されている画稿類をはじめて見る事ができた（図2・1）。おおよそ1メートル四方の箱の3分の2ほどに、ほとんど未整理のまま画稿類がのこされていた。おそらくここ数十年は手つかずの状態であったことも想像できた。そこでとにかくこの資料を預かって、時間のあるときにすこしずつでも調べていこうと考え、わたくしの研究室に運び込んだ。しかしながら糊がはかれ、それぞれが断片となった作品整理の作業はなかなかはかどらず、2004年度に研究室に配属になった学生の卒業研究としてとりあげ、彼女たちの力を借りてようやく調書を作り、写真撮影を行うことができ、2005年の春に写真付きの目録（DVD-R）としてまとめることができた（注1）。その数、断片を含んで1735件をかぞえる。以下これらの資料をもとに齋藤家およびその画稿について、簡単に紹介してみたい（なお作品名のあとの番号は調査番号である）。

画稿

いうまでもなく齋藤家は、秋月黒田藩のお抱え絵師齋藤秋圃を初祖とし、その三男梅圃が跡を継ぎ江戸時代後期から明治初年まで、絵師としての画系をつないだ家系である。

齋藤家にいまのこる画稿類は、前述したように1735件をかぞ

えた。多くは書画、およびその断片であるが、なかには、日記の写し、住所録、備忘録、書簡（およびその写し）なども含まれている。書画には、本画（完成画）の下絵というべきもの、運筆や彩色の稽古のためにえがいたもの、さらには今でいう写生（スケッチ）などもある。またこうした画稿には、区分をあらわすイロハの記号や番号、もとの作品の作者やいま写している筆者の名前、備忘のための色注や場所名など、多くの墨書が記され多くの印章が捺されていた。そのなかで齋藤秋圃と梅圃の区別をすることはむずかしい。すなわち「秋圃（?圃）」の墨書や印章のある作品をすべて齋藤秋圃作とするにはためらうところが多いのである。たとえば《双鶴図》（00439、図2・2）や《シュロ図》（00801）にみるように、「?圃」「梅」の文字が練習するようにたくさん記されている作品もあるし、《松に孔雀図（断片）》（01250）では「梅」を削字して「秋」の文字を書き加えている（図2・3）。また印章も手元があればいつでも捺すことは可能であるから、「?圃」の朱文方印が秋圃筆の決め手にはならない。そこでこうしたことを念頭にかけて画稿類をみてみれば、おおよそ秋圃の作品であろうかと考え得るのは3点のみになる。すなわち秋圃の作品とほぼ断定できるものは《筍図（断片）》（00855、墨書に「秋圃蔵」、表紙に「鍾馗大帳」（鍾馗台帳か）とある《鍾馗図冊》（01642、墨書に「癸所蔵」、「秋圃」の印章2顆、図2・4）、《植物図冊》（01649、スケッチの合間に「秋圃」の墨書）の3点にとどまるのではないかと考えている（注2）。ただ画稿と本画の関係でいえば、現在齋藤秋圃作とされ、いずれも福岡市博物館が所蔵する《遊行図》、《馬上人物図》や個人像の《菊慈童図》の下絵

画稿と思われる作品がのこされている。これらの下絵画稿を秋圃の筆とするのか、あるいは本画を秋圃以外の手になるものとするのか、もうすこし慎重に検討する必要があると考える。

齋藤秋圃の三男齋藤梅圃は、明治8年（1875）に行年60歳で亡くなっている。とすれば生年は文化13年（1816）ころになる。画稿中梅圃の墨書や印章のある作品は89件を数える。その最も早いものは《陶淵明帰去来図》（00599、図2・5）で文政11年（1828）の墨書がある。梅圃12歳か13歳ころの作品である。梅圃の署名があり年紀も記される作品は、その後文政末年から天保初年にかけて見ることができ、天保末年から弘化・安政年間にかけてはほとんど見ることができず、ようやく安政5年（1858）の《三福神図》（01636）になってふたたび登場する。ただいずれにしても文政年間から幕末までの、おおよその軌跡を追うことができる。そしてとくに集中するのが文政14年（天保2年、文政は12年まで、1831年）である。《布袋図》（00005）など17点を数える。この時期、齋藤秋圃は家督を長男?太郎に譲り（文政11年・1828）、その長男?太郎が江戸にのぼり（天保6年・1835）、そ?太郎出奔により秋月での家名断絶（天保9年・1838）など、齋藤家にとって大きな転換の時期でもあった。この間文政9年（1826年、文政11年以降とする説もあり）太宰府に移り住んでいた、太宰府の地で梅圃に手ほどきしたとも考えられる。

文書記録

いうまでもなく齋藤家画稿類はすべてが初出である。そのなかには、絵画資料とともに文書の記録もいくつか含まれている。



2・1 保管されていた画稿類

これらは、齋藤家の画家たちがどのように過ごしていたかを直接に語るものであり、大変貴重な史料といえる。なかでも現在焼失したと伝えられ、その内容の把握ができない『京遊日記』（天保5年・1834）の写しと考えられる史料《京遊日記》（01715、図2・6）は重要である。その書き出しには「天保五年四月一日早朝天満宮……」とあり、この日妻と梅圃を伴って出立したことが記されている。ひと月あまりの記事しか記されていないが、秋圃、梅圃の旅程中のひとこまを記すものとして大変興味深い。

また文学関係（俳句関係か）の資料を含むと考えられる《覚え書（住所）》（00043）ものこされている。さらに秋圃の交遊関係と思われるものや大阪の歌舞伎役者の名前を記す《覚え》（01720）、長崎関係の住所氏名などを記す《諸國姓名録》（01732、図2・7）、《長崎人名録》（01733、図2・8）もあり、住所録として用いていたことがわかる。さらになお、長崎、筑後、柳川、佐賀の各地の地名がのこる《写生帳》（01734）もある。不明な点は多々のこるが、これらの史料から大阪、長崎、筑後、柳川、佐賀などに知人がいたことがわかる。齋藤秋圃は京都に生まれ、中国・九州を放浪したのち、長崎、大阪、福岡（秋月、太宰府）にその生活のあとを残しており、これらの地名が本画稿中の文書記録のなかにみえることは不思議ではない。今後こうした文字の記録類を解読することによって、秋圃や梅圃の活動期間の空白期やその交遊関係を明らかにすることが可能になると考える。

齋藤家にのこされた画稿類は、おそらく齋藤秋圃や梅圃の活

動から推測すればその一部分だと思われる。そしてその多くが齋藤梅圃の画稿類だと考えられる。ときに秋圃晩年の作品の真贋が問題になるが、そのひとつの解答はこの画稿類のなかにあるかと考えている。文書記録の解読とともに今後も慎重に研究を進めていきたい。

注1. 参加した学生は、大田海、尾田絵梨香、高木美和の3名である。

注2. もちろん墨書がない作品のいくつかは秋圃の筆に帰せることも考えられる。



2・2：《双鶴図》（00439）



2・3：《松に孔雀図（断片）》
（01250）



2・4：表紙に「鍾馗大帳」（鍾馗台帳か）とある《鍾馗図冊》（01642、墨書に「癸所蔵」、「秋圃」の印章2顆）



2・5：《陶淵明帰去来図》（00599）



2・6：《京遊日記》（01715）



2・7：《諸國姓名録》（01732）



2・8：《長崎人名録》（01733）

3 移築前調査

図版解説

- 3・1 東北から見上げる。手前は近年になって増築された台所・風呂・洗面所棟。屋根は居室ごとに小屋が組み瓦が載る。
- 3・2 東南から塀越しに見る。小路（浦町通り）に並んで庭木が景観木となっている。
- 3・3 西北の錦町通りから見る。手前角は風呂・便所など。
- 3・4 南面する門と板塀。移築においてはこれら素材を再利用すると共に、配置や形状、基礎石と道路との位置関係などを再現している。
- 3・5 南面する浦町通り側から見た建物正面。門と塀越しに伝統的な和風住宅に設けられた洋風の応接間が玄関左脇に見える。ここから眺める建物外観は建築当初とほとんど変わっていない。板塀に囲まれた2階家の縁側に並ぶ大きなガラス戸の連続が昭和初期の住宅の開放感を表している。
- 3・6 西の錦町通りから見る。裏玄関を中央部にとり、南端に洋風窓をつけた応接間を、北端に風呂、便所を配置している。屋根をずらし重ねること、建物全体の量感を押さえながらリズムを持たせている。黒瓦、黒漆喰、黒板外壁、黒板塀に経年の風食痕が刻まれた威風を感じる。
- 3・7 主座敷縁側から庭越しに奥座敷の縁側と洗面・廁を見る。この鉤型や雁行型の空間配列は伝統的な屋敷型住居の特徴のひとつである。
- 3・8 座敷の縁側から庭に降りる踏み石。移築直前頃は庭の使用が少なく、他石も混じって本来の石組みとはなっていない。
- 3・9 南主庭跡。庭石や礎石が散在していて本来の庭景ではない。マキやツバキが見える。
- 3・10 玄関犬走り。見切り縁石と基礎石の内小幅をモルタル洗い出し仕様で仕上げている。洗い出しは再利用が難しく、移築時には新規に復元施行している。
- 3・11 浦町通り側の板塀と景観木。昭和初期の建築以来の風景を維持している。
- 3・12 景観木イヌマキ。庭木の代表的な存在となっている。永年にわたって浦町通りの風景の一部となってきた。
- 3・13 景観木モチノキ。常緑高木で、庭木としてよく見かける。本樹は太木過ぎて移植を断念している。
- 3・14 景観木クロガネモチ。庭木や街路樹によく使われる。本樹は移築先の敷地関係から移植を断念している。
- 3・15 ソテツ。玄関脇洋間（応接間）の窓先に、庭木としては珍しく観賞用のソテツが植えられている。移植時にはこれらの位置関係を再現している。
- 3・16 石造り手水鉢。奥座敷の端に厠用として設けられたものであるが、むしろ庭景要素の役割が大きい。移築先では敷地幅の関係から厠を再現できなかったため、玄関先の庭景として再利用している。
- 3・17 奥座敷の縁側ガラス建具戸袋と厠の地下窓を見る。厠前面の庭景の常套として梅雨時が花期にあたり赤い実をつけるナンテンを植えている。
- 3・18 石灯籠（大）。庭景の重要な要素であるが、移築先の座敷庭面積の関係から、門庭に据えている。
- 3・19 石灯籠（小）。日本庭園の重要な要素であり、座敷と庭の見えがかりの関係を踏襲するかたちで据えている。
- 3・20 1階10畳主座敷。床の間、付け書院、飾り棚の柱間装置をつけ、東と南に縁側を廻す。天井高が3.15mと高く、全体にのびのびとした日本座敷である。柱、長押、天井材は全て台湾ヒノキ材を使用し、昭和初期の木造住宅の香りが濃い。聚落壁は黒色仕様であり、ここにも建築当時の色彩感を感じさせる。



3・1



3・2



3・3



3・4



3・5*



3・6*

- 3・21 10畳主座敷に廻された縁側。座敷と庭を繋ぐ緩衝空間となっている。隅の障子を開け放つと庭の石灯笼に目が行く。
- 3・22 台所と食事室の間仕切両面棚。テレビが組み込まれている。
- 3・23 8畳奥座敷の床の間に付けられた花頭窓の奥に廁・洗面所を見る。
- 3・24 洋間プラスター塗り天井を見上げる。天井の四周隅は線形で装飾され、中心には照明具を飾る円形のモールディングが付いている。
- 3・25 2階座敷から南縁側を見る。欄間、大型のガラス戸、手すりの意匠に昭和初期の住宅意識を感じ取ることができる。
- 3・26 2階座敷続き間。右手南側の前座敷に続く左手北の奥座敷を見る。奥座敷の窓からは宝満山や四王寺山などが眺められた。空間の序列からは、2階の奥にあるこの座敷が日本の伝統的な住居のもっとも奥性を感じさせる様式を備えていることになる。
- 3・27 玄関。やや骨太の引き違い格子戸が建ち箴欄間が付く。天井は台湾ヒノキ材を用いた格天井を構成している。
- 3・28 玄関式台。人造研ぎ出しテラゾー四半敷の土間に続いて間口1.5間幅の台湾ヒノキの式台を構えている。式台は近世から続く日本の住居形式の要素のひとつとしてその存在は貴重である。
- 3・29 勝手口玄関。表通りの錦町通りに面している。意匠は正面玄関の重厚な造りと比べてやや細かな作りである。
- 3・30 玄関脇に付けられた洋間の扉。
- 3・31 一階奥座敷の端に設けられた廁と洗面所。屋敷型住居の形式のひとつとして貴重であるが、移築先の敷地幅が不足したため廁・洗面部分は移築再生ができなかった。そのため、台湾ヒノキ材でつくられたドアや天井の用材は他所に設けた洗面・トイレで再利用している。
- 3・32 中廊下。向かって右の南側に座敷が、左の北に台所や食事室が配されている。明治末年から大正、昭和初期までの都市型住宅に見られた住居形式のひとつで、住宅史から見れば貴重である。しかし、現代の住まいへ再生を計る場合は、このままの中廊下型形式では住み難く、移築にあたっては新しい平面計画の工夫が必要である。
- 3・33 作り付け台所小屋。
- 3・34 洋間に置かれた皮張り椅子とモールディング脚の小テーブル。
- 3・35 移築前2階平面図 1:150
- 3・36 移築前1階平面図 1:150
- 3・37 移築前1階床伏図 1:150
- 3・38 移築前基礎伏図 1:150
- 3・39 移築前南立面図 1:150
- 3・40 移築前北立面図 1:150
- 3・41 移築前東立面図 1:150
- 3・42 移築前西立面図 1:150
- 3・43 移築前仕上げ表
- 3・44 移築前2階床伏図 1:150
- 3・45 移築前小屋伏図 1:150
- 3・46 移築前2階天井伏図 1:150
- 3・47 移築前1階天井伏図 1:150
- 3・48 移築前展開図1 1:100
- 3・49 移築前展開図2 1:100
- 3・50 移築前展開図3 1:100
- 3・51 移築前展開図4 1:100
- 3・52 移築前展開図5 1:100
- 3・53 移築前展開図6 1:100



3・7



3・8



3・9



3・10



3・11



3・12



3・13



3・14



3・15



3・16



3・17



3・18



3・19



3・20*



3・21



3・22



3・23



3・24



3・25



3・26



3 · 27



3 · 28



3 · 29



3 · 30



3 · 31



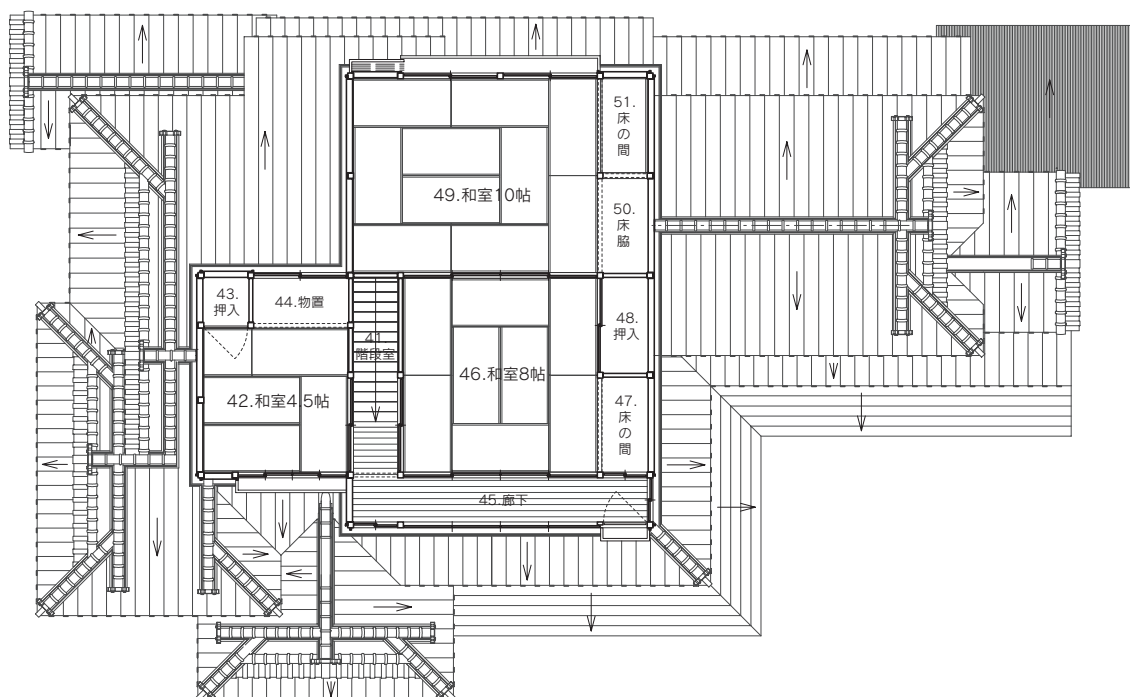
3 · 32



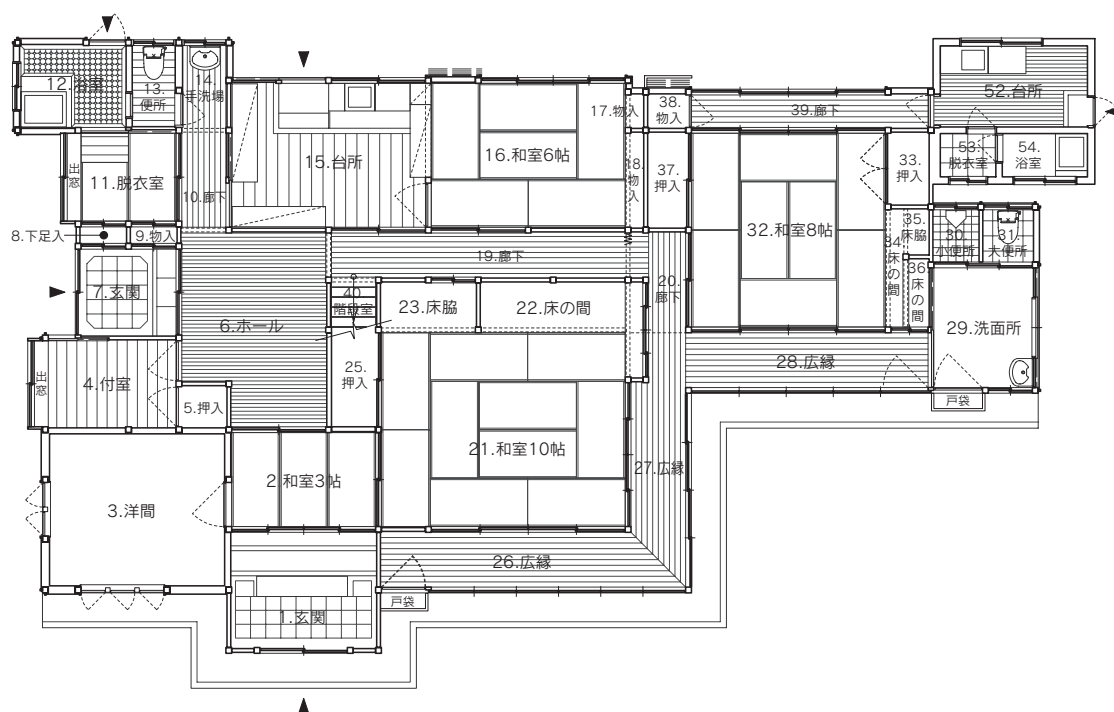
3 · 33



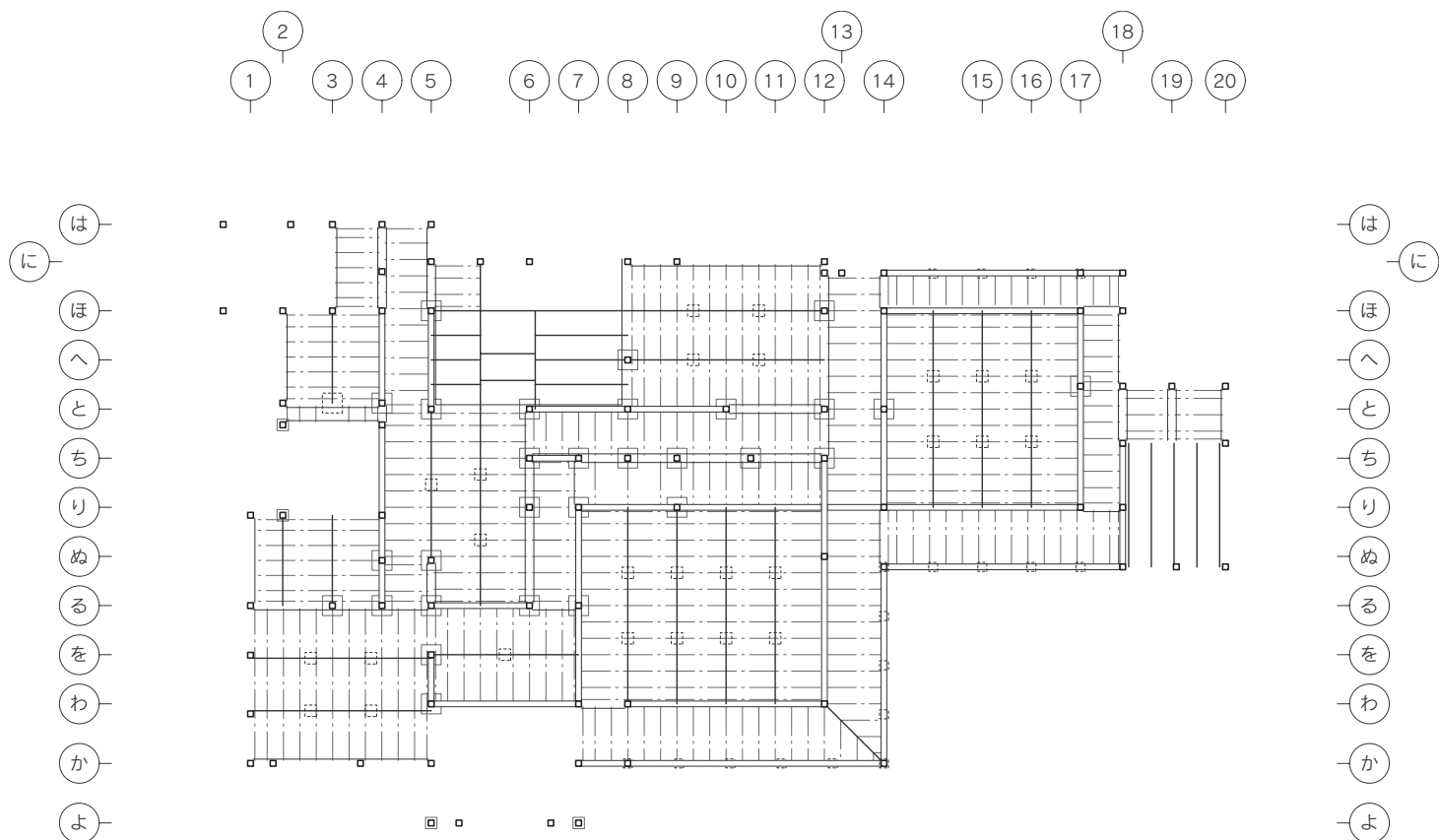
3 · 34



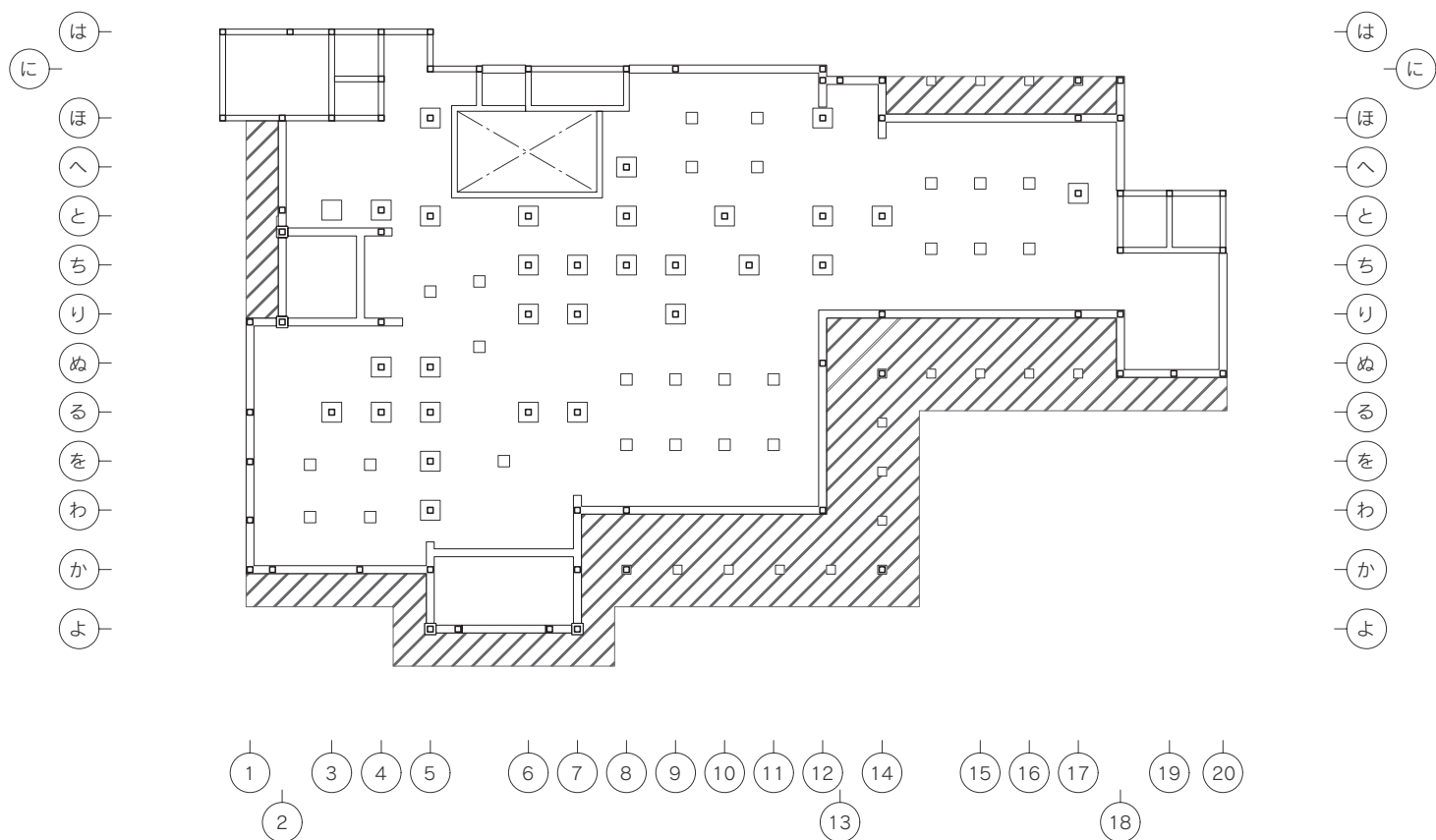
3・35 移築前2階平面図 1：150



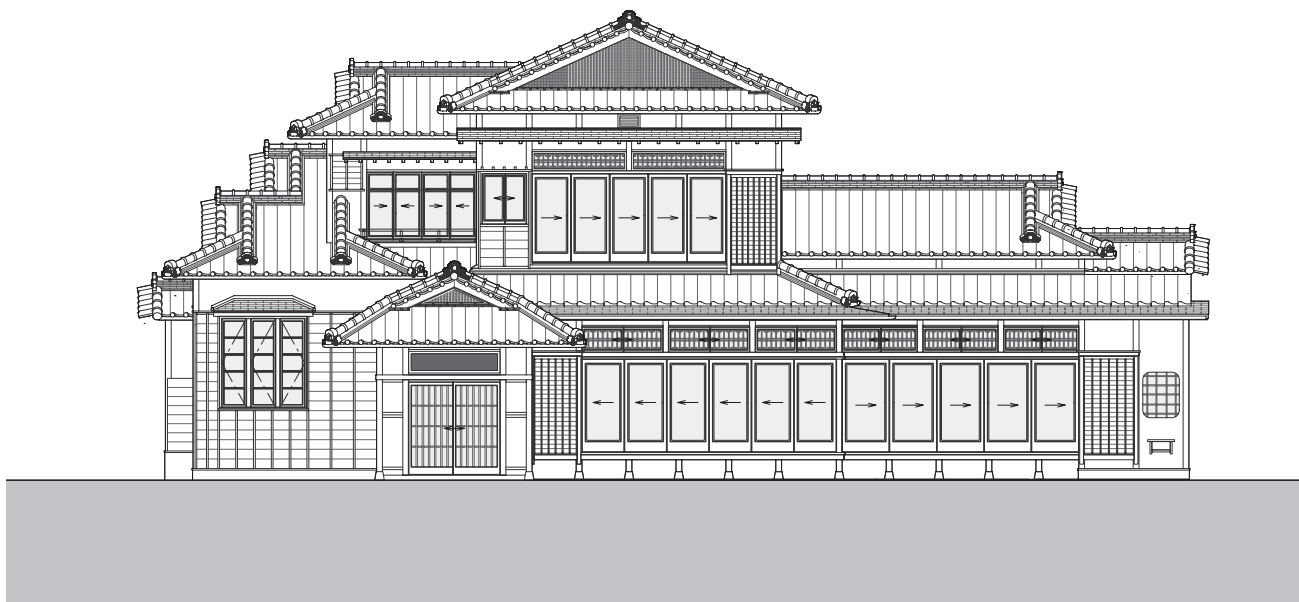
3・36 移築前1階平面図 1：150



3・37 移築前1階床伏図 1:150



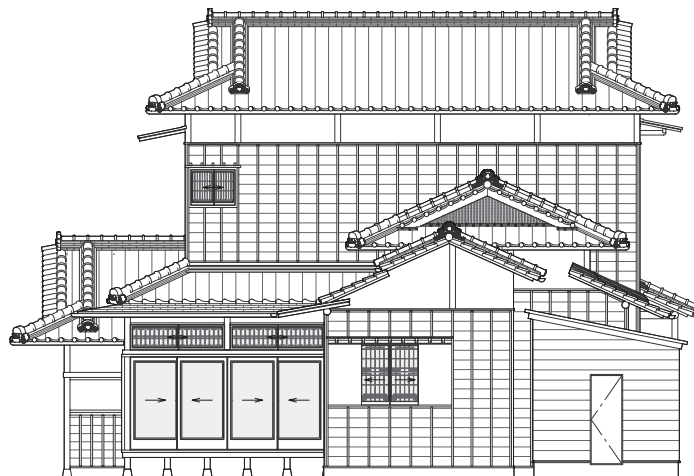
3・38 移築前基礎伏図 1:150



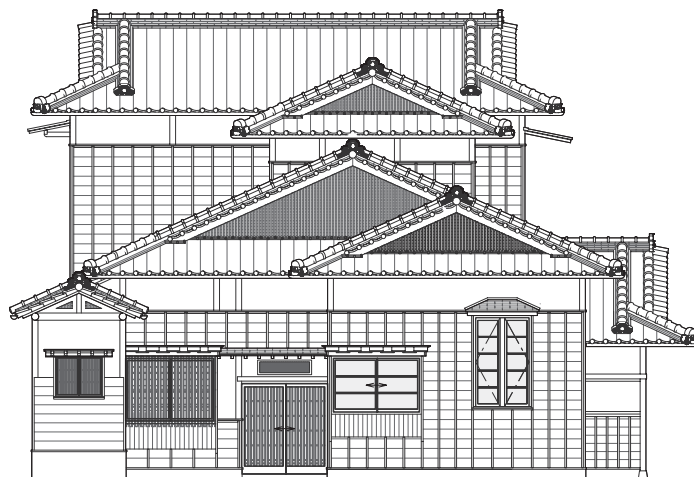
3・39 移築前南立面図 1：150



3・40 移築前北立面図 1：150



3・41 移築前東立面図 1 : 150



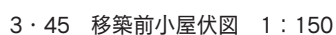
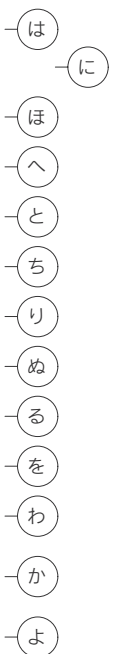
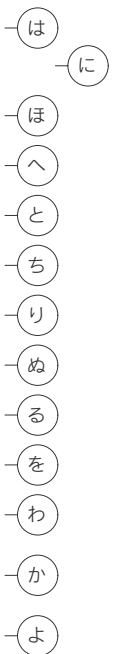
3・42 移築前西立面図 1 : 150

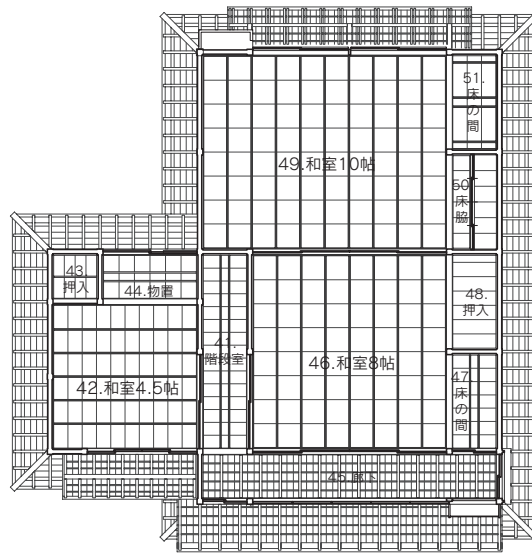
3・43 移築前仕上げ表（太宰府市調査資料）

階別	番号	部屋名称	床	壁	天井	天井高
1F	0	外部	人造石貼(研出し) 厚さ6.0cm			
1F	1	玄関	人造石貼(研出し) 厚さ6.0cm	(真)特殊化粧合板(天然木系)(荒壁下地) (真)羽目板張(荒壁下地) (真)じゅうく壁	格天井	2.85
1F	2	和室3帖	たたみ(上)	(真)じゅうく壁 (大)特殊化粧合板(天然木系)(荒壁下地)	竿縁天井(杉桤張)	2.75
1F	3	洋間	カーペット張(上)	(大)特殊化粧合板(天然木系)(荒壁下地) (大)クロス張(並)(荒壁下地) (大)クロス張(中)(荒壁下地) (大)プラスター塗(上)	塗天井(プラスター塗)	3.15
1F	4	付室	縁甲板張(桧上小節)	(真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉桤張)	2.65
1F	5	押入	縁甲板張(桧上小節)	(真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉板)	2.65
1F	6	ホール	縁甲板張(桧上小節)	(真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉桤張)	2.75
1F	7	玄関	人造石貼(研出し) 厚さ6.0cm	(真)特殊化粧合板(天然木系)(荒壁下地) (真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉桤張)	3.05
1F	8	下足入	板張	(真)しっくい塗(荒壁下地)	杉板天井	1.65
1F	9	物入	板張	(真)しっくい塗(上)	杉板天井	2.40
1F	10	廊下	縁甲板張(桧上小節)	(真)せんい壁(上)	竿縁天井(杉桤張)	2.80
1F	11	脱衣室	たたみ(上) 縁甲板張(桧上小節)	(真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉桤張)	2.55
1F	12	浴室	モルタル塗金鍍仕上 厚さ6.0cm 磁器質タイル貼 他 厚さ6.0cm	モルタル塗金鍍仕上 厚さ10.0cm 内装タイル(150×150) 厚さ10.0cm (真)リシン吹き付(上)	竿縁天井(杉桤張)	2.80
1F	13	便所	フローリング	(大)特殊化粧合板(プリント系)(荒壁下地)	クロス張り天井(並)	2.30
1F	14	手洗場	縁甲板張(桧上小節)	(大)内装タイル(150×150) (ラス下地) (大)特殊化粧合板(プリント系)(荒壁下地) (真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉桤張)	2.45
1F	15	台所	縁甲板張(桧上小節) モルタル塗金鍍仕上 ラス下地	(真)荒壁 (真)しっくい塗(上) (大)特殊化粧合板(プリント系)	竿縁天井(杉桤張)	2.80
1F	16	和室6帖	たたみ(上)	(真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉桤張)	2.75
1F	17	物入	縁甲板張(桧上小節)	(真)しっくい塗(上)	杉板天井	2.50
1F	18	物入	縁甲板張(桧上小節)	(真)しっくい塗(上)	杉板天井	2.60
1F	19	廊下	縁甲板張(桧上小節)	(真)せんい壁(上)	竿縁天井(杉桤張)	2.80
1F	20	廊下	縁甲板張(桧上小節)	(真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉桤張)	2.80
1F	21	和室10帖	たたみ(上)	(真)じゅうく壁 (真)特殊化粧合板(天然木系)(荒壁下地)	竿縁天井(杉桤張)	3.15
1F	22	床の間		(真)じゅうく壁		2.95
1F	23	床脇		(真)じゅうく壁		2.00
1F	24	物入	板張	(真)しっくい塗(上)	杉板天井	0.40
1F	25	押入	合板張(上)	(大)特殊化粧合板(プリント系) (大)特殊化粧合板(プリント系)(荒壁下地)	プリント合板天井	2.6
1F	26	広縁	縁甲板張(桧上小節)	(真)しっくい塗(上)	根太天井	3.15 2.75
1F	27	広縁	縁甲板張(桧上小節)	(真)しっくい塗(上)	根太天井	3.10 2.75
1F	28	広縁	縁甲板張(桧上小節)	(真)しっくい塗(上)	根太天井	3.10 2.75

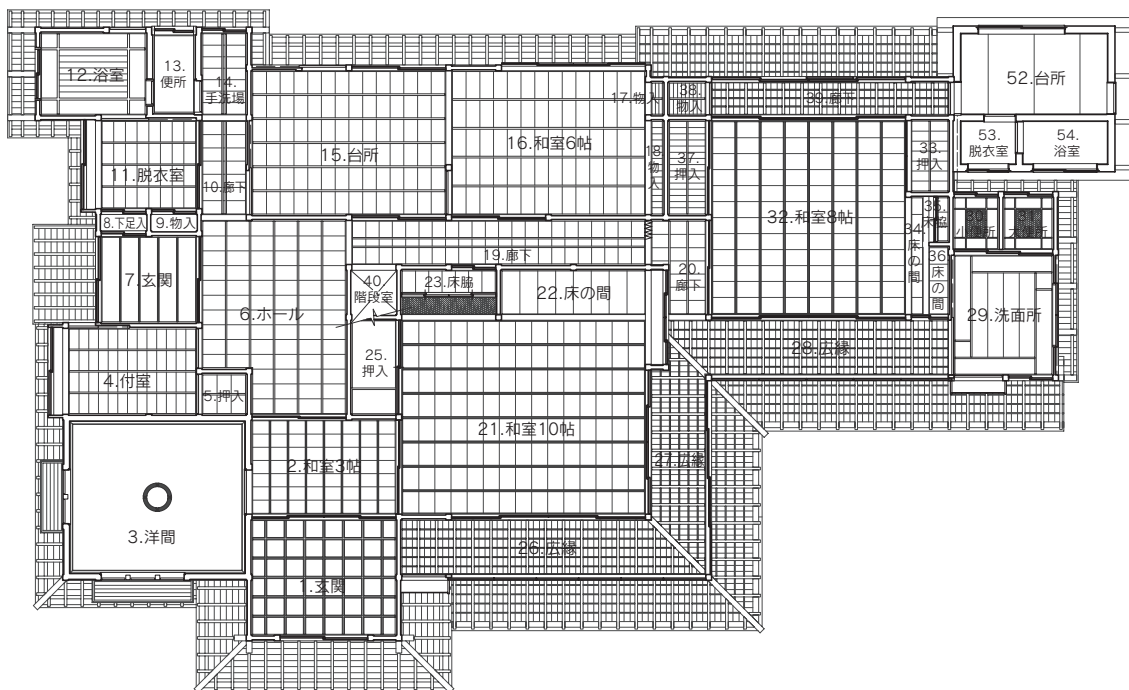
階別	番号	部屋名称	床	壁	天井	天井高
1F	29	洗面所	ビニール床シート張(上)	(大)内装タイル(150×150) (ラス下地) (真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉桎張)	2.70
1F	30	小便所	磁器質タイル(150×150)ラス下地	(大)内装タイル(150×150) (ラス下地) (真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉桎張)	2.800
1F	31	大便所	プリント合板張	(真)しっくい塗(上) (大)特殊化粧合板(プリント系)(荒壁下地)	竿縁天井(杉桎張)	2.80
1F	32	和室8帖	たたみ(上)	(真)じゅうらく壁	竿縁天井(杉桎張)	3.10
1F	33	押入	板張	(真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉板)	2.25
1F	34	床の間		(真)じゅうらく壁		2.75
1F	35	床脇		(真)じゅうらく壁		1.95
1F	36	床の間		(真)じゅうらく壁		2.45
1F	37	押入	板張	(真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉板)	2.05
1F	38	物入	板張	(真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉板)	2.50
1F	39	廊下	縁甲板張(桧上小節)	(真)しっくい塗(上) (真)しっくい塗(上)	根太天井	2.90 2.80
1F	40	階段室		(真)しっくい塗(上) (真)特殊化粧合板(天然木系)(荒壁下地)		3.65
2F	41	階段室	縁甲板張(桧上小節)	(真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉桎張)	2.60
2F	42	和室4.5帖	たたみ(上)	(真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉桎張)	2.55
2F	43	押入	板張	(真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉板)	2.55
2F	44	物置	板張	(真)しっくい塗(上)	竿縁天井(印刷もの)	2.40
2F	45	廊下	縁甲板張(桧上小節)	(真)しっくい塗(上)	根太天井	2.80 2.60
2F	46	和室8帖	たたみ(上)	(真)じゅうらく壁	竿縁天井(杉桎張)	2.85
2F	47	床の間		(真)じゅうらく壁		
2F	48	押入	板張	(真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉板)	2.55
2F	49	和室10帖	たたみ(上)	(真)じゅうらく壁	竿縁天井(杉桎張)	2.90
2F	50	床脇		(真)じゅうらく壁 (真)しっくい塗(上)		1.85
2F	51	床の間		(真)じゅうらく壁		2.60
		外壁		(大)押縁下見板張		
				(真)モルタル塗(はけ引仕上)		
				(真)しっくい塗(上)		
				モルタル塗(はけ引仕上) 厚さ10.0cm		
				(真)羽目板張(荒壁下地)		
				(真)押縁下見板張(荒壁下地)		
				(真)合板張(荒壁下地)		

1F	52	台所	フローリング	(大)モルタル塗 (金鍍仕上)	クロス張天井(並)	2.20
			モルタル塗金鍍仕上 厚さ6.0cm	(大)特殊化粧合板 (プリント系)		
	53	脱衣室	複合床板張(フロアボード)	(大)特殊化粧合板 (プリント系)	クロス張天井(並)	2.25
	54	浴室	モザイクタイル貼 他 厚さ6.0cm	(大)モルタル塗 (金鍍仕上)	クロス張天井(並)	2.35
			モルタル塗金鍍仕上 厚さ6.0cm	内装タイル(75×75) (ラス下地)		
				(大)特殊化粧合板 (プリント系)		
		外壁		(大)サイディング(中)		
				(大)サイディング(並)		

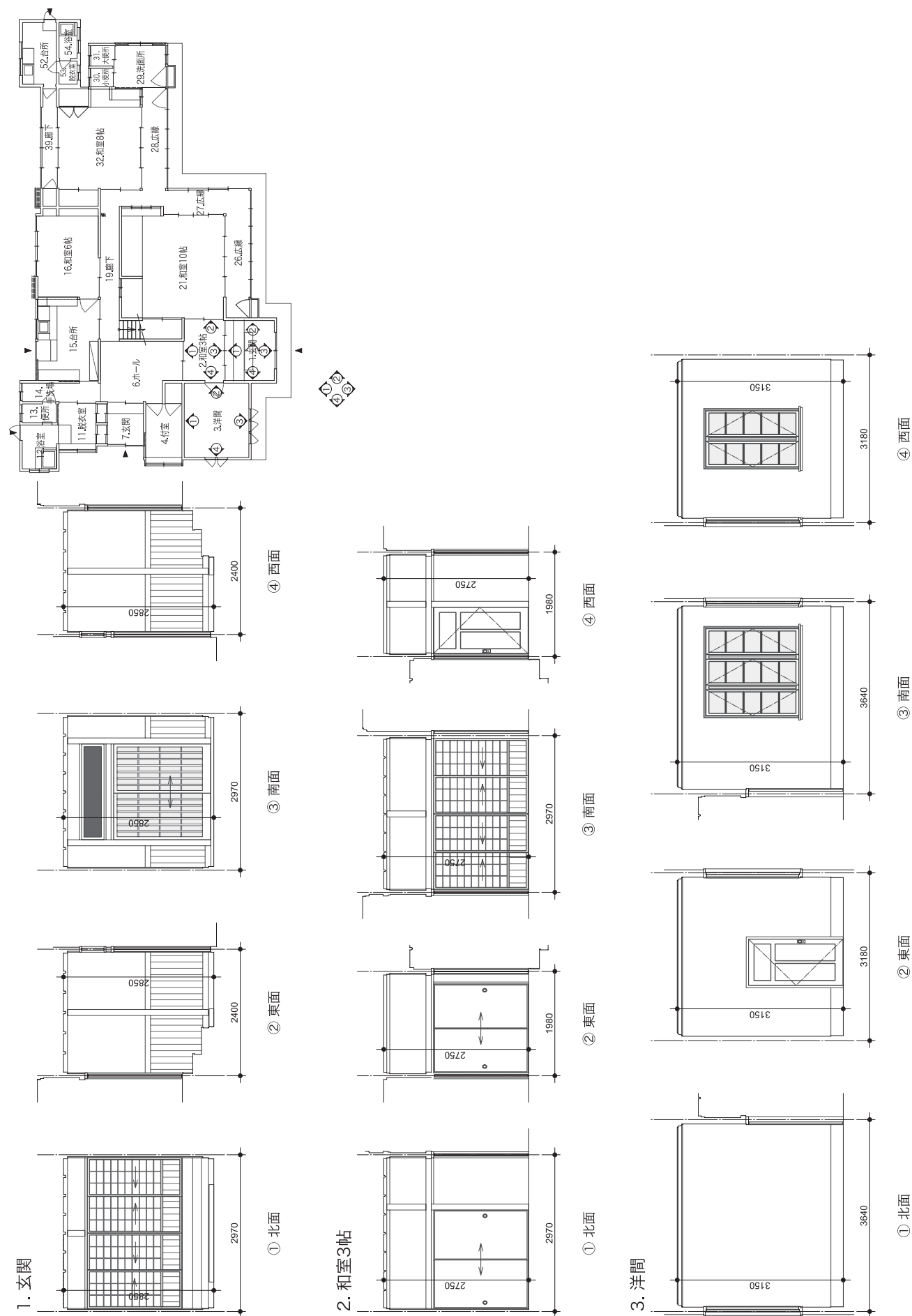




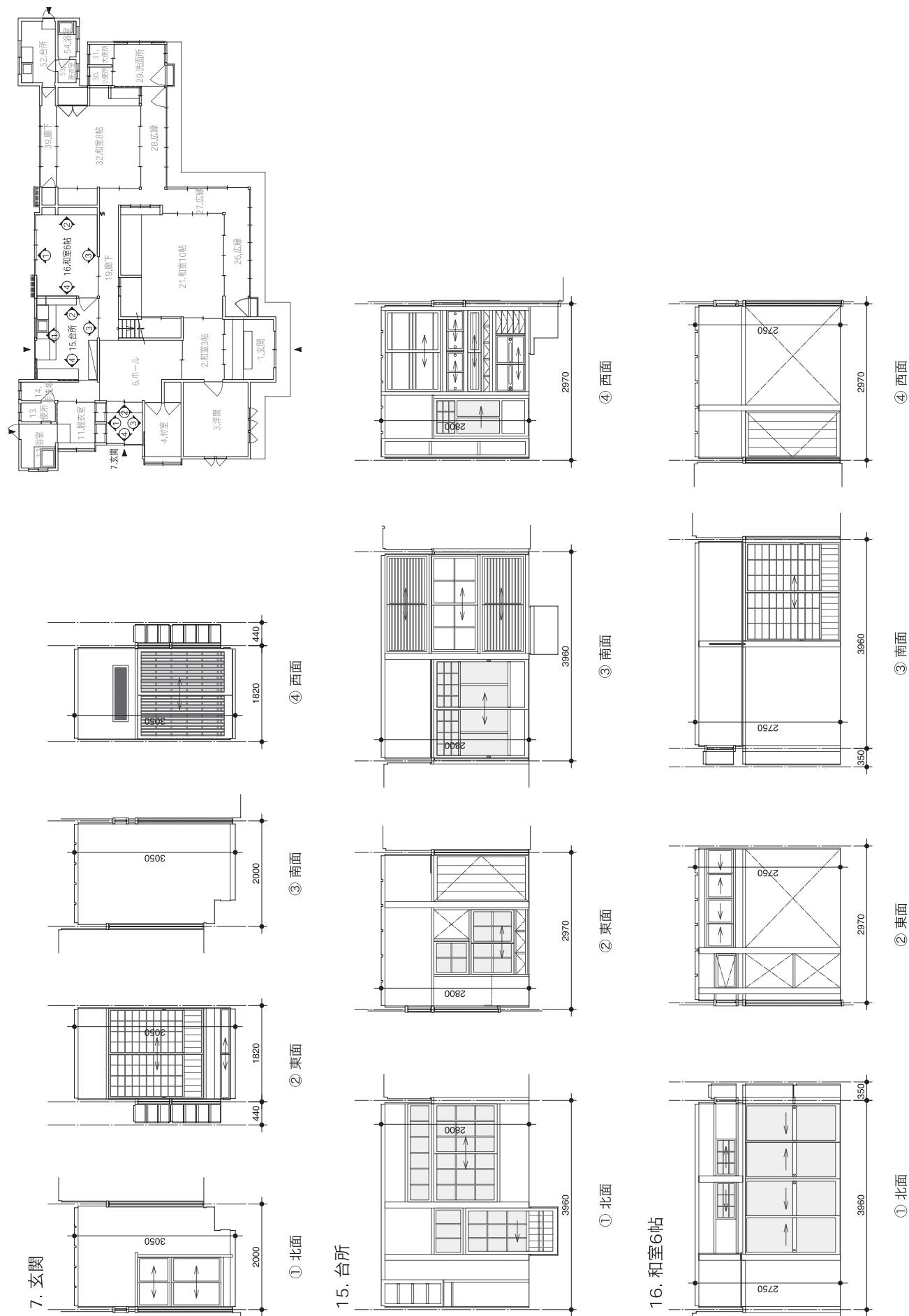
3・46 移築前2階天井伏図 1:150



3・47 移築前1階天井伏図 1:150



3・48 移築前展開図1 1:100



3・49 移築前展開図2 1:100

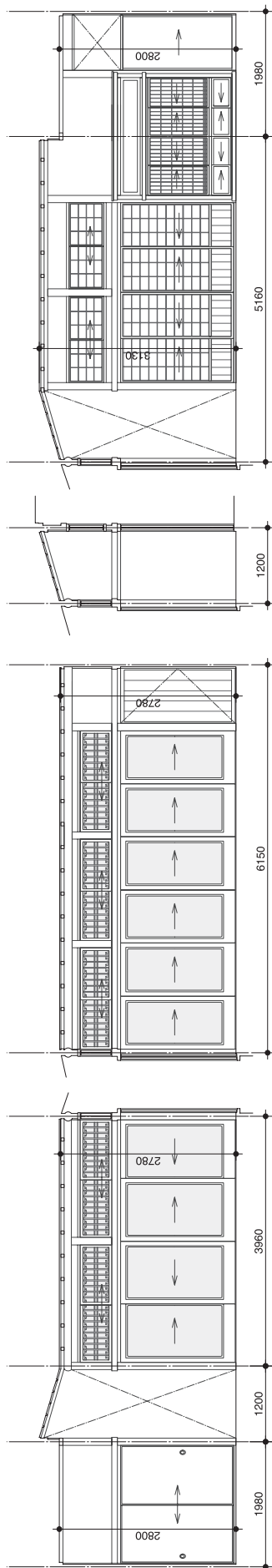
26, 27. 広縁

① 北面

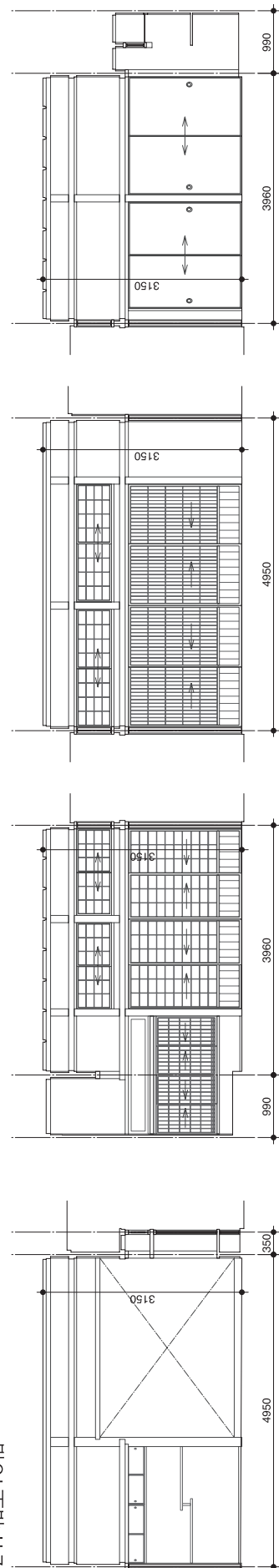
② 北面

4950 1200

3130 850

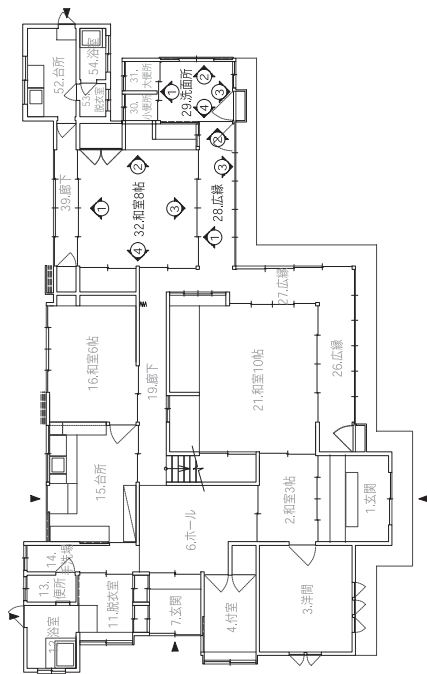


③東面

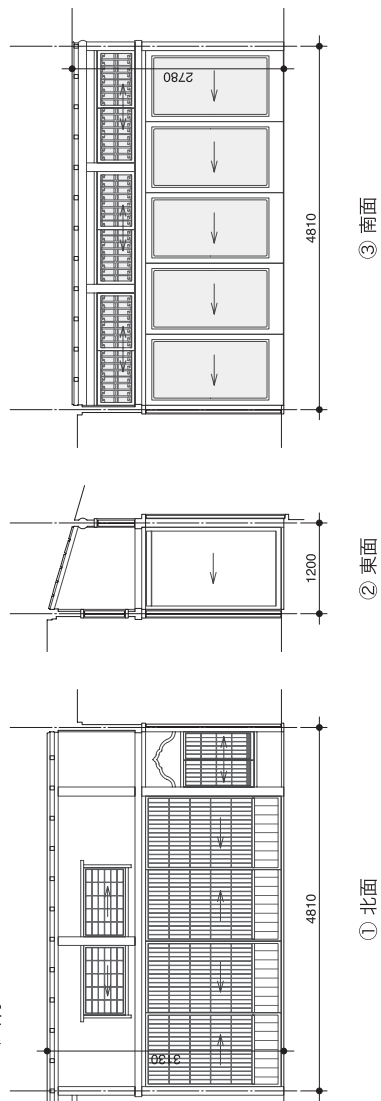


① 北面

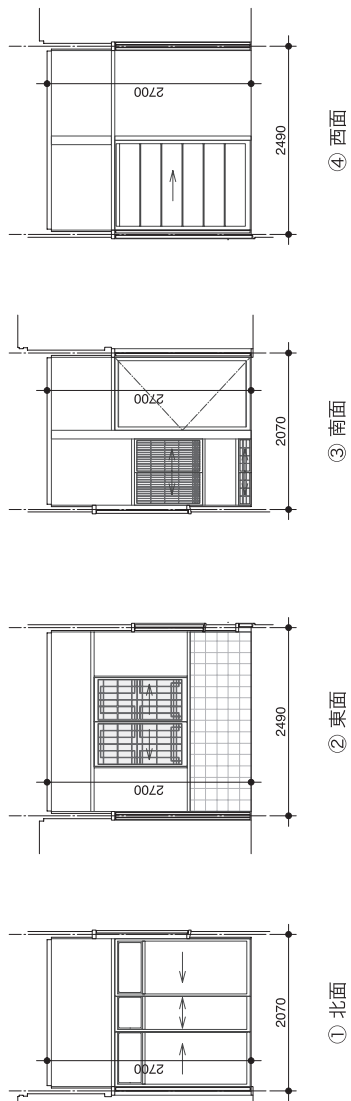
-168-



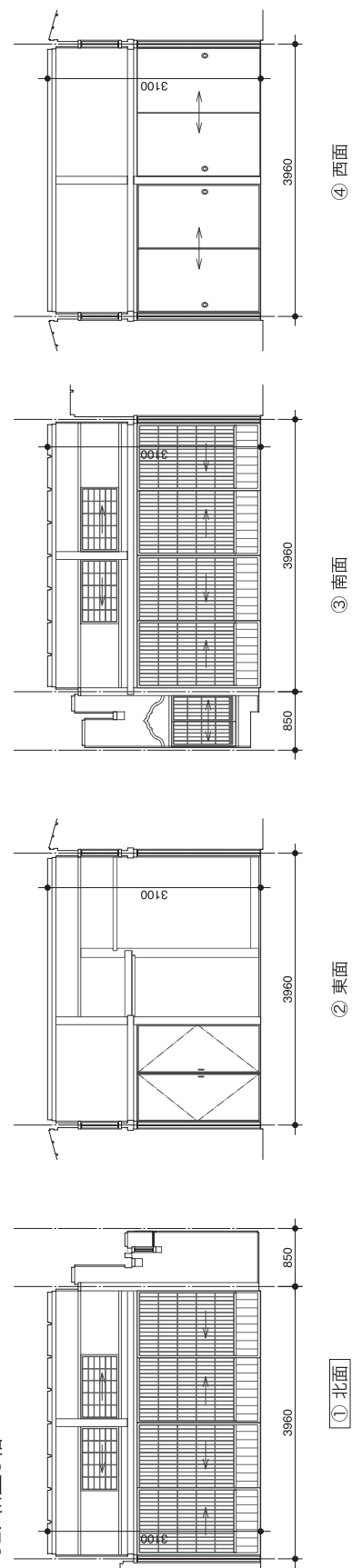
28. 広縁

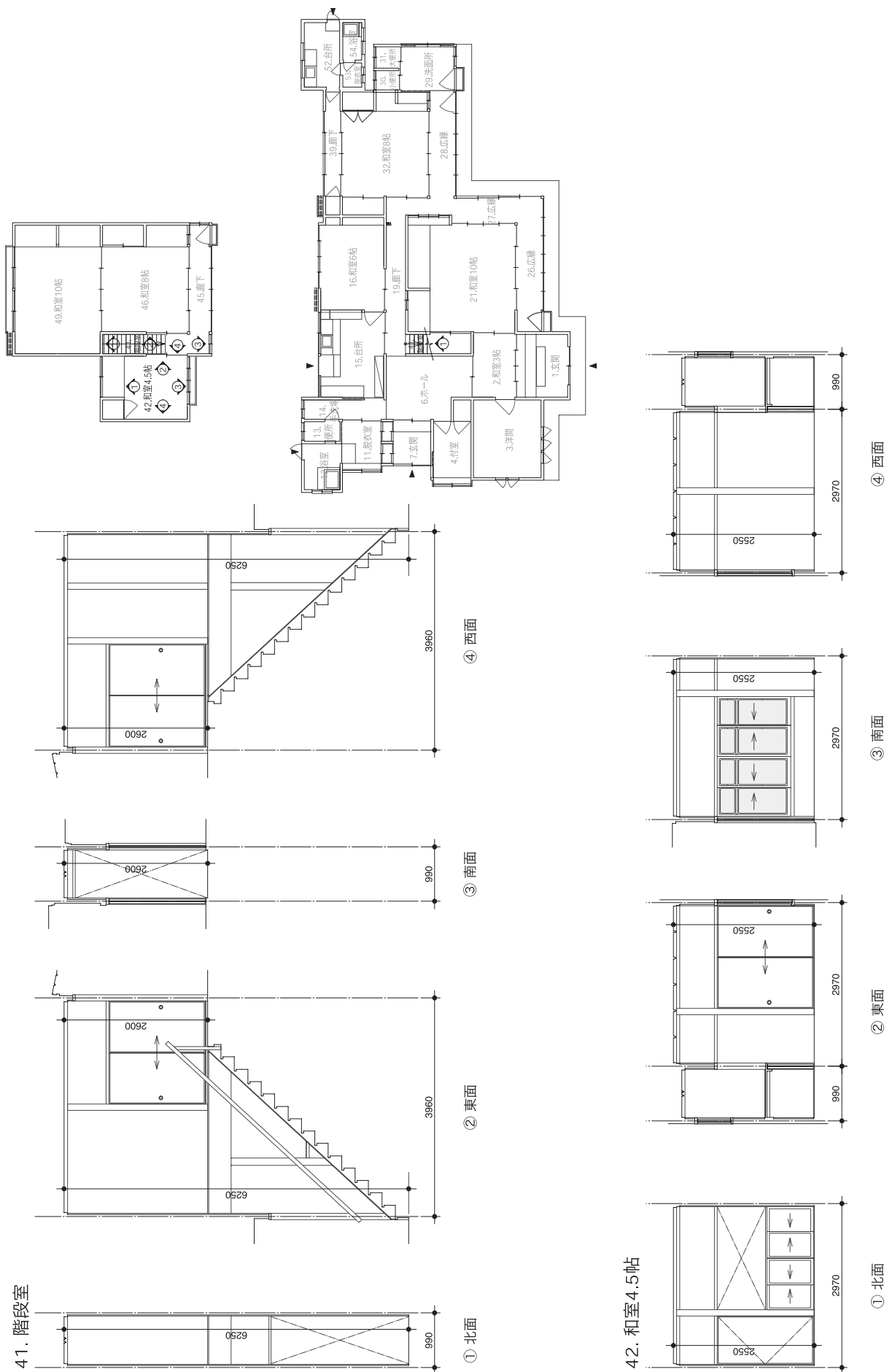


29. 洗面所

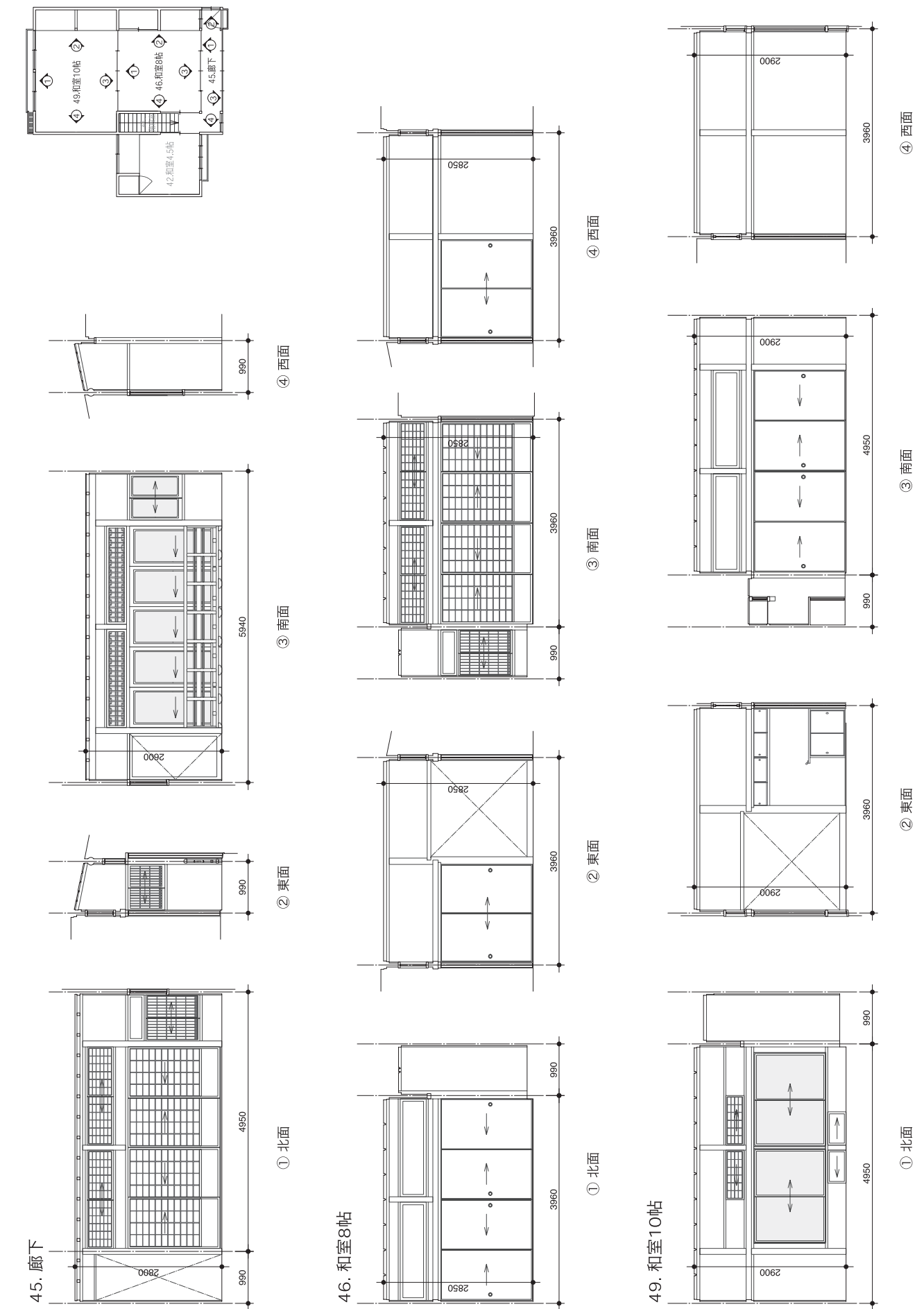


32. 和室8帖





3・52 移築前展開図5 1:100



3・53 移築前展開図6 1:100

4 解体工事

図版解説

- 4・1 2003年4月解体工事着工。解体足場組み立てと防塵シート張り。
- 4・2 北西方向西鉄太宰府駅側のビル屋上から解体現場周辺を俯瞰する。左奥に九州国立博物館の建設現場が見える。
- 4・3 防塵シートを透かして、壁と屋根瓦が下ろされた軸組を見る。
- 4・4 軸組解体を直前にして記念撮影する大庭建設工事担当者。解き工事担当者が引き続き移築再生工事担当となる。
- 4・5 家屋中央部の柱梁と階段。中廊下の造りが分かる。階段は側桁で段板を支えて背板を張る側板階段。
- 4・6 解体前に養生された柱と階段。階高が高く、階段が急勾配になっている。軸組解体作業中の倒壊防止のために仮筋交いや火打ち金物で補強する。
- 4・7 内部間仕切り壁と化粧天井を撤去。外周の壁はまだ残る。
- 4・8 屋根瓦を下ろして下地土を撤去。伝統的な瓦の葺き方であるが、屋根の重量が増し耐震性にも劣るので、現在は一般的な工法ではない。
- 4・9 外壁のささら子下見を撤去。横張りされた下見スギ板とささら子は風食が進み経年の味わいを醸し出している。外壁下地は竹小舞荒壁。丁寧な釘抜きが必要。
- 4・10 廂の化粧野地板を撤去。1本1本の釘を抜く。
- 4・11 2階座敷き床の間ケヤキ一枚板を1階から見上げる。3本の雇いホゾで板反りを防いでいる。
- 4・12 伝統的な真壁の竹小舞下地。腐朽はほとんど見られなかったが、再利用には適さない。
- 4・13 小屋組を解き、上部から順次に軸組を解いていく。
- 4・14 1階奥座敷き小屋組の2本のはね木を見上げる。はね木はテコの原理を利用して、長く突き出ている軒先を支えるために軒裏から小屋組内に取り付けられる材である。
- 4・15 2階座敷き小屋組、軸組を見る。
- 4・16 2階部分の屋根と壁が解かれている。東南の座敷き庭から見る。写真右端に奥座敷き付きの洗面・廁が見える。
- 4・17 松丸太の小屋梁を下ろす。
- 4・18 解いた木材を番付して整理し、一時保存する。
- 4・19 基礎石と庭の景観木を遺して撤去された家屋跡地。
- 4・20 角地のシンボルツリーのように蘇鉄が遺る。
- 4・21 撤去前の御影の基礎石と束石。



4・1



4・2*



4・3*



4・4*



4・5*



4・6*



4・7*



4・8



4・9



4・10



4・11



4・12



4・13



4・14



4・15



4・16*



4・17



4・18



4・19



4・20

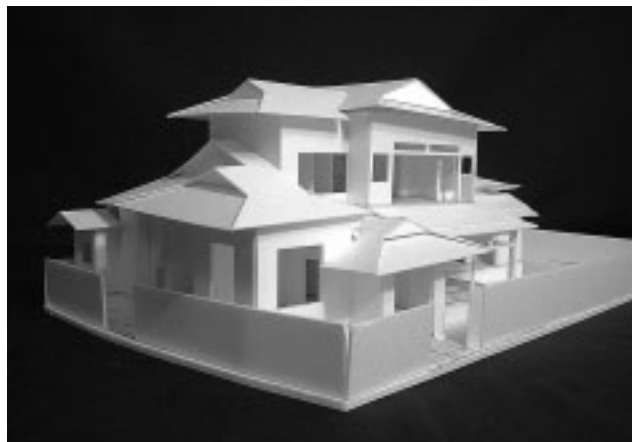


4・21

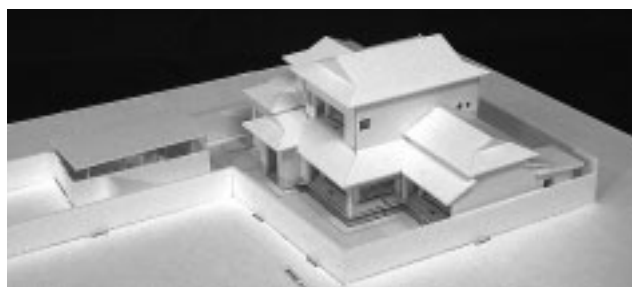
5 設計

図版解説

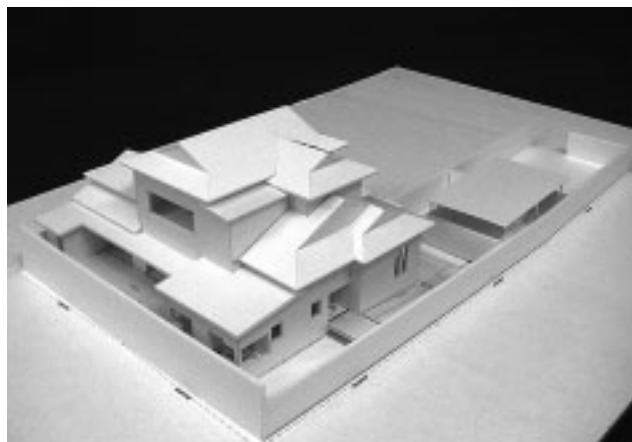
- 5・1 移築前に100分の1縮尺の模型を作り、計画の全体を構想する。
- 5・2 移築先の旗竿敷地に合せて建物の配置計画を練るための100分の1縮尺の模型を作る。東南から俯瞰する。奥座敷付きの洗面・廁部分が切り離され、竿地にガレージと倉庫棟を計画している。
- 5・3 模型を北西から俯瞰する。勝手口玄関の使い方は移築前と変えてバリアフリーのデザインを検討。
- 5・4 PSパネル（省エネタイプの輻射冷暖房設備）と間仕切り収納の意匠検討模型。
- 5・5 軸組模型50分の1縮尺。製作：山本剛司
- 5・6 室内計画模型50分の1縮尺。
- 5・7 軸組模型50分の1縮尺を俯瞰する。
- 5・8 素材と色彩サンプルの模型。
- 5・9 周辺図 1：1000
- 5・10 配置図 1：200
- 5・11 2階平面図 1：150
- 5・12 1階平面図 1：150
- 5・13 南立面図 1：150
- 5・14 北立面図 1：150
- 5・15 東立面図 1：150
- 5・16 西立面図 1：150
- 5・17 植栽計画図 1：250
- 5・18 南北矩計図 1：75
- 5・19 東西矩計図 1：75



5・1



5・2



5・3



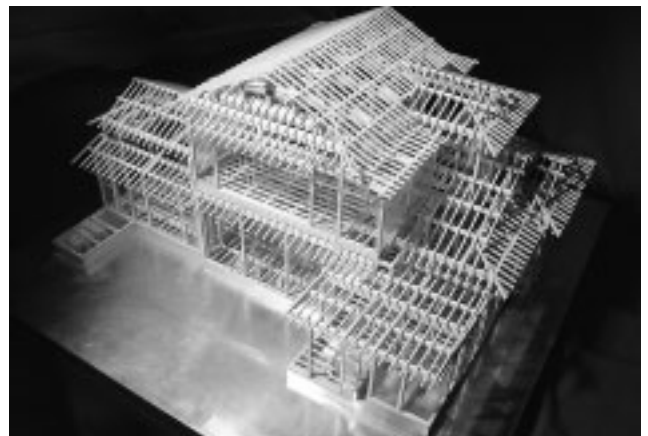
5S・4



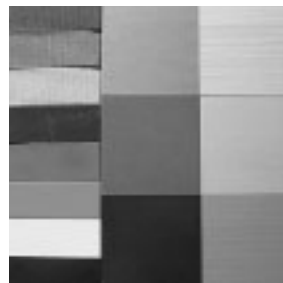
5 · 5



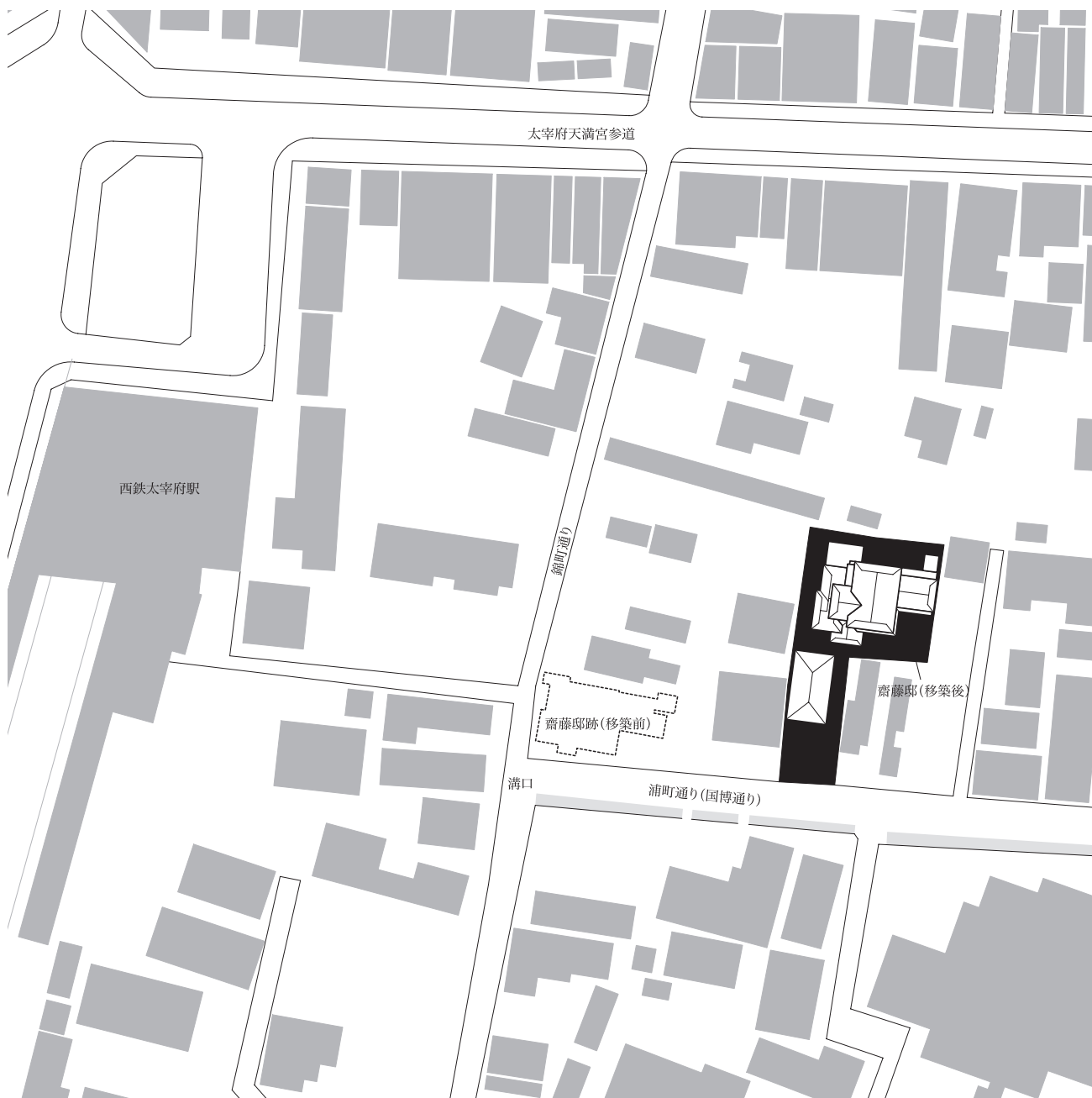
5 · 6

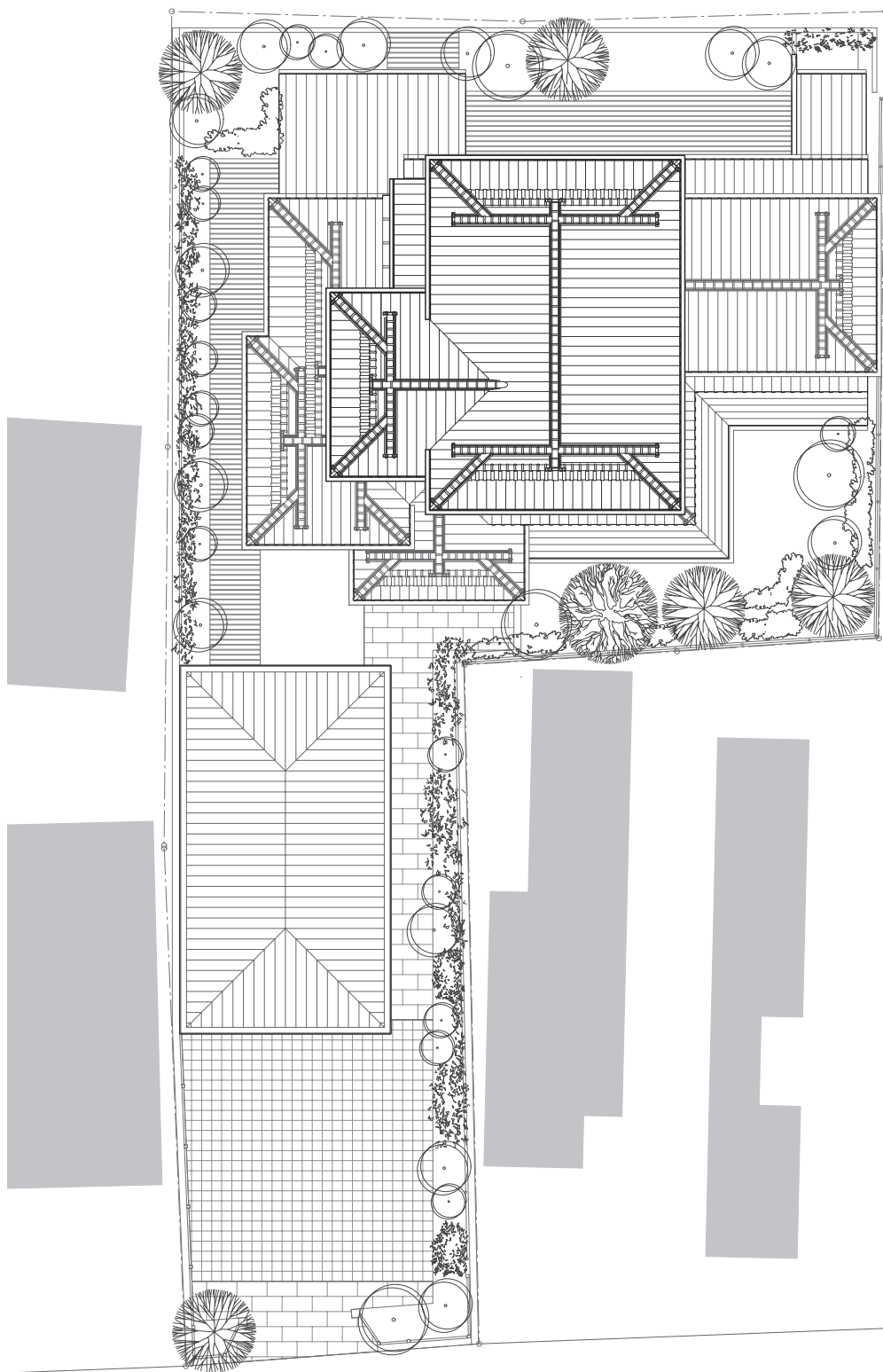


5 · 7

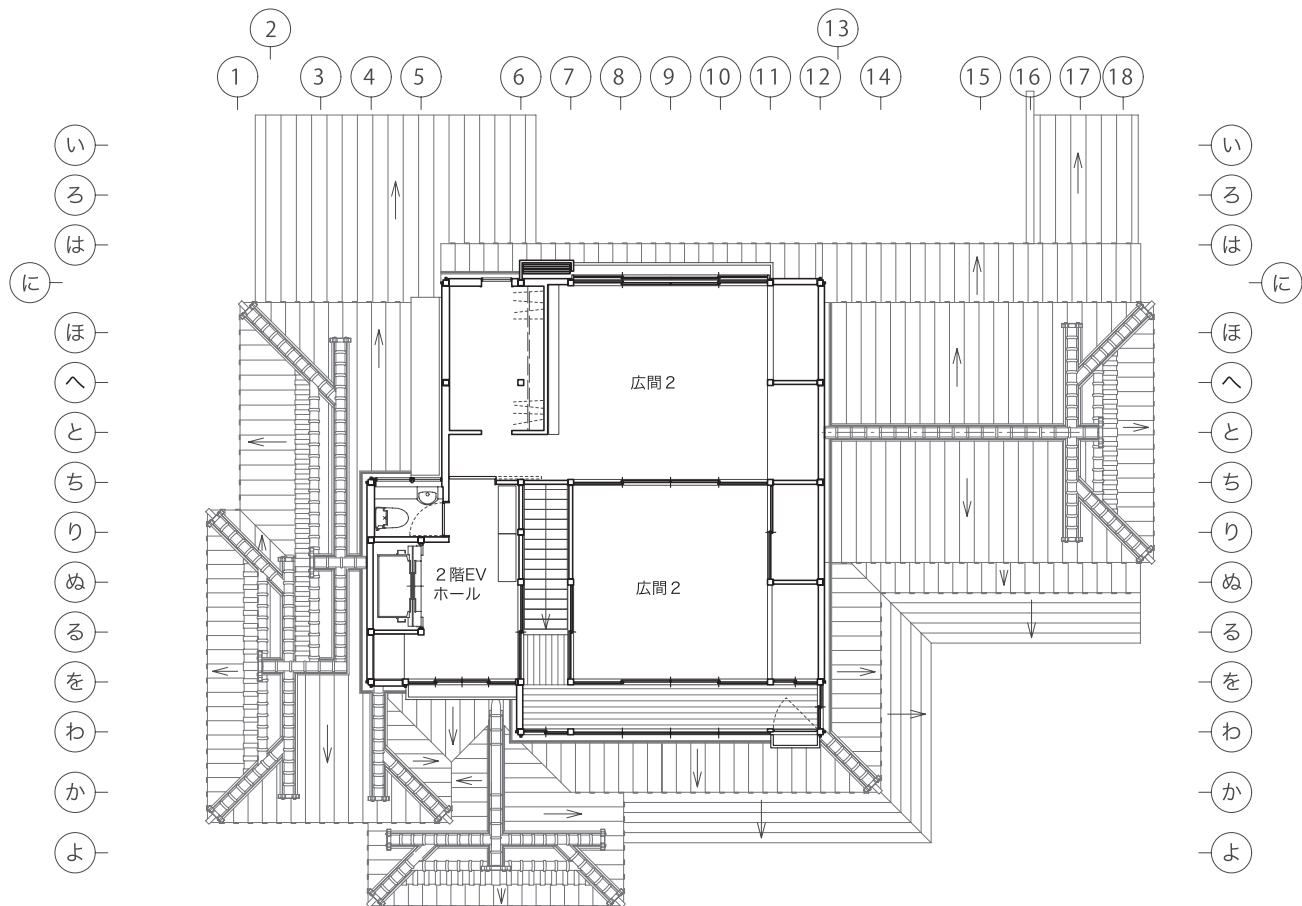


5 · 8

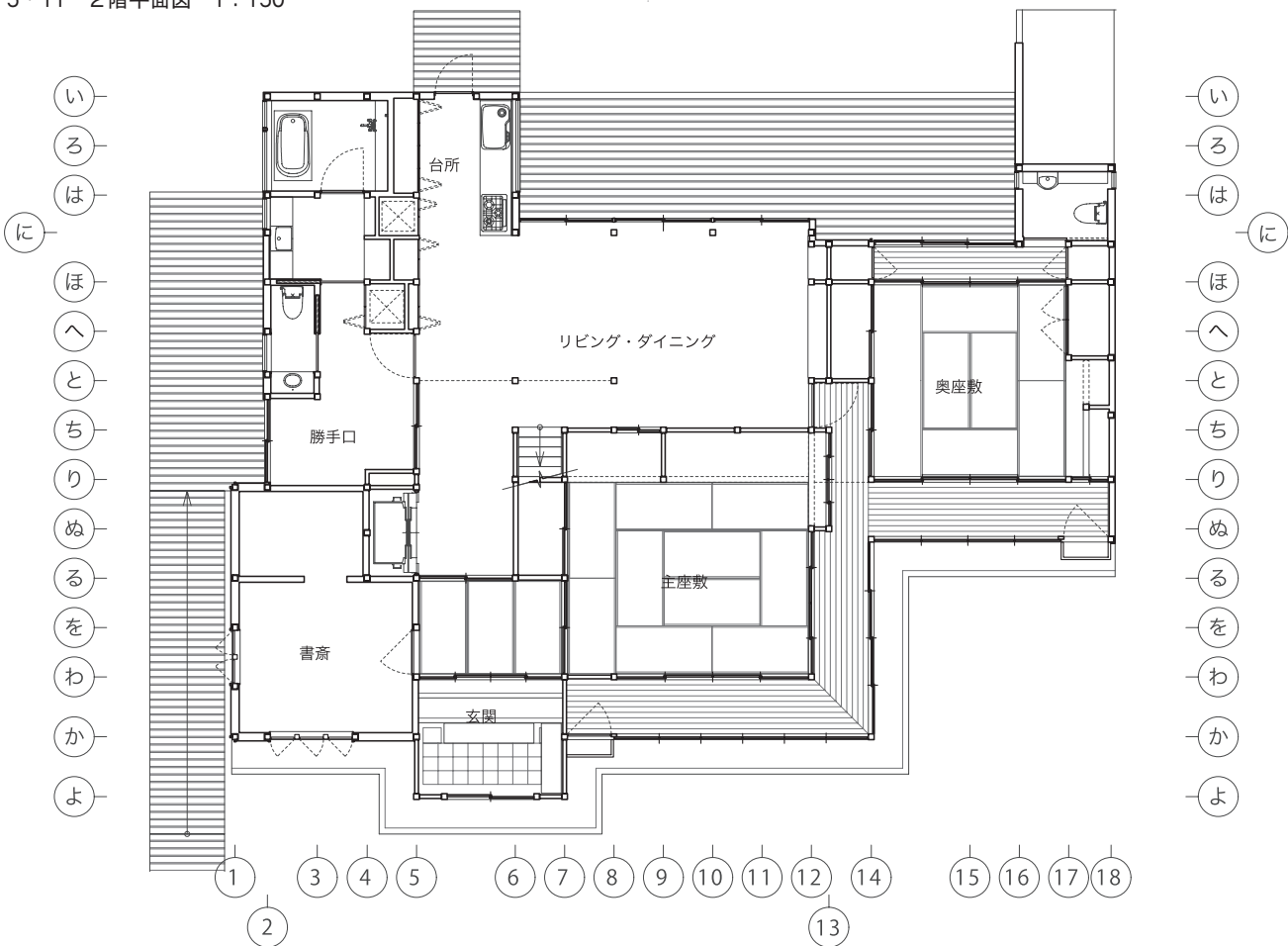




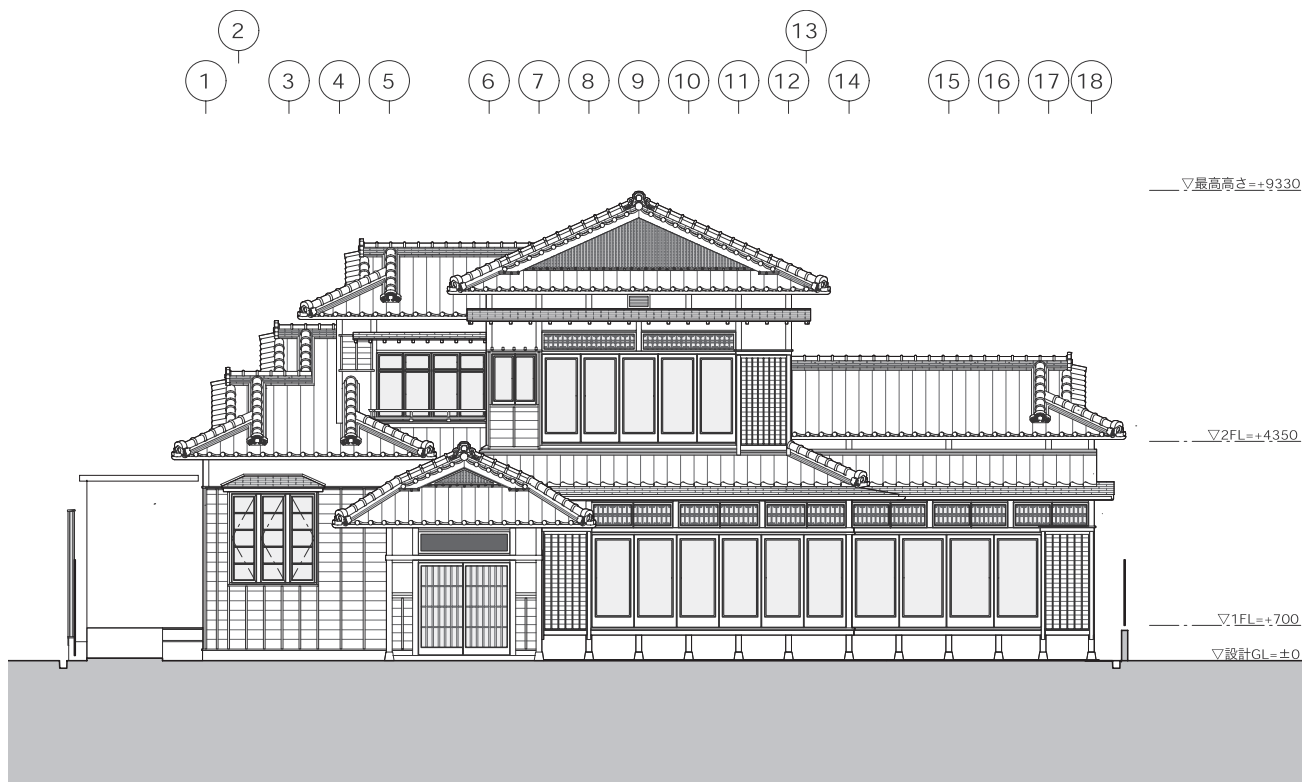
5・10 配置図 1:200



5・11 2階平面図 1:150



5・12 1階平面図 1:150



5・13 南立面図 1：150



5・14 北立面図 1：150

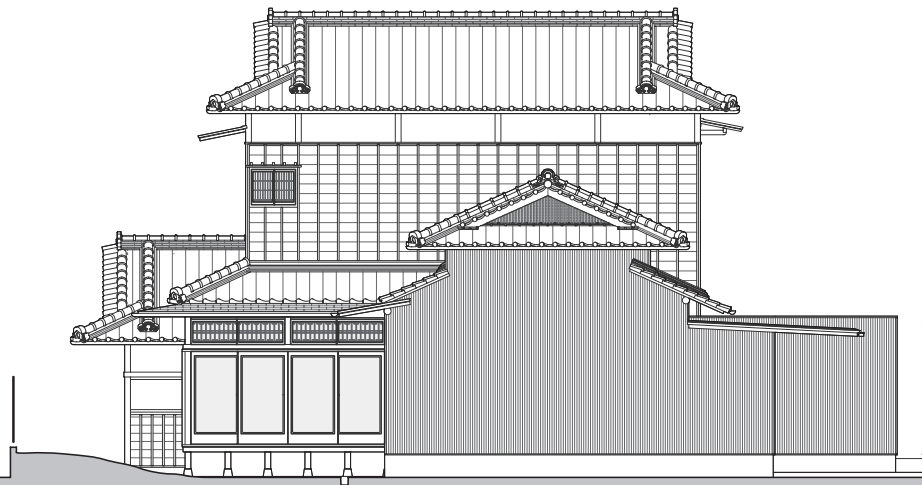
よ か わ を る ん り ち と へ ほ に は る い

最高高さ=+9330▽

2FL=+4350▽

1FL=+700▽

設計GL=±0▽



5・15 東立面図 1:150

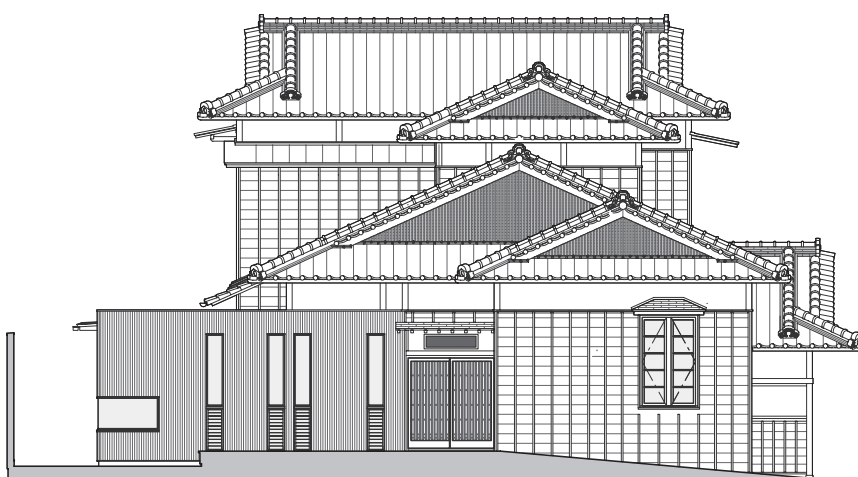
い る は に ほ へ と ち り ん る を わ か よ

▽最高高さ=+9330

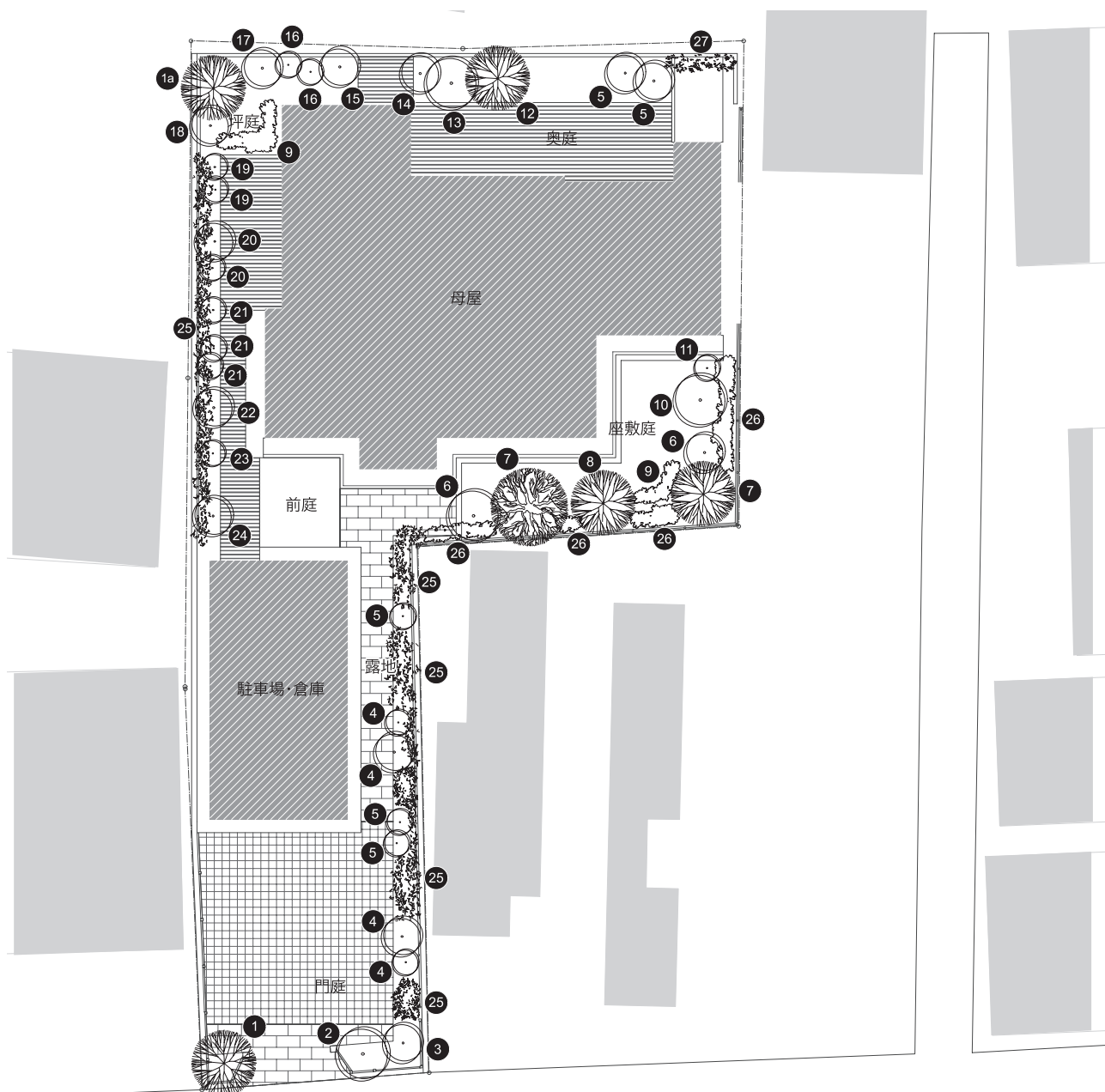
▽2FL=+4350

▽1FL=+700

▽設計GL=±0



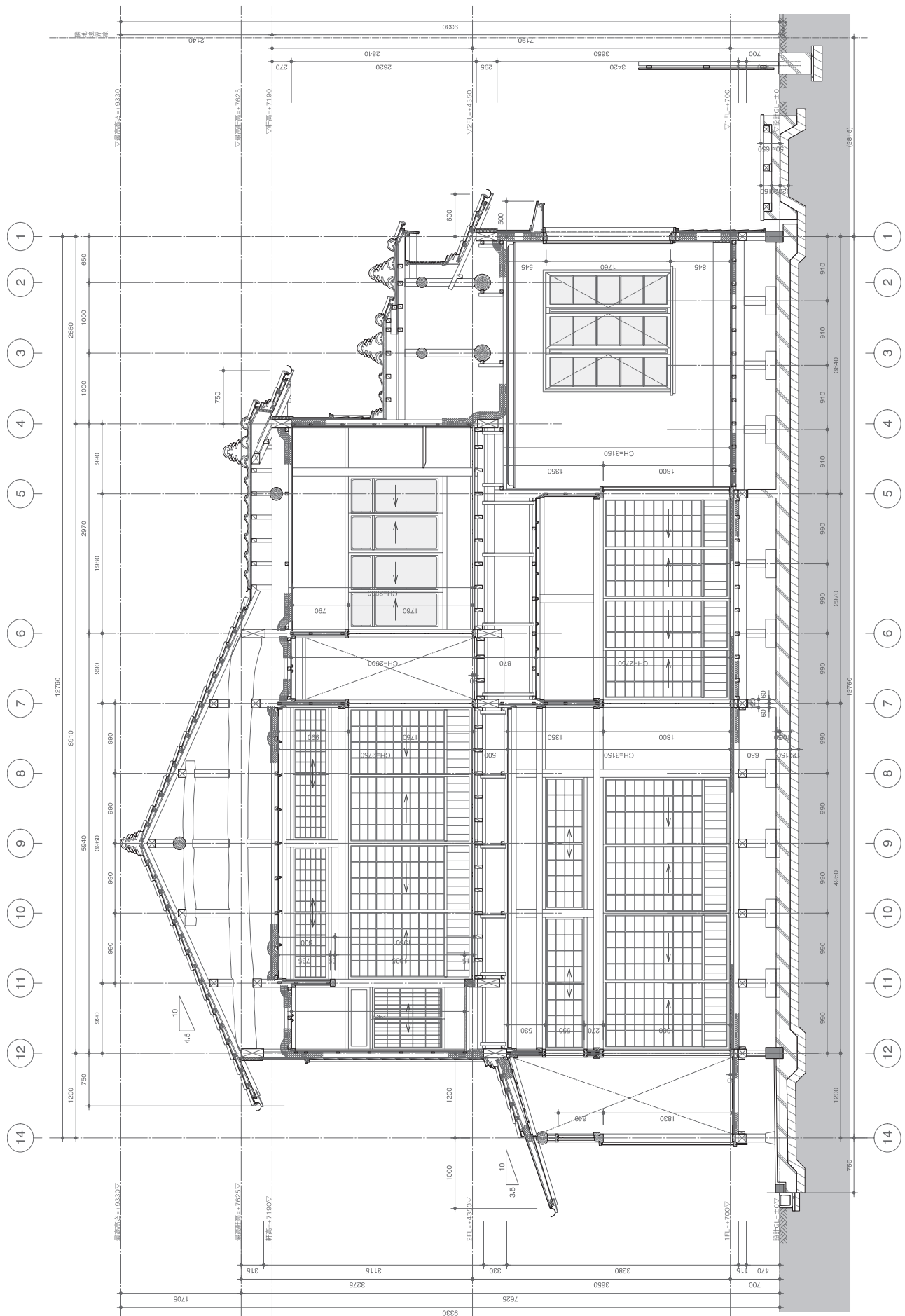
5・16 西立面図 1:150



番号	樹木名	数量
1	ウメ	1
1a	ハナミズキ	1
2	モチノキ(既存樹木移植)	1
3	ヤマツバキ(既存樹木移植)	1
4	ヤマモミジ	4
5	ヒメシャラ	5
6	カンツバキ	2
7	イヌマキ(既存樹木移植)	2
8	クロガネモチ(既存樹木移植)	1
9	ツツジ	適宜

10	イロハモミジ	1
11	ナンテン	1
12	モクレン(シモクレン)	1
13	ヤマボウシ	1
14	レモン	1
15	ザクロ	1
16	コブシ(ヤマモクレン)	2
17	サザンカ	1
18	サルスベリ	1
19	キンモクセイ	2
20	クチナシ	2

21	ニシキギ	3
22	ヤマブキ	1
23	ロウバイ	1
24	ソテツ(既存樹木移植)	1
25	生垣/ヘニカナメモチ	適宜
26	生垣/棒カシ	適宜
27	生垣/モウソウチク	適宜
下草1	フッキソウ, タマリユウ	適宜
下草2	トクサ, ササ, シダ等	適宜



5・19 東西矩計図 1:75

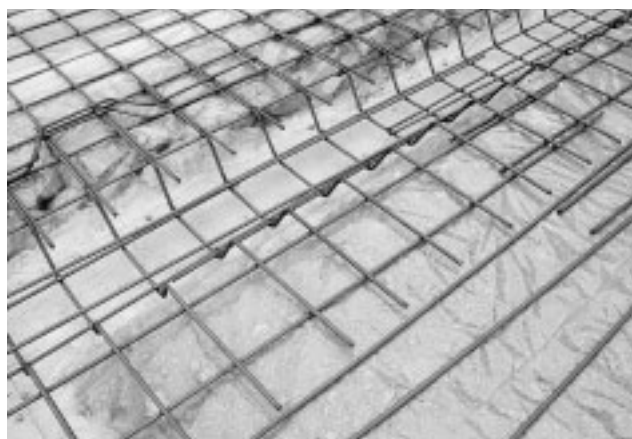
6 移築工事

図版解説

- 6・1 移築先の旗竿敷地を見る。
- 6・2 基礎土間コンクリート配筋。
- 6・3 基礎。座敷周りの基礎と束石には御影石布基礎を移設。それ以外は構造補強のため鉄筋コンクリートの布基礎を新設している。
- 6・4 土台の据え付け後、柱、梁を搬入して建方を準備する。
- 6・5 柱、梁の建方が始まる。
- 6・6 構造補強に火打ち材を取り付ける。
- 6・7 加工所で木材の補修を行う。
- 6・8 建て方中の2階から、工事中国立博物館方面を見る。
- 6・9 軸組建方。補修された材や代替の新材が混合されている。
- 6・10 組み上がった軸組に屋根垂木が架けられる。
- 6・11 1階奥座敷小屋組を見上げる。2本のはね木を組み込む。ここでははね木の仕様は伝統的な木造工法とは異なるが、建築史料のひとつとして元通りに再現している。
- 6・12 構造補強のため、伝統的な竹小舞に替えて構造用合板を用いている。
- 6・13 内部真壁の伝統的な竹小舞に替えて、ステンレス製の構造ブレースを取り付けている。
- 6・14 ステンレス製構造ブレース詳細。
- 6・15 2階建て部分の柱と床組。
- 6・16 瓦葺き屋根と廂の銅板葺きがほぼ同時に仕上げられる。



6・1



6・2



6・3



6・4



6・5



6・6



6・7



6・8



6・9



6・10



6・11



6・12



6・13



6・14



6・15



6・16

7 移築再生

図版解説

- 7・1 竿地を利用した玄関導入露地。
- 7・2 玄関と洋間（書斎）。伝統的な和風住宅の玄関脇に応接間を付けた和洋折衷住宅の形式を構成している。洋間の窓先には庭木として珍しい観賞用ソテツを移植して、根周りに解体された古瓦を敷いている。玄関部の屋根瓦の全てと、各屋根の鬼瓦は元の瓦を再利用している。
- 7・3 移築修景された正面全景。
- 7・4 東南から庭越しに見る。
- 7・5 西側から見る。勝手口前には雨除けと目隠し壁を張ったポーチを新設している。
- 7・6 勝手口へのバリアフリー斜路を新設。奥に坪庭を設ける。
- 7・7 玄関の庭景として据えた手水石と灯籠。
- 7・8 奥庭（北側庭とテラス）。敷地境界に高めの塀を設けて天空の反射光を得ている。下草のクマササの中にハナミズキとコブシを植栽。
- 7・9 門庭。門柱と板塀は移築修景したもの。板塀の支え石は新設。太宰府のイメージツリーとしてウメ古木を植栽。
- 7・10 竿地に新設されたガレージ内観。壁面と天井間に空隙を設けて、道路と母屋間の視覚的な見通しを計っている。
- 7・11 玄関脇書斎。応接間としての利用から書斎に転用している。勝手口横の付室は書庫に改造して書斎と繋いでいる。床はチーク材の寄せ木張りに改装。プラスター塗りの天井中央を飾る照明グローブは、大正、昭和初期の洋風化が取り込まれた時代を感じさせるアールデコ調の西欧様式器具を取り付けている。カーテンはこの時代より少し遡るイギリスの室内装飾品をデザインしたウィリアム・モリスのテキスタイルデザイン生地を用いて新調している。机は齋藤家代代のものを修復塗装している。
- 7・12 ホール。正面に白色のPSパネル（輻射冷暖房設備）を設置。室内の温熱環境調整と目隠しスクリーンの役割を果たす。左手に住宅用エレベータを新設し、バリアフリー化を計る。エレベータ廻りの表装色彩は、連続して並ぶ収納間仕切扉のボンベイアンレッドと同色塗装。
- 7・13 玄関の間から玄関格子戸を見る。伝統的住居の玄関様式を構成している。
- 7・14 玄関の間から主座敷を見る。
- 7・15 主座敷の東と南に廻る縁側から座敷庭を見る。天井コード照明は、アールデコ調デザインのグローブを新設している。本来はカーテンなどの取り付けはなかったが、ここでは縦型ブラインドを新設している。
- 7・16 修理・修復された主座敷。柱、長押、天井は台湾ヒノキ材で造作されている。聚楽塗り壁色は元の黒色から薄ネズに替えている。
- 7・17 主座敷から縁側を通して座敷庭を見る。
- 7・18 移築前の台所と食事室を改造したリビング・ダイニング
- 7・19 食事室と台所を見る。
- 7・20 2階広間を見る。
- 7・21 階段側から2階広間の縁側を見る。
- 7・22 勝手口を見る。土間の段差はバリアフリー化を計るために、外部ポーチ床と室内床を平坦に連続するように改造している。格子戸や欄間は修復再利用。
- 7・23 トイレ、洗面、浴室と併置してバリアフリー化を計っている。
- 7・24 中廊下に外光を導くために新規にデザインしたステンドグラス。緑と風をモチーフにした。デザイン：工藤啓子
- 7・25 奥座敷の縦繫障子前に白色の縦繫PSパネルを並べる。
- 7・26 倉庫（蔵）入り口からガレージ出入口を見る。壁と天井間には空隙を設けて視線を透している。



7・1



7・2*



7・3



7・4



7・5



7・6



7・7*



7・8



7・9



7・10



7・11*



7・12



7・13



7・14



7・15



7・16*



7・17



7 · 18



7 · 19



7・20



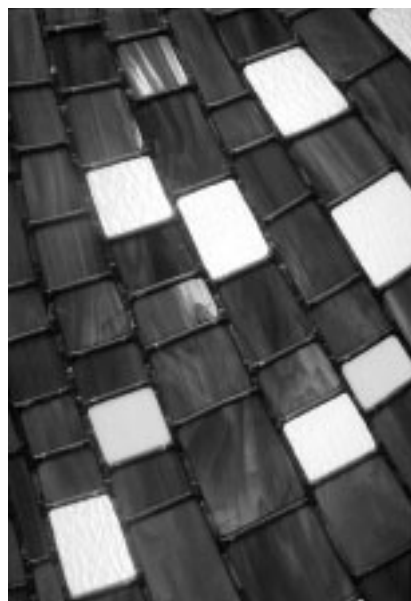
7・21



7 · 22



7 · 23



7 · 24



7 · 25



7 · 26

VI. 総括

九州国立博物館に伴う散策路整備に関する埋蔵文化財発掘調査を2件行って得られた知見と、前報告書にあたる『馬場遺跡2』で報告ができなかった自然科学分析の成果、並びに齋藤邸移築再生プロジェクトについて簡単にまとめておきたい。

馬場遺跡第6次調査では、平安時代後期から江戸時代後期、近現代にわたる遺構が6面にわたって検出された。とくに江戸時代後期には大きく二度の整地をして、土地利用を促進していったことがわかった。北部調査区の北境では、3回に渡って護岸用の石垣が作られている。それぞれ、弁天池、浮殿に対応すると考えられるが、明確な証左があるわけではない。現在、浮殿がある箇所も散策路の拡張によって埋め立てが行われた。その際に、試掘トレンチを設定して数カ所掘り下げてみたが、粘質が強い土の堆積が確認されただけで、具体的な範囲、時代などはわかっていない。今後の課題であろう。

18世紀後半以降の整地に、多量の土器・陶磁器、そして瓦類が出土していることから、天満宮に関連した屋敷が周囲に展開していたことが想定できる。南側では、現在も藍染川が流れているが、調査成果より地山を削る形で蛇行しながら流れていた暴れ川だったことがわかった。調査区の中央部では、平安時代後期から鎌倉時代にかけて、調査区の東より土を入れて整地をして安定面を作りだそうとしたことがわかっている。その後、江戸時代後期に大量の土をいれて、石垣を組んで藍染川を安定させたと考えられる。

馬場遺跡第7次調査では、谷地形が形成される過程を明らかにした。遺物としては11世紀後半から14世紀の遺物が混在していることが確認できたため、周辺の土地利用を推測できる資料が得られた。現在の地形ができあがったのは自然形成の力が強いと思われるが、およそ14世紀後半以降だと推定できる。

馬場遺跡第8次調査の自然科学分析の成果としては、遺物群は鑄造鉄器製作に伴う可能性が高いという結果となったことがわかった。しかし、調査区範囲の限界もあるうえ、観世音寺境内の調査例なども参照すると、銅と鉄の同時生産が行われている例も確認されているため、同様の視点で今後とも調査区周辺を調査・研究していく必要があるだろう。

齋藤邸の移築プロジェクトについては、散策路の整備計画と個人住宅の改修計画がちょうどタイミングよく整合したことにより実現がなされた貴重な計画である。この齋藤邸は、太宰府天満宮に至る道と藍染川に平行する小路が会うT字路の角地の北東に位置しており、昭和2～4年にかけて建築された都市型の和洋折衷住宅として特徴ある建物である。歴史的にも、この敷地には秋月藩御用絵師として活躍した齋藤秋圃が在住した屋敷が建っていた。つまり、歴史的な景観を構成する要因の1つであったことは想像に難くない。各地で貴重な景観構成建造物が意識なく破棄されている風潮のなかで、このような移築ならびに新しく次世代にとっても快適な家造りを「再生」されたことは地域にとっても喜ばしいことだと思われる。同時に齋藤邸にまつわる画稿類についても紹介されており、今後の地域研究にとっても貴重な成果報告になったと思われる。

天満宮周辺地域は古くから歴史的に貴重な伝説や建物、風景が残されている所だが、今後、それらをどう生かして「残していく」かは、いまを生きる世代のつとめであろう。周辺の調査成果の公表を含めて、歴史的な遺産をどうやって地域に還元していくかを、総合的に考えていかなければいけない地域であることを、今更だが強く考えさせられた。(高橋 学)

写真図版

写真図版には遺構の主な写真と、遺物の一部を掲載している。その他の遺構写真および遺物写真は、付録のCDにカラー情報で収録している。遺物写真に記載している番号はFig番号－Fig内の通し番号となっている。但し、銭貨についてはTab.1の整理番号を記載している。



Pla.1-1 馬場遺跡第6次調査 北部第1遺構面全景（上が南）



Pla.1-2 馬場遺跡第6次調査 北部第2遺構面全景（上が南）



Pla.2-1 馬場遺跡第6次調査 北部第3遺構面全景（上が南）



Pla.2-2 馬場遺跡第6次調査 北部第4遺構面全景（上が南）



Pla.3-1 馬場遺跡第6次調査 北部第5遺構面全景（上が北）



Pla.3-2 馬場遺跡第6次調査 北部第6遺構面全景（上が南）



Pla.4-1 馬場遺跡第6次調査 南部第1遺構面全景（南から）



Pla.4-2 馬場遺跡第6次調査 南部第2遺構面
6SX075完掘状況（西から）



Pla.4-3 馬場遺跡第6次調査 6SX090断割状況（南東から）、左手に現在の藍染川を望む



Pla.5-1 馬場遺跡第6次調査 南部第4遺構面西側全景（東から）



Pla.5-2 馬場遺跡第7次調査 西トレンチ全景（西から、空中写真）



Pla.6-1 6SX044出土遺物



Pla.6-4 6SX005出土遺物



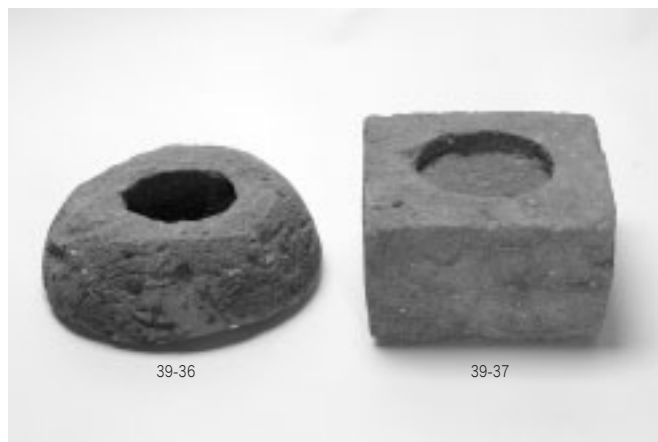
Pla.6-2 6SX043出土遺物



Pla.6-5 6SX075出土遺物



Pla.6-3 6SX043出土遺物



Pla.6-6 6SX090明灰黄色土 出土遺物

報告書抄録

ふ り が な	ばばいせき									
書 名	馬場遺跡 3									
副 書 名	－九州国立博物館建設に伴う散策路整備事業に関わる埋蔵文化財発掘調査－ 馬場遺跡第6・7次調査									
シ リ ー ズ 名	太宰府市の文化財									
シ リ ー ズ 番 号	97集									
編 著 者	高橋 学、宮崎亮一、柳 智子、大澤正己、鈴木瑞恵、工藤卓、橋富博喜									
編 集 機 関	太宰府市教育委員会									
所 在 地	福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号									
発 行 年 月 日	2008（平成20）年3月31日									
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		座 標		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因	
		市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了			
ばばいせき 馬場遺跡 第6次調査	太宰府市 大字馬場	402214	210326-06	57255.0	-42996.0	20030616	20040204	221	博物館散策路整備事業	
ばばいせき 馬場遺跡 第7次調査	太宰府市 大字馬場	402214	210326-07	57177.0	-42890.0	20030801	20030930	173	博物館散策路整備事業	
ばばいせき 馬場遺跡 第8次調査	太宰府市 大字馬場	402214	210326-08	57246.0	-43220.0	20040202	20040708	177	博物館散策路整備事業	
所収遺跡名	遺跡種別	時 代		主要遺構		主要遺物		特記事項		
馬場遺跡 第6次調査	集落・河川跡	中世、近世		掘立柱建物、石組み、 溝、井戸、河川		楠葉型瓦器椀、くらわんか茶椀 五輪塔、安楽寺銘瓦		平安時代後期の溝、井戸 河川跡		
所収遺跡名	遺跡種別	時 代		主要遺構		主要遺物		特記事項		
馬場遺跡 第7次調査	集 落	中 世		谷地形		土師器、龍泉窯系青磁、靱羽口		12世紀～14世紀後半に 堆積した谷地形		
所収遺跡名	遺跡種別	時 代		主要遺構		主要遺物		特記事項		
馬場遺跡 第8次調査	集落・工房跡	古代、中世、近世		掘立柱建物、石積溝、 井戸、炉跡		炉壁、靱羽口、鋳型、安楽寺銘瓦		平安時代後期の石積溝 一部埋土保存		

馬場遺跡 3

九州国立博物館建設に伴う散策路整備事業に
関わる埋蔵文化財発掘調査

太宰府市の文化財 第97集
平成20年3月

編 集 太宰府市教育委員会
発 行 太宰府市観世音寺1-1-1
印 刷 (株)三光 福岡営業所
福岡市博多区山王1-14-4